

お止めくださいエスデス様！

絶対特権

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

パルタス族の槍使いがロリデス様とエスデス様に振り回される話。

目次

ナイトレイド編 (IF)

因果を斬る

—

1

槍兵が斬る

—

8

拮抗を斬る

—

14

狩人編

城塞を突く

—

20

慢易を突く

—

27

大軍を突く

—

33

苦境を突く

—

39

叛逆者を突く

一

45

叛逆者を突く

二

51

叛逆者を突く

三

58

叛逆者を突く

四

64

叛逆者を突く

五

71

銃士を突く

一

78

銃士を突く

二

85

銃士を突く

三

91

銃士を突く

四

97

悲劇を突く

—

104

政務を突く

—

110

貧村を突く

—

115

芸術を突く

—

121

告白を突く

—

129

欺瞞を突く

—

136

三連星を突く

—

142

偽装を突く

—

151

内憂を突く

—

158

槍兵を突く

一

165

槍兵を突く

二

170

槍兵を突く

三

176

槍兵を突く

四

183

自称を突く

—

191

葬儀を突く

—

197

執着を突く

—

203

女心を突く

—

209

將軍編

幸福を突く

—

215

政争を突く

—

221

皇帝を突く

—

227

内務を突く

—

233

執念を突く

—

239

予兆を突く

—

246

配属を突く

—

251

修羅を突く

—

258

策戦を突く

—

264

不全を突く

—

271

守勢を突く

—

279

反動を突く

—

285

誓いを突く

—

291

紫陽花を突く



297

二輪を突く



302

罨を突く



309

絶望を突く



315

逆手を突く



321

姉妹を突く



327

影を突く



335

詭弁を突く



344

ナイトレイド編（I F）

因果を斬る

「久しぶりだな」

「雪原を互いに分かってから三ヶ月も経つてはいないだろうに、白々しいモノだ」

ナイトレイドの名を騙った、良識派文官の連続殺人事件。

これによりナイトレイドの、ひいては革命軍の名声を低下させることが目的であろうこの行動を起こした主犯格の挨拶に、ハクは素っ気無く応じた。

ナイトレイドがこの行動に対して何の策も講じることなく動かねば、その名声を低下させることができる。

一方で、動けば確実にナイトレイドを釣り出すことができる。どちらに転んでも旨みのある計略に、革命軍はそうとわかっていても動かざるを得ないような状況に追い込まれた。

名声目当てで切り捨てるにしてはあまりにも惜しい戦力であるし、切り捨てずとも最終的にその対処の任を負うのはナイトレイドだから、革命軍の懐は痛まない。

そんな思惑の元に、この竜船上での警備は実施されたのである。

「白々しいのではなく、待ち遠しかったんだぞ、私は。一日万秋というヤツだった」

仕掛け人は無論、この女。自分がアクティブに動いているときは抜群の戦術眼を持つエスデスであった。

「物は言い様、か」

「その通り。さあ、やろうじゃないか」

エスデスの背後には、三獣士。彼女の率いる軍の大幹部と言っても良い三人組の帝具使い。

ナイトレイド側はハクとブラートの双壁。プラス新入りの少年タツミ。戦力としてはまあ、互角であろう。

「ブラート、どうする」

「こっちは三人でいい。それで釣り合う」

三獣士の内一人とエスデスを相手にしては流石に分が悪いと見たのか、ブラートは敢えての苦戦を受け入れた。

自分とインクルシオでは、エスデスに傷をつけることはできても倒すことはできないだろう。が、その可能性を濃厚に持つのがこの隣に立つ相棒なのだ。

「わかった。任せる」

「おう、任せられた」

約十センチほど違う二人の拳ががちりとぶつかり、互いに笑い合う。

交わった視線はすぐさま前の敵に戻され、次いで一歩。

この二人は、前に出た。

「タツミ、お前は俺達の戦いを目に焼き付けとけ」

「おう、兄貴！」

入って以来、アジトでの鍛練で幾度となくこの二人の卓犖とした戦いぶりを見てきたタツミは、何の疑いも懸念もなく頷く。

外見からはそうは見えないが絶武とすら言える技巧の繰り手と、全幅の信頼を於ける最高の兄貴分。

この二人でかかれば敵せる者などないと、少年はそう考えていた。

「名は、要るか？」

「知り過ぎるほどに知っているさ」

互いに、最早名乗りは要らない。ただ、殺すのみである。

三対一と一対一。暗黙の内につくられたルールに従うように、四人と二人は帝具を手に持ち駆け寄った。

そして。

「頭上注意だ、悪く思え」

火焰の隕石。

正にスケールが違う一撃が、開戦のゴング代わりに四人の頭上に降り掛かる。

だが、この四人は避けようとしめない。反応すら、示さない。

敵する二人の槍兵の遙か頭上から斜線状に降りてくる焰塊が通る

一点を狙い、氷の隕石が斜線を描いた。

「そちらができるということは、こちらもできるということだぞ」

火焰と氷塊がぶつかり合い、一瞬の内に水蒸気へと変わる。

水蒸気は霧の如き迷彩となって辺りを包み、暫しの間船上の七人の視界を潰した。

こうなることは、ハクにはわかつている。焰塊を打とうが氷塊が迎撃するなどわかりきったことではないか。

では、何か。

視界を潰すことで有利になる。そんな伏兵が、あるとしたら。

「リヴァ、ダイダラ、ニヤウ！」

奇襲用の駒を、奴は隠し持っている。

一秒にも満たない思考の末に、エスデスは素早くその意図を見抜いた。

視界を潰し、咄嗟の対処ができなくなった時点で奇襲用の駒を投入、こちらの戦力を削る。

自分かりヴァが防がねばやられていたし、例えリヴァの帝具を使っても結果は同じだった。

何をやろうと、逃げられないような罠がそこにはある。

「後ろだ！」

確信を込めて、鋭く叫んだ。現にそれは正しい。ハクは背後に伏兵を配置していたのだから、もしもその駒がただの駒でしかなかったならばここで奇襲は失敗していただろう。

が、その駒は頭が回る質だった。

詳しく言うなれば、その駒は主の攻めに対する戦術眼にどこか抜けたところがあることを知っていた。

「ブッブー！」

一番反応の速かったダイダラの首、人体の急所に針が深々と突き刺さる。

突き刺さった急所から素早く引き抜かれて宙に血の色で半円を描く針とは対照的に、ダイダラの身体は地に崩れ落ちた。

「チェルシーさんの読み勝ちだね」

そういう彼女も、割りと抜けているところがある。

殺した後の残心が長いというのか、成果に浸りすぎだとも言うのか、兎に角彼女は標敵を殺し終えた後にかなり致命的な隙を見せてしまふという悪癖があった。

その癖は視界が無に等しい状態で、更にはドサリという重い音だけでどこで誰がやられたかわかるほどの獣じみた知覚を持つエスデスを敵として戦うには致命的なものだったのである。

何の予兆もなく足元から生え始めた氷石に姿勢を崩され、霧を凝固させた部位を起点に生えてきた槍の如き氷柱が串刺しせんとチエルシーに迫り、右方で霧を突き抜けて助けに動こうとしたブライトをリヴァの水龍が阻んだ。

ハクの姿は霧に包まれて見えず、死を自覚すらすることなく死という結果を叩きつけられそうになった瞬間、彼女の腰へ凄まじい推進のベクトルが掛けられる。

「チエルシー、油断は禁物だと言っただろう」

「ごめん」

腰から『く』の字に折れて緊急退避させられた彼女の抱かれ方は、いつもの如く俵持ち。色気も気遣いもない、実用性と運び易さ一点張りの抱き方である。

いつもならば『えー、横抱きにしてよ』などと言うのだろうが、彼女も流石に空気を讀んだ。
しかし。

普段読もうとしないだけで普通にしていれば優等生な彼女とは違い、この抱いている方の男は空気が読めない。愚直であるとすら思える場違いな順守性を持っている。

「そう言えば、いつだかこちらの方にしろ、と言っていたか」

「はいっ」

まるでお手玉でも投げるようにして、上方向と推進方向からなる二つのベクトルを掛けられながら腰に回した手を離されたチエルシーは、一瞬間に浮かんだ。

そして、運動神経のなさを露呈するように受け身も取れずに背中か

ら落ちてきた彼女は、すっぽりとハクの両腕に収まる。

横抱き。所謂、お姫様抱っこの恰好であった。

「どうだ。一応練習したのだが」

何故か僅かに自慢げに、されどハクはいつもの如くチエルシーを優しげに見下ろす。

その上にこの時、考えられる限り最悪なタイミングで霧が晴れた。

「……………ほオ」

「どうだ、チエルシー」

目の前には今や気の弱い者ならば視線だけで殺せそうな帝国最強と、空気の読めない槍使い。

チエルシーは、己の身の不運を呪う。

『何故こんな目にばっかりあうのか』と。

そして同時に、思った。

『このままではヤバイ』と。

因みに彼女がこうなったのは大体が自業自得であり、因果応報である。別に不運なわけではない。

不運というのはどうしようもなく理不尽な形で理不尽な悲劇が起ることであり、別に彼女の悲劇のように変な形に欲をかかねば回避できたことは含まれないのだ。

「おいハク」

「む」

ハイヒールの爪先で甲板を叩きながら、明らかに苛立ちを混ぜた声が耳朶を打つ。

ハクは、繊細なガラス細工でも扱うようにチエルシーをお姫様抱っこしながらそちらに振り向き、ごく微量な返事代わりの呻きを漏らした。

あまり敵としたしげに話すのも、どうかと言われたことがあったのである。

「そいつは何だ」

「彼女は、嘗ての貴女に対する嘗ての私だ」

副官です。

「そう一言で事実を端的に言い切れるのに、他者の想像に任せるような言い方をするから誤解を招くのだと、この時の彼はまだ知らなかった。」

むしろ、聞かれたことに対してそのまま答えをぶつけるよりも自ら想像の芽を膨らませるようにしてわからせるのが為になると思っ
疑っていなかったのである。

「……………おい、女」

「は、はい？」

凄まじい殺気とドス黒いオーラに圧され、チエルシーは明らかに引
きながら敬語を使った。

いつもふらふらと煙に巻いたり流したりする彼女が敬語を使わざ
るを得ないと確信するほどに、今のエスデスは凄まじい暴威の化身だ
と言い切れるほどの圧があったのである。

「どこまでいった。こいつにどこまで、何をされた」

変なところで察しのいいハクは、この質問が男女の関係がどこまで
発展したかの質問であると目敏く察知した。

そして明らかにビビっているチエルシーに代わり、答える。

「見ればわかるだろう。抱くところまでだ」
と。

無論、彼の言いたかったことは『横抱きをしただけです。キスも性
交にも及んでいません』ということであった。

というより、『抱く』のような紛らわしい隠語を勘違いを避ける為
に使わないようにしている癖に、それが主因で表現自体の紛らわしさを
生んでいるというところに、彼の救いようななさがある。

つまりこの場合は、『今の我らを見たらわかる通り、コレ止まりだ』
ということに他ならない。

が、エスデスから見れば『今のお熱そうなやり取りとこの恰好を見
てわからないのか。やるところまでやっている』となった。

「……………そうか」

「そうだ。別に驚くようなことでもないだろう」

戦闘中に無理矢理躲させる為には、こうした方がいい。というより

はこうする他に術がない。

紛らわしくもなんともない言葉が、一言足りないがために勘違いを生む決定的な瞬間を見たチエルシーは、補足をしようとして黙り込む。

眼光を視覚化すれば何かが出せるのではないかというような、凄まじい視線が彼女を貫いていた。

こんな視線と暴威に曝されながら話せるほど、彼女の肝は太くない。

「そいつは、殺す」

「護るべき者を、殺らせるわけにはいかん」

いつしか言われた『助けてハクサーン』を順守すべく、ハクはチエルシーを静かに降ろして槍を構える。

勘違いだらけの頂上決戦が、はじまった。

槍兵が斬る

「……勝った、か」

「勝ったねー」

命からがら敗走していくエスデス軍を見下ろした後、ハクは天を仰ぐ。

カラリとした寒空は、澄み渡るほどに蒼かった。

「流石は北方異民族最後の壁って言われるだけはあるね。見事な用兵じゃん」

「できるのは防御だけだ。根本的解決になっていない」

更には、決定的な勝利も得られてはいない。

策をめぐらした労に見合っていないというのが正直なところである。

しかも、天候が悪い。彼の帝具は雪の中では普段でも悪い燃費が更に悪くなってしまふのだ。

革命軍の『エスデスを北に止めておきたい』という気持ちはわからなくもないが、そろそろ潮だろう。後は天才の誉れ高き北の勇者に頑張ってもらうしかない。

二人が一時的に編入された革命軍の北方方面チームは、北の異民族を全面的に支援するために作られたわけではないのである。

「寒いし、そろそろ帰ろうよ。皆待つてるような気もするしさ……」

「……そうだな」

エスデス軍五万を、革命軍五千で翻弄するにしても限度があった。戦えば戦うほど戦力は磨耗していくし、疲れも溜まる。

情報戦での勝利と制空権の確保、更には地形を活かした嵌め技で勝ちをもぎ取ってきたが、エスデス軍はその苦境を楽しむかのように向かってきていた。

「北方司令部に連絡を頼めるか、チェルシー」

「もう撤退許可は出てるよ。革命軍の武威を示したからそれでよし、だって」

相変わらずの抜け目のなさに一驚しつつ、ハクは首を僅かに捻る。

どうするか。北の勇者は天才だが、エスデスがとるであろう
これからの動きを伝えるべきか、否か。

それが彼の思案の内容だった。

「どうしたの？」

「いや、少々配慮のない考えが脳裏を過ぎつたにすぎん」

北の勇者は天才である。その武威は帝国という四海見渡しても比
類なき大国が恐れるほどであるというのだから生半の天才ではある
まい。

対して自分はどうか。ただの革命軍の一指揮官でしか無いではな
いか。意見するのは、無礼に当たるだろう。

「帰るぞ、チエルシー」

「はい。兵は副官に預けて速やかに帝都へ帰還するように、だつて
さ」

帝都。帝国の都であり、腐敗の温床。

更には彼の現在の仲間が待つ地でもあった。

「帰還するぞ。帝都に」

三ヶ月後。

壁なき要塞などただの瓦礫とばかりに踏み潰し、これと同じような
台詞を吐いた彼の最大の理解者であり宿敵が、同じく帝都へ帰還す
る。

それを以ってナイトレイドとイエーガーズと呼ばれる帝国の対賊
の特務組織との対決は激化することになることを、この時点では誰も
知るはずがなかった。

これは、彼と彼女が道を違えた物語である。

「ただいま、帝都」

チエルシー変身態である飛竜に跨りながら、ハクは眼下に広がる大
小様々な明かりを灯す建造物を見渡した。

流星に『ナイトレイド』である以上は、彼は夜に行動する。

真つ昼間からチエルシーを駆って帝都北10キロほどにあるナイ
トレイドのアジトに突っ込むわけにはいかなかった。

「チエルシー、飛べるか」

「ギブ」

「よし」

十五時間ぶっ通しのフライトは、彼女の体力と帝具を使用するための力を無情にも削り取っている。

それは、普段ならば常に軽口を聞いているはずのチエルシーがたった二文字だけで会話を打ち切ったあたりによく表れていた。

「チエルシー」

「ヤダ。寝たい」

崖を跳び下りて歩くぞ。

そう言おうとしたハクの先手を打つように、チエルシーは欲望を口にした。

睡眠欲。疲労を感じた人間を襲うごく当たり前の欲望である。

だが、チエルシーは読んでいた。

「だが、今日中に帰れという辞令だ。帝具は目立つから使わんようにとも言われている」

だからこそ、彼はチエルシーを飛竜へと変身させてはるばる北の国からフライトをしてきたのである。そう簡単に諦めるわけにもいかなかった。

そもそも、彼の頭には理屈の通った命令に逆らうという思考回路が存在していないのであろう。

それがまた革命軍にいいように——すなわち北に行ったら南、南に行ったら北に、北に行ったらまた帝都へというように振り回されている所以でもあった。

「ならば、運んだら？」

「うん？」

「このチエルシーさん、軽さには自信があるんだけど」

策士であざとく、褒められたがり。

割りとうしようもない三つの属性を完備した女・チエルシーは、恋敵であるエスデスが聞いたら絶対に歯噛みするであろう一言を、けろりと吐く。

「お姫様抱っこで運んで欲しいなーって、思うんだけど」

「両手が塞がるが……まあ、お前を私が酷使した分こちらにも要望通りに酷使されてしかるべきだろう。引き受けた」

エスデスが言ったならば、確実に『そんなにヤワじゃないでしょう、お嬢』とツツコミを入れられた拳句にズンズン先に行かれてしまうであろう願いは、チエルシーの割り体力のない身体だからこそ聞き届けられた。

因みに、革命軍北方司令部に『ハクさんの帝具使うとナイトレイドのアジトがバレるんじゃないの?』と、懸念を植えたのも彼女である。

全く以って、彼女は真性の策士であった。

「ハクさーん、もう少し走るの遅くして」

「早く寝たいのではないのか?」

負担が掛からない程度に抑えながらも、彼の疾走速度は極めて速い。十キロなど十分もかからずに走り切るだろう。

「何だか風を感じたい気分なんだよね、チエルシーさん」

故に彼女は、延長した。そもそも一生の内でも何回できるか、或いはされるかわからない体験である。睡眠欲よりも、満足感と幸福感を得ることが優先されたと言ってよかった。

言い訳は咄嗟のものであるから今まで張り巡らしてきた策謀の巧緻さから見ると一段落ちるが、彼を納得させるには充分である。

何故なら、嘘はついていないから。

『彼にこのままお姫様抱っこされながら風を感じたい』だけ。敢えて省略しただけであり、嘘ではなかった。

「まあ、構わないが……」

「流石ハクさん!」

何が流石なのかを敢えて略し、ハクは僅かに脚の回転数を弛める。弛めれども速めようとも、チエルシーにかかる振動は一切変わらずに皆無なところに彼の歩法の極意があった。

こんなところで使われてしまう極意というのもなんだが、実際有用なことは確かである。

「着きそーだね……」

「ああ」

殆ど全ての虚偽装飾を引っ剥がすハクの目にはナイトレイド全員が一目も二目も置いていた。

それ自体が偽りとなつたのであらば、彼は迂闊な発言を控えなければならぬだろう。

これからの会話に深く関わる事項であるが故に、ハクはチエルシーに注意深く問うた。

「あの時に嘘は感じなかったから訊きたいのだが、お前は寝たいのではなかったのか？」

「あの時は寝たかったよ。今は違うだけで」

頭の上に疑問符を浮かべている彼には、チエルシーの今までの発言に一切の嘘がないことが本能的にわかっている。

が、どうにも割り切れなかった。

まるで一つの目的を他力本願で達成させる為に、いいように使われたような気がしなくもなかったのである。

「チエルシー」

「なに？」

残り少ないことを惜しむよりも今を目一杯楽しむことを優先したチエルシーは、いつもの如く気さくに答えた。

アジトまで、残り一キロ程である。

「お前、こうなるように仕組んだりしていたか？」

「うん」

いけしやあしやあと。

表現するならばそのような感じで、チエルシーはあつきりかけられた嫌疑を認めた。

否定すると嘘になる。嘘を付けばバレる。ならばさっさと開き直る。

この三動作を嫌味を与えないように行う術が、彼女はじつにうまかった。

「……お前には感謝している。眼となり耳となり脚となり、その普段現れぬ誠実さには私も一目置くほどに、な」

「へ？」

チエルシーの休みを知らない思考が、砂糖水をかけられたかのよう
にシヨートし、火花を散らす。

褒めて褒めてという癖にいざ褒められたら逃げ出すようなところが、彼女にはあつた。

そこらへんが単純な、つまりは欲望を第一に優先するエスデスならばシヨートするどころか加速するのだが、チエルシーにとっての不意打ちの一撃は物理・精神問わず命取りである。

「私にできることならば、可能な限りに融通してやろう。無論、限度はあるがな」

こう言われては、何も言い返せるようなことがなかった。おねだりも勿論、できなかつた。

結局彼女はこの後の約一キロを、頭をシヨートさせたままに移動することになったのである。

拮抗を斬る

槍を構えたハクに、隙はない。

節約の為か、鎧もない。

普段の彼女ならば、ここでおかしいとか気づくであろう。何せ最強クラスの強者とも言える彼が、己と唯一互する敵に対して手を抜いてかかっているのだから。

が、今の彼女は頭に血が上っていた。端的に言えばキレていた。

正常な判断力は保持していたものの、その最大の持ち味とも言える未来予知めいた直感が、沸え滾った理性を冷ますことにリソースを割かれていたのである。

故に、気が付かなかった。

「勝負を急ぐとはらしくないな、エスデス」

彼が甲板に張り巡らせた、一度限りの奇襲攻撃に。

甲板が黄金の光を洩らして消え、一段落ちて火に変わる。同時に炎剣が四方八方から降り注いだ。

甲板を鎧でもう一枚作り、瞬時に解除することによって足元を潰すと共に大火力で四方八方から同時攻撃を行う。

単純なタネだが、バレなければ有効であると言えた。

(前にも喰らったな、これは)

エスデスは迫りくる炎剣を周囲に氷壁を張ることで防ぎながら、自分の失態に臍を噛む。

先の雪原での戦闘でも、彼は先に待っていた。先に待って、こちらが攻撃に転じた瞬間にこの焰の奔流と炎剣の雨を喰らわしてきた。

今回はそれを、前とは違い開幕にもってきたのだろう。

ここまで考え、エスデスは心中で首を振った。

(いや、違う)

こちらが散漫だったからこそ、奴は二度目の仕様に踏み切っている。ならば、ハクにも僅かながらの油断があるのだ。

それを前提とするという、油断が。

余程巧妙に戦いを組み立てない限り、二度同じ手は通用しないとい

う法則が実力の伯仲した両者の戦いでは適応される。つまりこれは、妙手に見えた悪手だった。

——返してやろう。

意地の悪い思考で、エスデスは炎剣と丁度相殺できる程度の氷の盾を周囲に構える。

発生したのは、先ほどと同じく水蒸気。霧のごとく視界を遮る白の万幕。

「……なるほど」

ここにきてハクも、隙をついたと思われた自分の一手が悪手と化したことに気づいた。

並の敵——否、エスデスレベルの敵でなければ確実に仕留められていたであろう必殺の不意打ちですら、彼女との対戦では悪手となりうる。

反射神経のみならず、僅かな間によって思考能力をも計算に入れねばならないこの一瞬とは言い難い数秒のせめぎ合いにおいて、彼の選択はあまりに安直過ぎた。

そう気づき、鎧を纏う。

「流石に速いな」

後方にまわり、彼女の得物である細剣で首筋を狙った突き。

エスデスの奇襲は、鎧を纏いながら正中線を斜めに遮るようにして後ろ手に構えられた槍に弾かれた。

この後方からの奇襲が失敗したらどうなるか。そんなことは彼女も知っている。

最早思考というものの範疇ではなく、彼女は本能でわかっていた。だからこそ、迫りくる石突を半身になって躲けたのである。

「それでもないらしい」

「謙遜するな。私が更に速いだけだ」

石突での反撃を起点に身を後方に翻し、次いで槍の穂先による石壁の如き連撃を放つと言う文字通り怒濤の迫撃を凌ぎ切ったエスデスは、その繰り出した主であるハクに凄絶な笑みを見せた。

一瞬の読み違い、一瞬の反応の遅行が命取りになる。

それは帝具の効能でも何でも無い。ただのヒトが練磨し切った技術によって、その致死の一撃は繰り出されていた。

「……速さ、か」

常人には捉えることすらできず、達人にも霞すら見せない音速の攻防が、しばらく続く。

こう言った至近距離での技の競い合いになった場合、肉体の性能的にはエスデスが有利であった。何せ、『魔神顕現』『デモンズエキス』による底上げと天性の勘を持っている。

が、技術と経験に於いてはハクが遥かに上を行っていた。故にこの二人が雪の中で行った前回の戦いは決着がつかなかったのである。

この二人にはそんなことはわかりきっていた。前回の攻防の半ばで、既に薄々感づいていた。

気づいていて、今回までに改善しておかないわけがない。

「そらー」

エスデスの周囲に八本の刀剣の類に加工された氷刃が生成され、発射される。

前回は寸合の遅れが命取りのこの戦いにおいて互いに『目の前の敵の攻撃をどう避け、どう起点していくか』を考えるに留まっていた。

だが、今のエスデスは違う。彼女は先読みするという思考を放棄し、その分のリソースを帝具に回した。

つまり、三手目なるまでに帝具で無理矢理に隙を作り、それを活かさなければ死が確定しているということになる。

その一か八かの現状打破を掛けた八本の刀剣は、やはり思うようには飛翔しなかった。裂いている思考リソースが狭すぎるが故に、その命中精度は低いのである。

内四本が途中で脱落し、二本が致命傷には至らない部位に翔び、一本が鎧に舐め溶かされ、結局首元に翔んだのは一本のみ。

だが、ハクの注意はエスデスの細剣以外に八分割された。八分割された注意力は文字通り散漫であり、どれがどこにくるかを判断するに数秒のラグを必要とすることになる。

結果、彼はエスデスとのせめぎ合いを押し気味に展開しながらも自

分の脅威となりうる一本が急所に向かっているという事態を『なるべく隙を見せずに』対処せねばならなくなった。

つまり、どう動こうが隙になる。

ハクは、思考を変えた。

「隙があるぞー」

彼は、誘いに乗った。

僅かに槍を動かして氷の剣を弾いて致命傷を防ぎ、間合いを一步詰められる。

槍は、間合いを詰められたら弱い。普段の間ならばハクの人が使えるとは到底思えないほどの大槍が圧倒的な優位を誇るが、近距離になればなるほど小回りの利く細剣の方が有利なだった。

詰められた間合いからすぐさま細剣が弧を描き、手元に戻そうとしていた槍の柄を叩く。

ハクの表情は、変わらない。エスデスの巧みな技巧によって槍を弾かれ、懐にもぐり込まれても変わらず、続けざまにバツを描くように二太刀を叩き込まれても変わらなかった。

凄まじい二重ねの斬撃に二歩後退したところを更に一太刀加えられ、ハクの肉体と一体化した鎧から火花が散る。

「鎧に刃が立たんが、槍は弾けるだろう？」

氷の魔神の空いた片手に氷の粒が集い、束ねられた。

手に生成されたのは、剣。攻めている間は守りよりも思考リソースが空く。彼女にとってはこのような造形など他愛もないものだった。

唐突に生成された武器による一撃に不意をつかれてか、ハクの手から槍が落とされる。

空いた細剣が肩に叩きつけられ、彼はたまらず姿勢を崩した。

たまらずと言った形で、背中を見せる。

自分が隙を作ったように、彼女には見えた。

しかし彼女はこの隙を作るが為に自分の一撃によって間合いを広げてしまった形になる。

生成可能な大槍は、彼が所有する父譲りのものに日輪の槍を掛け合わせた一本のみ。そうわかっていた彼女は一気に間合いを詰めた。

前回、前々回と二度に渡る戦いで必中を誇り、苦渋を飲まされ続けてきた件の武器出しカウンターはない。

隙を逃さないとわかっていたからこそ、ハクの策は成功した。

背中を向けて隙を見せていた身を、翻す。

剣を持つていたならば疾駆する彼女の持つ速度だけで腹部に丁度突き刺さるであろう位置に、左手が構えられていた。

鞘から精練された剣を抜き放つような音をさせ、ハクの手元から唐突に剣が顕れる。

別に彼は槍だけしか出せないとも槍しか使えないとも言っていない。

「ぐッ!?!」

だが流石の反応の速さか、エスデスは腹部に硬質な鎧の如き氷を纏わせて致命傷を防いだ。

臓物を揺さぶられるような衝撃は来るが、臓物を串刺しにされるよりはマシであろう。

「……………」

息を吐くと共に低く呻るような音を上げ、ハクは剣を斜めに突き出すように我流で構えた。

下腹を襲った衝撃に思わず手をやったエスデスの右肩を斬り離すべく真下に振り下ろし、横に移動して避けたとわかるや右肩から左腹へと斜めに斬り、左腹から右肩へと手を返す。

もう一通りの斜め斬りを繰り返すといつもの癖で肘を伸ばした手を手元に戻し、尖い突きを胸部に放った。

ガチリという鈍い音と共にエスデスの身体が後方へと弾かれ、地面に転がりながら更に距離をとる。

「やるな」

「それはこちらのセリフだ、ハク」

突きを放ち終え、たまらず転がって距離をとったエスデスに彼は心からの賛辞を送った。

これまで彼が放った攻撃は、紙一重のタイミングで生成された氷の鎧によって悉く防がれ、その身から血を一滴も流させてはいない。

正に強敵、というのか。達人を束にして殺しかねない凄まじい攻防すら、その身に傷を負わせるには至らなかつた。

狩人編

城塞を突く

外には雪が降っていた。

深々と積もってゆくそれは、北の大地の厳しさの象徴ともとれる、寒さの化身。

その脅威を一番知っているこの土地に土着した狩猟民族、パルタス族は皆が一樣にテントの中に引き籠もる。外に出ているのは危険種にやられる前に寒さにやられることになるのが請負いのこの悪天候で、外に出ている者は皆無だった。

この、一人を除いて。

「……………」

肩から湯気が立つほどの熱を発し、降り積もる雪を溶かすほど体温を高めた彼は、槍を一心に振るっていた。

突いては引き、突いては引きの単純作業。気が狂いそうになるほどの時間、彼は毎日毎日この作業を繰り返す。

突く。

引く。

突く。

引く。

手に持つ槍が汗と血で滑り、それらが混ざり合った液体が穂先から滴り落ちる。

苦しげに顔を歪めながら、その少年は一心に槍を振るい続けた。

「ハク」

風と一体になり、空間を切り裂く。

持ち手が赤く染まった黒槍の刺突を続け、五千を超えた辺りで少年は止まった。

黒槍の穂先を凍りついた大地に突き立て、名が呼ばれた方向へと振り向く。

「ハク、ご飯。お父さんが一緒に食べるかって」

「いつもいつも、ありがたいことです」

少年は眼前の少女と、彼女を遣わしたであろう長に向けて静かに一拝した。突き立てた槍を引き抜き、傘を持ってきた少女に続く。

井戸に差し掛かったところで一回ことわりを入れて一杯汲んで頭から被り、予め用意しておいた拭き布で身体を拭った。

予備の服も、持ってきている。

律儀に待っていてくれた少女を待たせるわけにはいかない。

「終わった？」

「はい」

恥ずかしげに顔を背けていた少女が持つ傘を渡してもらい、さしてやりながら目的地へと向かう。

長のテントは一際立派という訳でもなければ特別な印が掲げられているわけでもない。しかし、誰もが迷わずにそこに辿り着くことができた。

身が震えるほどの、武の匂い。生半可ではない修練と、数十年に渡る豊富な実践経験。それが醸し出す武の匂いは、下手な目印よりもわかりやすいといえる。

「よお、ハク」

「昨日ぶりです、長」

蒼いと言うには澄み過ぎている、薄い色をした髪が衆目を惹く長の身体は、固い。

瞬発力も持続力もある、練り上げられた理想的な付き方をした筋肉と太くなった骨。がっしりとした体格は老いを感じさせず、まだまだパルタス族一の戦士であることを明確に表していた。

「まあ、食え」

「ご相伴に預かります」

胡座を掻きながら無言で山盛りに盛られた飯と肉とをかつ込む長と、負けじと小さな口で米を噛み、肉を裂いていく少女と、三人の中では割りかしマシに肉と米を身体に容れる、黒い髪を後で括った少年。

二年前、槍を振るっていた彼の父が長の妻であり少女の母である女

性を庇って死んでから、この光景は普通のものとなっていた。

庇われた女性も一年後に病で呆気なく他界し、結局母を喪った長の娘である少女が代わりに抛り所としたのがこの寡黙な少年である。

少女からすれば僅かに年の離れた兄、と言ったところだろうか。

「また槍か」

「……はい」

腕を上げ下げし、箸を使う手の動きの微細な鈍さで勘付いた長は、僅かに溜息をつく。

ハクと呼ばれた少年の父もまた、槍使いであった。その腕は長である自分と互する程のものであり、長と少年の父は一人の女性を奪い合う過程で決闘をしたりもしたくらいには仲が良かった。

死に際して遺して逝く子の未来を託された身としては、ハクと呼ばれた少年の激情を奥に秘めたような冷静な性格は安心が置けると言える。

が、その押し込めたような冷静さと苛烈過ぎる身体の苛め方には一抹の不安を覚えるのだ。

(娘も娘だし、こいつもこいつだ)

年少にして弱った者にも一寸の慈悲をかけない天性の狩猟者と、年少にして身体と性格を在るべき型にするべく造り変え始めている天性の求道者。

導きようを知らないと言うのが、何人もの一流の戦士を作り上げてきた長の下した結論である。

そもそも論として、天性そう定められた人としての在り方を否定しているものか、ということもあった。

「ご馳走になりました」

「ご馳走さま」

長が食べ終わったことを確認すると一押し、槍を持って去っていく求道者の卵を追うように、長の娘は慌てるようによそわれた米をかき込み、手を合わせて去っていく。

「……何だかなあ」

また外に出て、快復しはじめた身体を矯正し始めるのだろう。元

少年が槍を振るう度にその技量は根底から砥ぎ澄まされてきていると言えるし、何よりも一族随一の戦士の自分から見ても少年の槍技は若年にして既に熟練を感じさせられていた。

娘にはやり過ぎだと思っただけならば止めるように言っているが、あれは止めると言う義務や責務を感じると言うよりは隙を見て遊んでもらいたいと思っっていることを顔が如実に語っている。

「何だかなあ……」

削った楊枝で歯を掻きながら、長はもう一度繰り返した。

無論、長がそうこうしている間に、ハクは再び槍を振るい始める。

最初はゆつくりと、空に描いた的を刺突で射抜いていくような感覚を取り戻すまでの五回と、定着させる為の十回。

それが終わればただ一点をひたすらに突く。突いては引き、突いては引き。実体を持たないからこそ不滅の的をひたすらに突いていくのだ。

「ねえ」

「はい」

感覚を取り戻すまでの十回を終え、声を掛けられたハクは槍を左手で一回空に廻して氷土に刺す。

氷土は硬く、ハクにまだまだ修練が必要なことを実感させた。

本当の達人ならば、どんなものでも穿き徹す。それが例え大地であつても、変わらない。

「遊ぼ」

「雪ですよ、お嬢」

「でも、槍は振れる」

それとこれとは違う。普通の思考回路ならばそう言った回答が出てくるであろうが、ハクの頭にその選択肢は無かった。

この蒼き初雪の化身のような印象を他人に持たせる少女の言う遊びとは、狩りである。狩りとはつまるところ、槍を振るって危険種を殺すことであり、雪の中で槍が振れるならば狩りも出来るということになる。

「……確かに」

「実戦に勝る訓練は無いって、お父さんも言ってたよ？」

「……むむ」

悪そうな笑みを浮かべながら、少女は澄んだ蒼髪を風に膨らませて揺らしながら、一路いつもの狩場へと歩き出した。

頭の回る彼女は、自分の行動を彼が阻害しないことを知っている。

何だかんだ言っても、付いてきてくれることを知っている。

「お嬢、防寒着を着ていたのは——」

「うん。最初からそうするつもりだったの」

耳を覆うふわふわとした毛皮に、厚手の革コート。少しダブついているのは、それが彼女の母のものであったのを繕ったからだだった。

腰には肉厚の短剣と、布袋。

「仕方ない方だ」

「うん。諦めて」

膝まである長い髪を楽しげに揺らしながら、少女は僅かに雪の積もった黒髪を後で一本に括った少年の腕を引く。

「遊ぼ、ハク」

「……今度はどこに行きたいのですか？」

「北の邑！」

邑は、城郭都市。即ち、北の邑と言えば——

「北方城塞ですか」

「うん」

北方城塞は、北の異民族たちの活動拠点である。パルタス族はこの北方城塞と交易をしたり時に争ったり、色々と因縁をつけたりつけられたりしながら生活をしていた。

今は豪雪による一時的な断行状態にあり、パルタス族は自分で狩った獲物と今まで交易で溜めた米で冬を乗り切り、春になったら売りに行く。これが通例なのであるが——

「危険ですよ」

「何で？」

「北方城塞に属する連合体に我らも従属するようにと、秋に勧告がありました。長は断ったようですし、何より豪雪によって極めて攻め難

い冬にはなるまで何も無かったことを考えれば危害を加えるとは言い切れませんが——」

少し呆気にとられたようにこちらを見つめる少女の視線に気づき、ハクは言葉を途中で切った。

普段あまり動かさない舌が疲れたというのも大きいですが、彼は非常に自主性に乏しい性格をしている。即ち、話している相手になにかあったならばその異変の理由を掴むまでは黙ってしまうようなところがあった。

「……ハクって頭良かったんだね」

「……………」

今の今までどのような目で見られていたかが今の心胆から発されたであろう一言で知り、ハクは無言で少し目線を横にずらす。

齡十を過ぎるか過ぎないかで求道者の卵と言われる辺りで、彼も自覚するべきではあったのだが。

「……あ、あー違うよ!?馬鹿だとか思ってたわけじゃないよ!」

「……………はい」

一瞬。半ば反射的に浮かべたのであろう嗜虐的な笑みを慌てて収め、少女は懸命に手を振って弁明した。

「とにかく、行こーよ。私とハクなら何とかなるから!」

「……戦士を一人、引率で連れて行きませんか?」

「や」

膠も無い、或いはけんもほろろもない一言で却下され、少女はバンバン少年の腕を叩いて催促する。もはやきかん坊と同じであった。

「……仕方ない方だ」

「うん。諦めて」

いつものやり取りをし、いつも折れる方が折れ、我を通した少女はいつもの笑顔を浮かべる。

それを見た少年は僅かに溜息をつき、一つ指笛を吹いた。

降り立ったのは、エビルバード。調教済みの特級危険種である。

「では、北方城塞に行きます。しかし、情報収集をした後に入ります。わかりましたか?」

「うん」

呼び出したエビルバードを待機させ、楊枝で歯を掻いていた長に一言告げてから、二人を乗せたエビルバードは空へと舞い上がった。

慢易を突く

白雪が血に染まり、危険種の身体が地に倒れ伏す。

喉輪を穿かれ、或いは斬り裂かれ。一級危険種スノーラビットの群れは仲間の骸を四体残して退却しようとしていた。

無論少女は逃がそうとはしない。すぐさま跳び掛かる寸前の虎の如く四肢に力を溜め、追撃に移る。

「お嬢。これくらいでよいのでは？」
「えー？」

しかし、その追撃狂ともとれる癖は傍らに控えた槍使いの少年によって押し止められた。

少年の手に持つ槍からは血が滴り落ち、倒れ伏すスノーラビットの内の二体には喉に丸い貫通孔が空いている。他の二体は喉を掻っ捌かれていることから、別な狩人——即ち、少女が狩ったことがわかった。

されど彼がただの一刺しで一級危険種を屠ったことに間違いはないだろう。

「持ち運ぶのが些か面倒です」

「……むー」

巨体に生えた耳を片手で掴んで二体の死骸を引き吊りながら、ハクは無言でエビルバードの背中にそれを乗せ、もう一往復して更に二体の死骸を乗せる。

「行きますよ、お嬢」

「むー」

頬を膨らませてしゅしゅといった様子の少女がふかふかとした毛皮を持つスノーラビットの死骸を背もたれにしながらエビルバードに乗ったことを確認し、少年はごく微小な動作でエビルバードを飛び立たせた。

向かう先は無論、城塞都市である。

エビルバードが一つ羽ばたき、目的地が近づくごとに不満顔がその好奇心の旺盛さをはつきりと表に出した笑顔になっていく少女を見

て一つ笑い、少年は僅かにいつもの目的地から北に着地点を変更した。

半ば断交状態になってから城塞都市に向かうのは自分たちが初めて。用心に越したことはないというのが少年の私見であった。

「着きました」

そう言った自分の言葉が耳に届くが早いか、お嬢と呼ばれている少女は後部座席と化したスノーラビットの背もたれから跳躍する。

子供特有の旺盛な好奇心を持った少女にとって、城塞都市と言う環境は興味の宝庫であった。類まれな武の天稟と獣のような敏捷性を持った少女を止められる者は城塞都市内にそう多くは居らず、勝手に先行しても許されるような風潮があった。

今までは。

「待たれよ」

「おう!？」

跳躍した瞬間に襟首を掴まれ、少女は蛙の潰れたような声を上げながらエビルバードの上へ押し戻される。

スノーラビットを下ろす為に二往復し、最後に不満げな様子を隠さずに膝を抱えて座り込む少女を担ぎ、少年はエビルバードの上から三度降りた。

「情報収集をしたあと、と。私は言った筈ですが」

「むー……」

明らかな不満を見せながら、少女は少年の後ろに引つ込む。少年が降りたのを見てから自分も降りたあたり、一先ずは情報収集に従うことを決めたのだろう。

少年の情報収集は、特に何をするわけでもなければ金を渡して情報を求めるわけでもない。強いて言うならば日常の会話と人々の様子の変化から普段との差異を読み取り、それを的確に聞いていく程度の物でしかなかった。

しかし、この情報収集のやり方はそこそこの精度と只故の効率の良さを持っていると言える。現に今の城塞都市周辺の民や店から少年は普段との差異を敏感に感じた。

(毛皮と鉄がない、か)

スノーラビットの毛皮と肉をバラバラに売った時に言われた言葉を反芻する。

それにどこか、男衆がうきうきしていた。

退屈げに足元の石を蹴飛ばしたり拾って投げたりしている少女を他所に、少年は少し考えて結論を出す。

「お嬢、帰りますよ」

「えー!？」

スノーラビットを売り捌いたあとに残った金で酒と米、塩を買い、不満たらたなら少女の襟首を掴むようにしてエビルバードに乗せ、荷物も続いて乗せた。

城塞都市の上空を幾度か旋回し、入ることのなかった景色を注意深く見る。

(……杞憂であればいいが)

男衆がうきうきしており、鉄と毛皮が足りなくなればそれは即ち戦いの前。

攻めるのは、果たしてどこだろうか。南に行けば帝国があり、北に行けばまだ服していない異民族がいるであろう。が、南東に向かえばそこには自分たちの部族の幕舎が乱立していた。

「ねー、ハク。次はいつ来れるの？」

「私の予想が外れれば一月後には」

詰まるところ、向こうが攻めて来ないという確信があれば明日にも行けるのだ。

が、その確信を得るには時間と情報を必要とする。

あの後しばらくの間飛翔し、エビルバードは地に降り立った。

少年ハクが伝えた情報は僅かな慢易を含みながらも警告として受け止められ、戦士達から選出された代表者と長とが深刻さを伴って今後の対策を話し合っている。
が。

「ハク」

「何ですか、お嬢」

お嬢こと、長の娘である少女は鞘に納まっていた短剣を振り回しながら、槍の反復刺突を止めない少年に声を掛けた。

「北の奴等が攻めて来るんだって」

「そうですか」

どうやら楽観的な認識が是正され、万が一を警戒するそれへと変わったことを長の娘である彼女の口から聞いたハクは、やはり刺突を止めない。

攻めて来るにせよ、来ないにせよ。やる事は変わらない。

「不安じゃないの?」

「四肢のある生物を殺すことは変わりません」

「……それもそうか」

後ろで一つに括った黒髪が肩の動きに連動して揺き、槍が空を切り裂く。

人も危険種も、喉を刳り貫けば死ぬのだ。

隣で短剣を舞うように振り始めた少女を一瞥し、ハクは一層力を込めて槍を繰り出す。

「おい、ハク」

それを、五時間ほど反復し続けた時。渋く深みのある声が少年の背後から掛けられた。

隣で短剣を舞うように振っていた少女は疲労の色を濃くして脚を揃えて敷いた莫塵に座っている。

このことからとつくのとうに時間の感覚をなくしていた少年にも自分が鍛練を始めてから相当な時間が立っていることがわかった。

「はい、長」

「お前、こいつと手合わせしてみろ」

振るっていた槍を地面に突き立て、ハクは『こいつ』と言われて長に指し示された戦士の実力を測る。

流石に部族一の使い手である長には及ばないが、やはり一流の猛者。長い時間に渡って研ぎ澄まされてきた勘と肉体を持っていた。

「何故私が?」

「戦えるかってことだ。お前は年齢が微妙だからな」

ハクの年齢は十。普通ならばまだまだ訓練生であり、微妙という年齢ですらないが、パルタス族では最年少で十二から戦士になれる。その点を考慮すれば長の『微妙だから』との表現は妥当だと言えた。

「私は!?!」

「エスデス、お前は駄目だ」

エスデスは素質と才幹、天性の資質こそあるが、年齢は八。まだまだ戦士になるには歳も経験も足りないのだろう。

有り余るほどの才能があるぶん、エスデスの不満は大きかった。

(エスデスの才能と互するのはハクくらいなものだ。あと数年すりやあ俺も負ける)

が、溢れる才能の対価なのか。彼女には致命的な欠陥がある。

獲物との戦いを長引かせ、楽しんでしまうというのがソレであった。

(ハクにはそう言うのは少ねえ。誰であろうが躊躇なく敵を殺すから、危うくはあるが……)

地面に突き立てた練習用の槍を引き抜き、布に包んだ父祖伝来の黒槍の身を露わにしていくハクの顔には、何の感慨もない。狩る者の楽しみもなければ、武を磨く者特有の外に出すような武の気もない。

内に籠もり、自分の身を頼みにするような孤高の武。それがハクと言う求道者の歩む道の完成形なのだろう。

「はじめますか、長」

「ああ」

少年の持つ身の丈に合わぬ黒槍は、超級危険種の朽ちかけた死骸から抜き取った背骨を十五年かけて溶かし、鍛えた業物。光を反射し、写す刃は鏡の如く。少年の父の手に収まってからは数多の危険種の血を吸ってきている、魔槍。

「――」

槍の放つ妖気ともつかない雰囲気は、熟練の戦士を怯ませるに足るものであった。

(いや、違うな)

怯ませたのは、槍の妖気だけではない。構えたその姿が分不相応に長過ぎる槍を使っているにも関わらず、様になっている。

氷のように研ぎ澄まされた、穂先の如く。

一秒。

一分。

一時間。

どれほどの時間が経ったのかわからないほど、対峙する二人を見る戦士たちは、『呑まれていた』。

そして。

「参らせていただきます」

くるりと、敵する戦士に向いていた穂先が天を向き、地を向く。

少年の脚が音も無く一步踏み出され、空も裂けよとばかりに黒い穂先が対峙する戦士の持つ刃に牙を剥いた。

「避けるシュグルー！」

半ば反射で盾にしたであろう剣刃を貫き穿ち、喉輪を刮り貫く黒槍の穂先を幻視した長は叫ぶ。

しかし。

「……………私の勝ちですか」

穂先は剣刃を貫き、喉輪に触れるだけに留まり、静かに少年の手元に戻される。

くるりと黒槍を廻した少年は地に落とした布で穂先を包み、一礼してその場を後にした。

その後ろ姿を楽しげに笑うエスデスが追い駆け、場を静寂が支配する。

「……………あいつは、参加させる。異論はないな」

沈黙を破った長に続く者は、居なかった。

大軍を突く

『ハクは、つよいの?』

親を喪い、芯が抜け落ちてしまったような少年に、その少女は声を掛けた。

『なら、つよくなつて』

『弱いですよ』とでも答えたのか。或いは『さあ』とでも答えたのか。どちらにせよ、その身勝手な一言は、抜け落ちた芯の代わりに身を貫いた。

『ひとりはずまんない。でも、あわせるのはもつとつまんない。ハクがわたしにならないで』

稚さを多分に含んだ身勝手な要求に苦笑しつつ、自分も傍から見れば稚いということに自覚しながら、少年は頷く。

わかりました。あなたに並びましょう、と。

そして彼の芯には武への探究が深く刻み込まれ、その実直さから彼の芯を挿れ換えた蒼氷の少女のお守りも彼の育ての親から託された。

もつとも少年のやる『お守り』とはほとんど好き勝手にやらせ、危機に陥ったら尻拭いに行くくらいな物でしかない。寧ろ天性首輪を掛けられる側ではなく、掛ける側である少女に何か枷を加えようとするのが無謀極まりないというのはある。

が、少年の『お守り』とは悍馬に両手放しで乗るようなものであった。

「ハクはやっぱり、強いね!」

「……そうでしょうか」

結果、少女は良く言えば快活で無邪気に。

悪く言えば非常にアウトローな性格に育った。自分で定めたルールしか守らない、と言うような。

自然、少年は少女とは逆——即ち、ルールを遵守するような性格になる。二人共同じ方向に突っ走ってしまえば最早道を間違えても糺すことができなくなるからである。

これは少年の謂わば他人に流されやすい個性という物が選択の余地のない『仕方ない』という状況から生まれたとも言えた。

「強いよ、ハクは」

「お嬢が言うのであらば、強いのでしよう」

そのお嬢は、雪が積もりかけて僅かに垂れた木の上に居る。

「いくよー」

木の葉々に隠れ、どことなくぐもったようなその声が少年の耳へ届いた数秒後、宙に十数枚の木の葉が舞った。

落ちてくる葉を串き、地に舞い降りる前に処理するという独自の修行の一環である。

一枚目、二枚目、三枚目。一息の内に穂先に搦め捕られていく葉々を、少女は木の上から頭だけを出して見物していた。

彼女からすればこの修行の風景を見ることが何よりの道楽である。

彼女は自分の同年代の子らと刃を交えて鎬を削るよりも余程自分の為になるのだと思つて憚らなかつた。

無駄のない精錬された動きと言うのは、一種の美しさを産む。

少女はそんな言葉は知らなかつたが、事実としてはつきり認識していた。

「……」

槍をくるりと廻して少しの達成感に浸る少年を木の上から睥睨し、少女は蒼色の瞳を遙か前に向ける。

そこには自分よりも三歳くらい歳上の——即ち少年と同年代か歳上くらいの女が、雪の蔵の中で冷やしていたであろう布を持ってこちらへ向かつて来ていた。

(……む)

狙いは、ハクだろう。

早々にそう看破した少女は、無造作に木の上から飛び降りた。

蒼髪が風を含んで拡がるか、否か。それくらいの素晴らしい反応速度で動いた少年が滑るように進み、飛来し、降下してくる少女の身体を無理なく軟らかに受け止める。

「お嬢、危険で——」

「あつちに向かつて」

窘めるような言葉を言い切らせることなく、少女はムツとした表情と声色を隠そうともせず、少年の右肩を叩き、一刻も早い進発を促す。

自分でも何だかわからない、訳のわからない感情に従ったのは、これが初めてというわけではなかった。

いきなり飛来した上での唐突な命令に対しても特に怒るような様子も見せずに少女をおぶり、少年は『これも修行の一環だ』と言わんばかりにザクザクと深い積雪を踏み分けて言われた通りに『あつち』へと進む。

少女としても別に何があるからそちらに行けといったのではなく、完全な思いつきによる命令であるから、何かあるまでは迂闊に『止まれ』とも言えない。

防水性に優れた黒い男袴と黒い長靴がほんのり水気を孕んできたあたりで、積雪は急になくなった。排除された、とも取れるほどに明確に削り取られたその一本道を見て、二人はしばし止まった。

——これは敵の軍道ではないか
という疑念によって。

獣道である可能性も、勿論ある。しかし——

「あれは北の兵……遂に来ましたか」

特徴的で目立ちはするが優れた防寒着を基調にした軍装の兵たちが、シャベルでせっせと雪掻きに励んでいるところを見ると、その可能性は無に等しいところまで低下したと見るべきであろう。

(どうしますか?)

(……殺しちゃえば?)

敵だし。

彼女の口から極小にまで抑えた音量で漏れた一言を補足するならば、そんなところか。

結果的に見ればその判断は正しかった。その数秒後にどのみち二人は見つかっていたからである。

見つかってから殺しに行くより、見つかる前から殺しに行く方が有

利。パルタス族ならば子供でもわかる先手必勝を旨とした鉄則だった。

「お——」

お前はパルタス族の一員だな。

その確認すら取れず、複数の工作兵たちの喉には風穴が空く。

何かを言おうとしてか、空気のみが漏れる儂い音を立てながら死に行く兵たちの死骸を放置し、少女のお守から戦闘機械へと変貌した少年は、すぐさま次の獲物に襲い掛かった。

彼らの首元に、笛がある。

喉に狙いを定めていた少年の頭には、真つ先にその喉に程近い部位に掛けられていた笛を利用することが浮かんだのだ。

「暗号とかは、ないの？」

最後の一人にとどめを刺し終え、ひよつこりと姿を現したエスデスに対し、ハクは少しの沈黙を経て、言った。

「恐らくは」

笛を何に使うかと聞かれれば、非常時の合図が第一にくる。

では非常の事態に直面した時に、人は笛をどれだけ正確に鳴らせるか。

精々一回やそこらだろう。

峰々に木霊する笛の微細な高音を聞きながら、狩人と求道者は獲物を待つ。

この日の二人の狩りは、前衛として侵入していた北の兵たちがその数を半減させるまで続いた。

そして、北の兵来るの報は夕刻に帰ってきた二人の持ち帰った物的証拠によって現実味を帯びて戦士たちに伝わり、正式な戦士以外の少年少女に外出禁止令が出されることになる。

老戦士たちは来たるべき戦いに向けて侵攻ルートを予測し、罠を仕掛けたりして備え、若い戦士たちは武器を磨いて此れに備える。

この期に及んでもいつも通りの鍛練を繰り返すハクと、それをぼんやり眺めるエスデスのみが浮いていた。

最も、彼らにも言い分はある。

「どたばたするよりは泰然と構え、普段通りの力を出せるように専心した方がいい」

「これから『戦士じゃない者たちは狩り以外で戦うべからず』っていう掟を破るんだから、今は大人しくしておいたほうがいい」

ということであり、二者ともそれなりの算段があった。

寧ろ、備えているように見えて浮き立っていたのは他の者達だろう。なにせ、戦場を守る側が選べると思っていたのだから。

侵攻する側と、される側。どちらが有利かと聞かれれば、それは守る側だろう。しかし、限られた戦力で守らねばならず、なんの要塞も城もないとあらば話はまるで別だ。

こうなつた場合は攻める側が、圧倒的に有利なのである。故に。

「東の山道から来たようですね、長」

「ああ」

苦虫を噛み潰したような表情で、長はハクの言葉に答えた。

彼らが来ると思っていたのは、当然北方向。つまり、パルタス族の老戦士たちは北の兵らが真っ直ぐ南下してくると信じて疑っていなかったのである。

が、彼らは攻め口を変えた。

パルタス族の戦士らが危険種と戦っている間に人と戦い続けている者達とは巡らす思考の方向が違うとも言えるから、仕方ないことだろう。

「どうするんですか？」

全員掻き集めても百人しかいない戦士。その半数を北方向の防衛に遣つたのだ。東はガラガラ、物理的に回れない南・峻険な西に戦士を配置する必要はないから何とか対応できたが、罨も何もないので負けの目しか見えない。

「まあ、俺が百人斃すさ」

「戦士一人が百人斃しても、まだ尚敵は溢れるほどにいます。我らは死ぬまで戦うとして、戦えない者達には北方向の防衛に遣つた五十人

の戦士に護衛させて南に避難するように促してみても如何でしょうか？」

「そうだな。好きにしろ」

許可を得てすぐさま行動に移るまだまだ小さな背中を見て、長は堪らずに言った。

「お前には、エスデスのお守りっていう役目がある。あいつと南に行ったらどうだ」

「お嬢を護るには、時間が必要です」

だから、ここで死ぬまで時間を稼ぐ。

小さいが、大きな背中がそう雄弁に語っていた。

「ハク、死ぬなよ」

「お嬢に死んだら絶対に赦さないと言われました。私は死は恐れませんが、延々とお嬢に臍を曲げられ続けることを恐れます」

東の簡易砦に赴く前に、黒い服に包まれたハクの筋肉質な胸部を本気と半々くらい力で叩きながら、エスデスは言ったのだ。

『死ぬな』、と。『死んだら絶対に赦さない』、と。

そう言われたならば、彼は死ぬ訳には行かなかった。

少年が指示を伝え終わった、数分後。北の兵たちは堰を切った水の如く簡易砦へと押し寄せる。

殆ど絶望的な戦いが、始まった。

苦境を突く

駆けた。

繰り出した黒い穂先が敵の右側の眼球を貫通した瞬間、少年は自分が半歩前に駆け出したことを自覚した。

勇気とは人より半歩前に踏み出すことであり、踏み出さねば臆病者に終わり、一步踏み出してしまえば無謀に終わる。

槍が増えたかのようにすら思える連続した刺突が敵兵の無防備に過ぎる柔らかな肉の部分を貫き、血飛沫を上げて紅い霧を作り出した。

血の霧は、彼の動きを僅かに鈍くする。そしてその鈍化は、一息のうちに繰り出せる無謬の刺突、その回数が心理的な息苦しきによつて減少さしめた。

「おい、あんま無理すんなよ！」

未熟な少年を軽く窘める長は大柄な戦斧を自在に振るい、一息に五、六人を葬っていく。

パルタス族は、思いの外強かった。

「はい」

呼吸が止まってしまいそうな息苦しきの中で、やっとそれだけを搾り出す。

しかし、鍛練を積んだ少年の槍は止まることを知らずに半ば反射的に刺突を繰り出し、北の兵たちの喉や腹を貫いていた。

(この息苦しきはなんだ)

降り掛かる剣刃を半歩横に身を翻して避け、その動作に連動させて槍を繰り出す。

それだけで、何やら高そうな鎧を纏った戦士は斃れた。

(体力的にはまだ戦えるはずだが)

その戦士が斃れたことに激昂したのか、何人かの兵たちが一斉にこちらに向かって駆け出す。

しかし、彼らの持つ剣の間合いに少年が入る前に槍が彼らの喉輪を喰った。

身体の動きの鋭さは、鈍化していない。一時的に鈍化したけど、再び砥がれた。

ならば、何がおかしいのか。

「フウ——」

一息、大きく溜まった息を吐く。

肺腑に詰まったような感覚が幾分か軽減されたことを、少年は感じた。

無論、その隙を逃がす敵では無かった。思い思いの言葉で目の前の少年を罵倒し、そのことによつて自らを鼓舞しながら剣刃を振るう。自分なら殺せるという認識を無理矢理に植えつけて、彼らは呐喊した。

「疾ツ——！」

口から漏れる、烈迫の気合。

一息つき、息苦しさを解消させることによつて精妙さを増した槍技は、再びその猛威を奮う。

「——」

黙々と積み上げてきた鍛練を土台に、分裂したかのようにすら見える神速で槍を繰り出した。

一本の幹となった槍と両手から枝と言う名の刺突が生まれ、敵を貫いて花を咲かす。

「連枝、とでも呼びますか」

穂先を死肉で絡め取られることを恐れて深入りをせず、適確に急所を射抜いて戦うその姿に北の兵たちは恐怖の眼を向けた。

連枝と呼ばれたその技は精度を少しずつつ落としつつも連続して繰り出され、少年に立ちほだかる敵を無作為に殺す。

喉から外れて頸動脈を纏めて断ち切ることもあれば、狙い違わず喉輪に穴を開けることもある無作為殺傷の『連枝』と名づけられた技は、北の兵たちにとって恐怖の対象になりうるものだったのだ。

少年の眼前に立ちほだかる敵が怯みはじめ、戦う意志に欠けさせ始めた頃。

「長——」

後方で奮戦する仲間から悲鳴のような声が鼓膜に届く。

疲労の溜まった腕は、今日だけで百を越える回数繰り出した突き型の型をはつきりと憶えていた。

目の前と左右の敵を処理し終わると、ハクはチラリと背後に視線をやる。

(長が斃れたか)

意識を他所に回したことを悟ってか、或いは無我夢中だったのか。

新たに目の前に出てきた北の兵が怯みを捨て、右肩に向けて剣を振るった。

それは危なげなく捌いた物の、三時間もの間指揮と鼓舞、殺戮を担当していた長の負傷は大きい。だれかがそれに変わる役割をこなさねばならないことは、ハクの頭にもわかった。

「長を後方に。砦は放棄し、隘路で敵を迎え撃つ」

精神的支柱である討たれば崩れる。そんなことは誰もがわかっている。

故に十になつたばかりの餓鬼の支持をスラスラと聞き入れ、パルタス族の戦士たちは撤退を開始した。

殿は現在前線をこなしていた十五人が半ば自然に努め、戦士たちの個人的武勇によってかなりの被害を受けていた北の兵たちも体勢を立て直すために一端退く。

拠点である砦を落とされたものの、百倍以上の敵に耐え切ったと言う点ではパルタス族は善戦したと言えた。

が。

「死者は二十人、負傷者が十五人、か……」

「どうしますか?」

「戦わなきゃなんねえだろうが。当たり前のこと聞くな、ハク」

仲間の一人を庇って肩に矢を、腿に槍を受けた長は、無理矢理に起きようとしながらそう言い切る。

まだ南方に撤退し終えたと言う報告はない。或いはもう終わっているかもしれないが、その確証がないのだ。

「わかりました」

最初からここを使えば他の道を開拓して回り込まれる可能性があったから一当てして注意を引くまでは使うことはできなかったが、できて一対二が精々なこの隘路を使えば勝機はないまでも時間稼ぎができる。

南に撤退している非戦闘員と戦士たちがどの程度で移動し終えるかは知らないが、最早北の兵たちと最初に刃を交えてから一日が経っていた。

「入ってください」

長の交戦の意志は固い。そう判断した場合は、こうしろ。

副族長から言われていた通りに幕舎の入口付近に向けて声を掛け、入ってくる戦士たちに驚きを隠せない長に向け、一言一言を区切るようにして、言う。

「長が討たれたら、パルタス族は最早パルタス族ではなくなります。そこにあるのはパルタス族残党です。長と負傷者には十人の護衛を付けて南方に撤退している一団に合流していただき、纏めて下さい」

「なっ——」

見事な手際の良さで後方に護送される長を副族長と共に見送り、ハクは少年らしからぬ覚悟を決めた相貌で、振り返った。

「さあ、死ぬか」

恩人と妹のように懐いてきた小さな暴君を守って戦い、死ぬるならば本望だろう。

神がそう言っただけで逃れたような舞台に感謝を捧げ、少年は昨日だけで百を越す敵の血を吸った黒槍を手を持った。

無論、死ぬ気はない。戦って時間を稼ぎ、残った仲間と逃げるつもりである。

「副族長、行きましようか」

「ああ」

戦士としての花道へ、五人の戦士は駆け出す。

彼らの粘りがいつまで続くかに、この戦いの帰結はかかっていた。

南方に避難していく一団の中に、エスデスは居る。

彼女は見るからに不満たらたらであつたし、何度も脱走して戦場へと行こうとした。しかしそのたびに熟練の戦士に止められて連れ戻され、ついにはくどくどと諭されて引き戻されることになる。

その繰り返しが五度に及んだ時、エスデスはやっと諦めた。

その程度のことでは到底諦めそうにない彼女があつさりと諦めた理由さ定かではない。が、最早追いつけるような距離ではなかつたこともあるし、脱走して行軍を一々遅らせるのは得策ではないとわかつたからであろう。

ともあれ。多分普段の困つたような顔をしながら飄々と生きて帰ってくるであろう少年のことを考えながら、エスデスは自身も馬に揺られながら脚をふらふら揺らしていた。

脚を揺らし、馬に揺らされる度に澄んだ水のような綺麗な蒼髪が揺れる。

エスデスは、暇だつた。

「長たちが合流されたぞー！」

遠くで響く、歓呼とも悲嘆ともとれない一言を聞くまでは。

「ハクも帰ってきたんだ」

二十五人しか居ないという報告を聞いてもなんの疑いもなく少年の生存を信じたエスデスは、馬から降りて雪の上を駆ける。幼い彼女の脚では短すぎて馬には乗れないから、この判断は妥当だと言えた。

「エスデス……か」

「お父さん、大丈夫？」

「……まあ、な」

到底大丈夫ではない怪我だが、峠は越していると彼女が一目見た瞬間に本能が告げた為、彼女の関心事はそこにはなかつた。

「ハクは？」

むしろ現在に於ける関心事は、そこにある。

「ハクは殿だ。まだ戦つてるか、死んでるかだろう」

「じゃあ、まだ戦ってるんだ」

既に死んでるというもう一つ結末を考慮にすら入れず、エスデスはそう即断した。

顔色一つ変えないその強靱極まりない精神をどう受け取ったのか、溢れ出る緊迫感を隠そうともしない戦士たちが口々に何事かを呟く。

「何故、そう言い切れる？」

それを片手で制し、エスデスの父であるパルタス族の長は痛みを堪えながらゆつくりと口を開いた。普通ならば、五人で殿をして生還するなどは希望的観測でしかない。そしてエスデスは、希望的観測をするタイプではない。

娘の思惑を測りかね、長は前言を翻して問うた。

「死んだら赦さないって言ったから、ハクは死なない」

「まあ、そんなようなことは言ってたが……」

一寸の心配も見せない娘になにか鼻白むものを感じながら、長は静かに目を閉じる。

自分に出来るのが祈るくらいなものだと、彼はよくよく知っていた。

そして、七日後。後世に異様なしづとさと地獄からも這い出てくる
とまで謳われた生還能力を遺憾なく発揮し、パルタス族一の槍使いは
仲間二人を担いで満身創痍で帰還する。

皆が口々に快哉を叫ぶ中、エスデスが発したのは――

「おかえりなさい」

の一言のみであった。

叛逆者を突く 一

南方へと落ち延びたパルタス族は、しばらくの間の安寧を得た。

壮年の戦士を多く喪ったものの、狩りの相手兼収入源である危険種は尽きたわけではないし、変わった事と言えば精々危険種の革や牙を売る相手が北方異民族から帝国へと変遷したくらいなものである。

北方異民族が何故攻めてきたかは未だによくわかっていないが、ともかく彼らは自然界に存在する弱肉強食の掟に自らすら当て嵌め、『弱いから負けた』と言う理屈によって自分を無理矢理に慰めていた。弱いから負けた。弱いから悪いのだ、と。

が、幾人かの腹の虫はそれでは収まりきらなかった。弱いから負けた、では済まないし、割り切れないのが人の感情というものである。彼らは同士を募って徒党を組み、北方異民族の邑を襲い、恨みを晴らした。つまり、幾人かの浅はかな行動が更なる戦争の引き金を引いたと言つてよいであろう。

まあ、こう言う類の事件の通例を犯さず、襲った当人はそこまで深く考えていなかった。彼らの脳内は極めて身勝手な復讐心であり、妥当に過ぎる人の感情の暴走のみだったからである。

勝ち目は殆ど無いが、少数民族にとつて族民を見捨てるなどという思考は働かない。寧ろ端から存在しないとすら言える。自然、迎え撃つことになった。

しかし、やつても負ける。今回ばかりは地の利もない。族滅は免れないだろうと、誰もが思った。

彼らは神に勝利を祈り、一か八かで奇襲をかける算段を整え、実行寸前まで漕ぎ着けた。

が、そこに救いの神が現れる。

救いの神は南から来た。帝国である。彼らは北方異民族征討の足がかりとして北方異民族に関しての知識を保有する尖兵を探していた。

無論、いざ征討するときは先陣に立つてもらつつもりで。

非凡な戦闘力と北方異民族との戦闘経験と言う知識を持つパルタ

ス族は、まさにその適役といえる一族だったのである。

帝国はすぐさま傘下に入ることをパルタス族へ打診し、これを了承させた後に辺境に備えておいた軍を出し、北方異民族を牽制。撤退させることに成功した。

この一事を以ってパルタス族は帝国の傘下に入ることになる。

ここまでは、十年前の出来事。

『ハク。浮気していないか?』

衝撃的且つ『まだ我々はそういう関係ではないはずでは』と言うツツコミどころ満載の一文から始まる手紙を広げ、青年になった少年はしげしげとそれを眺めた。

「……………ふーむ」

「どうした、ハク」

「いえ、お嬢から手紙が」

お嬢ことエスデスは、現在帝都で將軍になるべく武功を積んだりしている。

何故將軍になるべく武功を積んだりさせているかと言えば、パルタス族としてそうは簡単に使い潰されたくはないという気持ちがあったからであり、帝国は身内から一人高官を出しておけばかなり融通がきく社会だったからであった。

つまり、一人が出世すれば芋づる式に周りの複数人もその恩恵に預かれる。

恩恵に預かった数人で北方異民族征討の際にパルタス族を優遇し、あわよくば被害を最低限に抑えて怨敵を滅ぼしたいという腹であった。

『私は將軍になった。だから来い。浮気はするな。ふらふらするな。真っ直ぐ帝都まで来て、私のところに来い』だそうです」

「あいつも十八だもんな……………」

將軍になったということはまあ、エスデスならやりかねないと言う風潮がこの二人の中にはある。

故に最も驚くべき事に驚かず、どうでもいいようなことに一々感慨を見せる、というようなことが度々あった。

「どうしますか?」

「行きたいなら行ったらどうだ?」

相変わらず、判断を人に委ねる奴だ、と。長は内心でそう思う。

何というか、あまり己というものがない。我欲に欠けるというのか、何というか。ハクは天性積極性に欠けていた。

「……では、行きます」

「おう、上官の言うことをよく聞いて行動しろよ」

何気なく言ったこの一言がとある大事件に巻き込まれる要因になることを、長は無論知る由もなく。

パルタス族一の槍使いは、幾ばくかの路銀と干し肉を持って旅立った。

まず徒歩で南下し、雨季で荒れ狂うコウガを水性危険種を調教して渡河。そのまま河を伝って更に南下し、調教済みの水性危険種を売っ払って金に変え、更に更に南下。行く手を阻むタイザンを越え、まっすぐ南下した彼は予定通りに帝都に着いた。

帝都についてからもすんなりと軍舎に行けたわけではない。警備隊員らしき茶髪の男性を殺し掛けていた暴漢を無言で刺殺し、『お礼をしたので家に来ていただけませんか』と言う誘いに乗りかける寸前まで行き、『真っ直ぐ帝都まで来て、私のところに来い』と言う件の手紙を思い出して逃げ出したりと、色々あった。

が。

「ここだな」

後にやる事は『エスデス軍はどこですか』と聞いたあとに、加入する。

やるべきことを反芻しながら、ハクは軍舎に入った。

「……なるほど」

入った瞬間に燦めく細剣。鋭利な刃で自分の肩を切り裂こうとするそれに対して本能的な反応も見せず、防ごうともせず、細剣の持ち主の喉元に布に包まれた黒槍の穂先を突きつける。

「お嬢。これは如何にもあなたらしい歓迎——」

言い掛けて、ハクは完全に停止した。

白い軍服と蒼銀の髪に映え、似合っている軍帽。腰元には細剣を納めているであろう鞆に、手首までを覆っている黒い袖。

「……………」

無言のままに左手を肩から俎板風にストレートに腹まで落とし、目の前にお嬢らしき女性と見比べる。

「……………」

笑いながら親指で細い首を搔つ捌くようなモーションで端的に『いきなりだな、死ね』とばかりにジェスチャーを取るその無遠慮さは、まごうことなく彼の主人であるエスデスであった。

「遅い」

頭一つ分小さい背丈の上に乗る軍帽が近づき、槍を持っていない方の手を掴む。

北に居ずとも病的な印象を与えない程度の白い肌は変わっていないかった。

「お嬢、成長期ですか」

「……………九年会ってなければ、誰でも容姿は変わるだろう」

だが、先頭に立ってぐいぐいと引つ張っていくところは変わらないう。そんな感を持ちながら、ハクは九年前と変わらずに引つ張られていく。

背も伸びた。九年で幼女が女性が成長し、言うなれば華開いたと言った感じだった。

「……………小さい頃の私の方が好きか？」

幼い頃のように頬を膨らませるのではなく僅かに朱に染めるに留めたエスデスは、珍しいことに少し言い淀む。

成長を止めることはできずとも、抑制することはできなくもないというのが彼女の考えであった。

「私からすればお嬢はいつまでもお嬢です」

「つまり？」

「中身がそのままではありませんか」

無理矢理に主導権を搔つ攫つていく強引さも、何者にも変えられない氷の意志も。生きとし生けるもの全てが徐々に変わっていかざるを得ないこの世で、この女性ほど変化の少ない存在も珍しいだろう。「……ふん」

その一言で内心を詳しく表現してのけた想い人の硬い掌を自分の掌で味わうように位置を変え、指を絡ませて更にキツく握り締める。咄嗟の奇襲に対応するには不利だが、彼女としては今は煩わしいことを忘れたかった。

単純に、女でありたかったのである。

「私を見ろ」

「はい」

しつかと手を握ったままのハクと正面に相對し、進行方向へと後ろ向きに歩きながら、彼女は言った。

「見たな」

「はい」

「これが今の私だ。よく憶え、よく知るがいい」

病的な印象を与えない程度の白い肌。膝を越えるまで伸ばした蒼銀の髪に、身体に貼り付けたような機動性重視の軍服と、長靴下。九年前より遥かに女性らしい身体になっていながら、目指すところと服に求めるところは全く変化を見せていなかった。

これだけの特徴を持っていれば見つけられない方が変であるし、憶えられない方がおかしい。

それをわざわざ『憶えろ』と明言したのは、或いは初見で用意していた——彼女が自分で『らしくない』と思うほどに女々しい——言葉をも、もの見事に潰してのけたからかもしれない。

「お嬢はよくわかりましたね」

「私が見間違えることはありえないし、付近で一度会ったからにはお前を見失うことなどはありえん」

ハクもまた背骨が軋むほどに背が伸び、軟らかな少年の身体から固まった青年の身体へと脱皮している。外見的特徴である黒い切れ長の目と濡羽色の黒髪はそのままであるが、それでも幼さが完全に消え

た分の変化は相当あった。

それを気配だけで読むあたりは、流石エスデスと言ったところか。

「私は見間違えなかったと言うのに、お前は——」

「見間違えてはいません。愕然としただけです」

ハクにも、言い分はある。

そもそもエスデスはハクを徐々に好きな男として認識していつていたから、別段男らしく変わっていても驚きはない。そういうものだと思ってきたからである。

が、ハクはエスデスを妹のように慈しんでいた。凄まじい無茶振りにせつせと応えながらも恨みもせず、どこかで苦笑しながらも仕方ないと思っていたのは、彼女が自分より幼いからであろう。

つまり、妹と女と言うのは彼に言わせれば『生物としての種類が違う』。妹は妹であり、女ではない。そんな認識が、漠然とあった。

その認識を粉微塵に打ち砕かれて直ぐ様再起動することは、彼にとっては難しい。

なにせ小虎が虎になった程度な衝撃であったエスデスとは違い、アヒルの子が白鳥になっていた程度の衝撃を受けていたのだから、愕然とするのも無理はないであろう。

「まあ、いい。やるべきことがあるからな」

「やるべきこととは？」

「追撃だ。裏切り者のな」

エスデスはニヤリと獲物を追い回す時の狩人の如き野性的な笑みを浮かべ、ハクは引つ張られるままに厩舎へと出た。

四頭の駿馬を鋭く一瞥し、エスデスは心の底から愉しそうに、呟く。

「さあ、再開を祝しての狩りをはじめよう」

叛逆者を突く 二

狩り、と。將軍に任官したばかりのエスデスはそう表現した。

が、それはあながち間違つてはいないという程度のみで、正しくはない。正確に言えば南方で起こった叛乱の鎮圧である。

まずこの叛乱を説明するにあたって最も重要なのは、帝国の地理と周囲の状況だ。

帝国は『現在は』単一民族国家である。

王朝の頃はシンと呼ばれたこの国は、様々な手法を凝らして敵対勢力を味方につけ、靡かぬ者は東西南北に軍を派遣して征討するという手法で領土を拡げてきた。つまり、発祥の頃は連合政権らしい要素を含む多民族国家である。

が、その『様々な手法』の中には婚姻もあつた。血が混ざり、国の土台である民と民とを融和させることによって懐柔し、対等の盟を結んだ筈の元・敵対勢力を取り込み、呑み込んできた結果が後期のシンであり、それを土台にして飛躍したのが始皇帝である。

この始皇帝は帝具という遙か人智を超え、何万もの兵たちが鎬を削っている戦局すらを一瞬で変えうるような力を持った道具を作つたことからわかるように、英明であつた。その英明さは政務に於いても多いに発揮され、征討した民族に単一民族としての結束を自然に植え付けるといふ偉業に成功した。

余談だが、単一民族の癖に髪の色が中々にカラフルなのはこの時に血が混ざつた名残だと言われている。

ともあれ。最強を誇つたシン王国が帝国となつてからも征討しあぐねた勢力が三つあつた。

北方の異民族。

西方の異民族。

そして、南方の異民族。

元々が単一民族であつた彼らは連合を行い、締盟し、合併した。眼前の脅威に対して、三方に割拠する彼らはいずれも同じ行動をとつたのである。

少数民族がいきなり大国になったことを受けた始皇帝は、考えた。彼らの宣撫政策に時間をかけるよりは、内部を一枚岩にするほうが大事だろう、と。

こうして始皇帝の統治する時代におけるシン帝国の領土拡張は終わりを告げ、三方と締盟した始皇帝は全知全能をかけて護国の為の四十八の兵器を作り始める。

人は死に、朽ちる。しかし、兵器は死なない。管理が良ければ朽ちもしない。

そう考えた始皇帝最後の一大事業は、見事成功に終わった。最初に材料収集に役立つ『一斬必殺』村雨が造られ、帝具と呼ばれ始めたそれらは次第にその数を増やしていく。

今は各地に四散しているが、一時期は四十八もの超兵器が完成し、始皇帝の元に集まったと言うが、今全てが現存しているかは定かではない。

あくまでも四十八、と言う数は伝承であった。

ここで唐突に話は変わるが、南方にバン族と言う一族が蟠居している。

この一族の説明に辿り着くまで非常に長くなったが、彼らは始皇帝が征討・宣撫を諦めた三連合の内の、南。南方連合の中心的存在であった。

彼らを含む三連合とはシン帝国は長い間締盟していたのだが、ある帝の御世にそれが破られる。

その皇帝は、始皇帝を超えたかった。故に帝具を新たに作ろうとしたが、失敗した。

一応作れてはいるが性能においては帝具に及ばない為、この皇帝の御世に作られた二世帝具は臣具と呼ばれている。またしても、余談である。

失敗した皇帝は考えた。どうすれば始皇帝を超えられるのか、と。

帝具もどきを作ると言う正気ではない事業に金を注いで国が傾かなかったことからわかるように、この時代の帝国は豊かだった。だから

からこそ時の皇帝に『始皇帝を越える』と言う邪念が生まれたとも言えるが、非常に豊かだった。

そして遂に、彼は閃く。

『三連合を征討すればよい』、というふうなベクトルに。

始皇帝の偉大さは宣撫の巧きにあつたことを脳から消し去つた彼は、盟約を破棄して三方に一気に攻め込んだ。この奇襲はもの見事に成功し、南方連合は帝国に吸収され、北方連合は従属し、西方連合は負けを重ねた。

この滅んだ、南方連合。彼らは帝国が盟約を破棄してしまい、常に周りに敵を抱えて泥沼になつてしまつたことにつけ込み、ゲリラ戦を開始した。

最も豊かで隆盛を極めた時代に、滅亡の端緒がある。

一端泥沼化した戦線は容易に固まらず、帝国が疲弊し切つた今も休戦したり戦つたりを繰り返していた。

今回の狩りは、その休戦の盟約を破つたバン族そのものと言える。

「わかつたか、ハク」

「はい」

道中の時間を消費し切るほどの長い長い話を終え、エスデスは一つ溜息をついた。

何故好きな男と久しぶりに会つたのに、こんな黴の生えそうなほどに真面目な話をせねばならないのか。答えは久しぶりにあつて嬉し過ぎて『何から話せばいいかわからない』とすることに尽きる。

「征北——何だかの私も動員するあたり、帝国も本気だ。愉しもう」

「爵大良造征北將軍兼北方方面軍統括將軍では？」

「正直どうでもいい」

武を志す者誰もが夢見る榮譽の職を『正直どうでもいい』の一言で一蹴し、エスデスは湿気を含んだ温風に髪を靡かせて立ち上がった。

「ハク」

「はっ」

「太刀合え」

「御意」

九年前までの空気を取り戻せないことに少し焦ったエスデスの一言に寡黙に頷き、二人は静かに幕舎を出た。

彼女は腰に佩いた細剣の柄を二度叩き、彼は黒い槍を一回廻す。戦闘準備は、整った。

「殺す気で行く。殺す気で来い」

「無論」

死んだらそれまで。殺したらそれまで。弱肉強食の単純明快な世界観で生きてきた二人の太刀合いは、いつもそうだった。

下手な言葉を何万遍交わすより、殺し合った方が余程わかり合える。

間合いに於いて優位を誇る槍が喉に目掛けて繰り出され、蒼銀の幕を潜り抜けた。

狙われる部位を承知していたエスデスが横に身体をずらし、残った髪の間隙を黒槍が穿ったのである。

「避けますか」

「当たり前だ」

視界で蒼銀の幕を穿つのを確認する前。穂先から伝わる空気の微細な変動を読み取ったのみで手早く手元に戻した槍が間合いを詰めに来た細剣を迎撃し、圧倒し始める。

細剣が一手攻めるごとに、槍は二手。

尋常一様な白兵戦に於いては負けを知らないハクの技量が、更に壁を超えていた。

「やはり、接近戦では私の負けだな」

わざと空けさせた幕舎付近で響く剣撃に釣られて来た兵たちは、二人を囲むようにしてただただ眺める。

口の挟む余地もなく、一言を発する前に動く戦況。肩の動きしか見えないような絶技の応酬に、彼らは只管に圧倒されていた。

「白兵戦は負けた。だが、最後には私が勝つ」

細剣に比べれば槍の方に間合いの利があるにも関わらず、エスデスは一跳びに間合いを取り直す。

帝具。その存在を知らないのが、ハクの第一の不利であった。

「……なるほど、危険種でも喰いましたか」

間合いを取り直した彼女の背後から無数に出現する氷の剣をしげしげと眺めながら、ハクは静かにそう呟く。

流星にこのような大規模ではないが、こんなことをしてくる危険種を殺したことがあったのだ。

「惜しいな」

彼女の帝具は『魔神顕現』デモンズエキス。北の魔神と謳われた超級危険種の生き血その物である。

危険種を喰ってはいない。飲み干すことで、彼女は体内にその力を宿したのだ。

降り注ぐ剣の雨を碎き、躲し、掴んで捌いていくハクの美しさすら漂う体捌きを見惚れる思いで見物する彼女に、流星の如き速さを以つて氷剣が迫る。

「見事だ……」

槍を地面に突き立て、氷剣を掴んでは後続の氷剣を折れるまで碎き続け、二刀流に、一刀流、無手。

目まぐるしく様々な型を過不足なく使いこなし、円熟した強さを魅せるハクは若年にして一種の境地に達していた。

「お前ならば受け止められるだろう、ハク！」

迫った氷剣を細剣で微氷へと変えて防ぐ。

当たり前のように絶技を見せつけ、一層弾幕を濃くした後に、彼女は叫んだ。

現れたのは、巨大な氷塊。

剣刃の弾幕を凌ぎきつた後に、特級危険種すら潰せるであろう質量を持った氷塊。

一回でも受け損ねたら即死するであろう状況で、ハクの心は湖面の如く凪いでいた。

刃を掴み、伐ち、捌き、とどめの氷塊を槍の石突で打ち砕く。

そこまでは誰にでもできる。

そこまでは彼女も読み切る。

ならばどうするか。

思案を終え、降り注ぐ剣刃を掴み、捌き。氷塊を打ち砕いた時、ハクの姿はエスデスの視界から消えた。

(何?)

ハクが槍を逆手に持ったと同時に白兵戦に切り替えたエスデスは、斬り掛かった残心のままに気を抜かれた。

居ない。

帝具使いではないから、摩訶不思議な現象は起こせないはず。つまり、選べる選択肢はそう多くない。

砕けた氷塊の欠片が陽光に燦めき、大粒の雹となって地面に落ちる。

一秒にも満たない思考の合間にその光景を目の端で捉え、エスデスは直感的に悟った。

「上か！」

「御明察」

氷を纏わせ、盾の如く肉厚にした細剣が落下速度をも味方につけた槍の一撃をギリギリで耐え抜く。

あまりの重みに砕けそうになる肩を力を僅かに抜くことで崩壊を防ごうとした瞬間、黒い槍兵か地に立った。

「——ッ——」

細剣を咄嗟に放棄し、掌から大雑把な氷剣を出して刺突を防ぐ。

一瞬でも躊躇い、決断力を鈍らせれば死んでいたであろう一撃を繰り出したハクの表情に、油断は無い。

自分が自ら追い立てて苛烈に喰らうタイプの狩人ならば、淡々と盤面を閉塞して詰めていくような狩人。

それが、この槍兵だった。

幾度も補強しつつ戦っていたとはいえ、今まで使っていた氷剣が三度目の突きで砕け散る。

右半身、中段。

必殺の構えになったハクに、エスデスはこの手が届けとばかりに新たに精製した剣を持つ手を伸ばした。

あと、僅か進めば氷剣が彼の胸に届く。

その、僅かが稼げない。

「あなたを傷つけるわけにはいきませんから——」

石突で胸元の印を軽く小突かれ、僅かが更に延ばされる。

「——これかどうか、御勘如いたいただきたい」

窘めるような、小突き方。

「私の、負けか」

小さな頃から幾度となく受けてきたその一撃に含まれた温かさは、何も変わってなどいなかった。

叛逆者を突く 三

血と、汗。二つの液体が入り混じり、悲鳴と絶叫が入り雑じる戦場という空間に、二人は居た。

「それにしても、あれだな」

眼前の敵に対しては細剣で眼球を抉って対処し、後陣の敵には氷の剣を振らせて一方的に殺していく。

戦争というものを馬鹿にしているのかと思うほどに適確な範囲攻撃と一点集中の局所攻撃の巧みな使い分けを以って戦略的に甚大な影響を与えて続けていた。

「あれとは？」

隣で槍を分裂させて一気に複数人を倒したように見せているハクもまた、凄まじい。前に居れば喉に風穴が空き、横に周れば連枝の餌食に。後に周れば石突による一撃が待っている。

不落の要塞のような感覚すら懐かせる二人の奮戦ぶりは、帝国兵たちを奮わせるには充分だった。

「もう、こいつらは終わりだな」

遙か後方で鎌首を擡げた水龍を一目見て包囲が成功したことを悟ったエスデスは、つまらなさげにそう呟く。

あまりにも簡単に勝ちすぎると言うのが、その不満の元であった。彼女からすれば、もっと火花が散るような戦いが好ましい。互いの脳から智慧と策を絞り出し、鎬を削りあつた末に強引に振じ伏せていくような。

「お嬢」

「わかっている」

飛び掛かってきたバン族の戦士一人を槍の石突が鳩尾に食い込み、繰り出した石突が手元に戻った瞬間に氷柱が腹を貫く。

白い軍服と、黒い革鎧。後に畏怖の象徴になる二人の張った初の対外共同戦闘は、速やかな包囲殲滅を以って決着した。

が。

「……お嬢、少し」

「うん？」

「補給線が伸び切っています。ここらに一つ、拠点を作って中間拠点としたほうがよろしいかと」

一回の完勝のみで遠征そのものが終わった訳では無論ない。無敵の強さを持つていても補給線を軽視した挙句にそれを絶たれば、一敗地に塗れることになるだろう。

パルタス族の戦闘隊長として北の異民族を大破し続けてきたハクには、敵がこれからとるであろう戦術が自分の思考のように簡単に掴めていた。

「造るには造れるが……氷の城は長くは保たんぞ？」

「氷の城ではなく、捕虜を利用して土城を築きます。ちようどいい山も見つかりましたし、あの山を削り貫いて要塞にするが適當かと」

指差したのは、それほど標高の高くない山。先行させた調査部隊に行かせた土壌調査の末、中間拠点として適當な場所に該当する山々の中で最も掘削に向いていると判断された山である。

「ああ、だからいきなりの生き埋めに反対したのか」

「殺すならばいつでも出来ます。活かしきらねばなりません」

乏しい補給線の所為で捕虜を得た時の選択肢が『斬殺』『坑殺』『刺殺』の三つしかなかった彼女にとって、『生かして活かす』という選択肢は新鮮だった。

もともと、彼女が活かすことを思いつかないほど愚かであったということは断じてなく、単に殺す方が彼女の好みに合致していた為に視野が限定されていれていただけであろう。

「結局殺すんだろう？」

「一般的な戦であれば、活かして殺さずと言う手法が一般的ですが、今回の目的が『根切り』である以上、そうした方が適當かと」

今回命ぜられたのは、族滅。単純明快に思考の余地なくバン族を殺し尽くすことであり、そこに逃げ道をも脇道もない。一人残らず敵を殺すことでのみ、その命令は達成されるのだ。

「女子供は生かしてもよいとは思いますが、私やお嬢のような例もあります。ここでは趣味は抑えられて忠実に命令に従うべきかと」

「生かしておいたら生かしておいたで面白そうなのだが……」

自分たちは奮戦と天運で危うく族滅を免れ、残党になることは免れたものの、子供の時には既に殿を務めていたような槍兵と帝国最強を謳われているドSは如何なる状況でも生き残っていたであろう。

征服者からすれば『生き残りの中にぞろぞろとそんな奴が居てたまるか』と言うのが心境だろうが、有り得ないことではない。

故に、新芽は摘まねばならないのだ。

「お嬢。あなたがドSなのは仕方ありません。私もとやかく煩く言う気もありません。が、将としての公務に私情を挟むのはやめられたほうがよろしい」

「わかっている。何よりも、残党を潰して回るよりお前と戦っていた方が嬉しいしな」

欠けた部分を補い、歪みを直す。

これが長がハクに期待したことであった。

しかし彼の性格的にそれは非常に難しく、専ら性癖である過剰なまでの嗜虐心を受け入れつつ、道を違えれば是正する。これが彼に求められたスタンスとなっていた。

基本的に感情を合理によって動かしているハクは、義憤や悲憤を懐かない。常人が遭遇した出来事に対し、最初に感情の音を鳴らすことに反し、彼は理に適っているかをまず考えた後に理に適う形で感情の音が鳴る。

感情を再優先に持っていきながら理に適う形で行動することも多い、ある種矛盾した人間であるエスデスと対象的な彼は、本人の流動的な性格さえ除けばこれ以上ないほどの補佐に適した人材と言えた。

繰り返すことになるが、これは流動的な性格を除けばの話である。全てを染め上げて突き進むエスデスの性格と、基本的に寛容すぎるほどに寛容な性格のハク。この両者の性格的な相性は主従的な意味ではよかった。

が、その相性の良さは長が求めている物ではない。親である彼からすれば寧ろ、娘に諫言を呈してくれるような人材になって欲しかったと言える。

だが。その『人としての性能面での相性の良さ』『性格的な相性の良さ』が奇跡的な整合性を以って噛み合い、変化は起こった。

エスデスが人の言う相反する意見をバツサリと否定することなく僅かに耳を傾けてくれるようになったのである。

その変化の要因の中には恋慕もあった。

されど一番の要因は、帝具という絶大なアドバンテージを得た自分を生身で圧倒した実力を重く見、強者として敬意を払ったからであろう。彼女は強さのヒエラルキーの頂点に立つ存在であつたからあまり注視されなかつたが、彼女は認められた者には敬意を払い、尊重するよくな一種単純なところもある。

何故ならこの世は弱肉強食だから。その一言が彼女の真理だつた。

故に彼女は強者に聞く。

「他に何か、案はあるか？」

「いえ、このままで良いと思います」

一年前。帝国の切れる最強のカードは、四枚あつた。

その声望故に中央から容易に動かせない大將軍候補・ブドー。

用兵の鋭さと帝具の強さが高水準に達している征西將軍・ナジエんだ。

用兵に於いては随一と謳われ、本人もそこそこ強い征南將軍・ロクゴウ。

歩く戦略兵器でありながら用兵にも荒削りながら非凡なものを見る最年少の將軍、エスデス。

この四枚のカードを一気に使うのが一年前までの帝国の最善手だつた。

しかし、一ヶ月前にロクゴウが革命軍側に寝返り暗殺チームに討たれることで、切れるカードは三枚に。

更にはブドーが大將軍に任命されるにあたって外征用に用いれるカードが二枚になつたのである。

この切れ得る最良のカードを切つて、帝国はバン族討滅に臨んでいゝる。その硬い決意のほどは推して知るべし、だろう。

「では、利用し切つて根切りにする。処刑方法は――」

「お好きなように」

あくまでも上の命令には従うべきであり、どう非難されようが気にしてはならない。

ただただ命を遂行するのが下の役割であるし、ここで中途半端に力を削いで生かしておいて後にまた出る被害で失われる命と、今根絶やしにすることで失われる命。

(根切りは正しいな)

理性の男は暫し考え、頷く。

根切りにすれば叛乱の抑制にも繋がるし、見せしめにすることで助かる命とここで奪う命を天秤にかけても、やはりここで奪う命の方が軽い。

「では、殺そうか。取り敢えず進行方向にある森は氷漬けにし、迂回。チヨウコウを渡河する」

「……チヨウコウは流れが速いと聞きます。筏を作らせますか？」

「ハク。私の帝具は何が出来る？」

愚問を投げ掛けた自分の唇を噛み締め、自戒する。まだどうにも、帝具という物の逸脱さに慣れきれていない自分が、彼は情けなかった。

「愚問でした」

「気にするな」

互いにわかった、会話の終わり。

ハクは幕舎の自分の寝台に座って瞑想をはじめ、エスデスは手持ち無沙汰な様子で長い脚をぶらぶらと振り、止める。

脚を揃えて姿勢を正し、幼い頃の面影をそのつまらなげな頬に残した彼女は、見ることにした。

ハクを。

「……………」

伸ばした背を屈め、膝に肘をつけて想い人の顔から胡座を掻いた長い脚までを凝視する。

いざやるまでは、鼻で笑って馬鹿にしていた。好きな者を見ていると言っても、それだけで心が満たされるものか、と。

(童話も馬鹿にはできんな……)

彼女の場合は満たされる、と言うよりは愉しくなる、だろう。だが、鬱屈とした暇が解消されたことに変わりはない。

(……ふーむ)

瞑想している黒衣の槍兵の前をつかつかうろろと歩き回り、何事かを思いついたかのように手を叩く。

「……軍帽は被せないでいただきたい」

自分の頭に被っていたものを細長い指でくるくると回し始めたことで勘付かれたのか。

千里眼にも似た鋭敏さを持つハクの一言を受け、エスデスは反射で背筋が跳ねた。

あの手この手で度肝を抜くような悪戯をしてやろうと工夫に工夫を重ねていた幼少期。散々見破られていた時に反射で見せた反応を、十年近く経った今でも身体は鮮明に覚えていた。

「……せっかく似合っているのですから、そのまま被っていればよろしいのです」

ひよいつと奪われた軍帽がなんの素っ気もない一言と共に頭に乗せられ、大きな手の感触が二度ほど頭頂部に布一枚隔てて触れる。

「私に、似合っているか？」

「とても」

すぐ離れた手の感触を意識に追わせながら、エスデスは嬉しげにそう問うた。

そして。

「似合っているか？」

「似合っています」

こんなやり取りが、以下数時間ひたすら続き。

「可愛いですよ。帽子は。帽子は。」

帽子は

通算五十七回目にそう言われて拗ねるまで、エスデスは氷の美貌をとろけさせていたと言う。

叛逆者を突く 四

「いい加減拗ねるのをやめていただいけませんでしょうか？」

「……………ふん」

くるくると万年筆を遊び、未だに少し拗ねた様子のエスデスはそっぽを向いた。

渡河作戦の後、首都をチョウコウを利用して水浸しにして住民諸共葬り去り、逃げた先にあつた副都も氷漬けにして潰し、全部で二十五万を捕虜に。周辺諸都市をリヴァ・ダイダラ・ニヤウの三獣士とハクが丹念に磨り潰して周り、合わせて十万を斬獲し、十五万を捕虜として帰還。

リヴァの帝具『水龍憑依』ブラックマリンを使用した水攻めに、ダイダラの大砲並みの突撃能力、ニヤウの『軍楽夢想』スクリームで混乱させる。

帝具の力を存分に生かして戦う三獣士と、勘と経験で培われた用兵で敵を踏み潰していくハク。中核としたエスデス本軍の周りを廻る衛星の如く四軍が敵を片っ端から薙ぎ払ってまわる方式は、三人の帝具使いと精鋭を雍しただでさえ高い攻撃力を持つエスデス軍の攻撃力を飛躍的に増大させた。

何となく突如現れて溺愛されているハクに蟠りを持つていたりヴァ以外の三獣士の内二人もこの戦法を提案した者がハクだとわかると、その実績と実力を認めて僅かに態度を軟化させたのだが。

「……………私が悪いのですか？」

「当たり前だ」

エスデスはまだ、拗ねている。

「何が悪いのですか？」

「自分の胸に手を当てて、私の帽子を見てよく考えてみる」

そっぽを向いた顔を一瞬だけ正面に戻したエスデスは、少しの逡巡も見せずに頭に乘せた帽子を掴んで放り投げた。

彼女の狙い通りに顔に当たるであろう軌道を描く帽子を片手で柔らかに掴み取り、形を崩さないように軽く撫でつける。

これは普通に主の持ち物に対する配慮であったのだが、エスデスからすればそうは映らない。

「やっぱり返せ」

一瞬で嫉妬メーカーが振り切った彼女は引き千切るような速度で搔つ攫い、帽子に憤懣遣る方無い気持ちに乗せて地面に叩き落とす。物にすら嫉妬をしかねないという程の深い執着心と、執着心よりも深い支配欲。

更にその支配欲より深く、暴走しがちな愛が全て、哀れな帽子に向けられていた。

「私の帽子は可愛いのか」

声色でそれとわかるほどの昏い嫉妬と、可愛さ余って憎さ百倍ならぬ恋慕余って憎さ百倍な雰囲気を全身から滲み出しながら、エスデスは極力平静を装い、問う。

「はい」

三獣士たちの必死の口パクも虚しく、基本的には嘘を吐かないハクは、あっさり逆鱗を撫で始めるといふ身の程知らずの所業に出始めた。

それでもエスデスは、ここで耐えた。物に嫉妬するなど、よくよく考えれば大人気ないのではないか——そんな思考が脳裏を過ぎり、逆鱗を撫で始めた馬鹿一人に更なるチャンスを与えた。

彼女は寛大なのである。

「私は？」

必死の形相でカンニングペーパーを指し示す三獣士を一瞥し、エスデスの方へと視線を戻し、ハクは言った。

「いいえ」

遠い目をしながら側に居た三獣士が脱兎の如く逃げ出すレベルの殺気を放ったエスデスに、ハクは更なる追い討ちをかける。

「質問の流れから察するに、ここははいと言う流れなのでしょう。しかし、私はあなたに嘘をつきたくありません」

「……………」

無言で決死の逃走を開始し、裏口から素早く各獣士が指揮する軍の

本営へと戻ろうとする三獣士の背を追うように、エスデスの異様に仄い声が背に掛かった。

「リヴァ」

「ハッ」

流石、と言うべきだろう。彼女に仕えると決めた時から身命を賭してことにあたる覚悟を決めていたリヴァは悲壮の雰囲気を含め、優雅に一礼をする。

リヴァの尊い犠牲に涙ぐみながら逃げ散った二人が視界から消える頃。

「……………私は可愛くないのか」

「……………」

乙女回路がオーバーヒート気味な主の様子に瞑目し、覚悟を決めてリヴァは問いに答えた。

「…………可愛い、と言うには適さない容姿であるかと思われます」

「……………そうか、下がれ」

目に見えて落ち込んでいる主に再び一礼し、リヴァは長い灰色の髪を靡かせて身を翻す。

自分の起こした火は、自分で消してもらわねば困る。

水使いらしい思考の元、彼はその場を後にした。

「…………私のことを可愛いって言ってくれたじゃないか」

「九年前ですから。容姿は歳月を経て変わるものです」

白布の如く他人の色に染まり易いが故なのか、或いは意識的にやっているのかはわからない。が、現にエスデスばりの容赦ない追撃を加えたハクは、何かに当たるまで止まらない黒い憤怒のオーラを納めさせるほどにまで凹ませている。

主導権を握ろうともせず、一切を受け身になっていながら主導権を握れてしまうあたりは流石のストッパーとしての適正であると言えた。

「小さい頃は背丈も相まって可愛いと評しましたが、背も高くなった今としては綺麗が適切かと」

いつもの如く適切な箇所が無意識のフォローを入れ、ハクは一礼し

た後に外へと歩みを進める。

エスデスが予め『合う』と予測し、要求した帝具が届いた今となつては、その能力を十全に発揮できるように準備をせねばならない。

強力な代わりに色々と厄介な制約を背負っている以上、全力を出せるように制約を満たすことが肝要だと、数時間前に受け取ったばかりの彼は考えていた。

「……待った」

「はい？」

「もう一度言え」

熱帯気候特有のキツイ陽光を浴びながら胡座を掻き、瞑想しながら備えているハクの肩を無理矢理に揺らす。

何故か最近になって趣味の瞑想を邪魔される傾向にある彼は、嫌な顔一つせずに再びゆっくりと口を開いた。

「今は可愛いと言うよりは、綺麗が適切かと」

「……………帽子を被ると？」

「可愛いと綺麗で半々……………くらいにまで変化する感じですよ。私見ですが」

言い終えてからすぐさま瞑想に移ったハクの肩を思いつ切り叩き、再び無理矢理に目を開かせる。

二度あることは三度ある。二度瞑想を邪魔されたならば三度目もまた邪魔されるのは最早定めであった。

「なあ、ハク。もう一度言え」

隣で膝をつき、黒い髪の色とあいまって色白さが目立つ顎を指で持ち上げ、顔を覗き込むようにして命令を下す。

病的なほどではない程度の色白さは、パルタス族の特徴的であった。

「綺麗ですよ、お嬢」

顎に掛けられた白魚の指を柔らかく取り除きながら帽子に手を乗せる。

一度、二度。痛みを感じない程度に叩き、撫でる。

エスデスは少しくすぐったそうに目を閉じ、両手を地についてその

感触を楽しんでいた。

「……隣に居てもいいか？」

「構いませんよ」

猛虎を仔猫のように躑け、あやしているかのようなこの状況に疑問符を浮かべる周囲に反し、二人はいつになく静かに時を過ごす。

朝方から日が昇り切るまで大樹を背にして橙色の光が漏れる夕刻までひたすらに日光浴と瞑想を併用して続け、陽が沈み切った瞬間にハクはゆつくりと立ち上がりかけ、止まった。

「お嬢、起きていただきたい」

「ん……？」

黒い革鎧に覆われた肩に凭れ、目を瞑って静かに息をしていたエスデスを少し揺らして起床を促す。

割と寝起きのいい方の彼女は、それだけで睡眠中の酩酊から覚醒した。

「……ああ、終わったのか？」

「終わったというよりは、陽が沈み切ったので終わりにせざるを得なかったという形です」

特徴的な目の縁を擦り、背伸びをしてから立ち上がる。

この程度の時間では、まだまだ制約を満たすには足りなかった。

「一石二鳥の方法を採っても、まだ足りないのか？」

「はっ」

胸の鎧に一瞬浮かばせた紅玉が、まだまだ満ち足りないとばかりに鈍く光り輝く。

強いことには強いが、非常に使い難い上に一度使ったら外せない。そんな曰く付きの帝具こそがエスデスがそうであろうと覚り、彼が適合性を示した物だった。

「……使おうとすれば使い難いが、使わずとも効力はある。だからこそ私はこれを薦めたんだ」

「白兵戦を主力とする私にとって自然治癒力の底上げは役に立ちます。助かりました」

身体に取り込み、一体化するタイプの帝具は何かしらの恩恵を使用

者に与える。エスデスの帝具である氷を操る帝具『魔神顕現』デモンズエキスは危険種の生き血。これを呑むことで身体能力の底上げに狂化による戦闘本能を鋭利にするという恩恵があった。

彼女の場合は狂化のデメリットを捻じ伏せたが故に戦闘本能は研ぎ澄まされなかったものの、身体能力は底上げされた。彼の場合は自然治癒力が大幅に上がったということになる。

白兵戦で、軽微な負傷は付き物。実力が同等の場合はその積み重ねが勝敗を分ける要因になることが多い。

その影響を受けないとなれば、その恩恵は計り知れないところがあつた。

「命令だ。死ぬな」

「……………嘘は付きたくないの、最善は尽くします。が、永劫死なぬことはお約束できません」

黒い槍を一つ廻し、掌を僅かに斬ると数秒の後に血が滲み、止まる。断裂した皮膚が癒着するまでに、一分たりともかからなかった。

使えないが、使える。奇妙な帝具であることに変わりはないが、優秀であることは確かだった。

「犬死にはしないことは、約束致します」

「……………そうか」

死にそうにはないが、何か。

何か致命的な感覚が欠けているような気がする。

「……………何か粗相を致しましたか？」

そんな思いを見透かしたかのように問いを投げるハクを見つめ、彼女は一回首を振った。

自分を負かした男の強さは伊達ではない。虚飾もない実のみの槍は、極めて高い階梯にある。欠けている感覚は、自分にもあるのだ。欠けているからといって負けるとは限らない。

「私は戦闘に於いて何が欠けている？」

「緊張感と慎重さでしょう。狩人故の油断、とでも言うのか……………そこが欠けていると思います」

「お前は？」

「……………総て、でしようか」

人の『今』はよく見ている。が、自分に求める技術を見ているが故に今を見ていない。つまり、総てに於いて未熟であるというように見えてしまうのだ。

だがこの視点の高さは嫌いではないし、欠点であるとも思わない。高みを目指せと言ったのは自分であることだし、彼女は別段そこを欠点としても見ないだろう。

「……………私に死ぬと言われたら、お前は死ぬか？」

「はい」

「それは何故だ？」

「お嬢ですから」

つまりそれは忠誠心だ。欠点ではない。

(近い所を突いたと思ったんだがな)

未だ欠点はわからない。しかしその欠点が致命的な欠陥であり、命取りになりかねないような懸念が彼女の頭を去らなかつた。

叛逆者を突く 五

見よ、貴様等の抛る最後の邑は赤く燃えている。

そんなエスデスの世紀末的発言の後、ナジエンダ軍の捕虜とエスデス軍の捕虜は狩りでもするかのように帝国兵に追い回された。

城郭都市たる最後の邑を失い、この大陸に最早逃げ場をなくした彼らは全軍で勢子となった帝国軍に追われ追われて、目の前に断崖絶壁があるとも知らずに自ら崖下へと雪崩をうって飛び込んでいく。

絨毯のように敷き詰められた同胞をクツションとして助かった者もチョウコウの河水を流しこまれた末に水槽の如く崖の壁上のみを凍らされ、一人、また一人と水死していった。

ここにバン族に加担した周囲の異民族を含む五十万近い人が一挙に地上から姿を消したのである。

「見えるか、貴様等の同胞が手も足も出せずに塵芥のように死んでいくさまが」

「この人屠が……！」

人を屠る者。人非人にして、異常者。その思いを一語に込めた彼の罵声は、戦闘民族のバン族らしからぬ鮮やかな表現力を持っていた。

恨み骨髄に達して色々感じるところがあったのか、人を豚のように狩っていくその姿を見過ぎたのか、或いは天が最後に憤怒を示すことを認めたのか。

ハクの玄人めいた用兵で首都を殆ど瞬時に落とされたバン族の王は、氷の魔神を憎々しげに睨みつける。

「いい眼だ。だが、所詮は豚だな」

こちらを睨んでから目の前の惨状に目を背けるように俯く王の背骨にヒールを刮りこませ、首にかけた首輪の鎖を上へと引いて無理矢理に視界に入れさせた。

「目を離すな。この世の原理が顕現した、何とも素晴らしい光景だろう？」

「異常者……が……」

「異常者？馬鹿言え。私が正常だ」

自分こそがこの世の原理の肯定者であり、履行者であり、順法者である。彼女はそれを信じて疑わない。

この世の原理は弱肉強食。弱い者は淘汰され、強き者の糧となる。親に教えられ、北の異民族との戦争に於ける敗走で実感した鉄の原理は、彼女の根幹となっていた。

「貴様等が弱かったばっかりに、守るべき者までもが死んでいく」
遠くに見える煌々と燃え盛る邑を心底愉しげに睥睨し、再び踏み敷く弱者へと視線を向ける。

齒を砕かんばかりに軋ませる男に更に体重を掛け、彼女は肉書獣の如き獯猛な笑みを浮かべた。

「弁えたか、豚。弱者は強者に楯突かず、ただ虐げられていればそれでいいのだ」

嗜虐的な笑みを浮かべ、氷の魔神は嘲笑う。

闇夜でも見えるように松明で崖の周囲をわざわざ照らし、後方から背骨を踏みつけ続けながら回した刃の無い軍刀で無理矢理に顎を持ち上げさせて、滅びをその目に焼き付かせる。

「貴様に、情けはないのかッ！」

「弱者へ掛ける情けはなどない」

一般の捕虜とは違う一郭に捕らえておいた少年兵にも容赦の手を加えることなく氷と水と死骸の地獄へと誘うように命を下す非情さと、残酷さ。

あまりの無力さに齒噛みしながら血を吐くように糾弾した王の言葉に、エスデスは一片の躊躇いも言い淀みもなく言い切る。

変えようのないほど強烈な自我はハクにも根底から変えることはできず、彼女の自身に変えてもらおう他ない。

しかし、その変わらなさこそが理不尽なまでの力の根源だった。

「……着いて行けん」

もう一人の将、ナジエンダはこの世の終わりのような惨状にそう呟く。

声を静かに呟くことしか、彼女にはできないのだ。

「そうでしょうね」

情けなさど無力さ。自分もこの地獄を作り上げるに一役買っていたとあらば、その心中の無念は如何ばかりか。

軍議で帝都からの命令を伝えた早々に顔を僅かに歪めたことから、ハクはこのもう一人の将が普遍的な良識ある人間であることに勘付いていた。

「……エスデス將軍の副将か」

「はい、ナジエンダ將軍」

最優先すべきは他人の命令であって自分の感情ではない彼にとつては情よりも命令を優先させるべき軍人という職業は天職だったし、必要とあらばいくらでも怜悯になれる分、こういう虐殺をやるにあたっても有用な人材だといえる。

が、こう言つた良識を持ち合わせた人間は——正直なところ、軍人には向いていなかった。

「着いて行けませんか、お嬢——エスデス將軍には」

「……………ああ」

一片の気配も掴ませずいきなり現れ、無表情でこちらの心境を確認するように問うてきたこの白面の武者に、思うところはないでもない。

しかし警戒以上に、エスデスのストッパーである彼を説き伏せればこの地獄も多少はマシな物になるのではないか、という希望の方が勝った。

「弱肉強食は、獣の世の掟だ。人の世に於いてそれを行使するならば、人と獣は何ら変わらないということではないのか？」

「……………」

「人には言葉があるし、理性がある。弱者が一方的に戮られ、善しとする世などはあつていいはずがない」

獣の世の掟。即ち、人が獣であつた頃に正しいとされた掟。

それは今の世において高らかに謳い、使われるべきものなのか。

ナジエンダは、彼にそう問うていた。

「正しいと思います」

そも、エスデスは戦いからして獣である。誇りなどは斟酌しない

し、無用な拘りはない。血を流せばそれを目潰しに使うだろうし、拳を振るうならば大地に振り下ろすようにして敵に喰らわせ、地に倒れたところを蹴り上げて追撃する、といったことを平気でやるのだ。

追撃狂、とでも言うのか。彼女は弱った敵を踏み潰すよりも蹴り、蹴り、突き、斬り、踏みつけて殺す方を好むだろう。

「では、何故糺さない」

「私は思想の否定者ではありません。弱肉強食と言う掟を否定することとはその掟を是とした数千万の人々を否定すること。私にそんなことができようはずもない」

「では何故、それと相反する私の思想を認めた？」

ある思想を是とし、それと相反する思想をも是とすれば、それは節操なしということではないのか。

定まっていないからこそその流れやすさ、というのではないのか。

その意を含んだ鋭い舌鋒を受け、ハクは少し困ったように頭を掻く。

そもそも彼は定まっていないのではなく、定めようとしていないのだ。どちらかに偏った見方をすれば客観性を失う。偏移を起こさずに中庸さを保ち、主が従僕を省みたときに何かを覚ってくれるような在り方こそが従僕のあるべき姿だと、彼は思っていた。

思想の熱烈な肯定者であり、強硬な否定者であるエスデスを主として持つならば、全ての思想の肯定者か全ての思想の否定者であることが望ましい。他者を鏡にするより、違った姿を隣に映してやったほうが時には欠けたところがわかり易くもある。

「……私が思想の肯定者だからです」

「肯定者？」

「頭ごなしの否定はせず、受け入れ、よく知ることで見えてくるものもあるのではないかと。私はそう思います」

顎に手を当てて考えるナジエンダから発される言葉を待つハクの頭もまた、回転していた。

この世で頭を使うやり取りとは、自分を知ってもらおうことである。他人から見える自分と自己が認識した自分を擦り合わせ、本来の

像に近づけなければならぬ。

言葉では足りないような情報を、伝え切らねばならぬのだ。

「……だが、矛盾した思想もある。矛盾を矛盾のまま受け入れることなく、解きほぐさねば理解することはできない?」

「矛盾した思想は、矛盾したままに捉えた方が真実の像に近くなるのではないでしょうか。即ち矛盾点とは相反する思想の争点であるとも言え換えることができますから、そこを自分の理解で崩してしまえば『何故争っているのか』と言う眼が潰えるのでは、と危惧します」

つまり理解とは思考の固定であり、探求の終着点である。自分の理解というものは自分で自分の終着点を固定してしまうものであり、その固定は他者を理解させるにあたっては諸刃の剣であるといえる。

固定せずに考え続け、周りに順応せねば強靱な意志の持ち主の考え方を是正することもできず、矯正することもできない。強靱な意志は別な強靱な意志とぶつけて糺すものではなく、傍らを省みて自ら糺すものなのではないか。

ハクの思想の要はそこにあった。

「……なるほど、よくわかった」

「拙き弁論で將軍の御耳を汚しましたこと、お赦してください」

ナジエンダもまた、強靱な意志の持ち主であろう。彼女は他者に屈することなく、自らの正義と意思を貫くことのできる勁さを持っている。

だからこそ、その思想の異質さをすんなりと受け入れることができ
た。

「……エスデスのあの行為も、是か」

「はい」

「……それに対する私の否定もまた、是か」

「はい」

瞑目し、風が頬を掠って通り抜ける如き自然さで一礼を返した彼を、ナジエンダは得難い人材であると見た。

思想の順法者にとって、諫められるまでもなく傍らを省みるだけで
自戒できる存在は、貴重だろう。エスデスが変わっているかどうかは

わからないし、変わっていてあれならばある意味大したものだが、兎に角。

「名は？」

「ハクと申します」

ハク。白か、薄か。どちらにせよ、流されやすく、染められやすい。が、自分を消して染められるのではなく、内に自分を秘めながら染められるのだろう。

「私の軍に來ないか、ハク。副官相当の待遇で迎えよう」

「私はエスデス將軍の為に死ぬと十年前から決めております。勿体無
いお誘いではありませんが、辞退させていただきます——」

丁重な姿勢を崩さずに断りを入れようとしたハクの身体が少し固
まり、無言で世紀末な所業が繰り広げられる右方へと向く。

「楽しそうだな、貴様等」

「……………ああ、お嬢。いつから？」

そこには彼の予想通り、文字通り周囲を凍らせるような殺気を放つ
氷の魔神が降臨していた。

「お前が節操なく誘いをかけられたあたりからだ」

「なるほど、それは絶妙な——」

いくら革製とは言っても、鎧が靴の形に凹むほどの無言・予備動作
なしの一撃を喰らい、微妙に眉をしかめた、二秒後。

「——タイミングでしたね、お嬢」

尋常ならざる耐久力を遺憾なく発揮し、ハクは素早く再起動を果た
す。

氷を蹴り碎くほどの一撃を殆ど無傷で耐え抜いた彼の右腕を思
いつ切り下に引っ張って身長差を縮め、エスデスはナジエンダに視線
を向けた。

「ナジエンダ」

「なんだ、エスデス將軍」

「これは私の物だ。私のハクだ。私だけのハクだ。誰にもやらん。い
いなっ。」

両手を肩辺りまで上げながら無言で頷いたことを確認し、エスデス

は腕よ千切れろとばかりに強く引つ張る。

「何を怒ってらっしやるのですか」

「黙れ浮気者」

「……ああ、離れるとでも思ったのですか」

浮気者という言葉をいつもの通り解釈したハクは、凶らずとも耳元で囁くように呟いた。

「私は望まれる限りはお嬢の隣に居ます。離れるときは死ぬ時か、必要とされなくなった時です」

隣に居ろと言われたのは、お嬢でしょう。

そんな一言を暗黙の了解と言う隠れ蓑の中に隠しながら、ハクは何でもないように言い切った。

一言で不機嫌から上機嫌へとメーターが振り切り、その振り切り具合を無理矢理に戻す。

赤面した顔を隠すように帽子を目深に被り直し、彼女は少し体重を掴んでいる右腕に掛けながら、言った。

「……………騙されんぞ」

「騙しませんよ」

これ以来、エスデスの拷問好きはかなり頻度を落とすことになる。

それは天秤にかけるまでもなく、他の女に取られたくないものがあるからであり、自分が側に居ないと安心できないからであった。

嗜虐の矛は、僅かに納まりを見せたのである。

銃士を突く 一

「お嬢、何でも望みを叶えてやると言われたら何を望みますか？」

「お前と組んで未来永劫、強敵と殺し合いいたいな……」

バン族殲滅をやり遂げた後の仮設執務室で、エスデスは遠い目をしながらそう零す。

彼女の視線の先には、窓から見える仮設練兵場があった。

「……ハク」

「はい」

鬱屈し、溜まりに溜まった戦闘衝動が蒼い目に澱む。澱んだ目が書類に向けられ、更に澱んだ。

最早どうしようもなく、彼女は戦闘に飢えている。目の前に極上の相手が目の前に居るのに、彼女はどうしようもなく飢えていた。

「戦おう……」

「求められては是非ありません。お受けいたしましょう」

こうなることは、彼女にはわかつている。基本的に彼は幼い頃に自分が振った割と無茶な願いを聞いていた。頼みを断らないし、命令には逆らう気すら見せない。

時空すら凍結させるような冷気が周囲の大気中にある水分を凍らせ、ダイヤモンドダストが生成させる。

気が昂ぶり、利き手は既に細剣の柄に向いていた。

「——いや、止める」

「そうですか」

窓際で余念なく日光浴をしていたハクを見、震えてすらいる利き手を柄から離す。

將軍としての仕事には忠実なのが、完全にアウトローな彼女の面白いところだった。

責任感が強い、と言うのか。部下の扱いもうまいし、情もかける。役割も基本的に万全にこなしてきた。

そんな彼女は、一見すれば帝国の忠臣であろう。しかし、趣味を知れば誰であろうとその評価を引っ繰り返してきた。

(その一事だけで、評を覆すにはまだ尚早であろうと思うのだがな) ルーチンワークを苦手とする癖に真面目にこなし、命令には忠実に従う。やっていることは忠臣そのものではないのか。

無言でこなすべき書類の半分を取り、万年筆を一本拝借する。

「手伝ってくれるのか?」

「秘密ですよ」

「うん……じゃない。ああ」

子供っぽい返事をしてしまった口を利き手ではない方の手で塞ぎ、ハクは割と慌てて訂正するエスデスをやけに温かい目で見つめた。

まだ子供の頃の癖が抜けきっていないところに、彼にしかわからぬ愛嬌がある。

「……それはそうと。最近給料が使い込まれているようだが」

「出征前にスラムや貧しい民から食べ物欲しいと言われましたので南部で穀物を買ひ、送ったのです。その為に少し費用が嵩みました」明らか話題を変えたことに気づきながらも追求はせず、あくまでも真摯に真実を答える。

そんな想い人の発した言葉にエスデスの澀んだ眼が一瞬で澄み切り、呆れたような視線を向けた。

命令とあらば善悪問わず完遂するが、本質的には流されやすくてお人好し。そんな彼が、スラムや貧しい民やらを目にして何もしないでいられるかと言われれば、いられはしないと彼女は答える。

他人本位、というのだろうか。兎に角彼はお人好しだった。

「……帝国でも十本の指に入るほどの高給だぞ?」

「ありがたいことです」

国政を牛耳るオネスト、大將軍ブドー、將軍のエスデス・ナジエンダ・ナカキド・ヘミの四将。次いでハク。帝国の最高権力者を後ろ盾に持つオネストのお陰で、エスデスの宮廷内での地位は高い。つまり、要求も通りやすい。

彼女がハクが金を求めてせっせと軍務以外の仕事をしていることを聞いて、放置したままであることはありえなかった。

故に、給料を跳ね上げるように要求したのである。

「……使い切ったのか？」

「はい」

「食費は？」

「自分で狩って捌いて焼いて食います」
「ないです。」

言外にそう告げ、槍を持ち上げて狩りに行くことを告げたハクを見て、エスデスはこめかみを人差し指で抑えた。

これでは、お人好しも過ぎるというものだろう。

「……私がつってやる。食っていけ」

「作れたのですか？」

心底驚いた、と言うような反応にエスデスの怒りのボルテージが一段階上がった。

目の前の男が下した自分への評価というものを知りたいものだと思う。

が、同時に既存の認識を超えていく自分というものも、彼女からすれば中々に悪い物ではなかった。

「……頑張ったんだ。そしたら出来た」

「流石です」

妹にでもやるように僅かに微笑みを見せた後に件の帽子に手を触れ、撫でる。

撫でる相手は今のところ自分に限定されているが、いつ誰にやるかわからないのが彼女の悩みの種だった。

「……癖なのかもしれないが、他の女にはやるなよ？」

「癖ではありません。お嬢が『お前はわかりにくい。だから私を褒めるときは撫でろ。それでわかる』と言ったのではありませんか」

最後に一際強く撫でられ、ぽんぽん叩いて仕事に戻る。

そんなことを言ったような気がしなくもないとばかりに首をひねって訝しむエスデスは、数分の後に考えることを止めた。

仕事に溜まりに溜まっていたのである。

「苦行だ……」

「私はもう終わりましたよ」

一時間と保たずに愚痴を漏らしたエスデスをピシヤリと黙らせるようなタイミングで、ハクは総量を半分に分けた書類を差し出した。溜まりに溜まった一ヶ月分の仕事をさらさらと済ましてしまうあたり、良識派の文官や大臣派のコボレ兄妹から実務能力にも優れていると評されるだけはあった。

「同じパルタス族なのに、何故お前はそんなに素早く適確にこなせるんだ？」

「私はお嬢の補佐役なので、足りないところを補うべく色々学びましたから」

基本的に矢面に立たされがちなパルタス族の舵をとっていた対外折衝役は伊達ではない。本気を出せば割と有能なのが、ハクの強みだろう。

必要に迫られないと他人の職務に干渉しようとしなのが玉に瑕ではあるが、偶にキラリと光るところを見せられるのはエスデスとしては楽しかった。

「エスデス様、お仕事終わったよー！」

「ご苦労」

完全に素が出ていたり乙女回路が全開駆動していたり——つまり、二人でいるときのエスデスの声の音階から職務用の一音階ほど低い物へ変わった瞬間を耳で如実に感じたハクは、顔を出さずに少し笑う。

どこで学んだのか、或いは地位が学ばせたのか。人は地位によって自らを変えていくというよりは、地位が人をそれに相応しく変えていくらしい。

エスデスの卓上に置いた腕の右に積もった書類を左手を遣って半分ほど抜き取り、必要事項と体裁、内容を盛り込みながら、ハクはそんなことをそんなことを考えた。

普段からそうだが、彼はエスデスに気鬱になるのではないかと心配されるほどに思考に埋没するのを好む。

これは命令を下されたときの機械のような徹底ぶりの反動と言っても良いのかもしれない。

「ハク」

ドアの開閉音がほんの僅かな余韻を残して収まると、早速声音が一音上がる。見事すぎる切り替えに再び内心で笑いを見せながら、ハクは声の方向に振り向いた。

「……私はいつもお前を馬車馬のようにこき使ってきたが」

彼女の心を正しく言い表せば、こき使う気はなかったであろう。

ただ、正規の軍事教育を受けた幹部がリヴァ一人というこの軍で、何よりもハクの何でもソツなくこなす能力は貴重だった。故に、命令を下してから気づくのだ。

あ。また働かせてしまった、と。

「私がお嬢の役に立てるならば、こき使われることこそが我が本望というものです」

忠実すぎる従僕と自分の目があったことで聞く準備はできているということを感じたエスデスは、いきなり本題を切り出す。

「更に働いてもらうことになる」

「御随意に」

そういったエスデスが広げたのは、帝国の地図。主な都市や山、川や湖や谷、地形の高低までが記されている、帝国のすべての地図と比べても極めて正確な部類に入るのであろう地図であった。

「我々は現在は専ら南の移植統治に専念させられている。故にニヤウとリヴァにスパイを放つように命令しておいたことは、知っているな？」

「はい」

ナジエンダ將軍が帝国で貧困に喘いでいた民を募って新天地である南方の豊穡な土地へと民を植えかえるという任務を全うし、その統治を任されたエスデスに全権を託す形で蜻蛉返りしてからしばらく経つ。

南部はまだまだ交通網なども張り巡らされておらず、戦禍によって破壊された邑も復興が完了しきったわけでもない。今は首都と副都とその周辺で経済圏を作り上げて穀物を作り、危険種を狩り、腐らぬように冷凍保存して帝都に送って金を稼いでいるだけであった。

「リヴァは副都で、ダイダラは治安維持の一環としてあちらこちらをまわっている。ニヤウは復興の指揮だ。なにせ人手が足らん」

「……叛乱でも起きたのですか?」

配下にいる帝具使いの現状を淡々と述べているところを見るに、戦闘能力に優れた駒が必要である状況に反して誰も動かすことのできないという状態を説明しているように、彼には聞こえたのである。

「そうだ。ナジエンダが裏切った」

「ほう」

別段驚いた様子も見せないで諾々と事実を受け入れるハクに対し、エスデスはファーム山から南方に通じる通路を戦っている者とは思えないほど形の整った爪でなぞった。

「ファーム山は革命軍の前線基地。本軍は南方だ。ここらの街道は先行して足止めしろ。私も一隊を率い、引き継ぎが終わり次第すぐに向かう」

南方と一括に言っても、帝国は広い。エスデス軍はすぐさまナジエンダを含む叛乱軍に追いつけるとは限らないだろう。

だからこそ、足止めだった。

「挟み撃ちの可能性もあるが、合流されては元も子もない。予期せぬ速度で迅速に行軍し、叩き潰した後に戻す刀でナジエンダと合流しに来た叛乱軍を潰す」

「御意。すぐに向かいましょう」

「馬は居るか?」

北の精強な兵を多く率っているエスデス軍には産地を北とする良馬が多い。

電撃的な侵攻・大火力での制圧こそがエスデス軍の必勝パターン。馬を揃えることに関して彼女が手を抜くことなどありえなかった。

「いえ。私だけならば走った方が速いでしょう」

「まあ、私の馬も軽々追い越していたから……」

一番速いのがハクの脚。二番目がエスデスの馬。三番目がエスデスの脚で、四番目がエスデスの副馬だということは、行軍中に証明されていた。

「では、行って参ります」

「気をつけるよ」

水つけが豊かな土壌に右脚で踏み出し、少し爪先がめり込んだ瞬間に左脚を出す。

数秒とかわからずに地平線の彼方に消えていく黒革の鎧が見えなくなるまで見つめ、エスデスは傍らの兵卒に声を掛けた。

「シヨウイを呼べ」

帝都から派遣され、ハクとも仲の良い内政官ならば信が置ける。

ハクの帝具を使った実戦が速くもはじまろうとしていた。

銃士を突く 二

太陽燦々、地は惨々。

「……いい天気だ」

そう呟いた黒髪の青年は三メートルの大槍を血に濡れた大地に刺し、代わりに傍らの林から斬って加工した掘削道具を使って黙々と屍を埋葬しはじめた。

屍の喉には一様に孔が空いており、偵察班を槍術のみで討ったことが伺える。

相手の中に能力の割れていない帝具持ちが居る可能性があることを否定し切れない彼は、細心の注意を払っていた。

戦う前から帝具の能力がバレていては不利にも程がある。ならば周りに気を配ればいいという話だが、文献漁りの末に盗聴の帝具や変装の帝具などもあることがわかった。

帝具は人智を超えたところにあるものであり、大体が常識の通用するものではない。

故に彼はより一層の慎重さを以って自分の帝具を気軽に見せるような軽率さを収めることにしたのである。

「……ふむ」

ここを通れないようにしているが、本当にここでいいのやら。屍を埋め終えて合掌した彼の脳裏にはそんな疑問が頭を過っていた。

偵察部隊が潰されたならば、警戒した本軍は避けて通る可能性もある。

地図を見たところ、無理をすれば迂回できなくもない道だったようにはなはずだった。

だが、そんな不安はある音によって打ち払われることになる。

鉄と軍馬、人の足音。如何に訓練を積んでいようとも、その音だけは消しきれない。

「……誰かと思えば、お前か」

「はい、ナジエンダ將軍」

大量の、漣のように響く軍馬の蹄鉄と兵の長靴の音に一先ずの安心

を得たハクは、辞儀を正して一礼を返した。

背中に巨大な銃を背負い、白馬に乗った銀髪を三つ編みにした女性。共に南部線線を戦ったナジエンダ將軍に相違なかった。

「兵も連れず、何の用だ？」

エスデス將軍を見限り、こちらの味方になってくれると言うならば最大の敬意を以って歓待する用意はあるが——」

そんなことは、ないだろう。向けられるに眼差しに含まれた言葉を最後まで読み切るまでもなく、答えは端から決まっている。

「御冗談を」

「だろうな」

裏切る筈など有りようもない。そのことを未然に知っているナジエンダの忠告もあつてか、両脇に控えた副官が仮面に手を掛け、精神力を籠め始めた。

「そして、エスデス將軍は候に封ぜられました。名を言うに際してはある程度の敬意を払って頂きたい」

「それはそれは。栄達著しいものだ」

語氣に大臣と組むエスデスへの嫌悪感と蔑みを孕ませつつ、ナジエンダは社交辞令を終える。

勧誘もやることにはやった。残すは、戦いのみだろう。

「帝具を持つていないお前が、帝具持ち二人に勝てると思うか？」

「私は命令を完遂するだけです」

背に挿した黒い大槍を縦に一つ廻し、陽光に照らされた黒い骨が輪を描いた。

(怯みはしない、か……)

絶対的に不利であることを示しても、全く怯みを示さないことは織り込み済みだが、できれば少しだけでも怯んでくれることが望ましかった。

エスデス軍の人材の豊富さは、正直に言つて常軌を逸している。

ダイダラの使う前衛の武人が持つことで多大な破壊力を敵に与える斧型の帝具・『二丁大斧』ベルヴァーグ。

ニヤウの使う同時にできるのは一つのみではあるものの、味方全体

の強化・敵全体の弱体化をこなせる笛型の帝具・『軍楽夢想』スクリーム。

リヴァの使う地の利を得ねば真価を發揮することは難しい物の、人の住む場ならばどこにでもある『水』を触媒にするが故に砂漠やらで戦わない限りは無能にはならない指輪型の帝具・『水龍憑依』ブラックマリン。

そして、エスデス本人の使う広範囲殲滅・近接戦闘・遠隔戦闘・味方の補佐。全てをこなせながらデメリットを持たない最強クラスの帝具・『魔神顕現』デモンズエキス。

更には三獣士相手に完封勝利を収め、エスデスにすら勝つたらしい目の前の槍使い。

(いずれ三獣士とこいつを斃していかなければ奴には永劫に届かない……)

エスデスの部下には、調略が効かない。皆が皆彼女に目をかけられ、恩を掛けられ、他の軍とは『練度が違う』といういかにも彼女らしい理由で一線を画してやることでその優越感を満たしてやり。

彼ら五方は骨の髄までエスデスの私臣だった。

「前衛、前に！」

「いつものでいく。奴は私が撃ち抜こう！」

副官が命を下し、ナジエンダ自身が檄を飛ばす。

七万の軍が鳴動する圧力を一身で受けながら、ハクはいつも通りに先んじて半歩踏み出した。

包丁を二つ併せたような三角形の刃と骨で固められた石突が、彼の持つ黒槍に備わった殺傷機能。

遠距離攻撃機能などはない。切っ先から石突までの三メートルが、彼の間合い。

しかし、それは。

左方、三メートル。

右方、三メートル。

前方、三メートル。

間合いに入った尽くが、ただの一薙ぎで切り払うことができるとい

うことに、他ならなかった。

「見参」

一薙ぎ、一振り。立ちはだかった兵卒を肋骨の隙間を縫って背骨を断つ。

身体の内部が透けて見えているのかと思うほどの技を無表情で繰り出しながら、ハクは機械のような忠実さで命令に従う。

足止め。殺すのではなく、彼が命ぜられたのはあくまでも足止めだった。

半歩進んで薙ぎ払い、一步退いては隊列を整えたところを石壁の如き怒濤の突きで貫き倒し、再び前線を崩壊させる。

正に、極みに達しようとする槍術の絶技を途切れることなく放ち続けるハクを、静かに狙う狙撃手が居た。

將軍・ナジエンダその人である。

彼女の持つ帝具『浪漫砲台』パンプキンは、珍しい部類に入るであろう銃型。奥の手こそないが、精神エネルギーを弾として打ち出し、ピンチになればなるほど火力を増すというシンプルながら強力な効果を持つ。この場合はまだ『ピンチ』ではないが、それでも帝具の名に恥じない程度の力は持っていた。

革鎧なんぞは軽々貫通するであろうし、貫通しただけに留まらず致命傷すら与えうるだろう。

身体にあたればの話だが。

「……銃型か」

そう一言呟き、ハクは槍の攻め手を収めて回避行動をとった。

散弾のように降り注ぐパンプキンの精神エネルギーを後ろに跳び退いて躲し、同時に前線との距離をとることによって続くパンプキンによる射撃の対処を容易に。

雨霞の如く降り注ぐ射撃を全て槍で迎撃した後に再び整った敵前線を文字通り突き崩す。

しかし、ハクは未だパンプキンの能力を知らない。彼が認識しているのはさ精々『エネルギー弾を撃ってくる。奥の手は不明』程度の認識だった。

故に、槍一本で前線を突き崩した後にナジエンダに向けて大槍を使った無謬の刺突を繰り出した時には、気づかない。

「ピンチは、チャンスだ！」

その無知があるからこそ、今までばら撒かれていた散弾とは格が違う、極太の光線が突如として放たれたことに彼は一驚する。

だが、彼は愛用の大槍を素早く引き戻して軽々避けた。が、向こうもそれにくたばるとは思っていない。更なる一手を、打ってきた。

「インクルシオか」

「御名答！」

背中に迫る鋭利な空気の流れでそれを察知したハクの嫌疑に、内に滾る熱さを隠そうともしない男の声が答える。

答えと同時に後方に回って背中から胸板へ突き通さんと繰り出された、透明化された槍。

「マジかよ……い！」

その穂先の、一点。半身になって軌道をずらしながら鋒のみを石突で止めて見せた槍兵に、思わずインクルシオから感嘆ともとれる声が漏れた。

更に驚愕すべきは、後ろを振り返っていない事だろう。振り返らずに、致命傷となりうる一撃を何の緊張も見せずに止めてみせる。

そのようなことが、どれほどの技量があれば可能なのか。

「インクルシオの装着者。名は——」

透明化で背後を取り、背中に向けて槍を繰り出してきた白い鎧の槍兵。

ファーム山で悪党狩りをしていた彼もまた、元は有名を讃えられて帝具を授けられた帝国の将兵である。

「ブラートだ。ハンサムって呼んでいいぜ」

『『百人斬りのブラート』、か』

今は恐らく土と水と氷にサンドイッチされて朽ちているであろう南部異民族との戦いにおいて、特殊部隊相手に奮戦した時について彼の渾名が、それだった。

「ハンサム。お前が名乗ったから、私も名乗ろう」

「は？」

「私はエスデス將軍——お嬢のしがない従僕、ハクだ」

まさか冗談をまともに受け止められるとは思っていなかったブラートはパンプキンから放たれる散弾を弾き終え、丁寧に名乗りを上げた男を見て、呆気に取られた。

繰り返しになるが、冗談をまともに受け止められるとは思っていなかったのである。

「いくぞ、ハンサム」

後方にしつかり気を回しながらもブラートの方へと向き直り、その中段の構えから大槍が炸裂しようとしたその時。

「待て」

「なんだ」

「やっぱブラートでいい。ハンサムは止めだ」

背後に迫る兵や矢を薙ぎ払ったりしながらも律儀に待っていたハクに向け、ブラートは先の口上を撤回を告げた。

このままだとひたすら『ハンサム』と言われ続けることになりかねないと、ブラートは殆ど一瞬で理解したのである。

「では、ブラート。行くぞ」

きつちり宣言からやり直し、中段に構えた大槍の突きが石壁となつてブラートに叩きつけられた。

ハクの槍が一突きすることに本当に石壁が発生して飛んでいったわけでは、無論ない。

その無謬無窮の刺突の連続が、あたかも壁のように思えただけである。

「……何が『しがない』だ」

充分お前もバケモンだ。

狙撃されないように巧みに位置取りをしながら、黒い槍兵は白い槍兵を穿かんとする。

達人同士の殺し合いが、幕を開けた。

銃士を突く 三

槍の描く軌道が、曲がる。

少しあり得ないくらいに湾曲し、肩を突かれたと思ったら脇を、脇を突かれたと思ったら胸を。異常な速度と精密性を併せ持つ槍の刺突。

並みの達人ならば反応すらできずにその身を穿たれるであろうそれを、ブラートは最初の一撃以外は完璧に防ぎきっていた。

「ブラートさん！」

ナジエンダの仮面の副官。潜在能力を引き出す帝具を保有する彼は、見ているだけで圧倒されるほどの攻防から目を覚まし、すぐさま自分の帝具を起動させる。

『超力噴出』バルザックの奥の手。詰まるところは、切り札。内容は通常の発動範囲の拡張。

通常の起動範囲である自身のみならず他者の潜在能力をも引き出すと言う強力な補助効果が苦戦気味のブラートに付与された。

「ありがとう———よー！」

攻め続けていたハクがはじめて、受けに回る。『悪鬼纏身』インクルシオの槍型の副武装・ノインテーターの薙ぎの一撃を縦に構えた槍で防ぎ、振り下ろしを槍の柄を盾として防ぎ、後方からの射撃を回避し切れずに一発もらう。

「喰らったか」

事も無げにそう呟き、掠った脇腹を空いた利き手ではない方の手で撫でた。

べつとりと、赤い。どうやら本当に一撃くらったのだと、とうに理解していた本能に続き、実証を経て彼の理性が理解を示す。

「負傷すんのが初めてってわけじゃ、無えだろ！」

「腹に孔が空いたことならあるが、掠ったのは初めてだ」

喉元を狙った刺突を半歩右にズレて躲し、ハクは返しの突きを見舞った。

当然の如く、避けられる。何せインクルシオで強化された挙句にバ

ルザックで強化されているのだから、その身体能力の強化幅は凄まじい。

未だ治癒力だけしか向上していないハクでは、今のブラートとは純粹な勝負では敵わないだろう。

「なるほど、敵わないな」

「他人事かッ！」

位置を入れ替え、ナジエンダから放たれる狙撃をブラートを遮蔽物として防ぎつつ、ハクはさっさと思考を終えた。

機を、待つ。

勝てないのであれば、攻めに相当する思考を削ぎ落とし、守りに徹すればいい。何せ彼の役目は足止めなのだから。

（気づきやがったか……）

槍は、攻める時にこそ最大の間が生じる。生じた隙を埋めるには引き戻しと言う一行程を踏まねばならず、ハクの実践経験から導き出された攻防一体の型はどうしても中途半端さを生んでいた。

しかし、守りに徹すればその無駄が消える。無駄が消えれば硬くなる。

「守ってばっかじゃ血が抜けてくぞー！」

「忝ない」

心配と挑発が混ざったような一括に、ハクは首を縦に落として答えた。無論、守りの構えは崩れていない。

ハクは、バルザックの強化能力を知らなかった。パンプキンのピンチを火力に変える力も、知らなかった。

だがブラートも、ハクの帝具の自動治癒能力を知らなかった。

帝具戦とは、お互いの能力の探り合いである。叛乱軍側は『仮面は力を付与するか、分け与えるか、引き出すか』『銃は追い詰めると火力が上がる』『鎧は透明になる』というように能力が割れてきていた。バテていないのはインクルシオをつけると身体能力が向上する、という点くらいであろう。何せ見た最初からインクルシオを纏っているのだ。脱がない限りはバレようがない。

が、エスデス軍側は——すなわちハクの帝具は、存在すら悟られ

ていない。能力などは知りようもない。

このアドバンテージをどう活かすかが、帝具戦である。敵の知らないことを知らないままに、もしくは気づかせないままに、或いはブラフを使ってミスディレクションを誘う形で、読み合いながら戦わねばならない。

羅列すると一見エスデス軍優位に見えるこの状況下で、情報アドバンテージを先に活かしたのは以外にも叛乱軍の方だった。

『千変万化』クローステールと言う帝具がある。これは紛失していない帝具の一つであり、誰にも下賜されていない帝具だった。

だが、その帝具はこの戦場にある。

何故か。

ナジエンダの側近に、ラバックという少年が居る。地方の大商人の四男坊であり、普通に暮らしていけば苦勞ひとつ知らない道を歩めたであろう彼は、誰もが羨むその道を自らの決断で捨て去った。

彼の故郷に赴任してきたナジエンダを見た時に、一目惚れしてしまったのである。

このことが彼の人生にとって幸福であったかは、わからない。傍から見れば安穩とした暮らしを捨て去らざるを得なかった不幸な恋だが、本人のみが知ることだろう。

まあとにかく。そのラバックは兵士になると持ち前の器用さでナジエンダ將軍の側近へと成り上がった。そして、ナジエンダ將軍から帝国に対する不満のようなことをそれとなく聞かれた彼は、悟る。

ナジエンダは帝国に叛くつもりだ、と。

そしてこれから向かうファーム山は革命軍の前線基地にあたることもまた、彼は目敏く知っていた。

頭の回転が早い彼からすればそこからのナジエンダの行動についての推理は容易であり、自分が行動に移すべき事もまた容易にわかる。

彼は自分を死んだことにし、帝国の宝物庫から自分にあつた帝具を盗んだ。それが『千変万化』クローステールである。

そして彼の存在は、ナジエンダだけが知っていた。隠し駒として最

後の最後に使う、正真正銘の切り札として。

(今だ、ラバー！)

天に向かつての、一弾。それが決行の合図だった。

ハクは、溜めに入っている。

攻めを掻い潜つての必殺の一撃を放つ為に、必要不可欠な僅かな隙。

まだ未熟なラバックは慎重に過ぎ、その隙を突くことは出来なかった。

ブラートは、反応する。

繰り出した槍がハクの右肩を覆う革鎧を弾き飛ばし、肉を抉り、血管の束を千切った。

飛び散る血と肉に、黒い鎧。

自らの負傷すらも計算に入れたハクは、ブラートの放った刺突が生む間隙に乗り、放つ。

龍の鍵爪如く湾曲し、肉を喰い破る一撃を、三つ。

同時に。

喉、鳩尾、額。人体の急所のみ狙って三本の槍が迫りくる光景を、ブラートは凄絶な笑いと共に見ていた。

わかる。これは帝具ではない。かと言って、同時に来ているように見せているわけでもない。

何の仕組みも、工夫もない。ただ、同時に繰り出しているだけなのだ。

インクルシオが——龍の鎧が軋むほどの速度で槍を引き戻す。自分の身体の反射的な反応だというに身体能力がついていっていないような、感覚。

(ごっ……!?)

辛うじて額と喉は、屈んで躲した。しかし、鳩尾の一刺しが霞むほどの勢いで龍の鎧に突き刺さる。

ここでブラートは、その霞むほどの勢いに逆らわずに後ろに跳躍し

た。

突き刺さる前に、鎧が砕かれるだろう。鎧が砕かれ、打撲程度の被害で抑えてしまうのが、この場合のベストだった。

だが、やはり衝撃は殺し切れない。半ば自分で、半ば相手に弾き飛ばされながら、ブライトは見る。

背後から迫る、糸の槍がハクの右脇腹を抉るのを。

「よっ——」

まだまだ、未熟。

数年後には立派なサイレントキラーになるラバックも、この時はまだまだ未熟に過ぎた。クローステールで出来るのも簡単な罠の設置と造形だけであり、界断糸による防御や糸の鎧も、咄嗟にできるものでない。

「ラバ、急くな！」

達成感で漏らしかけた歓呼の声を塗り潰すように、ナジエンダの緊迫した声が被さる。

事実、彼の存在を感知しながらも情報を引き出す為に目の前の敵へ専念していたハクが、遅まきながら動き出していた。

石突。固められたもう一端の凶器が、ラバックの鳩尾に突き刺さる。

糸と言う面で敵の攻撃を潰す武器に、点で突いてくる槍は強い。あの程度張り巡らせていた糸の結界を擦り抜け、石突は狙い変わらずラバックの鳩尾に激突した。

「パンプキン！」

頼みとするように、叫ぶ。

今の後方への一撃で、決定的な隙が出来た。

ここを突けば、やっと目の前の槍兵を斃すことができる。

希望という感情に応えるように僅かに火力の上がった銃弾が放たれ、彗星の如く迫り。

「面白そうなことをやってるな」

そして、全てが凍りつく。

「私も混ぜろ。二対四と行こうじゃないか」

血と肉が彩る戦場を自分の色に染め上げて、氷の魔神が現れた。

銃士を突く 四

「何故、エスデスがこんなにも早く来れるのだ……!?!」
辺り一面銀世界。

蒼と銀のみが姿を見せる地表に変え、目の前の敵の畏怖など歯牙にも掛けず、彼女は槍兵の方へと歩み寄った。

「ハク」

「命令を完遂いたしました、お嬢」

少し心配そうな、普段の声より一音高く思えるような濡れたような声色で名を呼ぶエスデスに向けて、ハクは静かに頭を下げる。

命令を第一とする彼にとって、心配されようが何をされようが報告こそが一番にこなさねばならない事案だった。

「ああ、ぐく苦勞」

限らない安心と敬意。それに絶大な愛情を軽く抱きしめて示した彼女は、すぐさま敵へと向き直る。

氷の魔神。そう言われるに相応しい暴威を、彼女は登場して瞬時に躊躇なく振るった。

ハクの苦戦の一因となっていたナジエンダ軍の兵卒を氷漬けにし、残党を率いてきた千人に狩らせ、帝具持ち四人とその他との分断を一瞬で終わらせてしまったのである。

これは大火力や地形を変えるような帝具を持たない——ポテンシャルはあっても帝具の扱いに習熟していないが故に使えない——ハクではなし得ないことだった。

彼はまだまだ自身の帝具を使うことに慣れていなさすぎたし、そうなった理由はといえば軽々使えるものでもないが故に慣れるまで使いつづけることができないのが要因に挙げられる。

つまり、ひたすら使つて戦いつづけるしかない。

これに対してエスデスの帝具は市街地でも使えるし、消費コストも軽い。実戦以外で熟練度をコツコツ上げていくにはこれ以上ないほどに優れている帝具と言えた。

「……いい動きをするな、インクルシオ」

「でも……」

手痛い一撃を喰らった身体を休ませることすらできずに駆け、ナジエンダとその副官を両手に抱えて跳んだブラートは、咳き込みながらそう返す。

ラバツクの回収がまだだが、自分の身体は二つもない。身体能力が上がっていたとしても、分裂することなどは不可能なのだ。

「ハク、様子見の結果は？」

「ナジエンダ將軍のパンプキンはピンチを火力に変えることができ、ハンサムことブラートの帝具・インクルシオは透明化。あの仮面は身体能力を上げるものかと。後ろの少年は糸の帝具でした。一撃を喰らい、喰らわせた為、詳細まではわかりません」

怜悯な雰囲気を漂わせる眼差しで、ハクは淡々と報告を行う。

帝具を使わずとも、分析はできる。元来、敵戦力を正確に把握し切る眼こそが彼の強みだった。

「よし、ハク」

「はい」

「帝具を使え。熟練度を上げるには実戦しかないのだろうか？」

命令の中に、私情が混ざったような温かみが含まれている。

そんなエスデスの一言に、敵する四人の帝具使いが冷や汗を流した。

その理由は言わずもがな。

帝具を『持っていないから使っていない』と思っていたハクが『持っていないながら使っていない』の間違いであると証明されたからである。

「……一番得意なのは何だ？」

「戦車です」

ここで言う戦車は鉄の車に砲塔を乗つけて放つそれではなく、二頭の馬に鉄の車を曳かせて槍やら矢やらで攻撃する旧代の武器のことだ。

彼は調教が得意であり、つまるところは馬術が巧みであると言える。故に戦車の操縦を得手としていたのだが。

「不得意なのは？」

「鎧です」

「ならば鎧でやれ。使いこなせれば無敵だろう、あれは」

彼女は一戦目の敗北から自分を鍛え直し、帝具を手に入れてから数日後の二度目の模擬戦でこれを使うことを要求。二連敗の憂き目に合う。

厳しい制限時間があるとはいえ、その制限時間内の速攻で完膚なきまでの敗北を喫することになった主要因たる鎧を、彼女は再び要求した。

「御意」

粛々と受け入れ、ハクは静かに半歩踏み出す。

人より常に半歩前に出て在れ。それが勇気というものであると言うのが亡き父からの教えであった。

「我が身に纏え」

黒い革鎧の胸部装甲の中央部に紅い石が浮き上がり、白と金で造られた彩色鮮やかな鎧が浮き出るようにして展開。黒い革鎧を地の色として白と金とが混ざり合い、四肢を覆う。

黒い大槍にも血のような紅と金の彫刻が施され、質実剛健といったような黒づくめの武装に紅・金・白の三色を加えることによって華と実を兼ね備えた武人らしい彩りを持たせていた。

「それは――！」

「時間がない」

流星に叛乱を起こそうとする前に役に立ちそうな情報を調べ尽くしていただけあって知っていたのか、ナジエンダが驚愕の声を上げる。

だが、最早彼に律儀に応じている時間はなかった。

彼が動き出すより少し前に動き出していたエスデスを追い越し、未だ健在のブラートへと迫る。背後の少年にとどめを刺すよりも、脅威を排除することを彼は選んだ。

「……来るか！」

「ああ」

ナジエンダとその副官を素早く降ろし、ブラートは自らの得物であ

るノインテーターを中段に構える。

まずは小手調べ。防がれることを前提とした突きを胸部の狙うにあたってのよい目印となつていいる紅い石へと繰り出した。

が、ハクは防ぎせよせよにひたすらに前方へと驀進する。

傍から見れば完全にヤケクソになつたかのような無謀な突進を続けるハクの胸部にノインテーターが突き刺さることであろうと、誰もが思った。

その帝具の凄まじさを知る三人以外の、誰もが。

ノインテーターの刃が触れる。

ハクは、なおも減速する気配すら見せず驀進を続けた。

ノインテーターは強化されたブライトの筋力とハクの突進の勢いそのままに鎧にその鋒を喰い込ませ――粉微塵に、砕け散る。

「なっ――!?!」

「ブライト、右に跳べ！」

『浪漫砲台』パンプキン。ピンチになればなるほど威力を増す彼女の帝具は、エスデスの来襲とハクの接近によつて最大にまで高まつていた。

通常攻撃ならば効かないかも知れないが、これならば。

柱の如く太い光弾が遙かな尾を引いてハクに迫る。

彼のとつた行動は、両手を交差させたのみ。

殺つた。

自身の俊敏さが災いして自ら光に包まれていくハクを見た誰もが、そう確信した。

あんな大威力のパンプキンなど見たことがなかつたナジエンダもまた、自らが置かれていたピンチの強大きさに恐れを抱きながら、そう確信する。

その、時だつた。

「いい攻めだ」

光芒の過ぎ去つた後からまるで無傷で、その男は槍を手に持つて現

れた。

すぐさま横に向き直り、ブラートを槍で突き飛ばしたその動きからして、外部に出ていないだけで内部にが損傷がある、という希望があるとは到底思えない。

そして。

「ナジエンダ。私のものに手を出すとは——全く、いけない腕だな」
ハクを盾にした後に踏み台にし、跳躍することで全くの認識領域外から現れた氷の魔神が、彼女の利き手を掴む。

氷に覆われていき、温度を失いつつある腕を、彼女はただ見つめることしかできなかった。

「———そんないけない腕は、いらないな」

止めようと奔った仮面の副官の首を細剣で跳ね飛ばすと、エスデスは硝子で出来た彫刻を握り砕くようにして潰す。

氷漬けにした腕は、肉片と血の欠片とならしめて四散した。

地に転がったパンプキンと凍った肉片をつまらなさげに目の端で見つめ、エスデスは休むまもなく次なるは標的へと動く。

帝具インクルシオ。ブラートである。

「後何秒だ？」

「二十と少しかと」

槍を身体で受けながら攻め続けるハクに対して守り一辺倒になっているブラートの腹に狙いを定め、エスデスは瞬時に蹴りを放った。

その予備動作が見えた一寸前に防御に動こうとしたブラートの槍を大槍で弾き飛ばしたハクもまた、ほとんど同時に蹴りを繰り出す。

「やはり最高だな、お前は」

「お嬢こそ、合わせやすいことこの上ありません」

同時の蹴りを下腹部に喰らい、宙を舞ったブラートが立ち上がった瞬間に脚を氷が固め、両腕を炎が縛った。

「また一緒に狩りに行こう、ハク」

「仰せのままに」

凄まじい熱を帯びて赤熱化し、鎧を吸収して更に威力を高めんとする大槍と、冷気を宿して蒼く光り、正反対に霜を降ろす細剣。

槍と剣から開放される即死級の一撃の同時攻撃がブラートに放たれようとした。

しかし、彼女らは何故か一旦つけた照準を外して背後を振り返る。「チッ」

「タイミングのよいことです」

背後から響く馬蹄と、無数の足音。姿を現した革命軍の本隊に向けて照準をあらためてつけ直し、彼女らの最大火力は理不尽な威力と合理的な判断を以って放たれた。

荒れ狂う冷気と、拡散する氷。

触れる物全てを灰にする一刺しと、踊り狂う焰。

明らかに対人に於いて使用するには不釣り合いな同時攻撃は革命軍本隊の先陣五万を消し飛ばし、爪痕を遺して速やかに消え去る。

「……兵を無闇に殺すわけにはいかんな」

「……………建前ですか」

退却戦用の余剰分だけを残して力を使い切ったエスデスと、制限時間を過ぎそうになった鎧を構成する分の光を攻撃に転用して挙げ句にすっからかんになったハク。これ以上の戦闘続行は、難しいことは確かだった。

だが、殺せないことはないだろう。特に片腕を亡くしたナジエンダや、見動きの取れないラバック・ブラートなどは。

だというのにすぐさま撤退を決め、来た時同様疾風の如く去っていくエスデスは来た時には居なかった男に向け、実に愉しげに声を掛ける。

「一人と片腕は潰した。帝具は残念ながら回収できず、またもや我らは強化された敵と戦わなければならなくなったな、ハク」

「はい」

「しかたない。兵の命が最優先なのだからな。しかたないことだ」

あのハクが、白兵戦で負傷した。

強化の帝具を使えば、奴らでも自分たちと渡り合えるらしい。

そのことを瞬時に察し、互角に渡り合える者との闘争に焦がれた彼女は、大臣に悟られぬように仮面の副官を殺した。

だが、帝具は置いてきた。つまり、またその適合者を見つければ革命軍はまだまだ捨てたものではなくなるだろう。

「ハク、実に愉しみだな」

互角に渡り合える敵に飢えた獣の笑みを浮かべる彼女の軍帽を軽く撫で、呼ばれた彼は少し微笑んだ。

「まあ、それもありでしょう」

悲劇を突く

「ハク……」

白いシャツ一枚を隔て、細く引き締まった———されど女性らしい丸みを帯びた柔らかそうな身体が押し付けられている。

その艶美さは、例えようもない。一つの完成された美術品のような美しさと内面に反する華奢さは一般的な理性しか持たない雄は勿論、自制心の強い雄を狂わせる魅力を持っていた。

「何ででしょうか」

「……味も素っ気もない奴だな」

が、相手にするのは鉄の意志。根性と義務感で腹に孔を開けながらも仲間を背負って生還するような男に、その誘惑は効かない。

寧ろその堅さに『だが、それがいい』とばかりに誘惑されたのは誘惑しようとした彼女自身という始末である。

あまりにも本末転倒な結果に気づかず、されど右腕に引っ付くのは止めず。

エステスは、少し年上の兄に甘えるように柔らかく細やかな髪を擦りつけた。

「ハクは私に興味がないのか？」

「ありますよ」

寸合の躊躇いもないその回答に、嘘はない。誰にも等しい興味を注いでいる彼の中で『特別な興味』の範疇に入るであろう自分の存在を確認し、エステスはまず一つ安心する。

ここで『ない』と言われた日には、彼女は告白もしない内に失恋を経験する羽目になっていた。

「ハクは女としての私に興味がないのか？」

「性欲を解消する対象としてならば、微塵も。いつくしむ対象としてならば興味は大いにあります」

またまた哲学的で難しいことを言っただけの彼に頭を抱えつつ、エステスは直接的な表現に少し顔を赤らめながら考え始める。

(肉……の対象として、と言うのは、そのままだ)

思考の内ですら言い切れないあたりはまだ誘惑しておきながら無知だったと言う弱点を晒しつつ、彼女はさらなる思考の深みへと埋没した。

いつくしむ、対象。これが愛しむか慈しむかで随分意味と攻略難易度が変わってくるだろう。

彼女は希望的観測の末に前者を選択した。それは彼女の楽観的なところを映し出していたわけではなく、乙女回路によるものである。彼女は基本的に希望的観測を好まない。事実を積み重ねてこれらを予測するのが将と言う職業に求められる資質だからであり、無論文性のものではない。これは自らの資質を改造し、磨き上げた結果だと言えた。

「……………なあ、ハク」

寝ている時も起きている時も、二人には常に身長差がある。

必然的に少し上目遣いにならざるを得ないエスデスがちらりと隣の男を見ると、彼は完全に休眠モードに入っていた。

「……………はい」

それでも、彼の意識は彼女の声によって覚醒する。癖というより、これは有事に際しての危機管理能力の一端であると言えた。

いきなり刺客が襲ってきた、なんてことがあったならば、他人を起こしている暇などないかもしれない。ならば一言で目覚めようというのがハク流の危機管理だろう。

「女は……………ほ、欲しいのか？」

「いえ。非常に手の掛かる主人が隣に居るので充分です」

「そうか」

なら一生手の掛かるままで居てやろう。

密やかな決意と共に彼の利き手ではない方の腕に身体をくっつけ、彼女は静かに寝る体勢に入り——気づいた。

「では何だ、あの三人は！」

急転直下、天元突破。そこそこ機嫌のいい状態から一気に怒りメーターが突き破り、振り切る。

エスデスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の流動人間をたださねば

ならぬと決意した。

そもそも彼女はいつも通りに生活していたら怒らないし、寝所で迫ってきたりはしない。一緒に寝ることを強要したりはするが、ハクが全く動じない為に自分だけがやけに照れたり恥ずかしがったりするだけで終わる。

それがいきなりこうなったのは、焦ったからに他ならない。服装はいつもと変わらないが、いつもならば迫ったりはしなかった。

「何で帝都に少し公務に行かせただけで、気づいたら女が三人に増えているのかを説明してもらおうか」

お怒りモードのエステスに対しても何ら怯むことはなく、ハクは訥々と話し始める。

「どう言い訳するつもりだ、と言ったならばすれ違うだけだと熟知されているあたり、エステスも手痛いすれ違い経験を重ねているように他者からは思えた。」

「海千山千の官僚たちとの油断ならぬ公務に疲れてファミリーストランで寝ていたら、悲鳴が聞こえたので起きてみたのです」

ファミリーストランの中で飲み物を頼み、飲み切った瞬間にハクはプツツリと休眠状態に入ってしまった。単純に官僚たちへの配慮やら何やらで疲れ切っていたのである。

故に彼は、気づかなかった。黒服の男たちが姿を現した途端にファミリーストラン内の雲行きの怪しさを悟った客全員が蜘蛛の子を散らすように出て行ってしまったことに。

「うん、それで？」

「取り敢えず悲鳴を上げた人の隣の少女が怪しげな黒服に脚を折られそうになっていたので取り敢えず待ったをかけました」

足音やら揺り動かしやらその他の下種の極みにまで至った会話でも全く目を覚まさなかつた休眠状態にあるハクは、悲鳴を聞いてむつくりと目を覚ます。

眠たげな目を擦りながら立ち上がった彼の視界には、三人の田舎から出てきたらしい少女とその三人を後ろから抑えつける黒服の男の姿が映った。

どちらが悪そうかは、誰から見ても一目瞭然だろう。しかし、彼は聞いた。

『何事だ?』
と。

「そう言ったら発砲してきたのでしかたなく応戦し、一先ず怪我をしないように気を使いながら眠っていただき、帝都警備隊の知り合いを呼んで引き取ってもらい、帰ってきたというわけです」

人の頼みは命令に違反しない限りは基本的に断らない、という流動人間っぷりが如実に出た説明に、エスデスは半ば諦めを孕ませたため息をつく。

もうこれは、どうしようもないだろう。何せ頼まれたのだから。頼まれたならしかたない。

弱者を庇う気持ちなど微塵もわからない彼女ではあるが、わからないものを『そうらしい』と割り切る賢さを持っていた。

ハクの奇行がその典型例であろう。
わからないものを突き放しては自分の好きな人の根幹を理解できないという虚しさに直面することになると気づいた彼女は、務めて理解をしようと努力した。

結果、彼女は理解を諦めた。どうにもこうにも彼女には死んで当然の弱者を庇う気持ちなど微塵もわからない。故に彼女は、『自らの信望する掟を疑い続ける』と言う強烈な自己矛盾を矛盾のまままで受け入れた。

人を肯定するということは自分と他人とを肯定し、殺し合っている人も肯定することである。現実の一部を肯定したり否定したりするものは自分の都合で実行者になったり批判者にはなったりするものであり、真の現実を自分の中に抱え込めない。故に、矛盾をも肯定しなければ、本当の解決は得られない。

ハクの珍しい長広舌が紡いだ言葉の玄妙さを、玄妙なままに受け入れる素直さが彼女にはある。

「……恋愛感情は?」

「微塵も」

「わかった。私が雇ってやる。使用人でいいな？」

目に感謝の念を湛えて無言で頷いたハクの謝意こ言葉を封じるようにその頬を撫で、身体を凭れさせて寝ることを示す。

彼女には、このままでは殆ど使われていないハクの家三人が住み着いてしまい、彼も時々はそのうちに帰らねばならなくなるということがわかった。つまり、使用人として雇うという決断を下した裏には打算があったといえるだろう。

が、如何に弁明しようが弱者を救ったことは事実であった。

「成長しましたね、お嬢」

「……お前が容易に内面を理解させてくれないからだ」

ベツトの上で扇のように広がった蒼銀の髪を撫で、頭の上に少しの間手を載せ続ける。

それは彼女が変わったことへの嬉しさの表れであることは、目を見ればわかった。

「……私は、変わるべきなのか？」

「いえ、今のままでもありだと思いますよ」

今までの自分を好きで好きで堪らない男に否定されることを覚悟の上で問うたエスデスを少し抱きしめ、愛おしさに浸した声色でハクは呟く。

「ですが、お嬢は自分を変えたい、変わりたいと思うのなら変わるべきかと」

「私は変わる気はない。なかった。お前が悪いんだ」

拗ねたような、照れたような。子供っぽい言い方で胸に顔をうずくめるエスデスをもう一度引き寄せ、離す。

「明日は巡察です。早く寝たほうが良いかと」

「あのまま寝たい」

離れた距離を再び詰め、温かみのかよる堅い胸に顔をうずくめながら、エスデスは問うた。

「その三人以外の他の女と関わらなかつただろうか？」

「ユビキタス一家の娘子には、その黒服と三人の御老人、一人の若者を引き渡すときに会いました。何でも、『悪の滅菌、ご苦労さまです！』

「こいつらは牢にぶち込んで改心させておきますね!」だとか」

「……まあ、それならいいだろう」

職務上の口上ならば咎める気はない。嫉妬心は湧くが、一々咎めるほどには彼女は度量の狭い女ではないつもりである。

嫉妬心は湧くが。

「……次に帝都に行く時からは私も同行するからな」

「賑やかな道中になりそうですね」

苦笑しながらも嫌がらない。そんなお前が大好きだ。

柔らかく抱きしめられるようにして、エスデスは自然と眠りについた。

政務を突く

「起きていただきたい」

「ん……う……う？」

寝相が悪い癖に『キツイから』という理由だけで相当際どい格好で寝ているエスデスを布団で包み、揺り動かしても万が一のことがないようにしてから起こしに掛かる。

頑なにしがみついて離さない腕を半ば強引に引き抜き、更にハクはエスデスを揺り動かした。

「起きていただきたい」

「ん……」

色気のある吐息を漏らして、エスデスはゆつくりと白い瞼を開き、澄んだ蒼眼が現れる。

いつもの野生の獣の如き警戒心の高さからくる寝起きの良さはどこへやら、と言ったような感じであった。

大方のところは久しぶりの添い寝で警戒心が根こそぎ消え失せてしまい、熟睡していたというところであろう。

「おはよう……」

「おはようございます」

眠たげに蕩けた眼を向けて挨拶すると、すぐさまの目の前の彼の膝を枕にして寝始めるエスデスに温かい目を向けてこの二度寝を受け入れようとした彼は、すぐさま長に命ぜられた一言を用いて自戒した。

『エスデスには欠けてる所があるから補佐してやって欲しいが、甘やかしはするな。お前は何もかもを受け入れ過ぎる』

本当に的を射ているこの指摘は、流星は親代わりといったところだろう。恋愛補正と『自分と彼が同化しかねないほどに甘えたい』という欲望フィルターが掛かっている娘とは、観察眼が違った。

「起きなさい」

「嫌だ……」

「……………そうですか。嫌ならば」

仕方ない。

伝家の宝刀を引き抜きそうになったハクは、慌てて再び自戒する。甘やかしはするな、と。

「これ以後、添い寝はしません。あなたの為になりませんから」

「起きた、起きた、目は覚めた。さあ、無駄な思考をするな。今日も一日頑張ろう、ハク」

長が居るならば、我が娘ながらチョロい物だと嘆き半分に笑ったに違いない。

それほど素晴らしい掌返しを敢行したエスデスは名残惜しげに膝から頬を離し、再びくつつけようとして軽く窘められるような視線を向けられ、止まる。

「軍服と、軍帽と、靴下……あとは、手袋……」

「……」

自称兄、実質母な手際の良さを見せる自称兄の差し出した軍服・軍帽・長靴下に長手袋の几帳面に畳まれたいつものセットを手に取り、エスデスはすつぽりと布団に潜った。

「出て行きましようか？」

「部屋を出る時も一緒がいい」

駄々をこねる子供のような言葉の後に、長靴下を足首まで引つ掛けた脚と手首から二の腕にかけての長手袋を履いた両手と蒼銀の長髪だけが布団から出ていると言う珍妙な状況が左右二度繰り返される。

しばらくもごもごと布団が変形を繰り返し、止まった。

「どうだ」

「寝癖が酷いですね」

褒めろと言わんばかりの顔に向けて忌憚のない意見を吐いたハクは、一先ず櫛で髪を梳く。

帝具の熱やら何やらで直せば速い。が、折角の髪が傷んでしまう。

丁寧に。しかし淡々と髪を持ち上げて梳いては止まり、梳いては止まりを繰り返し、ハクはじつくりと時間をかけた。

エスデスからすればたかが寝癖、ハクからすれば直すべき寝癖。髪を梳かれるのも嫌いではない彼女は、ほんのりと頬を赤らめながら目

を瞑る。

(ハクと一緒にになれる時が来たら、こういう風になるのかな)

基本的に自分が引き摺り回し、すっごく甘えて、時々いじめて。

子供は欲しいが、甘えられる面積が半分になってしまうことを考えれば当分はいらなないな、と。完璧に獲らぬ狸のなんとやらを考え始めた彼女の肩に手が置かれた。

無論、彼女の中では妄想世界に在住していた筈のハクの手である。

「直りました。巡察に行きましよう」

「あ……ああ。いいだろう」

妄想世界から現実世界に引つ張り出され、エスデスは少し戸惑いを見せた。

しかし、それも一瞬のこと。すぐさま抵抗がないことをよいことに指と指を絡め、手を繋ぐ。

「さあ、巡察だ」

「手を繋ぐ理由はあるのですか？」

完全に無視を決め込み、エスデスはハクをぐいぐい引つ張りながら扉を開けた。

巡察の時間である。

情というのは知識の温度を変え、知というのは情報の明度を変える。それによって見聞したことから雑色や雑音が消え、物事の本質を見ることが出来る。

情が豊かならばその知識は温かみを帯び、現実には則して柔らかく変質すると言つてよい。

彼女には政治に関する十分な知識はないが、庶民の生活に関する知識ならば豊富に持ち得ていた。問題は情の方である。

彼女にも当然ながら情はあるし、当たり前ながら人によってかける格差はあれどもその情は薄くはなく、寧ろ細やかさと深さを持ち合わせていると言つてよい。

ただ、為政者としての問題点はそのかける情に差がありすぎることであった。

『弱肉強食』。弱者は淘汰されて当然であり、強者のみに情をかけ

る。それがエスデスのやり方であった。

「困ったことなどはあるか？」

「やっぱり暑さ、ですね……」

「む……ならば三軒に一つの割合で氷室を用意する。それをうまく使って涼むといい」

が。

「実は疫病が流行して……」

「ハクに戦車で薬と医者連れてこさせた。今各邑の区画を回っていると……」

エスデスは人が変わったようにサバサバと決裁を終え、弱者が淘汰されぬ情ある統治を始めたのである。

これには無論、理由があった。

言わずもがな、ハクである。

『民が豊かになれば生活にゆとりができます。生活にゆとりができれば武を嗜む者も増え、武を嗜む者が増えれば強者が増えるでしょう。』

帝国には叛乱が続いています。お嬢の封地替えが為された時に別な統治者が赴任し、悪政が敷かれれば強者に率いられたこの地の民は蜂起することになります。つまり——』

強者の軍と戦えますよ。

弱者を蹂躪するのも好きではあるが、彼女の快樂とは強者と血沸き肉踊る戦いを続けることであつた。

その気性を巧く呑み込み、誘導するのがハクの役割である。

「不満があつたならば直接私に届け出る。出来うる限りで改善策を施行してやる」

戦いの芽を育てる為に、エスデスは今日も善政を敷く。

明君には到底なり得ず、虐殺好きの異常者とされた彼女の名は急速に是正されつつあつた。

更にエスデスは——というより政務における中の人であるハクは駄目押しのごとくある一手を打つ。

自らの私財を惜しみなく難民に分け与え、その財産の保護と生活の保証に当てたのである。

エスデスは、浪費をしない。そもそも金を使う趣味も興味もない。ここらへんの交渉は本音を交えて話せばすぐさま財産を放出することを了解した。

無私の善行こそが、いざという時の身を救う。そう信じて疑わないハクと実務に優れたショウイによって、南方はたった二年で国内でも屈指の経済地域と治安の高さを得、帝国からの独立すら叫ばれるような思想・文化・経済の一大地域へと進化したのである。

「……おかしいと思わないか？」

「何がでしょうか」

「山賊が来ない。河賊もだ」

エスデスの治める南方は、政務を執りはじめた当初は利益や税などを期待できない地域だった分、破格の恩賞としてオネスト大臣から無税・無役で授けられた土地だった。

無収支の土地に住民を植えつけたのは帝国だが、育んだのはハクと派遣の名目で左遷された優秀な内政官であると言ってもよい。

いわばエスデスの領地はハクの丹精込めた作品であると言える。

「……お嬢が接近の報を聞いた瞬間に私を蹴飛ばして『ハク、政務などやってる場合じゃないぞ、出撃だ！』とか何とか言っただけで突っ込ませるからでしょう」

「……『懲りないめげない諦めない』が賊の精神だろうか？」

「懲りずめげず諦めないとしても、肉体そのものを擦り潰されたらどうしようもないかと」

現に最初は外見は美女なエスデスに欲情しきっていた賊も、今や彼女の名を聞くだけで疾風の如く逃げ出した。

最早エスデスの領内に賊はなく、討ち漏らした僅かなバン族の残党はすぐ東の革命軍に合流している。

「革命軍でも潰すか？」

「近所に出かけるような感覚で潰されては、革命軍も堪ったものではないです」

貧村を突く

帝都。シン帝国の都であり、周りを長大な城壁が囲っている要塞都市でもある。

人口はその他の都市とは大差をつけてぶっち切りの一位であり、華やかさも店の豊富さも一位だと言えた。

この邑には全国の特産物やら何やらが集まり、金さえはあれば手に入れられぬ物はないとすら言われる。

現在は慢性的な不景気と重税によって経済的发展が滞っているものの、それでもなお帝都の華やかさは他を絶するものがあつた。

「久しぶりだな、帝都は」

「そうですね。三人娘を拾って以来です」

そういつた瞬間に、ムツとしたようなエスデスが指を絡めた右腕を引く。

今のは自分の配慮が足りなかつたとはいえ、彼女は自分と一緒にいる時に他の女の話をして欲しくなかつたのだ。

「なんですか?」

「別に……」

そのことに、当然彼は気づかない。ただひたすらにどつかれ、つつこまれ、叩かれながらデリカシーと乙女心の複雑さを学んでいくしかないであろう。修了できるかは果てしなく怪しいが、彼にはやると言う選択肢しかない。

「私と二人きりだろうか?」

「はい」

「なら、他の女の話はするな」

「何故ですか」

嫉妬しているから。当然そんなことは言えない。口が裂けても彼女は彼に言わないだろう。

彼女はプライドの高い女性なのだ。だらしないところもあるし、傍から見ればバカッパルでしかないが、プライドは高いつもりであつた。

「……命令」

「わかりました」

内に蟠る疑念を焼き尽くし、ハクは大人しく頷く。

エスデスは、いつになく澆刺としていた。変なことを言っただけの水をさすべきではない、と。彼は判断したのである。

「……お嬢」

「うん？」

E s d e s。見覚えのある名の綴りに、白い軍帽と蒼銀の髪。

可愛くデフォルメされた彼女の団扇と御札がそこにはあった。

「武安君御用達……か。私はこんなものを売ったことはないのだがな」

「どうやら犯罪者と酷吏に効果があるようです。わざわざお嬢の爵位まで記しているところを見るに本気ですね」

取り敢えず買ってきた団扇をエスデス本人に渡しながら、ハクは淡々と効果を読み上げる。

一般市民から御守代わりにされるほどに、エスデスの雷名は轟いていた。

「弱者は他人に継るのが好きだな……」

「好きなのではなく、人は誰しも何かに継らねば生きていけない生物です。それが弱者の場合は強者だということなのでないか、と」

また一つ新たな心理を学んだエスデスは、ぱたぱたと団扇で首元を扇ぐ。中々様になっているその光景に、群衆の一人がやっと気づいた。

「あれ……エスデス將軍じゃないか？」

彼女は目立つ。目立つからこそ少し大人しめに振舞っていたのだが、一端見つかってしまっただけが無意味だった。

元々彼女は將軍になった時から一般とは異なった趣向を持つ人々に熱烈な人気がある。滲み出るDSっぷりが凄まじく、一般とは異なった趣向を持つ人々は直ぐ様その匂いを嗅ぎつけることができたとも言えた。

ともあれ、バン族の討伐から帰ってきた時の凱旋パレードでもその

氷の微笑とすらりと長い脚、実際豊満な胸などからファンが急増。政務においても過欠を見せない有能さも相まって彼女は一種の偶像となっていた。所謂アイドルである。

更にはその情けある善政も加わり、彼女の人気は最強だった。問題は隣にいる奴である。

「で、アレが副将か……」

副将。言わずもがな、ハクのことであった。

民からすれば、彼は今一パツとしない。本人がパツとしようとしていないとも言えるが、パツとしていない。

彼の軍での担当は兵站管理と地図作成。重要だが、絶妙に地味である。政務においても功績をすべてエスデスに回しているの、何をしているかがわからないのだ。

『何で副将が三獣士筆頭のリヴァ様ではないのだろうか』

と言う疑念は、最早七不思議の域にあった。

これをハクが聞いたならば『確かにその通りだ』とでも言い、エスデスが聞いたならば『全てにおいて過欠がないから』と言うであろう。現にエスデス軍以外では彼の名は知られていない。とにかく地味で裏方仕事が多く、華美さがない。

兵站を担当すれば好き勝手に動き回るエスデス軍を一度も飢えさせることなくこなし、地図を作らせれば地形の有利不利・高低差や伏兵の有りそう・伏せられそうな地点まで描いてのけるのだから、有能であることに間違いはないし、内政においても産業も何も無い氷漬けの三邑から始めて今や十五の邑を保有する一大経済地域にしているのだから無能ではないのであるが、兎にも角にも目立たない。

「見られていますね、お嬢」

言わなくても見ればわかることをわざわざクソ真面目に報告するところに天然さを感じつつ、エスデスは千周りに視線をやった。

なるほど、こちらに向いている視線が多い。凱旋した時もこれほどではなかった。

「まあ、いい。それより手に持っているそれは何だ？」

「三人娘へのお土産です。真面目に働いていたので、給料以外にも報

いねば、と」

結局他の女のことを考えているじゃないか、と無言の蹴りを炸裂させようとしたエスデスは目の前に突き出された黒い小包みに気を取られ、止まる。

「これは？」

「似合うと思ひまして」

開けるように促すハクに渋々従ったように表情を作りながら、エスデスは内心狂喜した。

長靴を買ってこさせたことはあるが、ハクが彼女の為に自発的に動き、買ってきてくれたことはない。強いて言うならば食材とかがそれに当たるだろうが、それではあまりにも悲しすぎる。

「……十字架？」

「装飾品です。軍帽にでも付けられたら如何でしょうか？」

均一な長さを持つ二本の黒曜石を交叉させたように加工し、黒い十字の先を尖らせただけという単純ながら目を惹くデザインは、軍帽の正面につければ確かに似合うだろうという確信があった。

「……とっておこう」

「そうですね」

身体の内側で沸騰していた怒りが急速に収まり、代わりに甘い疼きと嬉しさが満ちるような感覚を楽しみながら、エスデスは早速軍帽に件の十字を取り付ける。

数ヶ月後にはエスデス軍のシンボルマークとなっているそれは後に爆発的な流行を見せたというが、それはまた別の話であった。

「……やけに機嫌がいいですね」

「うん」

幼少期の返事が——つまり、素が出る程度には機嫌がいい。

そんなな気に入ったのかという驚きと、自分はリヴァやラニヤウやらダイダラやらに乙女心がわからないとか言われているが、案外と好みはわかるではないかという密やかな達成感が、ハクの内にはある。

一方は幸福感に、もう一方は達成感に。同じ出来事に対して全く異なった感想と気持ちを抱きながら、二人はふらふらと宮殿へ参内して

辞令を受け取り、南方へと帰還した。

兵を整え、速やかに北方異民族を誅滅すべしと言うのが、その辞令である。

この辞令に従って軍を北へと進ませていく途中。エスデスは、我慢ならず疑問を呈した。

「ハクは金を持つとうとしないが、何故だ？」

帝都へ行き道でも帰り道でもそうだったが、私財を叩いて買った米を付近の農村に分けて回り、趣味で鍛えた剣やら槍やらも黙々とくれてやる姿に彼女は興味を湧いた。

ここは北へ行く途上。南で穀物を買ったハクの最後の貧村への施しである。

「便利さには基準が必要であり、富にはけじめが必要である、ということです」

「うん？」

便利さに何の基準があるのか。富になんのけじめがあるのか。大臣が求めている便利さに際限はないし、富になんのけじめもない。このままいってもただ拡大し、肥え太るばかりであろう。

その疑問を見て取ったのか、ハクは鍋をかき混ぜる手を休めてエスデスの方へと向き直り、言った。

「各人が便利さをそれぞれ求めると、他の誰かが不便になります。故に、基準が必要です。そして利益がふえすぎると他人からの怨みを買います、敗亡の原因になります。」

此れを利過ぎればすなわち敗をなす、と言います」

「……ふむ」

「私はお嬢に滅んでいただきたくないからこそ、時折蔵を開けることを提言しています。ですが真に災いを避けるならば自ら時を見、決断せねばなりません」

約半年ぶりの諫言を呈し、ハクは大鍋をかき混ぜる作業に戻る。火の調節は勿論帝具でやり、薪はなし。鍋の中身はデザートランナーの肉と芋、あとは味噌と水。白米を炊くための火の調節も同時にこなし、ハクは一人で数百人分の食事の料理をしていた。

「できました。おかわりは自由ですので、ゆっくりよく噛んでお食べください」

「施しだけではなく炊き出しまで——ありがとうございます……」
「富める者は他者に尽くさぬばならない義務を負います。これは、当然のことです」

平身低頭する老村長に向け、ハクは穏やかな温かみを持った言葉で応対する。

その光景は嘗ての彼女からすれば疑念と不快感に塗れたものだった。

(……自分も大概貧乏だろうが)

だが今は、心の中でそう毒づきながらも悪くはないと思っている自分がどこかにいる。

不思議なものだと、エスデスは両手に腕を持ちながらこちらに近づいてくるハクを見て、独りごちた。

「お嬢も食べますか？」

「ああ」

自然に隣に座ったハクの手の甲に自分の手を載せるようにして触れ、もう片手で腕を掴み、飲む。

「温かみのある味だな」

「気づかれましたか。実は生姜を入れてみたのです」

「そういう意味ではない」

片眉を擧めて疑念を示すハクの顔を見て少し笑い、エスデスはもう一口汁を啜った。

作った者の人柄の温かみがわかる、氣遣いにあふれる味だった。

料理というものは、他人を思って作らねばならない。

政治もまた、他人を思っていることに当たらねばならない。

鶏が先か卵が先かという話になるが、本質的には似通っているからこそ、彼はどちらもできるのではないか。

寒空の下で、エスデスはそんなことを漠然と感じた。

芸術を突く

北方異民族は、代々帝国に齒向かってきた民族である。

要塞都市を作る程の高い技術力と防寒性の高い装備によって地の利を活かして帝国からの侵攻を阻み続け、西・南の異民族との波状攻撃で国力を疲弊せしめたことからわかるように外交にも優れており、正に帝国の不倶戴天の大敵と言えた。

そんな三方から囲んで圧迫・疲弊したところを一気に滅ぼすという千年単位の大戦略を提案し、その忠実な実行者であった北の異民族に衝撃的な一方がもたらさせる。

その報とは始皇帝の代にも滅ぼし切れなかった南方異民族を尽く根切りにした、というものであった。

彼らはまず、この信じ難い報に対して疑いを持った。

将星燦めく始皇帝の代にも滅ぼし切れなかった南方異民族を今の腐り切り、能力のあるものが左遷・処刑されるような帝国で将軍となった無能者が潰せるものか、と。

しかしこの時代にも始皇帝の代と比べて量には劣るものの、実力ならば勝るほどの英傑はいる。

大將軍・ブドー。

彼らが認識していた明確な敵とは、内憂に備えて帝都を動けない最強の男ただ一人だった。

だが彼らが長い目で帝国と戦う為に内乱の種を撒き、オネスト大臣の就任の後押しすらしたその優れた大局観は目先の物を見る力を失わせた。

ブドーが現れてから、そちらの方の対策に力を注ぎ過ぎたのである。

つまり、新たな英傑など現れないという過程の元に北方異民族は政戦両略を回してきた。

しかし、苦心して作り上げた均衡状態をただの一戦で破滅させた女神は北から来た。エスデスである。

何をさせてもそつなくこなし、戦をさせれば無敗、政治を執らせれ

ば隆盛を極めさせるこの女は、まさに北方異民族からすれば脅威だった。オネストもそちらの方に欲がないことを知っているからか、中々彼女を疑わない。

だが一年に渡る政治工作の結果、オネストは莫大な貢物とエスデスの首を交換するという約定を交わし、前哨戦たる『北の勇者』ヌマ・セイカによる侵攻を放置。キシユウ・ヘイシユウまで獲られた所でやっと腰を上げ、エスデスを南方から派遣した。

約定通りの展開である。

後年この政治と謀略の駆け引きの終点で最高権力者たる彼が漏らした一言は、オネストの老獪さを如実に示すものとしてよく引用されることになる。

『釣りたいたときは釣ろうとしてはダメなんですよ。相手が釣りたがっていることを知ったら、本気で逃げ回らねばなりません。』

あたかも『やっと釣り上げた』と思わせることが大事ですな』

役者が違った。この一言で表せる対北方異民族滅亡への戦いの幕は焦った北方異民族自らの手によって切つて落とされ、焰と氷によって閉じられる。

「壯観だなあ、ハク」

「両軍合わせて三十万を越します。当たり前かと」

要塞都市の陥落で終わる一連の征伐戦は、北方異民族遠征軍二十万対、征伐軍十五万の会戦ではじまった。

今回は、迎撃戦。受け身の戦いである。つまりは――

「じゃあ、ハク。指揮は任せました」

「非才の身ながら、全力を尽くさせていただきます」

三十万以上だから壯観なのは当たり前です、とクソ真面目に報告したこの男の担当であった。

元来エスデスは、気質から火のように苛烈な攻める機動戦を得意とする。

ハクはそれに反して『常に気分が凪いでいる』と言われた平坦な気質から、じつくりと腰を据えて戦う永久氷壁の如き守りの戦いを得手とする。

この場合は、ハクが適任であるとエスデスはすぐさま判断した。「お嬢であったならばどうしますか？」

予定戦場は、高低差が激しい。泥濘も多く、自在な兵を進退させるにはかなりの幅広い視野が必要とされる。

ここから導き出す答えは、彼女の機動的な考えからすれば一つであった。

「この、一番高い高地を征した方が勝つだろうから行軍速度を速めるな。少々この行軍速度は遅すぎる」

「なるほど」

何やらさりと聞き流されたような印象を受けたエスデスは、更に念を押すように馬を寄せ、顔を覗き込むようにして忠告を行う。

「わかっていると思うが、この高地は軍事的な要衝だ。抑えられたら負けてしまうかもしれんぞ」

「戦術眼を持つ者ならば、誰もがそう思うでしょうね」

「先行して獲ってこようか？」

無言でかぶりを振ったハクの鉄面皮の内にある意図を掴みかね、彼女は馬上で腕を組んだ。逆に言えば、腕を組めてしまうほどに、この時の行軍速度は常からは考えられないほどに遅々としたものだったのである。

「……向こうもあの高地を欲しいと思っている。なら、獲ってやれば痛撃になり得るだろう？」

「彼らが欲しているならば、敵に差し上げたらよいでしょう」

「勝つ気がないのか？」

「またもや無言でかぶりを振ったハクに対し、エスデスは少し悲しい物を覚えた。」

思考がわからない悲しさ、と言うのか。致命的に迎撃する気がなく、寧ろ正面から強襲しようとする考えしかない彼女は、やはり受け身の戦いには向いていなかった。

「ヒント」

三日後。高地が獲られ、こちらの布陣が終わった時点になってもまだわからなかったエスデスは、補給線構築の指揮を執っているハクに

ヒントを求めた。

「肌寒くなってきましたね」

全くわからない。それが暫く考えたエスデスの正直な感想である。何故肌寒くなってきたから戦術的要衝を敵にくれてやるのか。

「お嬢」

「……ん？」

「あなたは攻めている時は相手の七手先まで読んで踏み潰しますが、受け身になると四手先も読めないのですね」

全く悪意のこもっていない正直すぎる感想は、彼女の思案中の思考を突き破り、心にグサリと突き刺さる。正直な直言だからこそ、受けるダメージは甚大だった。

「……同じ景色を、見たい。教えてくれ」

「戦術的要衝を獲った敵は、そこを中軸に布陣します。現にそうなっているでしょう？」

「うん」

戦術的要衝は、中軸に据えてこそ意味がある。ハクの言っていることは常識であった。

「彼らはこちらを侮るでしょう。何せ勝ち続けているのですから」
「うん」

これも、真実である。キシユウ・ハイシユウの守備軍はヌマ・セイカの用兵に大惨敗を喫した。

だからこそ、『槍を執っては無双、采を振るえば連戦連勝の北の勇者』などと謳われているのだろう。

「攻撃するには、陣から出ねばなりません」

「うん」

それつきり黙ったハクに、エスデスは更に卓犖とした馬術で以って寄っていく。

「びゅー」

「……訂正します。二手先も読めないのですね」

迂遠に『受け身に立たされると無能ですね』と言われたエスデスは、流石に凹んだ。DSすら凹ませ得る本音のみの弁説は、今日も鋭い切

れ味を誇っている。

「地図は見ましたか？」

「うん」

「こちらの右翼の前方に泥濘があります。向こうは知らないようですが、ここで攻めてきた敵兵の速度を鈍化させられます。

なるべく、引き出すのは鈍重な砲兵が望ましい。故にこの右翼の後方に連絡線と補給線を通し、右翼を突破させるように誘導します」

右翼を突破させれば補給線・連絡線が断たれ、更には後背に回られて挟み撃ちにされる。

敵は、最も火力のある砲兵隊を差し向けるだろう。

「ですがそこは泥濘。咄嗟の進退が出来ません」

「うん」

砲兵は鈍重である。泥に砲の足を取られては進退窮まり、進み続けるほどに軽快な行軍が難しくなることは知ってさえいれば誰にでも分かった。

「つまり、膠着します。高地から降りた軍は、退くに退けず進むに進めない——と言うよりは、右翼を突き破ったら勝ちという思考を固定し、余念を排除するでしょう」

「つまり、右翼は囷か？」

「いえ。囷は高地です」

その瞬間、エスデスは遂に理解した。

「……お前は、高地を獲られてからほんの一瞬で七手先まで読んだのか？」

「はい」

大したことでもないように言い切った彼を見て、彼女は無意識の内に獣の笑みが浮かぶ。

「始めるのか？」

「待つ意味がありません」

右翼はハク。本陣にエスデス。左翼にリヴァ。それぞれ二軍を指揮し、敵に当たることになる。

初めに動いたのは、高地に布陣した一軍。

薄い右翼を突破せんとする主力軍であり、狙い通りに砲兵が編入されていた。

次いで二軍が左翼のリヴァとエスデスの本軍に襲いかかり、たちまち火炮と剣撃に彩られた戦闘がはじまる。

——帝具は使用してはなりません。この戦いは帝具持ちに依存しつつあるあなたの軍が真の軍隊に脱皮する為の一戦です。

始まる前に釘を刺されたから、圧倒的な破壊力を解き放つわけにもいかない。

作戦通りにリヴァがじわじわと前線を押上げてエスデスへかかる重圧を減らし、ハクが退却行動を開始して敵の軍の延び切らせつつあった。

(そろそろか)

自分の役割はこちらの補給線・連絡線を絶つために延び切った敵の横腹を突き、中軸である高地を手中に収めて敵を左右に分断。半身不随にさせることである。

「全軍」

白馬に乗った、見目麗しき蒼銀の美女。全幅の信頼を置く将を見上げ、兵卒たちは健気なほど忠実に命令を待っていた。

「前進」

二言のみの号令で爆発的に士気をあげた後、彼女は細剣を抜いて先頭に立って敵陣に突っ込む。

驚くほど容易く、敵軍の中軸はこちらの手に渡った。

(何だ、つまらん)

骨がない。一言で言うならば、彼女の抱く不満はそう表せるだろう。

無論、脆弱な箇所を狙い討って蹂躪した。蹂躪したが、こんなにも容易く崩れるとは思っていなかったのである。

まず、火炮を右翼の突破に回し過ぎた。更には高地に向けてこちらが攻め手をかけてからの反応が遅すぎるし、泥濘に足を取られているが為に展開力もない。

戦線は延び切り、一旦攻めに使った兵力を高地の防御に転用しよう

としても時間がかかり過ぎる。

もの見事に策に嵌まった敵をゴミを見るような眼で文字通り見下し、用意された椅子に座つて一息をついた。

「見物するか」

目の前には、凍った湖。『肌寒くなってきましたね』とは、この湖が凍っているであろうという予想を指していたのだろう。

退路は背後の湖しかない。そこ狙い撃てば氷は砕け、敵兵は極寒の水に沈む。すなわち、楽に勝てるのだ。

「砲兵」

「ハッ！」

「水平射ではあれは割れん。大仰角を取り、敗走してきた敵が半ばまで来たら砲撃を開始しろ」

後続がつつかえて引き返すことができず、前の陸地に辿り着くこともできない『半ばまで』と言うところが、彼女のDSたる所以だった。

あまり気分が昂揚して来ない彼女は少し欠伸をした後に、理由に気づく。

(戦と言うよりは、どちらかと言えば芸術じみてるからか)

完璧な作戦を立て、勝てる環境を作り、敵を操作しているかのように鮮やかに勝つ。

確かにこれはこれで面白いが、指揮を執っていて楽しくはない。

寧ろ、この戦争芸術と戦つてみたいと思うのが彼女だった。

「……うん、つまらんな」

発射される大砲の轟音を背に、目の前で繰り広げられる追撃戦を見る。

やはり、北方異民族の軍の先頭に立つ槍使いの腕は目覚ましい。が、ハクと比べるとそれほどでもないというのが実際のところだった。

邂逅し、槍を交える。

結果のわかっている勝負から眼を離し、彼女はもう一度欠伸を漏らした。

—— エスデス軍は、地上最強。

その名を革命軍に轟かせる一戦は、一両日中に終わった。

告白を突く

強者。強者だ。彼は強者だ。

三度心の中で呟くほどの、甘美な感動を齎す芸術的な勝ちっぷり。初戦の勝利と言う疵を無理矢理に手で開き、拡大させる形で追撃戦を展開し、遂には北方城塞にまで追い詰めた。

戦に勝ち、一騎打ちにも勝ち。全てにおいて彼は北の勇者に勝るといえるか、勝った。

「ハクが、敵ならな……」

「お望みとあらば、革命軍にでも寝返りしましょうか？」

いつもの鍛練から帰還した彼の身体には、黄金の鎧。どうやら常時展開し続け、刻一刻と貪られていく消費量に身体を慣らすことにしたらしかった。

「それは一緒に居られないから嫌だ」

敵として相対し、殺し合いたい獣の本能とずっと一緒にいたいという切な望み。

完璧に矛盾する想いを抱えながらも、エスデスは狂おしい程の愛おしさを感じ、胸に手を当てる。

敵になると思うだけで、獣の本能が狂喜する。しかし、喜びと同じくらい女としての自分が悲しみ、泣きそうになっているのが彼女にはわかっていた。

「すみません」

「……いや、お前は悪くない」

二律相反する望みを抱える自分が悪いことを、彼女はよく知っている。

だからこそ、時折全てを彼に任せたくなる。全てを支配したくも、されたくもある。

ふと気づいてしまえば、後は速かった。

「おかしいのは私だ。」

矛盾している。お前に側にいてほしい。でも、敵として殺し合いたい。味方であれば最も頼れると同時に、あまりにも魅力的な敵であり

過ぎる」

今だって、胸に顔を埋めて甘えているのだ。

なのに、その敵とするに魅力的過ぎる強さに囚われている。ぐらりと。彼女の中の天秤が揺れた。

「矛盾はそのまま受け入れてこそ解決を見ます」

「うん……」

「私は、あなたの意志に従いますよ」
優しい。

エスデスは、自分でも自分が今相当に不安定な存在であるとわかっていた。天秤が常に揺れているような危うさすらあると、思っていた。

それはハクもわかっている。わかっているが尚恐れないうし、見捨てない。

(素晴らしい戦士だ)

鋭利な光が、眼に宿った。

(狂おしい程に、お前が好きだ)

その鋭利な光は一瞬で収まり、情の滲み出るような女の眼になる。強烈な二面性が、矛盾を自覚した彼女の前に立ちはだかっていた。

「私には全ての人間が等しく見えます」

エスデスは、甘えて逃げようとしている自分を目敏く見つけて嫌悪し、呆れながらも少し頷く。

彼女には自分の命を含む、全ての人間の命は等価値であると言われた経験が何回かあった。何の質問をしたのかは触れないが、そういうことがあったのである。

「ですがあなたは別です。正直に申しますと、私にはあなたに対する妙な執着がある」

「……………」

「あなたも私に対して強烈な執着があるのでしよう。ですが私は自身の執着に対する答えを見つけるまでは知らぬ存ぜぬで突き通すつもりでした。自己催眠というやつです」

人の心理を読んでズバズバと諫言を呈していく男が、朴念仁である

筈がない。

言われれば当たり前のことだが、言われるまで気づかなかったのも事実だった。

「私は、あなたへのこの執着が何だかを知らなければあなたへの思いを表明できないと思ったからです。即ち私も矛盾している。等価値だと自然に思いながらも、あなたに偏っているのです」

「……うん」

「誰もこの自己矛盾を抱えています。それを恥じることはありません。寧ろ自覚し、真剣に向き合ったことを誇るべきです」

矛盾のない人間はいない。故に恥じることはない。問題は気づかずに行ったり逃げたりすることで、真剣に向き合ったことは誇るべきだ、と。

誠心誠意、自分にも相手にも刻みつけるように、彼は言葉を紡ぐ。

「あなたは私をどうしたいのですか？」

「……女として、愛して欲しい。戦士として、満たして欲しい。ずっと側にいて欲しい」

それに応えるように、エスデスは必死に言葉を選んだ。

何の飾りもないその言葉と彼女の在り方と被っているあたり、本音のみをぶつけたのだろう。

求愛と、戦闘欲と、所有欲。この三本柱が今の彼女の全てだった。

「私もあなたのことは嫌っていません。寧ろ、好きです」

真つ直ぐ見つめてくる蒼眼に対して誠意を示す意味も込めて、ハクは同じく見返す。

彼もまた自己矛盾を抱える一人であり、他人にとやかく言える立場にはない。

しかし、エスデスの突発的に発生する自己矛盾に苦しむ姿を見ていられないのも事実だった。

「ですが嫌わないのは私のスタンダードな姿勢であり、あなたの求める物とは種類が違う。」

しかし、特別な執着があるのもまた事実です」

「わからないから、応えられない」

彼が無言で頷くのが、彼女にはわかる。

「私はあなたの天秤が完全にどちらかに振り切れた時にしか、答えが出ないと思います。」

女としてのあなたが勝てば、その愛を受けた時にわかる。戦士としてのあなたが勝てば、戦って決着がついた時にわかるのでしよう」

「告白は」

しただろう。しかも相当頑張った。

続けようとした言葉を唇に当てられた一本の指が阻み、強く掴めれば折れそうなほど華奢な腰に回された腕に力がこもる。

肩にももう片方の腕が回され、彼女は初めて抱きしめられていた。ここで初めて、受け身になった。

たったそれだけで天秤が女の方に傾いてしまう辺り、彼女は相当に戦士と女との間を絶妙なバランス感覚を以って渡っていたのだろう。

故に、その矛盾を指摘されるまでは釣り合ってたなどいないことに気づかない。指摘する者がいなければ死んでもなお気づかないかもしれない。

が、それは仮定の話である。今の彼女は矛盾を知ったし、受け入れた上で解決しようとしている。

「あれは相談として受け取りました。あなたが矛盾を受け入れ、決着がついた後に改めて気持ちを聞きたいのですが、よろしいですか？」
「……うん」

驚くほどあっさりとして、女の方に傾いたエスデスは頷いた。

本来単純な性格である彼女に、その心理を読んでの確なフォローと誘導を行うハクは天敵であろう。今の今まで気づかなかつたし、今も気づいているかどうかと言われれば疑問符が残るが、天敵であることに間違いはない。

「ハク」

「はい」

カチツ、と。硬質な物同士が当たった時のような音が響き、背伸びした時に彼の額に当たってズレた軍帽が地面に落ちる。

氷の美将と讃えられる彼女は思いの外、燃えるような熱い血流を

持っていた。

「……初めてか？」

「まあ」

唇から僅かに血を流しながらもあくまでも余裕な素振りを崩さない彼の態度で、エスデスは自分の上がりっぷりを自覚する。

彼女は、身体が硬直しかけるほどに緊張の極にあった。

「……私もだ」

「わざわざ言わずともあんな無茶な突進をかまされた後に『経験済みだ』とは思いませんよ」

一言多い。

熱を持った唇を少し抑え、紅潮した頬を隠すように顔が見えなくなるくらいにまで堅い胸に埋める。

何度やつても、温かい。その温もりが好きだった。

「マーキングだ」

「？」

立ったまま寝たのかと思う程の長い沈黙の後、エスデスは少し甘すぎるほどに甘い声で囁いた。

「お前は私のだ」

「今更過ぎますが、当たり前のことです」

遂には耳まで朱に染めたエスデスの頭に触れながら、あやすように背中を撫でようとして、止まる。

「……………離すな、と？」

「……………」

腰に回された腕は、どうやらお気に召したらしい。

幼い頃に『疾走感が欲しい』と言う理由で走る時には俵持ちをしていたわけだから、彼の腰持ち履歴は長いのだ。

だから、しつくりくるのかもしれない。

黄金の鎧をデフォルト装備にすべく常日頃から展開し続けている槍兵は、そんな的外れな思考を巡らせながら再び華奢な腰を抱く。

「よく折れませんか」

「……………五十四あるからな」

耳にまで上がった血が薄紅色になるまで薄まったエスデスは、次の一言で一気に冷めた。

「二十七、三十一の差があれば細く見えますし、感じますよ」
待て、と。

むりやり押し倒そうかなとすら思っていた、エスデスは思考を冷却させた。

「……私のスリーサイズを、知ってるのか？」

「反問は無礼ですが、軍服の新調を『手続きが面倒くさい』と言って私に丸投げしたのはどこのどなたでしょうか？」

軍服は、基本的に彼女の体型を浮き立たせるように寸法されている。というか、彼女自身がハクにアピールする為に普段着たる軍服を特注でそうした。

つまり。一言で言えば知る必要がある。

「……………ハク」

「は——」

言い切る前に、無言の掌底が繰り出された。

振動と、氷。腹を物理的に貫く一撃に、流石のハクも眉を僅かに動かす。

物理攻撃はカット出来ても、浸透剉には対処法がない。

図らずとも、彼はこのことを今思い知らされた。

そして、数秒後。

「では、戦士としてのあなたの出番です」

「ああ、わかっている」

打撃から立ち直った彼は腰に回した腕を肩にやり、己の方を向いていたエスデスを敵の陣へと向かせる。

自己矛盾に対しての懊悩から自分を素早く切り替えることができ
るあたりに、彼女の危うさと個性が表れていた。

『『ああ』が戦士で『うん』が乙女。中々にわかりやすいですね』

「……………何？」

「なるほど、無自覚ですか」

帽子の膨らんだ部分を掌が潰し、八センチ高い身長が頭を撫でる。

潰した先には、絹のように柔らかな蒼銀の髪があった。

「……お嬢」

「なんだ」

「別に知られて恥じるような数字ではないと思いますが、どうなので
すか？」

再び彼女が彼の為に開発した掌底を繰り出したのは、言うまでもな
い。

欺瞞を突く

北方城塞が陥落してから、七日後。

エスデスが帝都を留守にしている好機を逃さずに跳梁し、市民と悪徳貴族や腐敗官僚を震え上がらせる暗殺集団・ナイトレイド。

革命軍の裏部隊として暗躍し、その蜂起を確実に成功させる為に地盤を固める傍ら民を苦しめる腐敗官僚と悪徳貴族の天誅も下している彼らに、その届いて欲しくない報が届いた。

「集まったな、皆」

四人の女性と四人の男性。自分を含む全てのメンバーがこの場に集まったことを確認し、一人一人の目を見るように視線を遣った後に責任者であるナジエンダは口を開いた。

「悪い知らせが三つある」

その重い口調に何かを感じ取ったのか、その場に集まった全員の口元が結ばれる。

悪い知らせ。そこから連想される物は当然ながら軽やかな物ではない。重く、辛く、厳しく。絶対的な不吉の予感が皆を照らした。

「まずは一つ目。エスデスが北方を制圧・宣撫を終えて南方へ帰還。本人と三獣士は帝都に残ったようだ」

「予想より遥かに速いな……」

角が生えているという一目でわかる特徴を持つ男性が無感動に呟き、正統派な髪型からリーゼントヘアへと悪夢のイメージチェンジを果たしたブラートが首肯する。

「半年以内に潰しきるだろうってことはわかってたが……速いな」

行われた宣撫が物理的な物なのか、それとも真に宣撫と呼ばれるものなのかはわからない。が、北の備えが低練度の帝国兵だけでこなせるようになってしまった事実のみが革命軍には突きつけられていた。

「……三人揃って左腕と本体は帝都。で、右腕は何処にいるんだ？」

「それが、二つ目の悪い知らせに繋がる」

野性味溢れる金髪の美女・レオーネの質問に、ナジエンダは手を組んで肘を卓上につきながら答えた。

「革命軍に内通していた村五つと、一邑が陥された。文字通り全滅で、な」

「……全、滅？」

信じられない、と。一人の少年が内心が透けて見える驚愕を見せる。

新人であるタツミが表立って見せた驚愕は、こういった不測の事態に慣れている他のメンバーにも共通する感情であった。

「前に私は、至高の帝具の下に三つの帝具があると話したな」

四十八の帝具には、格付けがある。一番上には至高と呼ばれる帝具。その下には無から有を生み出す三つ、更にその下には武器型の帝具や、生物型……と言ったように、一口に帝具と言っても様々なものがあるのだ。

エネルギーの充電が必要とはいえ、リスク無しに雷を操る帝具・『雷神憤怒』アドラメレク。

飲むと狂うと言われた曰く付きだが、無から氷を生成できる帝具・『魔神顕現』デモンズエキス。

同じく曰く付きの使うと一回で灰になると謳われた、光を織る帝具・『玄天霊衣』クンダーラ。

至高の帝具に次ぐ三つはパイルバンカー・血液・腕環と様々だが、極めて強力だという点では共通している。

「その内の一つだ。適合しないと光に灼かれて灰になるが、究極まで適合すると使い手と融合すると言われている」

「能力は何なの？」

片腕を亡くし、使用することができなくなった彼女の帝具『浪漫砲台』パンプキンを受け継いだツインテールの少女・マインが投げた問いに、ナジエンダは姿勢を崩さずに陰鬱としながら答えた。

「文献によれば、光を織る能力——らしい」

「光を織るう？」

何とも抽象的な表現に相貌を疑念に染めるマインに、ナジエンダは少し頷く。

彼女が体験したのは鎧のみ。突然現れた理由も光を主材料にして

いるならばわかるが、彼女には他に何をしてくるかが皆目見当がつかなかった。

「とにかく、城郭都市と村を灼き尽くす火力と異常な防衛力を持っていると考えればいい」

「じゃ、じゃあ。戦うことになったらどこ狙えばいいんですか、ボス？」

タツミの一言に沈黙した皆の重苦しさを打ち砕くように、角の生えた男性が手を上げる。

「何だ、スサノオ」

「逃げた方がいいだろう」

スサノオと呼ばれた彼はナジエンダの新たな生物型の帝具であるが、同時にナイトレイドでも一二を争う強者であろう。

その彼の発した逃亡推奨は、取り除かれた重苦しき以上の重圧を皆に与えた。

「マインとシエーレが暗殺帰りに帝都警備隊の隊長と戦い、逃げに徹して引き分けたことがあつただろう」

「あの時は危なかったです……」

ほんわかとした空気を纏う長髪の女性・シエーレが感想を漏らし、その緊張感のなさが空気を弛緩させる。

弛緩させ過ぎると、注意力を失う。

緊張させ過ぎると、柔軟性を失う。

組織を管理するにあたって、この丁度良さが難しかった。

「お前たち二人を逃がす為に殿を務め、逃げ切ったと思つた時に立ち塞がられたからわかる。」

あれは本体も相当やるぞ」

「どれくらいに、だ？」

主の問いに答えず、スサノオは少し考えて両手を打った。

乾いた音が響き終えた、その時。

「この一音の間に、俺が捌けただけで七十四からなる無間の連撃が来た。奴曰く、七十八らしい。なるほど、受け切ったはずの俺の身体には四個の孔が空いていたわけだから嘘はついていないのだろう」

「……俺と戦った時から、二年経ってないぞ?」

「己の未熟さを痛感した、らしい。俺と戦い、夜明けまでに倒しきれなかった時もそう言っていた」

ブラートの引き攣ったような問いに静かに答え、スサノオはまだ僅かに痛む手を見やる。

三日経とうが、あの強烈な打ち込みの痺れは引かない。力では僅かに自分が上だろうが、技量では遥かに劣っていた。

「俺も鍛え直しだな」

「付き合うぜ、スサノオ。このままじゃ俺も齒が立たないかも知れねえからな」

「訓練は後にしろ。三つ目もある」

焦りと共に訓練場へと足を運ぼうとした二人を引き止め、ナジエンは手短かに切り出す。

彼女にも、時間が足りないことはわかりきっていた。

「地方チームが壊滅した。これも大炎上していること、南部にあったことを加味すると奴にやられたのだろう」

悪い知らせの全てがエスデス軍によるものとわかつては、修羅場を潜ってきた流石の殺し屋たちも言葉を失う。

これからは安易に酷吏や腐敗官僚や悪徳貴族などを暗殺しに行くことが相当難しくなるであろうことは、誰にでもわかつていた。

「なんつーか……今までは俺は一般人だったから純粋に『エスデス軍って凄いな』って思ってたんだけどさ」

華美な鎧と優れた武装、優秀な下士官に三獣士と呼ばれる三人の幹部。見目麗しい美将を支える地味な副将に、氷の魔神。

主将は一兵卒からの成り上がりであり、身分容姿問わず出来る者を取り立てる新進気鋭の軍。

「敵に回すと、よりそのヤバさがわかったよ……」

「お前……言いたいことそれだけ?」

ラバックは二年ほど前の対戦では石突で振り向きざまに突き飛ばされると言う不覚を演じ、そのヤバさをまさに身を以って知った。

と言うかこの中で痛い目に遭わされていないものの方が少ない。

新人であるタツミの感じるヤバさを、彼等は生々しいまでに感じている。

しかし、それでもやらねばならないのだ。

「いや、そうじゃなくてさ。説得できないのか？」

「誰を？」

「副将。うまくいってないような話が結構伝わってきてたから、いけるんじゃないかなー、と思っただけだ」

同僚のノウケン将軍に絡まれた時に『欲望を表に出し、満たし続けられ必ず滅ぶ。さしずめあなたは、女で滅ぶことになるのではありませんか』と言って激昂されたり、ブドー大將軍に『地位の重みが人の重みになつては地位に呑まれているということでしょう。一度地位に呑まれているということを自覚してみたら如何ですか』と言って不興を買い、その毒舌をよくよく知っていた大臣に『私の前では喋ることは不要です』と言われれば『それはいいでしょう。が、人の口をふさぐということは水を堰き止めているのと同じこと。あなたの好むこの方法をとっている限り、塞がれ、鬱屈した民意と言う名の洪水に押し流されるのではないでしょうか』と言って言葉を失わせ。

主君であるエスデスに『あなたは欲望のままに生きています。欲望のままに生きることが楽しいでしょうか、いずれ必ず滅びます』と試みてみたりと、傍から見れば到底うまく行っているとは思えないし、他者に好意を持っているとも思えない。つまりところは言い方に思いやりがない。

「関わっていないとそう感じるが、奴は人が大好きだ。思いやりとは真実と欠点を見せ、直してやることだと思っただけで、嫌っているわけではないと思う。刃のような率直さは毒を含んでいるかのようには身に痛い、傷つけようとしているわけではないとも、な。」

容れる度量があればこれ以上ない薬になる」

「……………つまり？」

「凄まじく不器用なだけだ。その率直さを容れたエスデスには多少なりとも気を使って話すらしいが、な」

その代わりによく凹むらしいがとは、言わなかった。

そして。

「……………容赦をくれ」

「容赦とは？」

空からの爆撃を完遂して帰還したハクは、彼が留守中に業務を代行してくれた仮副官にぶつけた理不尽な命令の数々を指摘し、相変わらぬ刃を放っていた。

事実だからこそ辛い言葉の刃にグサリと刺されたエスデスは、いつも通りに凹む。

無表情無感動の口調での指摘ほど、辛いものはないというのが彼女の持論だった。

「もう少しこう、温かみのある言い回しを——」

「温かみのある言い回しとは具体的には何度ですか？」

無論彼は、天然である。

三連星を突く

「情報をいただいたにも関わらず、悪に逃げられてしまいました……」
「そうか」

報告すべき戦鬪があつた日にすれ違う形で南方へと戦車を走らせていた恩人に向かつて、セリユー・ユビキタスは頭を下げた。

ユビキタス家とこのエスデス軍の副官兼情報将校兼参謀長とは、数年来の付き合いがある。

それは父親が警備隊を退職し、娘がその隊長にまで登り詰めた今になつても変わらず、今では職務上の立場と権限を犯さない程度に輔弼しあう仲になつていた。

「また稽古をつけていたいただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

「前はそちらが南方へ来た。今度はこちらから出向こう」

帝都警備隊が入手した地方支部からの情報を束ねた文書を受け取り、卓上へと置く。

その気になれば人を撲殺できそうな程に分厚い書類は、帝国全域であつた変事や反乱軍の動向を纏めた物である。

軍とはまた違った視点を持つ警備隊からの報告は、誤報を抜き、良質な物を選別して纏めれば革命軍の動きを大体掴むことができた。

無論、それには軍の報告をも集積し、選別しなければならぬ。

だが、それを不眠不休でやっておきながら普段の職務とエスデスのお世話に過欠を示さないのがエスデス以上に革命軍にとっての脅威と見られている理由の一点であろう。

「見逃したのはこちらも同じだ」

「南方へ行つていたのでなかったのですか？」

「笛を吹いただろう、お前は」

二対一という不利を情報アドバンテージと帝具の相性で覆し、援軍が来るのがもう一瞬早かったならば少なくともどちらかは捕縛できていたであろう状況に於いて、ハクもまた動いていた。もつとも、角の生えた『スサノオ』と呼ばれる男性に阻まれてしまったが。

「そうでしたか……やはり悪は、手強いのですね……」

「少なくとも、尽きることはないだろうな」

「最近でもスタイリッシュと言う科学者を違法な人体実験を行った咎で捕まえたばかりですし、まだまだ正義の光が世界を照らすまでには足りません。」

「ですが！」

「バンツ、と。力強く机が叩かれ、複数の書類が宙を舞う。」

「分別中だった書類が『残念だったなあ。やり直しだよ』とばかりに雪崩を打って混ざっていく様をちらりと一瞥し、身を乗り出して熱弁を振るうセリユーへと視線を戻した。」

「セリユー・ユビキタス。何故この世に革命軍というものがあり、民はそれに与すると思う？」

「……革命軍に誑かされたからでは？」

「民も馬鹿ではない。臆病で、慎重で、何より鈍重だ。変化が必要だとわかっていても尻に火が付くまでは腰を上げない。そんな奴らが何故やすやすと誑かされたのか」

別段、彼はオネスト大臣の配下の酷吏のように民を馬鹿にしているわけではない。臆病さは思慮深さであり、慎重さは現実を踏み固めているということであり、鈍重さは意志の堅さである。尻に火が付くまでは動かないのも忍耐強さの表れであるし、誑かされない、と明言しているのだから馬鹿だと言っているわけでもない。

「エスデスならば瞬時に働くこの言語変換も、セリユー・ユビキタスからすれば難解だった。」

「……………そこに魅力を感じたから」

「…………お前にとつての正義とは悪を許さず、明文化された法で天に照らして裁くというような峻切なものであろうが、正義の本義とは閉じられていたものを開き、開いたことにより人民を救うというものだろう。」

「革命者に正義を見るのは要するに時の蒙さを開き、万民に新たな光をもたらそうとしているからだ。この新たな光こそが、魅力と言っても構うまい」

「別な正義を突きつけられたセリユー・ユビキタスの思考が固まる。」

そもそも彼女の思考はあまり柔軟ではない。貫き通す強さは持つが他者を容れる柔らかさに欠けていた。

「……正義は勝つと言うが、向こうにも向こうなりの正義があることを忘れるな」

未だに混乱したような表情をしているセリユー・ユビキタスに気づき、ハクは僅かに思考を巡らした。

つまり彼女が表に出してきた戸惑いや、混乱などの根源は何なのか、を。

「障害は多いだろうが自分が決めたならば貫き通してみるといい。それでわかることもあるのではないか？」

『一言少ない』

そうエスデスに言われ続けたのが流石に堪えたのか、ハクは遂に過不足なく述べた。

自分が寡黙であるという自覚はなく、寧ろ多弁であるという思いが濃厚だった彼にとっては反撃するように放たれたエスデスの発言はかなりの驚きを伴い、身に沁みている。

少なくとも、自分の間は忘れることがない程度には。

最後の一言でようやく意図を読み取ったのか、結局笑顔で去っていったセリユー・ユビキタスを無言で見送り、彼は崩された書類の山を黙々と捌き始めた。

エスデスは自分の公務が終わって帰ってきた時に彼が自分の部屋に居ないだけで、怒る。いくら怒られようと構わないが、拗ねられるのだけはいただけなかった。

「……難しいものだ」

「何かな？」

目の前にお茶を入れた陶器の器が置かれ、置いた主を見れば頭上をリボンが踊っている。

自分より幾つか下。エスデスと近い年くらいの年齢ながらそうは思わせない容姿には、かなりの見覚えがあった。

「チエルシーか」

「そ。情報収集終わったから本業に復帰しに来ました……って感じ」

チエルシー。エスデス軍の帝具使いとは別枠でハク個人が彼自身の所領で見出した帝具使いである。

「そう言えば侍女長だったな、お前は」

「自分で任命しておいてそれはないんじゃない？」

否定しきれないけど、さ。と、自分が約半年間革命軍に内偵していたことが侍女長の仕事ではないことが重々わかっているのか、チエルシーは遠い目であらぬ方向を見つめた。

器量も要領もいいから取り立てられ、殺そうと思った異常者の領主も突然現れた幽鬼のような男に捕縛されて裁かれ。

全てうまく行っていた、我が人生。

「何で帝具使えるとか言い出したかな、私……」

「強制してはいない。お前から言い出したんだからいつ辞めるのかもお前の自由だ。お前は我が眼としてよく働いてくれたからな」

本気で言っているからこそ、彼女としても引き下がれないものもある。元々かけられる期待に弱く、なるべくは応えたいと思う質なのだ。

それが原因で身を滅ぼしかねないようなところもあるが、美德であることは確かだろう。損をする性格であるとも言うのかもしれないが。

「……まあ、やるけどね」

「そうか」

よく要点を抜き出し、結論と推論を分けて纏められたチエルシーの報告書は、読みやすい。本来は要領のいい役人志望だっただけあって、非常に優れた分析力と要約力を持っていた。

見れば見るほど、使えば使うほど、情報収集に最適な能力をしているのである。

「次はどこで集める？」

「暫く侍女長として羽根を休められるがよろしいのでは？」

「じゃあ、そうしようかなあ……」

帝具であるメイク道具を手で弄くりながら、チエルシーは一つ頷いた。

緊迫したような空気を内に溜めて行動しなければならなかった革命軍での内定は、彼女の中に見え難い疲れを溜めている。疲労抜きにぬるま湯の仕事をこなすのも悪くはなかった。

「行く時は一筆。侍女長をやるならば新規で雇った三人の教育を」

「はいはい、っと。暫くはここに居るからよろしくね」

その後、暫くの間談笑相手を務めていたチエルシーが何かを察知したかのように退散した、数分後。

「ハクう……」

「はい」

割と駄目そうな声を出し、ぐでーっと前につんのめるように背中に凭れ掛かってきたエスデスを受け入れ、ハクは肩に乗せられた顎――及び柔白の肌と蒼眼を横目で見た。

三連続。何故こうも女性の訪問ラッシュが続くのか。

ハクは甚だ疑問だった。

「女性としてのデリカシーを守れ守れと仰っていますが、後ろから抱き着いたり私が寝ている時に突進してきたりしているから女性として扱われないではありませんか？」

充分に女性として魅力的なのにそう言う遠慮を抱かせないのは、あなたの魅力の一つだと思えますよ。

本人はどうやらそう言っているつもりらしいが、彼が話すのは一般人にはただの皮肉にしか聞こえない難解な言語である。

「うん。もっと褒めろ」

凄まじい天然ぶりで辛い問題提起を行ったハクもハクだが、エスデスもエスデスで相当に難解な言語表現に隠された真意を当然の如く読み解き、正しい答えを返せる辺りは流石であった。

過剰なスキンシップの所為で折角の美人顔が距離と遠慮を感じさせない。故に、しらつと数字やら何やらを口にしてしまう。適切な距離と恥じらいを持ってくれればソレもまた変わってくるのだが、今のままではちよつとなついた仔犬が突っ込んでくるのと何ら変わらない。

それを知ってか知らずか仔犬の如き行動の数々を改める気は全く

ないと断言した彼女が、デリカシーを手に入れる日は遠いだろう。

「日々の雑務に疲れた私には風呂上りのこれが癒やしなんだ……」

「そうですね」

実にあっさりと疲労宣言をスルーし、慮る言葉を取るでもなくハクはゆつくりと立ち上がった。

勿論エスデスは立ち上がる為にとられた予備動作でさっさと凭れるのをやめている。

「む……」

台所あたりに引つ込んでしまったハクを目で追い、エスデスは一考すらしてないと思われるような雷光の如き素早さで彼の洋服棚から白無地のワイシャツを無断で抜き取って軍服を脱ぎ、手早く畳んでワイシャツを着る。

最早熟練すら感じるようなその速さは、毎日の繰り返しの賜物であった。ハク曰く『実に大した物ですね、お嬢。到底何かの役に立つとは思えませんが、素晴らしいものだと思います』ということらしい。

因みに彼はこれでも褒めたつもりだった。皮肉とかではなく、本音のみがそこにはある。

「ん……」

そんな皮肉を正常な意味で取れる数少ない人種である彼女は、流れるが如き精練された動作でダブルベッドの内の片方に潜り込み、布団にくるまって好きな男の温かみのある匂いを堪能していた。

余談であるが、彼女は好きになったら全てを好きになる質である。これは非常に惚れ込みやすいとも言えるし、極めて一途な思考を持っているとも言えた。

故にその全てを好きになる質であり、欲望のままに生きている彼女からすれば他人の服を着て他人の寝台に潜り込んで他人の布団にくるまっている現状は至極当たり前の行為だろう。そこに一般的な規範は存在しない。

自分がしたいからしているのである。

「一応、寝台でも摘めるような料理を作りました。食べますか？」
「うん」

無意識に甘えるような声を出したエスデスの顔のみがハクの布団から顔を出し、親の餌付けを待つ雛のように口を開けた。

「……怠惰の極みですね」

「うん。でも幸せだから全然いい」

純粹に怠惰に身を任せることへの健康への懸念を口に出したハクに対し、エスデスが答えたのは今の嘘偽りない気持ち。

こうも直球でぶつけられては、悪い気がしないのは確かだった。

「仕方ない人です」

「それは、今更だろう?」

「違いありません」

軽い夜食を食べ終わり、寝間着に着替えたハクの隣にちよこんと腰を下ろし、美しい絨毯のように寝台の上に広がった蒼銀の髪が肩に凭れる。

「お前、また一言足りてないぞ」

「……そうでしたか?」

「うん。かなり」

セリユー・ユビキタスへの諫言で実直スイッチがオンになったことが原因だろうと、彼は適当に考えた。

そして、実際あつてはいる。

「……すみません」

「誰にでも失敗はある。気に病むな」

大度量を見せる彼女を見て、少し間物思いに耽る。

何だこの小さいのは。

最初に突つかかかってきた彼女を見た時の、それがはじめての感想だった。

とことん生意気で、怯むことを知らない。何回やっても勝とうとしてきて、遂には夜討ち朝駆けまでも完備してくる始末。

だが、彼にはそれが不思議と嫌ではなかった。そもそも誰かと関わることをやめていた彼にとっては、嬉しさの方が勝っていたのかも知れない。

二年後くらいに、自分は遂にその『小さいの』に負けた。

接戦の末に初めて負け、『守りが弱いな』と屈託なく言われた後に芯を戴いた。

十年後に再び合ってみたら、俎板が俎板でなくなっていた訳である。

外見は変わっても扱いは基本的に変えないつもりだったし、それでいいとも言われたが。

(……変えるべきか)

煉瓦のように組まれている脚には腿の柔らかみが、胸には押し付けられている胸の張り柔らかさとが伝わり、腰を抱くように回した手からは滑らかな肌と新雪の如き柔らかさが伝わってくる。

「ハク」

変えるべきか、と。

彼はもう一度自問し、自答した。

「おい、ハク。もっと私を強く抱け」

この小さな暴君は、女性だ。今までは何か馴れ合いのような形で接してきたが、このままではいけないような気もする。

ハクは別なことを指摘されて漸くそのことに気づき、すぐさまそれを実行に移した。

今からでも、移そうとした。

「……離していただきたい」

「やってみろ」

力づくならば、できなくもない。だが、このコバンザメのような引っ付きぶりを見せる彼女に対してそれは徒労だろう。

「女性として敬意と尊重をこめて丁寧に扱いたいのです」

「いらん」

けんもほろろとはこのことか。正に意見を一蹴され、ハクは流石に押し黙った。

前にデリカシーを持ってと言われてから考えていたことを一瞬で潰されたのだから仕方ないとも言える。

「……あなたの言うことは矛盾しているような気がするのですが、ど

うか。いや、別に構わないのですが、気になったもので」

「ああ、そうだ。私は私のままで生きています。その場で抱いた欲望が矛盾した行動を取らない人間などはいない」

何だかんだで結局は『それもよし』と解釈したハクが、無言で目を瞑って腰を引き寄せたその瞬間。

「それはそうと、他の女の匂いがするなあ、ハク」

ガブリ、と。嫉妬剥き出しの昏い視線が身を穿き、並び方のいい真珠のように白い歯が鎧を内に沈めたハクの肩に突き刺さった。

痛い。甘噛みではあるが、本気に近い噛み方と顎の力がその感じる痛みを増幅させているのだろう。

冷静な分析ができる程度には余裕だが、正直かなり痛かった。

「やましいことはしていませんよ」

「ふん……どうだかな」

相談に乗り、談笑し、拗ねた主人の機嫌を直し。

色々間とか時とかの運が悪いことを、彼はやっと自覚した。

偽装を突く

彼女がまだ一役人でしかなかった頃。

彼女の出身地が地獄でしかなかった頃。

「太守殿。貴方には殺人罪・横領罪・窃盗罪・傷害罪など、計二十四件の嫌疑が掛けられている。速やかに憲兵の指示に従い、帝都に移動されるようにとの、エスデス様の御下命です」

自分が一応調べ上げ、提出した証拠と文書を一々並び立て、その男は現れた。

切羽詰まって『奴を殺せ』と命令した太守とその命に従って動いた取り巻きを力を利用して投げ飛ばし、銃撃をも軽々避けた彼が、その武芸の程に怯え疎んでいた太守の方へと歩みを進めるだけで、地獄のような圧政は終わりを告げ。

自分は、その要点を抜き出す能力を買われて側近兼秘書とも言える侍女長に抜擢されたのだ。

それが、苦勞の始まりだったが。

「まだ情報収集してるの？」

ともあれその頃から、根を詰め過ぎないようにするのがチエルシーの役目である。

「やる量が多いに越したことはない」

エア・ルナ・ファルの三人娘をしごき終えて完全に休憩モードに入ったチエルシーが執務室へと無断入室を果たし、これまた無断で置いていた棒付き飴を舐め始めてから、はや一時間。一度も周りを顧みず、ハクはひたすらに情報を整理していた。

最近三獣士がナイトレイドを釣る為に動き出している。即ち、大臣の策略で誘き出されるであろうナイトレイドとの対決が急速に近くまで迫ってきていると言えた。

その為には敵戦力の把握を正確に行わねばならず、ナイトレイドの情報を得るには些細な出来事・天誅を下されたと思われる悪徳貴族やらの死因から類推せねばならない。

「どうなの、今のところは」

「ナイトレイドに殺られた被害者たちの死因は様々。呪毒、絞殺、刺殺、撲殺、銃槍、両断されたことによるショック死など、な」

呪毒ならば、分かり易い。帝国に嘗て所属していた元羅刹四鬼・ゴズギが回してきたババラと言う老婆の死体にそれらしき痕跡があったから、ナイトレイドの中には『一斬必殺』村雨の使い手がいると考えられる。

恐らくこれは『必殺刀』の使い手として名高いアカメの帝具。

ここまででは誰でもわかる。しかし、問題は他だった。

「銃槍はナジエンダ元將軍が持ち去った『浪漫砲台』パンプキンだろう。セリユー・ユビキタスの証言からそれが『マイン』と言う名であり、桃色ツインテールの少女だということもわかる。そして、両断されたことにショック死も、わかった」

「二年前に盗まれた『万物両断』エクスタスでしょ?」

流星に鋭い情報通ぶりに頷くことで同意を返し、ハクは紫色の長髪と眼鏡が特徴的な女性が描かれた手配書に『万物両断』、桃色ツインテールの少女が描かれた手配書に『浪漫砲台』、黒髪の少女が描かれた手配書に『一斬必殺』と書き込む。

後わかるのは、百人斬りのブライト。これは『悪鬼纏身』インクルシオでほとんど間違いはない。

「他がわからない。絞殺は糸で絞められたような跡があったから『千変万化』クローステールだろうが、使い手がな……」

「戦ったなら覚えてるんじゃないの?」

「振り向き様に石突を叩き込んだだけだ。視界の端に緑色が写った気もするが、それで無用の嫌疑をかけるのもどうかと思う」

疑わしきは罰せずがユビキタス父の信念であり、ひいてはその娘であるセリユー・ユビキタスの信念であり、ハクも大いに同意するところである。

無用の嫌疑を無辜の民にかけることは罷りならんと言うのが、帝都における新たなルールだった。

「絶対に悩むよりも早いだろうし、私が潜入してこようか?」

「危険だ、止めろ」

「バレない自信があるんだけど、駄目？」

寸暇の躊躇いもなく瞬拒され、チエルシーは不満げに口内で飴を転がす。

彼が慎重さと忍耐強さの男であることはわかっているが、少しの危険で莫大な情報アドバンテージと言う名の利益が見込めるならば、その僅かな危険くらいは負ってやろうという気持ちだが、彼女にはあつた。

「ああ、駄目だ」

「心配してくれてるのかな？」

悪戯っぽく、自身の持ち味を活かして挑発するように微笑むことで自信の程を伺わせても、返ってくる返事は不動不変のただ一言。

「その通り、お前の身が心配だ。だから行くな」

「……………はい」

面と向かって三度にわたってこう言われては、チエルシーも流石に引き下がるしかない。と言うより彼女は元来、真っ直ぐに正の感情をぶつけられることに弱いのである。

多少なりとも内部で屈折しているとは言えども真っ直ぐにしかぶつけてこない彼との舌戦での相性は最悪に近いほどに悪かった。

「念の為に帝具はここに置いておく？」

「信じている。持っている」

「……………ああ、そ」

遂に抗する手段すら失ったチエルシーが珍しく黙ると、執務室には再びの沈黙が訪れる。

もつともこの沈黙の主要因は、チエルシーが勝手に地雷とじゃれ合っていたら案の定爆発した、というものでしか無かったのだが。

「……………あ、エアたちに仕事教えなきゃいけないんだっ」

「精が出るな。期待している」

明らかな棒読みによってやっと拓けた逃げ道を走っていたら後ろから投げ槍に貫かれました、とでも言わんばかりの完敗を喫したチエルシーがグロッキー気味にふらふらと執務室を後にすると、その場には彼女の舐めていた飴の甘い香りがふわりと漂っていた。

そんなことも関係なくハクはひたすらに仕事を進め、気づく。

「リヴァ殿か」

「相変わらず部下の命はとことん大事にするのですな」

含みのある言い方と共に現れたのは、リヴァ。三獣士筆頭にして、最近起こっている文官の連続殺人事件を引き起こしている人物である。

帝都警備隊と誼を通しておきながら、命令されたことを完遂するためには汚名を被ることも辞さないその姿は、エスデス軍の理想的な軍人だと言えた。

「大凡人である私に尽くしてくれる出来た部下だ。彼ら彼女らが尽くしてくれる分、私は彼ら彼女らを無為に散らさせてはならないという義務がある」

「なるほど」

彼女はペットとして目上から保護し、彼は協力者として対価として保護する。やっつてることに大差はないが、命を惜しませない為に様々な手を打っているエスデスと命を惜しませて生かして帰すことを再優先にしているハクとは、内面的にかなりの違いがあった。

基本的に能力を磨いてやり、人柄を無意識に育てて外に出してやるハクと有能さを有能さとして手垢のつくほどに使い抜くエスデスとはそもそも論として目指す結末に違いがある。が、傍から見れば異様なほどに出て行く者の数が少ないのだから、あまり違って見えないのだ。

「戦力分析は出来ましたか、参謀長殿」

「そんな大層なものではないが——暫定版ならば、な」

こちらが能力を割っていてそれを敵が知っている帝具の欄に、『万物両断』エクスタス、『悪鬼纏身』インクルシオ、『浪漫砲台』パンプキン、『千変万化』クローステール、『一斬必殺』村雨。

向こうが能力を割っている帝具の欄に、『水龍憑依』ブラックマリオン、『軍楽夢想』スクリーム、『魔神顕現』デモンズエキス、『玄天靈衣』クンダーラ。

「奴等の情報元は、ナジエンダですか」

「共同作戦でおしみなく使用したのが仇になった形になる。裏切るとは思っていないかったことを併せれば仕方のないことではあるが……正面から奴らと相対すれば、不利な状況に陥るであろう可能性は否めん」

ナジエンダとの共同作戦で、三獣士はその帝具を遺憾なく使い敵を撃滅している。故に、彼女は三獣士の帝具そのものを知らずとも外見の特徴、或いは能力を知っているはずなのだ。

あとはそれを手掛かりに文献を漁っていけば自ずと帝具の利点・欠点に辿り着くだろう。

「竜船か寒村か……候補は二つに一つ。我らの動きは奴らに割れているだろうな」

「……ならば、裏をかきますか？」

「それはお嬢が決めることだ」

纏められ、綺麗にファイリングされた情報にサラリと目を通し、リヴァは一礼してその場を去った。

基本的にエスデスが政治的な公務の際に選ぶ副官はリヴァである。ハクは謂わば私設副官、と言ったところだろうか。

そうなった理由は言わずもがな、エスデスが暇さえあれば甘え、暇がなければ作るというような有り様で甘えすぎる所為である。

馴れ合いが職務上で起きてはならない、というのは国に仕えるものとしての基本であった。

「ハ——」

「チエルシー、何をやっている」

リヴァと入れ替わりに再び入ってきた蒼銀の髪を持つ女性の表情や何やらの微細な違いを目敏く察知し、ハクは目線で悪戯好きの侍女長に変装を解くように促す。

そもそも彼女は、いくら見事にやり込められてもそうやすやすと引き下がるような玉ではない。何かしらの手段を用いて嵌めようとしてくるのは容易に想像がついた。

「げ……」

明らかな選択ミスに後悔の念を滲ませたチエルシーはエスデスの

顔のまま表情を引き攣らせ、コルクを引き抜くような軽い音と共に本来の姿に還る。

具体的に言えば膝までであった蒼銀の髪が蜜柑のような橙色に変色し、僅かに短くなり、更には身長が十三センチほど縮み、目つきも猫科の猛獣のような鋭さを失い、僅かに丸みを帯びた可愛げのある物へと変わった。

「何でわかったの？」

「滲み出る光彩が昏い。お嬢は透明さがあるが、お前にはないからすぐにそれと知れる」

例えるならば、エスデスは豹であろう。

しかし、チエルシーは頑張っても肉食獣のような猛気を出せない。自分を偽れば作れるが、長年見続けている彼からすればその猛気はハリボテにしか見えなかった。

彼に外見を用いた誘惑は効かない。彼が見るのは心の純度であり、光彩である。肌体も華服も、それを覆い隠す膜に過ぎない。心の純度とは誤魔化しの効かないものであり、ふとした挙措で顕れるだった。彼が見れば外面を繕ったような美しさは醜く見え、光彩を放つ心の持ち主は美しく見える。人の心が放つ光彩に一つとして同一な物はなく、似通ってはいても一致はしない。

チエルシーとエスデスの心の光彩は似通うどころか、大いに違っていた。

故に彼に、虚飾は効かない。本質を剥き出さざるを得ない。

彼に、嘘は効かない。

「昏いって？」

「本質が仮面と混ざっている。中々本音が出ないし、気づかない。恐らくは、建前が多いのだろうな」

人の光彩の純度は在り方で決まる。元来狂っていようが、欲望のままに暴恣を振るおうがそれが自分の本質ならば透明に見え、隠す物があるならば昏く見えた。

即ち彼女は本質に気づいていないか、出ていないかだろう。

昏いのは、決して悪いことではないのである。

「……まあ、かもね。エスデスに見せた時も『血色が良過ぎる。もつと人間味をなくせ』って言われたし……」

心を覆うのが、外見だ。巧みに覆ってもその光彩は隠せないのだから、自分の心には色が付いているといえる。

透明な心を持った者に外見を偽ってしまえば、人並外れた——ハクの眼や、エスデスの勘と言った半ば超常的な——感知能力を持つ者にたちどころに訝しまれてしまうだろう。

「幽鬼の如き、と言われてるだけのことはあるのだろう。自覚はないがな」

罹病しているが如き、病的なまでに血の気のない肌。

全く崩れない鉄壁の表情。

他者の真贋を見極め、射竦めるような鷹の目。

この組み合わせほど、冷酷さとか伶俐さとかいった印象を与える外見はない。発言にも人としての血が通っていないような理性的な発言が目立つから余計に、だ。

外見をその不透明な白さを持つ心に染められた彼は、最後にゆつくりと頷いた。

内憂を突く

「どうしますか、お嬢」

「潰さざるを得ん。私は行けないが、三獣士が属く。それに——」
開かれた窓から飛んで来た梟を怜悯な目で見遣り、エスデスは苛ついたように机を白魚の如き細く長い指で叩きながら、言った。

「お前の私兵の帝具持ち達。あれを使えば問題は無いだろう」

「戦闘要員ではない者しか動けないのです。一人は病氣療養中だと言うのに大將軍派の文官にテンスイへ叛乱討伐に駆り出される始末ですから」

昼真つ盛りにパタパタと飛来し、黄金の鎧の肩にある円形の装飾の一部に停まって首を傾げるような動作を見せた梟を不快気な目で見つめた後に、側にあつたペンを梟の首へ目掛け、投げる。

馬鹿にしたように首を傾げ、その後パタパタと翼を動かして浮力を得ながら、梟は投擲を避けるべく肩から落下し、地面すれすれで浮上した。

完璧に手慣れたおちよくりの動作は、何故か悪戯好きの猫のような機敏さと小悪魔めいた笑みを連想させる。

鳥だというのに。

「おい、鳥女。そこから降りろ」

帝国最強の殺気を混ぜたドスの利いた声をどこへやら。風見鶏のようなスルースキルで以つて受け流した梟は、相変わらず飄々とした様子で肩の装飾に停まっていた。

「ハク、降ろせ」

ここで『何故ですか』と聞き、幾度となく巻き添えの掌底を喰らつてくれば、あのハクとて流石に学ぶ。

彼には珍しく何も言わずに指を一本差し出して梟を肩から移し、飛んで来た窓から解き放った。

梟も冷気を纏い始めたエスデスには敵わない、或いはからかっても被害しか蒙らない、と理性的な判断を下したのか、割とあっさりと外へと逃げる。

ここらへんのツーカーなやり取りが、彼女には益々腹立たしかった。

「……あれはお前にとっての何だ」

「貴女にとっての私です」

私の副官です。つまるところは、彼の言葉はそういう意味を含んでいたものであっただろう。

だが彼女からすればその景色は別なものとして見えるし、違う意味を含んでいるように見えた。

「……………死ね」

だが彼女は失念していた。

こういうことをあつさりを受け入れる奴であるということ。

「了解しました」

死を早々に受け入れ、首元に刃をあてがおうとした右腕を凍らせる。

反射で凍らせた箇所を覆う氷が一秒とかがらずに光に灼かれ、文字通り霧散したところを見ると、更にその焦りは深みを増した。

「前言撤回する。死ぬな」

「……………」

反射で帝具に頼ってしまった自分を戒めつつ、エスデスは右腕で以って刃をあてがう腕を掴む。

氷に対して見せた灼ける様な光はチラリとも顔を見せず、代わりに訝しむような疑念が顔を見せた。

自律防御。触れる物全てを灼き、弾き、本体への堅牢な護りとなる一形態。防御に全てのリソースを裂いているにもかかわらず、気が狂ったような攻撃性能も備えた万能の形態が、彼の帝具の通常駆動である。

無論、この鎧はそれに触れる人の身体をも灼く。だからこそ適合者が現れても即死し、身に纏うことすらできずに灰になっていった。

太陽の激情、というのか。苛烈で鮮烈な部分のみを体現した鎧は、今では陽の穏やかな恵みを体現している。

「……………私にとってのお前とは、何だ」

「右腕。或いは副官でしょう」

自律防御の反射の速さは、使い手に依存するらしい。即ち今の氷に對しての自律防御の反射の速さは、彼が如何に多く彼女と戦い、氷結させられてきたかを物語っていた。

しかしその一方で、如何に模擬戦が加熱しようと彼女の肉体には指一本触れていない忠実さをも物語る。

正に半身、というのか。一体化したのがわかるほどに鎧と主は似てきていた。

「ハク」

「はい」

「私はお前が好きだ。わかるな？」

なるほど、と。得心の入った顔をし、幽鬼のように血色の悪い顔が少し慚愧の念に沈む。

どうやら自分が誤解を懐かせるにふさわしい言動をしたことに気づいたらしい彼は少しの間だけ口を真一文字に結び、頭を下げた。

「私の中に貴女が私に抱くような感情を私が彼女に抱いた事実は確認されていない。誤解を懐かせて、すまないと思う」

「例えではなく、口で言え」

「了解しました。お嬢」

例えの悪さや曖昧さが誤解を生む。誤解を産まねば勘違いはされず、嫌われることも少なくなるだろう。

そう判断したエスデスの珍しくまともな忠告は、ハクの鎧をすり抜けて心まで突き刺さった。

「勘違いはさせない方がいいですからね」

「その通りだ」

お互いにひと息つき、目の前に出された茶を啜る。

この一動作を境として出発前の職務上の会話は終わり、互いに素が出始めていた。

「それにしても、最近大將軍派の巻き返しが著しい。今回の作戦にしても私達と三獣士とお前直属の二人とセリユードでナイトレイドを殲滅させる予定だったのが、これだ」

「……セリユー・ユビキタスに関しては、仕方のないところもあります」

何せ彼女は、ほんの一ヶ月前に所持する帝具『魔獣変化』ヘカトンケイルの奥の手・狂化を使用。ヘカトンケイルをオーバーヒートさせてしまっている。

ヘカトンケイルの奥の手は強力なものの、一度使用すると数ヶ月の間帝具自身が動けなくなる諸刃の剣。使わざるを得ない状況であっただろうが、こちらの大反攻への戦力が漸減されてしまった。

更には交通を結ぶ橋であり、戦場になる竜船を破壊されてはたまらないからという理由でエスデス自身の出馬が不可能になり、一般的には鎧の帝具で通っており破壊力に乏しいハク、直接的な攻撃能力を持たず自己強化しかこなせないニヤウ、白兵戦能力に秀でているだけでこれまた破壊力に乏しいダイダラ、地の利があるとはいえ火力不足が否めないリヴァ。生物型帝具一つで詰みかねないパーティーでナイトレイドに挑まねばならない。

戦力が分断されているとはいえ、たった一個の帝具で詰みかねないパーティーは、どうだろう。

「お前の面制圧能力はギリギリまで隠しておき、直前でバラして釣り針にしたが……案の定、大火力持ちを竜船に入れたくはないらしい」「ナイトレイドとの戦闘で壊されることを危惧するならば最初から竜船を戦場を選ばなければいいことを考えれば、自ずと見えてきます」

こちらが誘き寄せようとして敷設した罠を、逆利用された。で、そこを利用しようとした大將軍派——所謂清流派が大臣派——所謂濁流派の力を減らしに来たのだろうか。

大国の驕りというのは恐ろしい。大国は人を育てないというのも、正しいらしい。何せ足元まで火が迫ろうとしているのにそれに対しての危機感も持たずに、水を掛けようとする者を討とうとしているのだ。

最終的に火を消す者が居なくなりかねない現状を、全く理解していない。

「こちらの弱体化でしょう。ブドー言えども一人では流石に帝具使

八人を相手取るには荷が重い」

「だろうな。大臣が珍しく外国に対して謀略の網を巡らせることに意識を裂いたらこれだ」

ナイトレイドの密やかな警護の元に帝都入りを果たしたチョウリ元大臣の元、清流派は再集結を始めている。

シヨウイ・セイギら南方に派遣されてきた文官にも声が掛かっているらしいことが、他ならぬ本人たちから知らせられた。

「内乱を収める側にも、更に内部分裂が始まっています。厄介なことです」

「だが、だからこそ面白くもある。ブドーもその軍も、蹂躪するに足る相手だ」

この大將軍・ブドーを中心とする一派の暗躍には、オネストやコボレ兄弟ら濁流派に対する嫌悪と正義感もあるだろうが、第一に危険視されたのはエスデス軍の伸長であろう。

何せ、エスデス軍が動けば帝都警備隊も動くのだ。『魔神顕現』デモンズエクス、『玄天霊衣』クンダーラの二つの亜強の帝具と、三獣士の『水龍憑依』ブラックマリンら三つの帝具。帝都警備隊の『魔獣変化』ヘカトンケイル、ハク直属の私兵が持つ『変幻自在』ガイアファンデーシヨンら二つの帝具の、合計八個。始皇帝が遺した四十八の帝具の六分の一。各地から見つかっている物で、帝国の保有する物となれば更に限られてくるから、実質的に最強の戦闘力を持つ軍隊はエスデス軍であることに間違いはない。

二人の將軍、五人の私兵、一人の友軍。稼働帝具は戦闘タイプが六個、補佐型が二個とバランスも良く、動員兵数はエスデス軍が約十万、帝都警備隊が約一万。

一騎当千の強者が六人もいるのだから相対的に兵力は兵数よりも上がるし、軽い税・無役・福祉の充実によって徳を積んでいるから『世を糾す』と立ち上がったっても何ら不思議がない。そこに集う者も多いだろう。

「……お前の所為なんじゃないのか？」

「そうかもしれません」

確かに現状、彼の趣味とも言える善行がブーメランの如くエスデス軍に突き刺さっていた。

主に人材と名声的な面に。

「お前に何も言われなかったままに私が生きていたら人材など集めようとは思わん。三獣士で充分だし、封地を治めようとも、弱者共を労って強者にするなど思いもつかんだらうからな」

「……すみません」

「だかまあ、悪くはない。気にするな」

気落ちしたように座っているハクを抱き締め、顔を豊かな胸部に埋もれさせるエスデスは、中々に様になっている。

元来彼女は一人ケンカした末に割りと容赦のない舌鋒に突かれて凹みこそすれ、男にベタベタに甘えるような女ではない。寧ろ甘えさせる方である。

現に、いなす技術が達人の域に達しているハクでなければ甘えさせていた可能性の方が高いのだ。いなされてベクトルを真逆にされているだけで、本来は逆なのである。

「フフフフ……」

「ご満悦ですね」

顔の右側に柔らかい物を感じながら、常日頃と変わらぬ明哲な声がかぐもり気味に口から出た。

くぐもった理由は、言うまでもない。

「うん、何というか……頼られるのも悪くはない。いや、今までの行いを省みて『頼るのも悪くはなかった』と言うべきか」

「常日頃から頼っていますよ、私は」

するりと頭を抱擁する腕の中から抜け、ハクはゆらりと立ち上がった。

「お嬢」

不満げな顔をしていたエスデスに向けて一礼し、肩の装飾を光に揺らめかせながら滔々と述べる。

「行ってまいります」

「朝帰りは厳禁だぞ。早く帰ってこい」

雨が振りそうな天気の中、彼は戦場になるであろう大運河に停泊した竜船付近を遊弋する。

最初の激突が、不十分な準備の元に始まろうとしていた。

槍兵を突く 一

「……陽光を節約するのはいいけどさ、何で代わりばんこ？」

「私ばかりが楽をしていてもいかんだろう」

全長2500キロメートルに渡る大運河を滑るようになめらかに
はしる巨大な竜を船首に備えた豪華客船の上を、ハクとチエルシーは
遊弋している。

背中から伸びた燃える焰のように紅く揺らめいている蛇行した四
枚の装飾から翼の如き光が漏れ、触れる物を灼き尽くすような苛烈な
光の翼を生成していた。

背中には実際は鳥女でも何でもないので変装時は基本的に鳥に
なっていることが多いが為に公的な呼び名もそうなってしまうた、
チエルシー。

彼女からすれば能力が誤魔化されているという点で寧ろ歓迎でき
る渾名なのだが、その実用性の反面尻の軽いような印象を与えるよう
な気がすることも加味すれば、プラスマイナスゼロといったところだ
ろう。

ではなぜその負のイメージを背負ってもまだなお鳥になるのかと
言われれば、彼女が得意とする基本的に視覚に頼った情報収集をする
ならば人になる必要はなく、寧ろ周りを見ているも何らおかしくはな
い生物であることが求められるからだった。

人間とて周りを見ていてもおかしくはない生物だが、大仰な動作や
繰り返される動作は不審を買う。鳥に注目する人間は少ないが、他人
に注目をする人間は多いのである。

「と言うかさ。こんな距離離れてて見れるの？」

背中がすつごく暑いんだけど。寧ろ熱いんだけど。

最早主人に対する口の利き方でない投げやりさで問いを投げ、チエ
ルシーは二人羽織の現状への対応策を口にするでもなく不満だけを
言って押し黙った。

エスデスが見たら氷結からの即死コンボに繋がりがねない背中に
引っ付いているその姿は、彼らからすれば正当な理由によるものだ

言える。

詳しく言えば、まず彼はチエルシーとは違つて危険種にはなれないのだから巨大化もできない。つまり背に乗せられない。

即ち、抱きかかえるしかない。

有事に備え、両手が塞がらない方法で抱きかかえるべきだろう。

結果、こうなった。

「熱いか」

「それはまあ、いいよ。良くないけど。問題は視認できるかできないかでしょ?」

雲——というか薄い灰色の幕に遮られるように、下界の景色は薄れて見える。これではとてもではないが援護などは出来ないし、自身という戦力を適切な時節に投入することも困難だろう。

チエルシーは、そう考えていた。

「私は一応弓使いでもあり、狙撃もできる。目はいい方だ」

「それにしたつて、限度があるでしょうが……」

相変わらずどこか籠が外れた身体能力と天然な回答に頭を悩ませながらも、チエルシーは同僚の顔と実質的に同僚みたいな某警備隊長を思い出す。

天然。

DS。

殺し愛。

正義厨。

上司の上司を含み、周りにまともな奴がない、と。

『他人を殺すことで世が良くなる』と言う世紀末救世主めいた考えを嘗て本気で信じかけていた現・常識人は嘆息した。

「どうなってる?」

「少し前とは違つて甲板に人が一向に出てこようとせん。ニヤウの笛の音が隔々まで響き渡り、浸透したようだな」

何故見える。

そんなごくごく真つ当な突っ込みをするべく手を上げ、下ろす。ここで突っ込み入れても咎められることはあるまいが、直せる素行など

とは違い、天性と修練の賜物である身体能力に関してはもう仕方ないと割り切るしかなかった。

「交代だ」

「はいはい」

暫しの間だけ自由落下に身を任せた彼女は、スカートをさり気なく抑えながら懐から化粧用具を二つ出す。

箱ごと持ち歩かず、その時その場に必要なものだけを持ち歩く。

変装する為の化粧用品ならば本体の箱とは違って破壊されても替えが利き、収納機能及び収縮機能がついていないが故に持ち運びするにあたって嵩張ることこの上ない化粧箱の帝具・『変幻自在』ガイアファンデーションの、応用だった。

「見事」

「まーねー」

変化したのは、長大な体躯を持つ知性ある龍。即ち、オウムの如く人語を喋れる飛行生物。

最近の彼女のお気に入りには、危険種図鑑で見て以来ずっと肉眼で見てコピーしなかったこの生物である。

「竜船という退路のない場所で戦う以上、お前の帝具は不可欠だ。悪いが、頼むぞ」

「はいはい」

返事は気楽に、視線は真面目に。態度の割りにはマメな性格をした彼女は、いち早く眼下の戦闘に気がついた。

「敵は——金髪、紫髪、茶髪、インクルシオと牛角、ピンキー、それにナジエンダ元將軍。不利だね」

「退くことを前提に戦うことは変わらん」

ナイトレイドの戦力は、今が絶頂期。故に、削る。削った後に決戦がある。

「アカメは居ないよ。帝具を見るに、金髪が不明だった帝具、紫髪が『万物両断』エクスタス、黒髪リーゼントが『悪鬼纏身』インクルシオ、茶髪が『超力噴出』バルザック、ピンキーが『浪漫砲台』パンプキン。牛角はナジエンダ元將軍の帝具の生物型だとすれば、クローステール

も居ないね」

「お前も大概だろう」

「この危険種が大概なの。私はまあ、あんま良くないよ。目」

時々縁が縞々の眼鏡を掛けているところを見るに、その発言は嘘ではない。原因は仕事のしすぎとか、目の使い過ぎとか。つまりは、ごく一般的な理由であった。

眼下での激突が始まりそうになった、このような日常の会話は終わりを告げる。程よく弛緩し、程よく緊張することが、この二人は自然と出来ていた。

「チェルシー。遊弋可能時間は後どれくらいだ？」

「うーん……三十分そこいらかな。正直に言えば、二十分以内に決着つけて欲しいなと思ってる」

身体的な体力と、帝具を使う為に使用される別な体力。決して容量が多い方ではないということ、彼女自身が一番よく知っている。

エスデスという桁違いの持久力と無尽蔵の容量を持つ女傑を間近で見ているからこそ、彼女はいい意味で自分の限界を的確に悟っていた。

「わかった」

そう頷くなり、ハクは頭から一直線に竜船目掛けて墜落する。

下手に加速するより、減速するより、落下に身を任せた方が慣れも相まって上手く行くだろうという計算の元の行動だった。

呆氣にとられたような、半ば諦めたような雰囲気を漂わせるチェルシーを遥か上空に残し、彼の身体はほんの数秒で竜船へと墜落する。

果たしてそれは、上手く行った。

「来たな槍兵」

「ハンサ——ブライト。それはお前にも冠されるべき称号だろう」

『悪鬼纏身』インクルシオを呼び出す為の剣を手に持ち、傍らには嘗て引き分けた牛角の戦士を相棒として置き。

再び、槍兵達は向かい合う。

「ダイダラは『万物両断』エクスタス、ニヤウは『超力噴出』バルザック、リヴァは金髪。なるほど、一対一を貫くか」

無類の破壊力を誇る『二丁大斧』ベルヴアークには絶大な切断能力を誇る『万物両断』エクスタス。

『水龍憑依』ブラックマリんに金髪をぶつけた意図はわからないが、『超力噴出』バルザックをニャウに当てたのはその高い白兵戦能力故だろう。

彼は元々支援系なのだから、白兵戦は得意ではない。

「おいおい、手配書には名前も書いてあんだろ。言ってやれよ、そんなに。帝具が戦ってんじゃないんだぜ？」

「……そうだな。今のはこちらの過失だった」

手に持つ帝具が、一番の脅威。それを明確に認識する為の言は、ともすれば敵に対する侮りと映りかねない。

鎧を纏わず、翼代わりの背中の装飾だけの槍兵と、同じく鎧を纏わず、簡易のプロテクターと剣を手に持った槍兵と、遠く東方の服を思わせる服装をした、牛角の槍兵。

二人の槍兵が帝具を起動させ、生物帝具が得物を構えた。

「インクルシオオオオオオオ！」

白い怪物の如き巨大な体躯を持つ、龍の危険種・タイラントの肉体がブライトの背後に現れ、堅固な鎧が筋肉質な身体を包む。

形成された鎧は、嘗て見た白い鎧とは明らかに変化を見せていた。

「頼むぞ、クンダーラ」

全身に鎧に刻まれた太陽を思わせるの紋様が浮かび、その体内に沈めていた鎧がその紋様に沿って浮き上がる。

鎧が身体の一部となっていることが視覚的にも聴覚的にもわかるような非常に生物的な印象を持たせる鎧の浮き上がり方は、正に身体と鎧が癒着するように一体化していることを周囲へ如実に伝えていた。

ヒトの槍兵はお互いに帝具の名を呼び、ヒトならざる槍兵は静かに得物を構える。

二対一。防御力と防御力、再生力と再生力。二対一で漸く互角近くにまで持ってこれた戦いが、始まった。

槍兵を突く 二

ナイトレイドでも一二を争う戦力である二人を最高戦力であるハクに配し、押し込む。

その間に三獣士を他のメンバーに討たせ、ハクを倒せぬまでも軍の運営にその思考リソースを省かせることによつてエスデス軍を鈍化させるというのが、ナイトレイドが革命軍から受け取った司令であった。

革命軍も、無能ではない。必死に活路を見出すべく奮励努力し、大將軍派と大臣派——清流派と濁流派との抗争を激化させ、オネストの登場以来常に劣勢に立たされてきた清流派の中核となり得る元大臣・チョウリを全力で護衛。これを帝都に安全に送り届け、一気に抗争を五分にまで持ち込ませたのである。

チョウリの政治手腕を得た清流派は濁流派が画策した帝具持ち八人を集めてナイトレイドを一挙に覆滅させる計画を全力で阻害し、これ以上の濁流派の勢力拡大を制限。戦力を削ったところを革命軍に情報を流し、濁流派の武官を潰しにかかったのだ。

革命軍からすれば革命実行時最大の脅威を排除でき、清流派からすれば濁流派の武官勢力を漸滅できる。両者の利害は一致していた。

故に、ナイトレイドがここで殆ど全力を以つて潰しにかかれたのである。

「守ってばかりでは勝てんで、ナイトレイド」

一つ柏手を打つ間に、七十八発。

スサノオが経験し、皆の前で忠告した明らかに誇張や法螺の類であろうと一笑されてもおかしくはない連撃が全く虚偽ではないと、ブライトはその身を以つて味わっていた。

小回りが利かず、複数を相手するには到底向かない大槍を使いながら、二人の最高戦力と相對するハクは未だその身に傷ひとつつけられていない、全くの無傷。

攻撃は鎧で防ぎ、槍は攻撃と敵の思考の誘導に使う。

鎧も、無敵ではないのだ。肉体と癒着しているとはいえ、甲に覆わ

れていない箇所を狙えば肉体に傷はつけることはできる。

だが、狙わせない。優れた敏捷性と巧みとしか言い表せない体捌き、更には攻撃の誘導によつて、彼はこの激しい打ち合いを支配していた。

「オオッー！」

スサノオには力で負け、ブライトには僅かに技で負け、されど速さは誰にも負けず。

その評価が間違いでないことを示すようにスサノオの一撃を軽々躲し、更にはブライトの一撃を手甲で受け、この一瞬の攻防においては未だ振るわれていない槍がブライトの右肩を貫かんと繰り出された瞬間。

「そーー！」

鋭い射撃音と、鈍い音。腹を覆う鎧に消し飛ばされながら、パンプキンの射撃が攻撃動作を一瞬遅らせた。

ダメージはない。パンプキンから放たれた光の弾は黄金の鎧を貫くには至らず、表面の薄い光の膜を貫通したのみで止まる。

が、光の弾に込められたベクトル——当てた時に受ける衝撃が殺され切るわけではない。

身体の中心部分、謂わば幹である胴体の中央部が、腹。そこに移動する為にかけてたものと逆のベクトルをぶつけられれば、勢いを殺すまではないか？とも減衰させることができることは明らかだった。

「ナイス援護だ、マイナー！」

「当たり前でしょ！あたしは射撃の天才なのよ！」

自らを鼓舞するかのよう、或いは共に戦っている味方を盛り上げるように、ナイトレイドは積極的に声を出す。

それは連携に便利だからという合理的な理由もあるが、案外彼らの熱い気性によるものなのかも知れなかった。

三獣士は基本的に喋らないし、連携というほど協調性に優れているわけでもない。

だが、個々の苦戦具合を見るにその差が明確に現れていると言えるだろう。

彼らの連携は相互に寄るものではなく、一方的な——即ち、苦境になった誰かをその場で手の空いていた誰かが援護するというものであり、援護があることを前提として戦おうとしない。つまり、連携に於いては明らかにナイトレイドに劣っていた。

「……なるほど、他を始末するまで時間を稼ぐ気しかないようだな」

「これも立派な戦術だ。卑怯だなんて言ってくれるなよ？」

「ああ、言わん。それは至極真つ当な判断だ。

しかし——」

一段、纏う空気が重くなった。

まだまだ底が知れない力量を感じ、流れる冷や汗が頬を伝う。

奴はまだ、槍と鎧しか使っていない。光を攻撃に使っていないし、武器に焰を纏わせてもいない。その身、その技量だけで帝具使い三人を相手に受け身になることなく攻め続けていたのだ。

「——こちらものうのと見ているだけが能ではないのでな。その守り、貫かせてもらおう」

「だろうな……——来いよ」

「やってみろ」

援護射撃が放たれ、相対する二人が啖呵を切る。

漏れ出す光に注視しながら、三人の槍兵が織りなす絶技の狂宴が再開された。

そうして再び幕を開けた最高戦力同士の戦いが硬直状態にある一方で、三獣士たちもまた戦っている。

ダイダラは『二丁大斧』ベルヴァーグを巧みに操り、『万物両断』の名の通り全てを斬り裂く鋏型帝具・エクスタスの唯一の斬れない部分である平の部分に斧を打ち付けて体勢を崩させ、隙ができれば片方を投擲。

投擲した方の斧に敵の注意を向けつつ自分の手元にある方の斧で投擲され、旋回する片方が両断されないように牽制し、帝具の相性の悪さを覆しながらも互角の戦いを演じ。

ニヤウは未だ『超力噴出』バルザックを使いこなせていない茶髪の少年相手に速さで圧し、或いは躲すことでこれまた硬直状態に持ち込

み。

リヴァは常日頃から指摘されてきたペース配分に気を使い、最低限の量の水を巧みに操作。本来はその癖である大技の連発する間にある隙を狙いに来たであろう肉弾戦特化の金髪の女性をいなし、痛打を与えながら長期戦の構えをとっていた。

人数から見れば、圧倒的に不利である。帝具を使用する為の体力の総量からしても、圧倒的に不利なことは変わらない。

だが、その危うい均衡を保ち続けているところに三獣士の意地と底力があつた。

ここに均衡を天秤ごと破壊するエスデスがいれば、間違いなく勝っていたであろうと思わせる見事な釣り合いを見せる戦い。

この『硬直』という一言で表される戦いから『派手』という印象へと変えたのはやはりと言うか、最高戦力同士が火花を散らす、二対一の戦闘においてである。

「ブラート、右だ」

右手の光線、左手の爆炎。

槍を扱いながら左右交互に打ち分けてるハクの器用としか言えない戦い方に、彼らは圧されつつあつた。

「右がピンポイント狙撃、左が大火力、拳句の果てには無謬の連撃かよ……」

「左右打ち分けによって役割を分け、発動までのラグを極限まで削っているのだろうか」

槍から逃れ、光線を躲し。一箇所に集まって考察と対策を練ろうとした先に爆炎が翔ぶ。

流石に自重しているのか、甲板を焼き尽くすほどではない。が、ポツポツ足場が脆くなり始める程度には火力があつた。

「いけっ！」

「無駄だ」

大槍でブラートを庇いに立ちはだかったスサノオの左肩から先を灰へと変え、その隙を穿ちに来た光弾をピンポイント狙撃によって相殺し、後ろに回って刺突を放ったブラートの愛槍・ノインターターが

背中に触れる前に石突を以ってインクルシオを突き飛ばす。

マインが光に視界を奪われ、ブライトが鳩尾に喰らった衝撃で目が眩み、スサノオの意識が自分の左肩から先に集中した、一瞬。

その一瞬が終わり、彼は無傷で立っていた。

本当に、本当に傷がつかない。攻撃が生身の箇所当たらない。

尽きぬ闘志を持っていても、無傷の男に対する本能的な怯みまでは消せなかった。

「……どうした、降参か」

再生を終えたスサノオも、インクルシオを纏ったブライトも、パンピンを構えたマインも。

警戒と怯みがないまぜになって一向に打ちかかってこないことを不審に思ったのか、三人が構成する三角のラインの中央に立ち彼は静かに意志を問う。

これで終わりなのか、と。

「そんなわけ無いでしょうが！」

勝ち気なマインが侮蔑とも取れる本心からの疑念に反応し、大火力の一撃をパンピンから撃ち出した。

次いでブライトが上段から、スサノオが下段から打ち掛かることで、中段のパンピンと組み合わせ、咄嗟の判断による上中下三方向からの攻撃を束ねた『一撃』が繰り出される。

人の形をしたものならば確実にどれかは喰らうであろう必殺の一撃に相對して、その男は笑った。

おかしい、と。彼との戦闘経験があるブライトの脳内に疑念が過ぎる。

あの男は、あんな軽い笑いを浮かべるような奴だったか。どんな苦境に際しても涼し気な風貌は崩さなかったが、ああいう風には笑わなかった。

おかしい。

頭が僅かな疑念を憶えて停滞したのとは裏腹に、一度解き放たれた肉体は一直線に獲物へと向かう。

そして。

「バーカ」

悪戯が成功した悪戯鬼のような含み笑いとはんっ、という破裂音。軽い音と白い煙がハクの居た場所に立ち昇り、彼らの連携攻撃は悉く空を切った。

ブライトも、マインも、スサノオも。ほんの一瞬ではあるが、思考が止まる。

今までであった姿が、消えた。そんな異常現象が生死が賭かった極限状態で発生して、淡々と思考を巡らすことができるほど、人は万能ではない。

故に、煙からごくごく仔猫が猫のくせに脱兎の如くその場から走り去ったことにも、気づかなかった。

そして。

「頭上注意だ、悪く思え」

太陽を背に構えた槍の切っ先が向く竜船の船首部分に誘導された三人に向けて、空から焰塊が降り注いだ。

槍兵を突く 三

灼く。それだけに特化した焰の塊は、エスデスの氷塊の如く竜船の船首部分を質量で押し潰し、灼く。

だが、その灼かれて崩落する船首の上に三人の姿は無かった。

スサノオがそれにいち早く反応し、ブライトとマインを引張って跳躍していたのである。

無論、その動作は天から見下ろすハクの視界に入っていた。

「避けたか」

生物型、鎧型、銃型。それら三個の帝具に相對する彼が使う帝具は、腕輪。

——クンダラ。その名の通り腕輪の帝具。超級危険種タイラントが突然変異し、その新たに生やした翼が一度羽撃けば雨は枯れ、土地は罅割れると言われるほどの高熱を纏った上に再生能力を得るという超級危険種の歴代の怪物たちの中でもトップクラスにヤバイ個体の生き血を賢者の石に注ぎ込んで結晶とし、背骨を溶かして加工することで腕輪とした帝具である。

その素材となった超級危険種の実力の程といえば、一つ羽撃けば日は隠れ、土地は氷に閉ざされると謳われるほどの冷気を纏った超級危険種——デモンズエキスの素材——とのいつもの決闘の最中に雷雲から現れた龍と北方異民族の土地を一線を境として焰と氷と紫電が踊り狂うと言う地獄に変貌させるほどの三つ巴の死闘——俗に言う頂上決戦——を繰り広げた拳句、横入りしてきたパンプキンとエクスタスに重傷を負わされ、三匹揃って帝都目掛けて一直線に侵攻。

他の四十五帝具総動員でやっと雷龍を斃し、斃した雷龍を使った帝具でやっと死んだと言うほどの化物であった。

つまり、帝具の中でもトップクラスの力を持つ危険種を素材にしていると言える。

「チエルシー、来たのか」

パタパタと翼を懸命に動かしながら空を翔け、チエルシー変身体で

ある雀は彼の肩にやってきた。

基本的に福籠に梟になることが多い彼女が雀と言うのは非常に珍しい。が、状況によつてはないことはなかった。

「……手紙か」

脚に括りつけられた手紙を慎重に取り、抓むようにして広げる。

『避難がしゅーりよー』

空舟は解除してよし。

奥の手を使わざるを得ない』

手紙に記された三行が、チエルシーの意思であつた。

「……使うな。危険だ」

「えー……ケチー」

喋れるにもかかわらずわざわざ手紙を書いて脚に括りつけてから変身するという手間をかけ、その茶目つ気をいかにくなく發揮したチエルシーは、不満と嬉しさがなまぜになつたような声色で拗ね、翔び立つ。

無論その間にも、断続的に焰塊は降り注いでいる。それは嘗て帝具の素材となつたタイラント・亜種が現出させた地獄の風景。その三分の一にして、劣化だつた。

「ハンサ——ブラート、スサノオ、行くぞ」

「その前にこの惨状を何とかしろ！」

既に船首を潰されたか燃やされたかわからない方法で失い、沈みかけの竜船である。これ以上の焰塊の雨には耐え切れそうもなかった。だがその正当なツツコミも虚しく焰塊の飛来音に呑み込まれ、消える。

「おい、お前！」

「何だ、少年」

目に正義感を、声色に憤怒を。

総合的に表すならば義憤ともとれる感情を露わにした少年に向け、ハクは幽鬼のようなと形容される血の通っていない色をした白面と、冷徹さを感じさせる静かな声を以つて答えた。

その伶俐な刃のような雰囲気には圧されながらも、ニヤウを討つて三

人の援護に向かおうとしていた少年は、更に詰問する。

「船ごと沈める気なのかよ！」

「必要ならば」

彼が任務を受諾するにあたって命令されたことは二つだった。

一つは、敵勢力の漸滅。

二つ目は、自身の生還。

如何に罵られようと、この二つを遂行する為ならば彼は汚名を着るのも辞さない。最優先となる目的を主が定めたならば、その目的を貫き穿つのが槍たる己の役割であると、彼は端的に理解している。

だからこそ、怜悧に見えた。冷血に見えた。彼が巻き起こす大体の誤解の元は一言の足りなさだが、次点はこれであろう。

今回もまた、一言足りていないのだが。

「人が乗ってんだぞ！何百、何千ものだ！」

非常な正論であった。何千とまではいかないが、確実にこの船が出港時に載せていた人の命は五百は越える。

だが、それは通じない。

「いや、それは違う。この場の争いの種を作り出したのはお前たちだ。国が定める法に違反している賊である貴君らが大人しく縄についていれば竜船が沈むこともなかっただろう。」

まあ、そもそも大臣が苛政を敷くのが悪いのだがな」

そもそも論で行くならば、この場合は大臣が全て悪いということになるだろう。何故ナイトレイドがこの場に來たかと言われればそれは清流派の文官を守るためだし、何故清流派の文官を狙うのかと言われればそれは、オネスト大臣が邪魔に思うからであった。

だが、その『邪魔だから殺す』という論理は元が原始的な感情から発せられたとはいえ、ハクを動かす為の筋道が立っている。

オネストが、立てた。その舟に居る文官の過去の経歴を洗い流して公にし、些細なことから罪を抽出したのである。

彼に命が下って出発する、ほんの僅か前である今朝に。

だが、そんなことは問題ではない。問題はエスデスが命を下したことにある。

「じゃあ何で——」

「お嬢が我が主だからな。貴君らの持つ一般的な価値観で悪だと言われようが、裏切る訳にはいかん」

少し目を瞑り、苦労人の風格を滲ませながらハクは首を一つ縦に振る。

それだけで非常な同情を得られるほどの悪い顔色であり、目の下に隈でもできていたら即病院に担ぎ込まれているであろう病弱さを彼は自然と身に染ませていた。

「我が主は理性と理屈では動かん。己がしたいからやるのだ。したいの思ったからやる。それだけだ。」

獣の理屈、強者の傲慢でしかなく、理論とも言えない理論だ。どうしようもなく、己が己であることに固執する。幾度試みようかと他者からでは曲げられん頑固者だし、何より自分で日常生活を営もうという気がない。それもそれでありだが、一般的な規範からは外れているし、これを以って我が主は人間失格だと断言できる」

が、それでもいい。個人の感性や趣味に感想は言っても口には出さない。

自らの心情を口にし、されどその口調に厭味つたらしい陰鬱さは無く、寧ろカラリとした風韻がある。

だがそれでもなお、その感想に度々ダメージを喰らっている被害者に対して手痛い酷評とも取れる言い方で更なる死体蹴りを敢行しながらハクは静かに頷いた。

趣味は拷問。特に引き出したい情報がなくとも暇潰しに拷問。狩りが終わったあとにやはり拷問。拷問が終わったら健啖家らしく大量の飯を食い、他人を抱き枕にして爆睡。一生の九割五分をやりたいたいことしか費やしていない。

最近は拷問好きも収まりを見せているが、いつ再発するかはわからないと断言できるだろう。

「……でもさ、ほら。それほど酷くは」

「実体験だ。間違いはない」

思わず敵もフォローするほどの評判倒れな内情をつらつらと聞か

され、タツミは鋭利に尖った怒りを丸めてフォローに入った。

何というか、無感情の如き平坦さでひたすら感想を述べるその姿は、主と上手く行っていないような印象を与えているのも宜なるかな、というところである。

『はいはい、ナイトレイドの皆さん』

驚異的な強運さで直撃どころか掠りもしなかった放送施設に引つ込んだチエルシーが適当に選んで変装したであろう誰かの姿で放送を開始し、聴き慣れた調子の聴き慣れない声が竜船を包んだ。

『案の定ハクさんが一言足りていないので補足しますが、竜船に御乗船なされた皆さんの避難は済んでいますので御安心を。あと——』

何かを言い掛けたその瞬間に放送施設のラツパ型の拡音素材に金髪の人らしきグラマラスな女性が乗り、それを追跡したであろう水竜が派手に拡音素材を水圧で押し折る。

放送施設に直撃しなかっただけマシだが、良い所で媒体を壊されたチエルシーが苛ついて放送機材を放り投げたことだけは確かだった。

「……それとなく、言っただけだったのだがな」

「全く伝わらないぞ」

困惑の色を強めた仮面・鎧・銃士・生物帝具の四人を代表し、生物帝具が否定の意を伝える。

竜船が、沈むことはなかっただろう。

そう言ったから人は沈まないということは気づくであろうという画策は露と消えた。と言うかこれで気づくのはエスデスくらいなものであろう。

あと、ギリギリチエルシーが気づくか気づかないか。それくらいだった。

「ともあれ、ナイトレイド。今までは操れる光の半分を舟に回していたからろくに武装も使えなかった。が、最早手加減はせん」

炎熱の槍と、黄金の鎧に、光の翼。死ぬべきではない等価の命を送り届けた舟が消え去り、光の粒子となって翼に集う。

「改めて名乗ろう。エスデス様の従僕、パルタス族のハクだ」

黄金に覆われた脚が曲がり、爪先に力が籠った。

ふわりと舞った埃だけを残滓に、ブラートの纏うインクルシオ目掛けて大槍が振るわれ、肩の装甲を舐め溶かす。

「避けたか」

「……本気出してなったのかよ」

「全力は尽くした。今までの私の全力が、あれだ。今からの私の全力が、これだ」

熱に舐め溶かされた装甲を周りの装甲が庇うように延び、穴を塞いだ。

まだ素材となった危険種が生きているからこそ、帝具の自動修復。

「スーさん！」

背後で、力が膨れる。

潜在能力を引き出す帝具、『超力噴出』バルザック。その使い幅は極めて大きい。

スサノオのような奥の手によって本来の力を引き出せる帝具に使用えば、そのデメリットを打ち消すような形でその必要とされたエネルギーを補填し、奥の手を発動することができるのである。

無論、これは反訴だ。故に奥の手ほどの威力は出せない。

しかし、主の生命力の三分の一を吸い取ることではか真の力を発揮できないスサノオにとっては、それでも充分だった。

「——天叢雲剣！」

遙か東方の国の、帝具と比肩する三つの武器。俗に神器と謳われた三種の内の一つの名を冠す剣が、腰から上下に両断すべく振るわれた。

絶対的な防御には、絶対的な攻撃を。

「やるな」

だが、私には届かん。

言外にそう言い捨てるように、剣は粉々に砕かれ、灰となって土に還る。

槍に纏わせた光炎による盾と、盾で勢いを殺してからの一薙ぎの通常攻撃。

「いい斬撃だ。惜しみない賛辞を贈りたい」

「……有り難く受け取ろう」

嫌味の一切ない贅辞を冷や汗と共に受け取り、スサノオは灰となつた柄だけの剣を見つめる。

空は、曇り始めていた。

槍兵を突く 四

炎上。

開戦した当初はあったであろう竜船への配慮をかなぐり捨てた打ち合いが始まり、ナイトレイド側にもかなりの疲弊が見えはじめた。

距離を詰めれば槍で圧され、唯一鎧を通る攻撃である『万物両断』エクスタスには遠距離からの光線や爆炎で距離を取られ、的確に敵前衛の力を削る。

しかし、ダイダラを倒して合流したシエーレを矛に、優れた自動回復能力を持つスサノオと堅牢な鎧を身に纏うブライトを盾に、ナイトレイドは果敢に攻めていた。

「万物両断……か。厄介な物だな」

思わず言ったと言うような言い方で、ハクの口から感想がこぼれる。何というか、帝具の相性が良くないのだ。

殆ど完全な耐性と防御力を誇る『玄天霊衣』クンダーラだが、やはりと言うか、弱点はある。

というよりは始皇帝によって作られたといった方が正しいかもしれない。

まず、第一に。鎧の強度が落ちている。本来はエクスタスでも切断による破壊が困難だったのを攻撃にリソースを裂くことで劣化させ、全身を覆うような鎧の一部を引剥がして露出部分を作った。

つまり、『攻撃性能は余熱のみ、ただし絶対的な防御性能と内部からの毒のたぐいを灼き尽くす耐性』が『攻撃性能は光と炎、プラス極めて破壊が困難だけでしょうと思えばできなくもない防御性能と呪毒以外の毒耐性』になったのである。

それはピーキーな性能を丸くし、バランスをよくしたとも言えだが、弱体化していることは間違いない。何せ呪毒を体内ごと灼き尽くした毒耐性とエクスタスを弾き返した防御性能を棄てているのだ。

始皇帝は明らかにその帝具が敵になった時の対策としての弱点を作りたいたいが為に改造したのだろう。

因みにデモンズエキスにはそのような弱体化は施されていない。

あれはただの純粹な生き血である。

つまり、操作できる光の全てを呼び戻しても嘗ての鎧には届かない。

そもそも彼は鎧があまり好きではない。主の敵を討つのは守つてどうするのか、という心情もあった。

故に、呼び戻した光は専ら攻撃性能の強化に割り振られることになる。

その防衛を顧みない超人的な勇敢さと殆ど無敵の耐性、自動回復の優秀さがこの帝具と使い手とをこれ以上ないほど噛み合わせていた。

帝具自身は無敵でも、使い手は無敵ではない。首は露出しているから、ある程度の腕と痛みに耐えうる根性とがなければやすやすと攻略されてしまうだろう。

(どうするか)

三獣士とナイトレイドとの地力の差。数の差。それは長期戦になればなるほど浮き彫りになった。

こちらは『万物両断』エクスタス、『浪漫砲台』パンプキン、『悪鬼纏身』インクルシオ、『電光石火』スサノオ、『超力噴出』バルザックを相手取っている訳だが、こうも連携と防御を最重視されてしまえば迂闊に踏み込めば手痛い反撃を喰らう。

(……友軍がないのが一番の難点だな)

槍は一本、腕は二本。同時に対処できるのは二人か三人。致命傷になり得る攻撃を受ける役割を致命傷にならない盾役で受けてくるから一向に敵が減らない。

腕があと一本あれば何とかかなりそうなものだが、再生とも表現できる程の回復力を持っていても腕は生えてこないのだ。

インクルシオ、スサノオ、バルザックの三人が前衛、後方支援がパンプキン、必殺の匕首としてエクスタス。未だに無傷なのがおかしいほどの重厚な布陣である。

「天叢雲劍——！」

左方向から一閃が入り、背後には透化したインクルシオ。正面からはバルザック。右からはパンプキンの狙撃が首元目掛けて迫り、エク

スタスの姿が視界から消えた。

天叢雲剣の、その威容に目が惹かれる。その一瞬で死角に消え、それを誤魔化すべく透化しながらもわざと気配を滲ませて背後から。退路を塞ぐために正面と右から攻め、退路を限定。

「……不利、か」

一撃を喰らうことを覚悟する。

向かうは右。狙撃手を消すことを優先することこそが、多対一での定石だ。

籠手部分でバルザックを付けたタツミの斬撃を、石突による牽制でインクルシオを纏ったブライトを、天叢雲剣を屈んで躲す。

『浪漫砲台』パンプキンは、ピンチになるほど火力が増すという厄介な帝具。だが、この多数で一を囲んでいる状況はとてでもないがピンチであるとは言えない。

寧ろ、危機の渦中にあるのはハクの方だった。

(雨か)

鎧の輝きが曇り、傍目に見ても激しい劣化が見て取れる。

(機だな)

最低限の勝利を手繰り寄せる為に狙撃手を狙うと言う作戦を放棄し、ハクはエクスタスの刃の平の部分を蹴り上げて件の放送施設を背にするように立った。

「ヤバいんじゃない?」

雨を受ける度に黄金が曇り、味気ない土気色へと変色する。水苔とかではなく、純粹に効力が低下してきているのだ。

これが始皇帝の対策の一つであることは言うまでもない。

そして危険が間近にまで迫った放送施設から翔び立った一話の梟がチエルシーであることもまた、言うまでもない。

「その癖お前は逃げないのか?」

「いやまあ、逃げたいけどさ。ここで見捨てたら………ほら、目覚めが悪いし?」

いつもと変わらぬ調子に、いつもと変わらぬ変装対象。軽口の裏にある確かな忠誠心と殉死の精神があることを一瞥したのみで悟り、ハ

クは距離を取ったまま動かないナイトレイドの方を真っ直ぐに見ながら、命を下した。

「リヴァを回収して帝都へ帰還しろ」

「はいはい、と」

含みのある笑みを浮かべたチエルシーは天へと舞い上がり、黒い雲間に姿を隠す。

後は、彼が時間稼ぎをするのみだった。

「……さて、ナイトレイド。今の私に鎧は無いぞ」

土気色の鎧が肉体に染みるように消えていき、黄金の鎧無き身体が露わになる。

黒い革鎧が包むのは、肉体の一部が削られたのかと思われるほどの瘦身矮躯。少なくとも一般人から見れば、この不健康・貧弱・瘦身矮躯の三拍子揃った男を見て強者だとは思わないだろう。

「日光を原動力としているのは、間違いない情報だったようだな」

「それは正しい。どこからの情報かは知らないが、素晴らしい情報屋を持っているものだ」

槍を構え、戦いを再開せんとしたその瞬間。

空が割れ、明らかな強さを纏う長大な巨躯が姿を現した。

「リヴァさーん、撤退」

「私より向こうを優先すべきでは——」

至極真つ当な反論を弁駁する時間すら無駄だとばかりに無視し、龍尾の一閃で獣人らしきナイトレイドの一員を弾き飛ばし、鉤爪で両肩を掴んで飛翔する。

咄嗟に反応したブライトとスサノオの反応速度をゆうに越える速度でハクが動き、わざわざ広げた距離を詰めた。

「甘いな」

完全に虚を突かれた彼らに鎧を失ってもなお衰えぬ槍撃が繰り出され、まるで振り出しに戻したかのように近接戦闘の雄である二人が仲間の元へと弾き飛ばされる。

その両者の動きに始まった時のキレはなく、ブライトの帝具も使用限界を向かえつつあることが見て取れた。

「……そちらも消耗しているようだな」

「お前ほどではないがな」

そう勝ち気に返すナジエンダにも、かなりの負荷がかかっている。これまで味方の数々の危機を救ってきたマインのパンプキンも撃てる残数が片手で数えられるようになり、スサノオの再生能力も衰え、後方支援組のナジエンダとマインを除けば皆が皆満身創痍。

槍に身を刻まれ、炎に焼かれ、光に灼かれ。全力で戦える者など一人も居ない。

対する槍兵は帝具の使用権を失ったものの無傷であり、その技の冴えに曇りはない。彼が雨によつて帝具を失っていないければ、誰もが絶望に目を染めていたであろうこの状況で、彼らの身体は高揚に満ちていた。

—— エスデスの右腕をもげば、革命軍数万人。いや、組まれた時の脅威と暴威を加味すれば、十数万の人命が助かる。

その確信が、彼らの希望となっていた。

「私は退いても構わない。戦つても構わない。ナイトレイド、貴君らの判断に委ねよう。」

どうする?..」

「……………愚問だな」

—— 無論、お前を殺す。

—— やってみろ。

焰塊に遮られ、再び距離を取ること遮られ。

四度目になる激突が、始まった。

「いくぜツ、ハクー」

「来い、ブラート」

ノインテーターと、無銘。

白と黒、二色の槍が火花を散らし、他のメンバーが散開する。

ここで初めて、ナイトレイドは防御を捨てた。攻撃に徹し、包み込むように押し潰さんと一大攻勢を掛けたのである。

嵐の如き攻勢は、雨という幕の内で一時間にも及んだ。

陽は隠れ、沈む。

完全に不利な状況下で、ハクはまだなお五分五分の均衡を崩さずに戦っていた。

「本当に、人間かよ……ッ！」

少年タツミが仮面の内から漏らした声こそが、ナイトレイドの誰もが心に秘めた感情だっただろう。

エクスタスに胸を貫かれ、ノインターターに腹を穿たれ、天叢雲剣に肩から袈裟がけに斬られ、パンプキンに左腕を焦がされ、眉一つ動かさない強靱な意志と戦闘続行への精神力。

「いい守りだ」

右腕一本で手繰る大槍は、疲弊と驚愕に鈍ったブラートの防御を打ち砕き、インクルシオを強制解除に追い込み、余勢を駆るような槍捌きでスサノオを腰から上下に両断。

エクスタスを躲し、パンプキンを焦げた左腕で受け、タツミの剣を槍で弾く。戦闘続行が不可能となる傷を負わせる一撃を的確に見極めて防ぎ、ハクは敵戦力を削っていた。

「タツミ、レオーネ、合わせてください！」

「了解！」

「わかった！」

再生中のスサノオに代わってシエーレが前衛となり、真っ先に切り込む。

エクスタスは、鋏型の帝具。その最大にして最速の攻撃は、刃の開閉である。

だが、この満身創痍の男はそれすらも避けた。

そして反撃の一撃を迫りくる天敵に向かって放とうとし、止まる。

「私も相当しぶといけど……あんたには負けるよ……！」

槍を小脇に抱え、歯を食いしばりながら金髪の獣人・レオーネが攻撃動作を遅らせる。

その遅れた、一拍の間。

「エクスタス！」

首を伐採する直前で虚しく空を切ったエクスタスが、突如煌々と光

り輝いた。

敵の動作を逃すまいと見開いた目に光が突き刺さり、不死身の槍兵の視界を奪う。

奥の手・金属発光。つまるところは盲まし。他の派手な奥の手と比べて地味だ地味だと言われるこの奥の手は、この期に及んでは最良のものだった。

視界に頼らずとも、戦闘はできる。

だが、咄嗟に他の五感に切り替えるには如何な達人でも僅かの間が必要不可欠だった。

「終わりだ！」

タツミ。そう呼ばれた少年の剣が、硬直した槍兵の胸に突き刺さる。

人体の急所を穿った感触が刃から伝わり、思わずタツミは顔を顰めた。

圧倒的なまでの実力を持つこの帝国の英雄を、殺した。そんな慚愧とも達成感とも言えない感覚が身体を満たす。

「やつ……た？」

後方からマインの声がし、タツミは静かに剣を胸から引き抜く。

敵は、立ったまま死んでいた。

「……………よくやったな、タツミ」

ブラートの寂寥感が滲む声が、ナイトレイドにとっての終戦の号だった。

しかし。

「油断をするな、首を刎ねろ」

「ボス、そこまでしなくても——」

ナジエンダは、知っている。彼がエスデスの命令の忠実な履行者であるということ。

彼が死ぬと言われたことを。

そして何より、バン族との戦いで部下を庇って三度の瀕死の重傷を負いながらも涼しい顔で最前線に身をおいて戦い抜いた不屈の勇者であるということ。

「……わかったよ、ボス」

一番近くに居たレオーネが槍から手を離し、地面に落ちたベルヴアークを持って槍兵へと歩みを向けた、瞬間。

「……………まだ」

事切れたはずの口から、普段と変わらぬ言葉が漏れる。

「まだ、斃れるわけにはいかん」

自由になった槍を廻し、自らの動作を戒めていたレオーネの腹部を串き、穿つ。

圧倒的なまでの、意志の力。そのみが瀕死の身体を立たせていた。

「あの重傷で膝もつかねえのかよ……………」

「私が膝を屈する存在は、この世に一人しかいないのでな」

槍を構えたその姿に、死の気配などは微塵もない。

ただ、陽炎のように燃え立つ意志のみが彼の身体を屹立させていた。

「それにしても、少年。先程は見事な一撃だった」

「褒めてる場合でも容体でも無いでしょうが！」

空からの声と共に、ハクの身体が船上から消える。

超高速で往復した火龍——チエルシー変身体——の鉤爪に攫われる形で、両者の死闘は幕を閉じた。

自称を突く

「チエルシー、今は夜だな」

「それがどーかしたの？」

一時間前だろうか。変身に変身を繰り返して、危険種として身体を酷使し続けたが為に流石に疲弊し切ったチエルシーは半ば墜落するようにして地上に降り立った。

そこが、危険種の巣であるとも知らずに。

決して運の良い方ではないチエルシーと、自称かなりの幸運のポジットブシンキングスト・ハク。彼らが二人揃えば不幸の方に針が傾くことは、誰にでもわかる。だが、これはあまりにも酷かった。

しかし、そこは無駄に実力はあるハクである。

不幸に負けず——最も彼は『食料が手に入った。幸運だな』と思っていたが——瀕死ながらも元気に特級危険種を槍にかけ、指から今の彼の生命力のように弱々しい火を出して肉を炙っただけの野戦料理をもぐもぐと二人が食べ終わった、その時。

ハクはポロリとアレな台詞をこぼした。

「私は朝帰りは禁じられている」

相変わらず、その身に鎧はない。そして負った傷は薄い膜に覆われている程度しか回復しておらず、いまだに危篤の状態である。

そのような状態にあってもなお、ハクは常日頃と変わらなかつた。

「へえー……」

濃い上司・更に濃い上司の上司・濃い同僚兼部下にサンドイッチを喰らった彼女が身につけた必須技能である素晴らしいまでのスルースキルが発動し、天然発言を水に流す。

彼女は地面に右脚だけで半分胡座を掻いた後に左脚の膝を地につけて爪先を手で持ち、延髄のあたりにまで伸ばしていた。

彼女は、趣味のヨガで忙しかったのである。

「あぁー……効く……」

「……どうしたものか」

リヴァはもうとつくに帰っているだろう。すぐさま復命に帰らね

ば臣下としての礼を失するし、何より出会い頭に掌底を打ち込まれかねない。

が、彼に朝帰りは禁じられていた。

「私が戦闘詳報送つといたから心配しなくていいんじゃない？」

ま、胸に剣がぶつ刺さった辺りで自動的に送るように組んでたプログラムごと放送施設が粉微塵になったからきちんと遅れてないかもだけどさ」

「……そうだな。ならば着いたら昼まで時間を潰すとしよう」

今度は右半分だけではなく、完全に胡座を掻きながら両腕を膝に触れさせるように肩から斜めに伸ばしているチエルシーの凄まじくアバウトな戦闘詳報に全てを任せ、ハクはあっさりとは決断する。

朝帰りはしない、と。

「ハクさん、紅茶飲みたい。ヨガの後の一杯がチエルシーさんは欲しいなーって、思います」

「……紅茶か。どこかの邑に突き当たればあるのだろうか、今からならば徒歩だろうな」

殆ど同年代とは思えない程の年の差を感じさせる会話と容姿は、目撃されていたならばかなりの困惑を呼んでいたであろう。

何せ童顔の方が年を喰ったような趣味をしていて、年を喰ってそうの方が軽い無茶ぶりをかまされているのだから。

逆だったら周りに与える違和感は少ないのだろうか、逆でないが故にそうはいかなかった。

「……歩くか。野宿は嫌だろう」

「そうねー……歩きますか」

「厭はない」

噛み合っていないようで噛み合っている会話をしながら、二人はふらふらと立ち上がる。

瀕死の重傷者と、見た目と中身と年齢の全てが釣り合わない少女は、墜落した時に視界が眩み、最後らへんは適当に飛行していたが為に帝都を過ぎてしまい、すぐ東に目的地があることも知らずに、一路西へ西へと歩み始めた。

「おー、着いた着いた、着きましたね」

「そのようだな」

例に漏れず、相も変わらず、時化ているものは時化ている。実際貧しい。どうしようもない。職もない。金もない。人もいない。助けもない。

帝都の近くなのにこれはどうだろうか、とチエルシーが首を傾げる程度にはこの都市は貧しかった。

何せ西部異民族との最前線に近いのだから、税も厳しいし男手も必要とされる。

彼らは帝都の付近だと信じて疑っていないから疑問に思うが、場所さえわかれば得心することは間違いないかった。

「うーん……帝都の近くに不時着したからそこそこ栄えてるはずなんだけどなあ……？」

「どこも貧しいのだろう。内政官及び、我ら高給取りの失策だ。こうなると、革命軍の理念もわからなくはないな」

見た物を理知的に観察してから理解しようとするチエルシーとは違い、見た物を見たままに理解するハクは、この光景になんの疑問も懐かない。ただ政治的失陥を読み取り、今度の施しはここでやろうかな、と考えて終わりである。

「それにしても、貧しいにも限度っていうものが……」

「貧困に限度などあるまい。貧しいものは貧しい。それだけだ」

最近帝都と周辺十二都市を環状経済圏とし、悪官汚吏の総入れ替えを行ったばかりだし、何回かした巡察では順当に発展しているように見えた。

あの笑顔と清潔さ、火事にまで配慮した街並びの良さと活気が嘘だとは思いたくないのが、チエルシーの本音であろう。

「ハクさんが立案して、実行したんでしょ？」

「ああ。あくまでもお嬢名義でだが……巧くはいいないようだがな」

とことん無感動な反応につまらなさを覚え、チエルシーはリボンを風に靡かせながらあたりを見回し、気づいた。

「ねえ」

「何だ」

「ここさ。コウノウ郡じゃない？」

経済圏政策が行われたのはケイヨウ・ヘイイン一帯。米どころで著名な俗に言うゴウソウ地帯であり、コウノウではない。

つまり、まだ未着手なここら一帯は貧しくて当然なのである。

「……だからと言って貧しいのを善しとする訳ではないがな」

「知ってるけどさ。死ぬほど苦勞して通した政策が無為に終わるって何かこう、虚しくなったり、悲しくなったりしない？」

「虚しさに浸り、悲しむ情や暇があるならば過欠を見つめてそれを直し、成功するまでやればいいだろう」

ド正論を返されて黙りこくって民上調査に入るチエルシーと、民の苦境をつぶさに聴き取り、後の政策の糧とするハクは、あることをすっかり忘却していた。

紅茶が欲しくて彼らはここへ来たのである。そのことをチエルシー自身が記憶の彼方から抹消してしまっていた。

そしてハクは、純粋な善意で瀕死の身体を引き摺って政務の糧を得ようとしている。

チエルシーも別段止めず、自分も精力的に働いた。彼女も貧困を善しとできるほど割り切れていないところがある。

「——つまりそもそも福利厚生が足りていないし公共事業もなければ、職もない。役所は何もしてくれない、と」

「どうしようもないね。なんかもう、どうしようもないね……」

下手したらエスデスよりも心理的には打たれ強いチエルシーが遠い目になって同じ言葉を繰り返すだけになるほどの腐りっぷりに、ハクは少し瞠目した。

「腐ってるわあ……改めてまともところから目を離すと、腐ってるわあ……」

ハク領エイの旧太守の人狩りを見て以来の負のオーラを放出しながら、チエルシーは重圧に沈むように儂く染まる。

軽い調子を装っているわけではない。彼女の嘘偽りない素であつ

た。

だが、その一方で何となくナマの人らしさがある。一般的な倫理観と、正義感があった。

だからこそ、魔神・幽鬼・大狸の揃った大臣率いる濁流派で変な愛嬌と可愛さがあると言える。

「……腐ってるからこそ、治さねばならないのではないか？」

「わかってますよ、ハクサーン……」

ヘッドフォンについた蝶を模したりボンまでをも萎れさせ、チエルシーはいつになく沈んでいた。

人の手の届く範囲、というのか。それには確かに限界があり、のうりよくのあるものが如何に足掻いても救えるのはその両腕に抱えられるだけなわけで。

「革命に光を見たな、チエルシー」

「え、え!？」

いや別に、全然そんなことないよ、と。凶星を刺されたチエルシーは慌てて弁明し、手を振って無実を示す。

だが、彼に装飾や嘘は通じない。彼は見ようとしめない限りは常に本貫のみが眼前に見えていた。

「無理からぬところだ。セリユー・ユビキタスにも言ったが、今の時は蒙い。これを開き、万民に新たな光をもたらそうとする革命軍は正に希望だろうからな」

「……私が寝返ってもいいのかな？」

「国の仕組みにおいて、主人は給金と恩徳を以て配下を使役する。だが、我々配下にも主人を選ぶ権利はある。」

思想の差異はどうあれ、その選択は尊重されて然るべきだろうと、思う」

からかい半分の戯言に、相変わらず血の通っていない正論を述べ、今なら何も見ていませんよ、とばかりに彼は部下に背中を向ける。

一度も敵に背中を見せていないが無いが故に、背中部分に傷やほつれは全くと言っていいほどなかった。

「じよーだん。裏切らないよ」

「お前は思想的にそちらへ傾くと思ったがな。どうやらこちらが量り違えたようだ」

降参とでも言わんばかりに側頭部まで掲げた手を動かし、戯言を下げる。

ハクは、驚いた。単純に、彼は部下に忠誠を強要していない。裏切ったならば自分の器に収まらない程の大器だっただけのことであろうと、さらりと諦める。

そんな彼にはチエルシーもまた一角の才を持っていることが彼にはわかつていた。

故に、磨いた。磨き切ったら自分の元から離れるとしても、それが他者の役に立つならばそれでもいい、と。

故に彼女の思想や願望と似通ったものを持つ革命軍に内偵させ、選択肢をやったのだ。

『君を引き止めはしない。好きに動け』と。

故に彼女は選択する。

「チエルシーさんはハクさんの気遣いを読み取れないほど鈍感じゃないし?。」

いつも口に加えている飴の新品をバックから取り出し、包装を解いて彼の口元につき出す。

「わざとらしかったか。すまないな」

「うん。らしいからいいよ」

心の中に在る、二つの選択肢。

その内の一つが燃え落ち、消えた。

葬儀を突く

「二人揃って何してるの?」

黒髪黒眼に暗殺チームの黒制服。腰には朱黒二色の鞘が目を惹く如何にも業物らしい日本刀を佩いた少女——クロメは、一応恩人である上司と同僚に声を掛けた。

はるばるテンスイから帝都への帰路に、コウノウ郡はある。コウノウ郡に墜落し、その一邑で色々やっていた二人と帰還途中のクロメがかち合ったのは偶然の要素も含んでいるとはいえ、必然であった。

「炊き出しだ」

「あ、クロメじゃん。どお、食べる?」

臨死から瀕死程度にまで回復したハクの趣味・施しを根は質朴な善人のチエルシーが止められるはずもなく。彼らは買った米を炊き、仕留めた危険種の肉やら脂やらを調理して煮込み、香草やなにやらを入れてカレーらしきものをせっせと作っていた。

野戦料理の達人と、一般女性の平均よりかなり上な料理の腕を持つチエルシーの作った料理が醸し出すその匂いは、食欲旺盛なクロメが無意識で釣られる程度には美味しそうな物であったのだろう。

現に彼らの作ったカレーらしきものはコウノウ郡の民の口にあつたらしく、一杯食べ終えた民がその生への執着や生きる為の強かさを見せつけるように空鍋を持ってきていた。

彼らの言いたいところはつまり、『余っているなら鍋にくれ』ということである。

「食べる」

ちらりと周りの反応を見て興味を持ち、鍋の中を見て口の端から涎を垂らしたクロメの即答に、迷いは無かった。

「隣の女の昼飯の分以外は、貴君らに全て渡す。焦るな」

クロメに一杯よそってやった後、ハクはいつもの淡々した声で民に向けて言葉を掛ける。

ガツガツと掻き込むように食べるのではなく一口一口の味を楽しむような食べ方だというのに、食べるのが異様に速いクロメもちやつ

かりその列に加わり、自分の護衛である故・ナタラに鍋をもたせると
いう徹底振りを示したあたり、その旨さが伺えた。

単純だが、人の心を掴むには胃袋を掴むのが一番だった。信頼を得
るにもまず空腹を満たしてやらねば前には進めない。

「チエルシー、お前の分だ」

「はいはい」

横に立って配給している女ことチエルシーに確保していた最後の
カレーらしきものを白米にかけて物で満ちた椀を渡し、ハクは身の丈
ほどの鍋を持ち上げる。

彼は、休むことを知らなかった。

一日前に掘り当てた井戸で鍋を洗い、調理用具を洗い、次なる炊き
出しに備える。

その後、今まで握っていた包丁の代わりに槍を持ち、危険種を狩り
に行くつもりであった。幸い墜落地点と言う名の危険種の巢は近く
にある。

「將軍、食べないの？」

「やるべきことがある」

暢気にもぐもぐ五杯目を食しているクロメに問われ、彼は義務感に
突き動かされるように答えを返した。

なるほど、彼からすればまだこの邑はやるべきことに満ちているの
だろう。

だが。

「休みなよ、將軍。鍋洗いはドーヤが、危険種狩りはナタラがやってく
れるって言ってるし」

鍋持ちと化していたナタラと呼び出されて早々に雑用を押し付け
られたドーヤの顔に『聞いてないですよ、クロメさん』と言わんばか
りの困惑がはしり、消えた。

そもそもクロメの帝具で呼び出せるのは死者のみであり、死者には
基本的に表情はなく、ただ主の命令を機械的にこなすのみである。

いくら彼女が自身の帝具の扱いに習熟してきたとはいえ、表情を保
つ事は難しかった。

「……では、休もう。正直に言うとなんか身体が辛いのでな」

自分の頭頂部まである鍋をえっちらおっちらと井戸まで運んでいくレザーハットを冠った金髪の美女・ドーヤと、得物である薙刀型の臣具『トリシユラ』を持って危険種狩りに行く青年・ナタラの両死者が視界から消えるまでチエルシーはスプーンを咥えて見送り、そして。

「で、どうすんの?」

遠慮を知らず、強かさを知る民の狂気・鍋ラツシユを乗り切ったことを身に沁みて感じたチエルシーは飴に変わってスプーンを咥え、その問いを投げる。

「どうすんのって?」

無言の爆食を見せつけているクロメが七杯目を完食し、八杯目を自らよそいながら問いに向かって問いを返した。

彼女の帝具である刀剣型帝具・『死者行軍』八房は抜き身。

即ち、未だ効力を発揮したままである。

その能力は斬り殺した屍体を八体までストックし、自在に操ることであった。

全帝具中でも外道・非情の戦闘型であると評されるこの帝具を雑用に使われるとは、作った始皇帝も考えていなかったであろう。

「ほら、エスデス。帰んないの?」

エスデス。帝国最強の女。亜強の三帝具の内の一角・『魔神顕現』デモンズエキスの使い手。

爵は侯。封地はシヨク。所属は濁流派。国内ではアイドルめいた人気を持つ、氷のような美貌を持つ女性であり、臨死から瀕死へと回復を果たしたこの男の上司であった。

チエルシーの飴を舐めながらのツツコミに対し、ハクは明らかにしまったと言う不覚の顔を晒す。

正直、紙を購入してこれからの施すべき政策や対応策を練ったものを書き連ねていた彼からすれば、その一名の名を注意の外に置いたことは失陥に等しかった。

「しまった」

「しまったじゃないでしょ、全く……」

「部屋が何やら何やらで凄まじいことになっているだろうな……」

そっちじゃねーだろ。心配されてる方を汲み取れよ。

チエルシーはそうツツコミを入れ、黙る。

口元でピコピコと動く飴も、残りのストックが少ない。何か口に加えておかねば一抹の寂しさを感じる彼女からすれば、在庫がないのは死活問題だった。

正直、いっつも独占されている上司を密やかに独占するのは気分がいい。寧ろこのままでも一向に構わないのだが、どうせ彼はこの仕事という名の無償の善行に区切りがいたら気づくだろう。ならばさっさとツツコミをいれてしまった方が後々の会話の種になるという計算であった。

「私は完全回復してるけど、乗ってきますか、お客さん」

「頼む」

「乗る」

一人称が調子に乗っている時や凹んでいる時によってかなり変動するチエルシーの『私』は職務上の会話とかに散見される。これに反して『チエルシーさん』は主にからかうときに使われていた。

まあ、ポロツとどちらかが用途以外のところでも出ることもあるのだが。要は気分次第であろう。

「じゃあ、しゅっぱーっ」

火龍。件の竜船からの戦闘で運送・捕獲・撤退・墜落を一頭でこなした働き者の外見である。中身は何に変身しようが全てチエルシーなのだが、そんなことはよかつた。

今の問題は。

「出ましたね、亡霊ー」

この何故か喪服な警備隊長さんである。

「否定できんな」

「だね」

今まで散々幽鬼だの何だの言われてきた肌色の悪さと、瘦身矮躯。亡霊扱いも宜なるかな、であった。

しかも後ろに『死者行軍』。これはもう、誰が見ても骸人形二体とクロメが帝都に帰還したと思うであろう。

「正義は私が……」

ここで一度涙ぐみ、自称から公称になった『正義の味方』セリユー・ユビキタスは、同情と共に宣言する。

「道は半ばで倒れた無念はわかります！

だから、正義は私が執行します！悪は裁き、正しき方向へと導きます！あなたの代わりに私が為します！故に、成仏なさって結構です！」

「……む」

どーすんのこれ、とでも言うべきチエルシー変身体の火龍に向けられながら、軽く自分に酔っているらしい帝都警備隊隊長から目を逸らし、空へと舞い上がる。

『任せた』との一言を残して。

「どーすんの。完璧に死者扱いじゃん？」

「無念だ。私が命令を履行しないで勝手にくたばるような男だと思われていたとは」

明らかに違うベクトルと薄すぎる環状の起伏故に怒りとも言えない感情を感じながら、チエルシーは背中の上で手綱を取られながら愚痴を聞き、返した。

「……話題を振った私が言うことじゃないけどさ。皆胸に剣突き立てられたら死ぬんだよ？」

「まあそれだけじゃ死なないとしても、腹に三つの穴開けられた上に腕を焼かれた拳句に胸を貫かれたら、全盛期の私でも死んでると思うよ？」

クロメの全盛期は一年前。強化薬をドバドバに使って薬漬けになつていた時である。

その強化薬の効能は凄まじく、彼女を即死させるには心臓を潰すか首を切り離すしかない程であった。

今は薬が身体から抜け切っているが為にかなり戦闘力は落ちていますが、その『耐えられる』という感覚はなごりとして持っている。

無論、何となく『耐えられる』という感覚がわかるだけで耐えられないのだが。

「死ぬか、死なないかではない。死ぬわけにはいかんのだ」

チエルシーとクロメは、黙ることにした。

最早常識的な耐久力と痛覚と精神力を持ち合わせた彼女らには理解し得ない範疇にある問題だと、悟ったのである。

「……そんなことより、だ。帝都はいささか以上に活気がないな」

「そう言われれば、そうだね」

カレーの最後の一杯を食べながら眼下の光景を見下ろし、クロメは実感と共に相槌を打った。

「チエルシー、降下」

「はいはい」

ぐるりと帝都を一周廻り、半ばチエルシー飛行場とかしている広場へと危なげなく降り立つ。

空の防御は、この三人には無意味だった。

「エスデス主催、三獣士の葬式だつてさ。行く?」

「ほう、幸いにも今は朝。昼には報告に帰らねばならないが、線香の一本くらいはあげに行くか」

ネクロマンサーと不死身の槍兵の天然同士の会話に、常識人の介在する余地はない。精々ツツコミを入れるくらいが、彼女の限界である。

「……私達も含まれてる気がするんだけど」

「え?」

「まだ死んではないのだから、私に葬式は不要だろう」

チエルシーは、諦めた。

執着を突く

エスデスはその日、白い喪服に身を包んでいた。いつもの露出の多い服装ではなく、無改造の式服。

猛獣のような活発さも澁刺とした英気も完全に白に沈み、色を喪う。

いつもどこかに獰猛なものを含む彼女らしきは欠片もないが、その憂色の淑やかさはまた彼女の中で何かが変わったことを表していた。

「……弱かった」

やけに虚しく、味気なく感じる世界でポツリとそう呟く。

群衆も何もかもが視界に入らず、あるのは黒ずんだ茶色の棺だけだった。

「ハクも弱かった。それだけだ」

そう言った瞬間、胸が張り裂けるように痛む。

それが肉体に負った傷ならば、笑って自分に一太刀浴びせた敵の腕を潰え、戦い続けられた。

なのに、この傷の痛みは治まらない。立てないほどに、強く痛む。

「ハク、痛い」

キュツ、と。その名前を口に出した瞬間にまた疼いた。

どうしようもなく、喪った者が大きすぎる。

「何とかしろ」

いつもなら、側にいてくれた。

自分が無茶を言っても、嫉妬に任せて理不尽な振る舞いをしても、だらしなくても、世界の全てが敵に回っても黙って側に居てくれそうだと、そんなことを思っていた。

「……痛いんだ」

今は、居ない。もう、世界のどこにも居ない。

自分の声が何の応えも齎さずに虚しく響く。

とてつもない虚しさは大切な何かを喪い、空になった内に反響していた。

「お前の所為だぞ」

必死に痛みを堪えて、立ち上がる。その何気ない一動作だけで視界が暗く染まりそうな程に辛く、苦しかった。

棺から背を向けるのが、怖い。彼を見失うことが、怖い。

他の二人とは違って屍すら遺らなかつた愛しき人の棺を再び見て、喪失に啼く空いた心に憎悪が満ちる。

憎悪と、虚無感。もう二度と笑えないであろう自分を噛み締めながらももう一度繰り返して、身を翻した。

これからは、ただ殺す。愉しみもせず、悦びもせず。虫でも殺すかのように踏み潰す。

暗い感情に閉ざされようとした心に、一筋の光が差し込んだ。

「それはどうでしょうか」

閉じようとした心が開かれ、聞き覚えのある平坦な声が耳朶を打つ。

視界に入るのは、血の気のない蒼白の肌。

形容するならば、幽鬼のような。

「……ハク？」

「如何にも。朝帰りではありませんが、少しばかり誤解されているような気がしたので参上した次第です」

エスデスは文字通り目の前が真っ暗になっている状態だったのでわからなかつたが、ハクと現在は空気を読んで席を外している従者二人も一応その葬儀には参加していた。

エスデスの前に律儀に線香を上げて手を打ち、瞑目してから静かに立ち去る。そんな一般的な礼節が崩されるほどに、彼女の挙措は哀しいほどに美しかったのである。

「見事な挙措でした。群衆もあなたに眼が釘付けにされていましたよ」

彼女はもう本当に何も見えていなかったから気づかないのだから仕方がないが、葬儀でとつた礼と挙措の淑やかさは限りがなかつた。

喪つた悲哀と白い喪服が絶妙に合わさり、群衆が彼女へ向けた畏敬と同情の念は計り知れないものがある。

計算ではなく、心胆から発して哀しみが民の心を打つたと言ってよ

かった。

「お嬢？」

黙りこくり、継るように袖の裾を握り締める。

怒るかキレるかの選択肢でしかないであろうと思っていたハクにとつて、これはかなり意外な反応だった。

「……黙って、そのまま。後、鎧を解除しろ」

復活した硬い鎧が、血の通った温もりを遮っている。

そのお陰で傷の殆どが癒え、瀕死から少し具合が悪い程度の体調にしてくれのがこの鎧だとは言っても、今ばかりは邪魔だった。

無言で頷き、光と共に鎧が消えた。

その瞬間にふわりと白い喪服と黒い軍服が重なる。

群衆が一種幻想的なまでの美しさの魅了から解き放たれ、我に返った。

「……もう」

少し濡れたような声と、震える身体。

エスデスはいつになく自らの弱々しさを露出させていることに、自分ですら気づいていない。

虚しさを復讐心が満たし、その昏さに光が差した。差した光に素の自分が照らされ、剥き出しになってしまっていたのである。

「どっにも、いかないで……」

突き刺さるような、懇願。

恐怖を知らないが故に、彼女は凄まじく強かった。その恐怖の知らなさは弱点が無いと言ってもよいであろう。

だが、恐怖を自覚してしまった。

他者を喪うことの恐怖が光が差した後の心を満たし、弱みを作ってしまったのである。

今や最強の戦士であるという強者の誇りとも言える殻は恐怖に剥かれ、生の女の部分が顔を出してしまっていた。

「……一緒に居て」

甘えるのではなく親に継る子のようにしがみつくと彼女に戸惑いを抱き、ハクは柄にもなく少し慌てながらエスデスの細い手首を掴み、

宮殿へと歩む。

「お嬢、場所が悪い」

群衆からの痛い視線から守るように盾となりつつ、手首を掴まれながらも何の抵抗も示さない彼女を訝しみ、彼はやっとこさ宮殿内の私室へと辿り着いた。

あくまでも自分が主導権を握るのだ、というこだわりのあったエスデスとは思えないほどのおとなしさに少し瞠目し、一先ず彼女を抱きしめる。

何となくだが、そうした方がいいと彼女のすべてが思わせた。と言うよりは彼にそう思わせてしまう程、今の彼女は壊れやすそうに見えるていたのである。

「帰還、お待たせいたしました。誠に申し訳なく思っております」

まず彼は、謝った。それほどに彼女は疲れ切り、悲しんでいた。

色気より強烈な何かを男に直接的に訴えるような妖しさが、今の彼女には備わっている。

「いい」

何かが変わったことを如実に表すような、一言だった。

思わずはっとしてしまうような濡れた眼差しが彼を射竦め、竦んだ彼の頸にほっそりとした腕が力なく巻かれる。

「……一緒に居てくれ。頼むから」

「それは、無論のことです」

哀しさを感じさせるような痛切な懇願を聞き、ハクは彼女となるべく向かい合うように距離を取ろうとして、止まった。

目の前に、長い睫毛がある。きめ細かな肌も、あった。

「……無論なら、こんな寂しい思いをさせるな」

身体が糸の切れた人形のように前に倒れ、完全に普段とは異なる彼女の様子に気を吞まれていたハクを容易く押し倒す。

何となくだが、彼女は普段の英気のようなものが戻りつつあった。

「私を、温めろ」

わかるだろう、と。その濡れた目が語りかける。

「それは、あなたの副官としてですか？」

「女を淋しさに叩き込んだんだ。男がすることはひとつだろう」

淑やかさと、艶美までの妖しい魅力。並の男でも、それ以上でも、その注意の全てを吸い付けるような女が、そこには居た。

あくまでも、女なのだ。彼女は自分を異性として慕ってくれている。

悪い気はしないが、普段の色気も何もない頼りっぷりからの差から生じる戸惑いの方が勝った。

無論、嬉しいと言う感情が彼の中にもある。しかし、彼女が求める男と言う役柄になりきれないと言うのも事実だった。

「嫌なら、いい」

「……………嫌では、ありません」

微妙に着崩れた喪服が艶めかしい。元々魅力的な容姿が、艶のようなものを帯びている。

女というものをてんで知らない彼にも、女性的魅力はなんたるかというものはわかった。

そして目の前に居る雛のように守り、育んできた女性がそれをふんだんに備えているということも、わかる。

彼は馬鹿ではない。彼女がどれほどの覚悟を以って切り出したのかもわかつているし、彼女が自分を攻めあぐねていることもわかつていた。

未知に対して臆病な一面を持つ彼女が相手から手を出してもらおうとして、せっせせと誘惑していることもわかつている。

だが、武に生きてきた彼に色事をどう決裁すればいいのかわからな
いのが最大の問題だった。

「私は、副官です。それ以上になれるとも思えませんし、なろうとも考えたことはありません。何故私なのですか？」

彼はここで、遂に疑問を投げ掛ける。

「私に色事は向いていない。私にはあなたの意図が掴めない」

槍なのだ。彼女に生きる意味を与得られたその日から、彼は人ではなくなった。

常に半歩、前へ。

誰よりも、速く。

彼は今もなおこの二つの柱の忠実な履行者で有り続けている。ただ一本の槍として仕え、使われ、折れたならば打ち捨てればいい。それが彼の彼女に対する想いだっただけ。

愛しては、いる。だがそれは、対価を求める愛ではない。一方的な、恩義を資本にした見返りの要らない愛だった。

「私は槍だ。私にはあなたの欲するところがわからない。戦士としてならば、最上の武技を以ってあなたに応えるが、こればかりはどうしようもない。あなたに執着はありますが、物に恋愛はできないのです」

「……なら、理解せずともいい。取り敢えず私を抱いてみる」

内面的に一度死んだが故の執着の無さと、天性の無欲さが変に混ざってややこしいことになっている。

さっさとそのことを見抜いた彼女は、すぐさま腹を括った。

もうこれは荒療治しか仕方ないのだ、と。

「何故ですか」

「抱けば私はお前の物だ。私に対する執着が僅かでもあるなら、無理矢理にでも深めてやる」

——嫌ではないのだろうか？

挑発するような声音には、やはり少しの恐怖が孕んでいる。

断られることに対する恐怖、のような。

「……では、そうしましょう。どうすればいいのですか？」

「……私もわからんが、何だ。本能のままにいけば何とかなるのではないか？」

始まる前から、前途多難であった。

女心を突く

「やはり、綺麗な髪ですね」

「もつと他に褒めるべきところがあるんじゃないか？」

昼風呂からあがって柔らかな服を着て、エスデスは身体を預けた男の胸に背中から凭れる。

言っている言葉は不満げであるが、その声音は蕩けるように甘かった。

「この髪は美しい」

限らない優しさが、髪を梳く手に表れている。

極上の芸術品でも扱うかのような丁寧さに、エスデスはその自尊心を大いに満足させていた。

「昔のように、束ねないのですか？」

背中は凭れさせながらも、長く量の多い髪を右腕に垂らして丹念に梳き、愛でる。

開ききった花は、凋み落ちるしかない。そうさせないのが花をいくしむ者のつとめであると、彼は考えていた。

男と女が歡を尽くしてしまえば、それ以上のものは求めようがない。急ぐことは虚しさを求めることになる。

「ね、ハク」

「はい」

夜に見せた僅かな執着と欲は静かに凧ぎ、穏やかな温かみのみが瞳にあつた。

「案外何とかなるだろう？」

「そのようです」

自信と達成感を眼に湛え、すっかりいつもの英気を取り戻したエスデスは、少なくとも外見的には以前に戻っている。

内面的には、わかったものではないが。

「どうだ、私は。いいものだろう」

擬音を付けるならば確実に『ドヤツ』と言うような類の物が的確であろう笑顔で、自分の肉体の卓犖さを学んだ彼女は甘えるように抱き

ついた。

彼が梳いていた髪は、既に彼の右腕から離れている。

「相も変わらず、まだ子供ですね」

歳も21にもなり、昨夜女にもなった。たぶん子も産めるし、帝国でも有数の美人であろう。

であるのにまだ、自分で自分を誇るような幼さが彼女にはあった。外見は伶俐さを基調とした彫刻のような完成された美が目立つが、内面は非常に未完成で未成熟な童女のような愛らしさがある。

元々人間は先に性別を核とした自分が形成されるものであるうが、彼女の場合は女としての人格の形成を待たずに狩人としての自分が完成された。

故に女としての人格は形成途上のまま放置された挙げ句に長い眠りにつくことになり、今に至る。

「……不満、か？」

「別段」

非常に珍しい柔らかな笑みがこぼれ、エスデスは暫しの間だけ思わず言葉を失った。

前に笑顔を見たのは、いつだったか。恐らくは実家を出て帝都へ人質生活——もとい軍人生活をはじめ前の、見送りの時だったような気もする。

つまりは、十年以上前であった。

「次にその笑顔を見れるのは十年後か……」

「昨日も笑いました。貴女の寝顔が余りにもあどけなさ過ぎて、少し思わずこぼした嘆きに、予想外の答えが返る。

きつと、幼子を慈しむような慈愛の笑みだったのだろう。

それが自分に向けられていたことを考えると嬉しくもあるが、同時に恥ずかしくもあつた。

「……こほん」

「肺腑の具合が悪いのですか？」

的外れな天然さまでもが、ただただ愛しい。欠けたところが有り、自分がそこを補えることがたまたまなく嬉しい。

「咳払い、話題を切り替えるための物だ。他意はない」
「わかりました」

耳元で静かに鳴る声が心地良い。重ねた身体が熱を持ち、ぴたりと吸い付くように触れ合った。

相性の良さ、と言うのか。彼が退けば彼女が押し、彼女が退けば彼が圧す。互いを思いやり、気を使い合っているからこそのものであった。

「……寝よう」

「それはどちらの意味ですか？」

これは、かなり意地の悪い質問であろう。他意はないとは言え、彼の一言は良くも悪くも虚飾がない。

「……こうしているだけで、切なくならないか？」

「全く。そも、こうならぬように事を済ませた後も抱き合いながら話したではありませんか」

海のような情愛を持つ彼女からすればもつと一緒に居たいし、側にいればそれだけで愛が暴走をはじめ。正直に言えば、彼女はまだまだベツトにいたい。情事で再び愛を確かめ合いたいというよりは、抱きしめあいながら喋りたい。

が、ハクはその点淡泊である。夜は寝る。が、昼は寝ない。そもそも彼からすれば寝過ぎたことがありえないのだ。

「更に言わせていただくならば、仕事はどうなされたのですか」
「……知らない」

甘いような雰囲気は彼女が望んでいることはわかる。が、それは職務を全うせず、仕事を滞らせていい理由にはなり得ないのだ。

「義務を果たしてこそ余暇があります。そして、これは余暇です。義務を果たしていない我らに与えられるべきではない」

思いつ切り顔を胸板に埋め、聞く気のない態度を顕にしたエスデスを突き放すような冷淡さを感じさせるロン長で、ハクは切り札を引き抜いた。

「私の存在が原因で貴女が己の職務に粗相を見せるような羽目になるのでしたら、私は二度と貴女の視界に入りません」

「……私は側に居ると言った。命令には従うのがお前の性分だろう」
「貴女の為にならないならば、その限りではありません」

エスデスは、甘えたい。何日もの空白と、念願の恋が叶った嬉しさを共有したいのである。

ハクは、あくまで道を外さない。何日もの空白があろうが、執着を持った女性と結ばれようが、それは仕事を休む理由にはなり得ない。

「……いいじゃないか」

エスデスは、悲しかった。

恋していた。愛している。死んでしまったら絶望するほどに、大事に思っていた。

私は、将軍というだけなのか。お前は、副官というだけなのか。私の想いに応えてくれたのは、副官だからではないのか。

胸が痛み、疼く。泣きそうなほどに哀しかった。

「何がですか」

「私は、ずっと好きだったんだぞ」

私は、十五年前からお前が好きだった。私は、ずっと貴方を慕っていた。

「想いが叶った今日一日くらい、甘えさせろ」

「なりません」

一切の逡巡もなしに切って捨てたが、彼は彼なりに思惑がある。昨日一日は何も言わなかったし、基本的には意に添った。

これ以上は休み過ぎであり、蛇足であろう。

「昨日一日は何も言わなかったでしょう。働きなさい」

「………うん」

理屈は通っているし、一応情も掛けられていた。何よりこれ以上粘ると本当に二度と己の視界に入らないようなことが起こりかねない。

明らかに泣きそうな感じにしよげているエスデスを見るに見かねたのか、ハクは両目を閉じて背中に左腕を廻した。

右手は蒼銀の髪の上に載せられ、癖っ毛のないさらりした長髪を撫でつけるように動いていた。

「………後一時間で働きに行きなさい。私もそれを目処にして執務

室へ行きます」

「……うん」

厳しさの中に温かみがある。それも、明らかにこちらを氣遣って発された温かみが。

だらしないほどに相貌を崩して胸板に頬と髪を擦り付けるその姿は、もう完璧に甘々であった。

そして。

「昨夜はお楽しみでしたね」

「ああ。新たな体験であったことは確かだ」

からかい気味に言った台詞を直球で返されたチエルシーを僅かに赤面させながら、きっかり一時間後には彼は執務室についていたのである。

やることはそれこそ無数にあった。まず、昨夜エスデスが寝てから二時間ほどで纏めたコウノウ郡の内政改革の草案などが、それにあたる。

他にも彼の所領でありチエルシーの故郷でもあるカンチユウの内務もこなし、帝都及び周辺十二都市で構成される経済圏を確固としたものにしなければならなかったのだ。

それに、エスデスが仕事を休みまくっていたことのツケもある。

本当に、仕事はやろうとすれば尽きない。ノウケン將軍の如く最低限だけを部下に押し付けて酒池肉林、というのもできるにはできるが、彼はそういうことをするタイプではなかった。

「というかさ、今日一日くらい一緒に居てあげたよかったんじゃないの?」

「お互いに仕事がある。義務や職務を疎かにするものに私事を楽しむ権利はない」

彼が黙々とクソ真面目に、エスデスの目が死にながら数日分の書類仕事をものの数時間でこなし終え、コウノウ郡開発の草案に修正を加えて清書。文句がないように体裁を整え、オネスト大臣に提出した時には、もう既に陽は沈んでいる。

カンチユウの方でも防衛線として幾つかの要塞とそれに付随する

複数の補給線を確保する作業を現在のコウノウ郡の開発と並行して
勧めねばならないのだから、時間も足りない。

「でも、チエルシーさんなら一緒に居てあげたいし居たいと思うけど
なあ……」

「……女心はわからん。どこからが我儘か区別もつかない。ままなら
んものだ」

「女心なんざ我儘でしかないよ。極論すれば、何かやって欲しいって
いう心でしかないんだから」

仕事を終わらせ、終わっていないであろうエスデスの元へと足を運
ぶ。

何かが、はっきりと変わりかけていた。

將軍編

幸福を突く

「エスデス」

「何だ、ハク」

お嬢ではなく、恋人として隣に立つ男として。ハクは腕の中にすっぽり入った蒼銀の女性の名を呼んだ。

透き通るような白い肌は名を呼ばれる喜びに上気し、華が綻ぶかのような笑みが浮かぶ。

名は、符牒。その人間の魂に根付いた一つの呼び方であると言つてよかつた。

その呼び方は主に自分では使わず、他者によつて使われる。

故にその符牒の呼び方の変化には、呼ぶ者と呼ばれる者という両者の双方の関係の変化が如実に表れていた。

「いつ族長には挨拶に向かう？」

「へ？」

馬鹿みたいに真面目な、つまりは冗談などは到底吐きそうにない口がエスデスの予想外の敬語の外れた言葉を吐く。

正直、彼女が求めているのは容姿を褒めるような言葉だったり、内面を褒める言葉だったり、その読み難い心情を解せるほどの詳細な感想だったりであつて、断じて父親への挨拶ではなかつた。

「私は貴女を抱いた。名を呼ぶことにもした。それはつまり貴方を妻として迎えても良いということではないのか？」

「……ま、まだ早いような、気も、するんだが」

透き通るような肌にさつと朱が差し、その気持ちの昂りを示す。

迂遠にとは言え、抱いたのだから妻として嫁に來いと告白されて鉄面皮を保てるほど、彼女の精神力は強くはなかつた。

「……本当に、私でいいのか？」

「でなければ二度も抱かないだろう。遊びではないのだからな」

またしても、時は朝。まだ少し痛みの残る一昨日は飛ばし、健常に

なった昨日に、エスデスはまたしてもそれとなく誘っていたのである。

「私の認識違いであるならば、率直に言っただけだ。貴女は普段は率直に過ぎるが、色事においては婉曲が過ぎる」

「お前が率直過ぎるだけだ」

どこに大臣にからかい気味に『お二人、最近はお熱いようですな。熱いとは温度のことではなく、関係性のことですが』と言われて『それは当然だ。嘗ては主従、今では相思相愛になるべく互いを理解し合っている最中なのだから。それは見えて熱くもなろう』と返して黙らせる男が居るのか。

と言うより寧ろ、オネストと言う政界の巨人を一言で黙らせることのできる彼が異常だった。

「私は恥ずかしかったぞ……」

そして、ニヤニヤ見つめながら無言で肩を叩いてきた大臣がこの上なくムカつく顔をしていて、二重に赤面する羽目にもなっている。

エスデスの私情がかなり混ざったもう少し婉曲にしろと言わんばかりの発言に、ハクは手を翳して待ったをかけた。

「……貴女は隣に立つに相応しい者として私を選んだのではないのか？」

「そうだ」

「ならば恥じる必要はないだろう。それとも、相応しいと言うのは嘘か？」

つまり、恥ずかしいというのは隣に居る男が自分を彩る装飾品として相応しくないといい、それを恥じる事によって生まれる感情である、彼は思っている。

確かにそれはそうだ。だが、この場合は意味合いが違う。

「……恥じてはいない。恥ずかしいんだ。似て、非なる感情だ」
「どう違う」

それは、とだけ言ってエスデスは少し黙り込んだ。感覚的に理解している『暗黙の内に共通認識となった言葉や表現』を、更に口語訳するのは非常に難しいのである。

「無様なさげなけな様を晒すのが恥で、内を晒されるのが恥ずかしい、だ。我ながら巧いな、これは」

「……なるほど。では貴女は私の前では恥を積み重ねているが為に、それを口に出されると恥ずかしい、と。そういうことですか？」

確かにだだ甘な彼女はなげなけな。いつもの氷のような美貌は蕩け、好きな男から与えられる幸せという感情と優しき、節々に感じられる愛に溺れ切っているのが、今の彼女だった。

その耽溺具合はもう、埋没しているとさげな言える。

「……………」

正に墓穴を掘るとはこのとこだ、と。そう気づいた時にはすべてが遅かった。

「そう言うことですか？」

「……………私は！」

駄目押しの的確なタイミングにドSの素質と自分との共通項になりうる匂いを敏感に嗅ぎ取りながら、エスデスは取り敢えず怒鳴ってみる。

他人を黙らせたり、注目を集めるには、大声。古来より続く法則であつた。

「私はお前に甘える自分を恥ずかしいと思つたことは一度もない。甘えたいから甘えたいんだ。そこにあるのは欲望だけだ。私はお前にずーっと甘えていたい」

自分の発言を顧みたらおそらく彼女は悶死するであろう。それほどに赤裸々な告白だった。

ハクはこのある意味予想通りである意味予想外な——方向性としては予想通りで直接性からすれば予想外な——を受けて少し笑い、エスデスの頭を優しく撫でる。

温かみに盈ちている細い腰を抱き寄せると、彼の胸板にあたつていた豊かな胸が柔らかに形を変えた。

「私も貴女と共に在りたいと思つていますよ」

「うん……………」

一昨日までは考えられないほどに熱烈な求愛にうつとりとした工

スデスは、完全に身体から力を抜く。

これ以上ないほどに無防備で、その信頼の程を表すかのような姿勢だった。

「ところで。今日は非番でしょう。私は一向に構いませんが、室内でだらだらとしているだけでいいので――」

「しょうか？。そう続けようとした唇が前に自分がやったことを塗り替えるように、一本の指に塞がれる。

「前もだが、敬語はいらん」

「わかっている。が、慣れないものでな」

出会った時からほぼ敬語で突き通してきただけに、敬語に対する慣れというものが僅かな違和感を生んでいた。

「エスデス、と。呼べ」

「エスデス」

限りない愛と信頼を込めて、熱い体温を冷ますようにひやりとした額を彼女の額に当てながら、彼はその名を呼ぶ。

「質問に答えてほしい」

「……あ、ああ。挨拶か」

近づいた鷹のような鋭さを持つ黒眼に魅せられ、エスデスは少し吃った。

同じ恋愛経験零同士でも、何故か彼女が先に立って遊べない理由がそこにはある。

何というか、天然ながら急所をついていくのだ。彼女にある攻められれば少し怯み、咄嗟に出してしまう恥じらいがないのも勿論あるであろうが、それにしても狙っているが如く的確である。

「挨拶は、何だ。私を娶る……ということを決めたというように取るぞ？」

「無論、こちらにも娶りたいからそう言っている。そして、今日の非番を利用して行きませんか、とも言っている」

率直過ぎる言葉に再び硬直したエスデスの様子をまだ不十分にしか伝わっていないが故の膠着と誤解したのか、ハクは抱き寄せた彼女の肩を持ち引き離れた。

視線の先まつすぐに鷹の目があり、彼からすれば海のような色を湛える蒼玉がある。

「何も求めん。その軍服のまま嫁に來い」

今となつては何の変化も強くない。戦争道楽も、狩りも、拷問も、好きなだけやるといい。

その表現のあらわれが彼からすれば『軍服のまま』であつた。

自分がそう言われたならば直訳するくせして、自分が言う時は中々に詩的な語を好むのが、如何にも彼らしいと言える。

「——は、い」

絞り出すように、鷹の目から逃げるように、彼女はか細い声でそう応えた。

本当ならば、今すぐ抱きつきたい。抱きついて、嬉しさを表したい。身体が思い通りにならない経験は、これで何度になるだろう。彼女は感じる幸福が上限を超すともう何もできなくなる質らしかつた。

「——と、言いたいのだが」

「へ？」

割りと目の前の男のいいように使われている華奢な身体が再び彼の意志で膝に乗り、長い髪が腹から背へと流れ落ちる。

「止められた。大臣に」

急転直下、奈落の底。夢の実現から一気に振り出しに戻された彼女は、少しではなく戸惑いながら怒りを見せた。

まあ、順当な反応であろう。

「……何故だ？」

そして気を取り直して更に問い質したのもまあ、順当であつた。しかし、これに対する答えもまた順当である。

「我らが帝都を離れると、な。四方からこれ幸いと敵が来るらしい。あと、ブドーに対する抑えがいなくなる」

戦争中と、政争中。まだまだ敵は多いし、尽きる気配などは微塵もなかつた。

「……日帰り新婚旅行などは、私は嫌だぞ」

「私も南方の島によさそうな浜辺があると聞いていて、そこを予定し

ていたのだがな。日帰りはきつい」

脚が長いから胴が短いエスデスの頭の上に顎を乗せ、ハクは少し考える。

そもそも挙式も新婚旅行も無理だからこそ、せめて挨拶だけはと思ったのだ。だが、このエスデスの上がり切つてはいるが下がったテンションではそれもままならないことは明白であろう。

ならば。

「エスデス、逢引きに行くか」

「い、いやに積極的だな……」

耳元で鳴る俗に言う美声に、エスデスは少し背筋が震えるのを感じた。

割と色々なところが責めたら弱い彼女は、例に漏れることなく耳も弱い。

それを知つてか知らずか、彼はよくよく頭の上に顎を乗せながらぼつりぼつりと喋りかけることが多いので、尚更である。

「……そうだな」

急いでいたようだ。すまん。そう続けようとしたハクの思考と自分の発言の失態を目敏く察知し、彼女は素早くフォローに回った。

「いや、全然悪くはない！」

寧ろ、もつと私の魅力の虜になれ。うん」

「……いや、時を重ねる度に貴女への愛しさが増していく。虜になつて視界を狭める気はなかったが、そうなるのも時間の問題かもしれない」

またまた硬直したエスデスの頭を愛しげに撫で、ハクは僅かに苦笑する。

(愛しいな)

柔らかな幸せが、二人を優しく包んでいた。

政争を突く

オネスト大臣は、食傷気味だった。

具体的に言えば体重が五十キロほど落ち、福ぶくとしていた腹周りがスツキリとするほどには食傷気味である。

はつきり言って、若かりし頃の大臣もここまででは痩せていなかった。

若かりし頃に政権を一手に握らんとした彼が帝都にやってきたのはリヨウシユウ軍閥の長兼リヨウシユウ司令官としてであり、その頃から割りと肥えていた。

要は、バリバリの軍人ではなかったのである。

「……どうしたのだ、大臣」

「最近糖分を口にすることが非常に困難になってきました……」

ブラックコーヒーを一口啜り、オネスト大臣はため息をついた。

自らの傀儡である皇帝に心配され、政敵であるブドー大將軍にすら目を見張られる程の変化。

「……娘が余所からきた男とイチャラブイチャラブしてバカップルっぷりを見せてくるのが、こんなにも辛いものだとは思っても見ませんでした」

「エスデス將軍は大臣の娘なのか？」

似ていないな！と快笑する皇帝に向かい、オネストはすぐさま己の発したそのスキヤンダラスな一言を打ち消す。

「いや、一応こんなちっこい頃から目をかけてきましたので、そんな感じに思っているだけです」

使えると目をつけ、時々戦場に放り込んだりして強さを磨き、特注の軍服をデザインしてやり。

美しくなり、薫るような色気を纏い始めた矢先に男が出てきた。

「実の息子はどうでもいいのですが、彼女は惜しい」

「恋していたのか？」

「有り得ません」

外見最上、中身最悪がエスデスである。というか、であった。嬉々

として囚人相手に拷問の研究をしたり目を抉ったりする女に、恋はしない。

「やはりどこまでいっても親の気持ちなのでしようねえ」

ブラツクコーヒーを飲み干し、更に注ぐ。

黒く、なみなみと注がれた液体は、凄まじく苦い。だが、それがいい。

「……恋か」

皇帝の呟きに敢えて答えることなく、大臣は再びコーヒーを啜った。

あのバカップルと同じような桃色空間を皇帝に作られては、ブラツクコーヒーの消費量が増えてしまうことだろう。

「まあ、何ですな……胃が痛くなるような問題ですよ」

人前などは関係なしに髪に触れたり身体に触れたり撫でたり抱きついたりするバカップルを想像し、大臣はすぐさまブラツクコーヒーを飲み干した。

(……あの二人を見ざるを得ない帝都の住民にコーヒー豆でもあげましょうかねえ)

今もまた、身近で見せられる自分のような激甘桃色空間に耐えきれなくなっているであろう民を思い、オネストは初めて施しを行うことになる。

肉よりコーヒーとなり、現在は貯えられた栄養と言う名の脂肪を切り崩して生活している大臣は、コボレ兄弟にそのブラツクコーヒー政策を実施することを告げ、宮殿の窓から空を見上げた。

バカップルの激甘桃色空間に、民が食傷気味にならぬことを祈つて。

「ハク、あーん」

「む」

口元に突きつけられたケーキをハクは怪訝な眼差しで一瞥し、清々しいほどの笑顔で甘味を押し付けてくるエステスを見て、諦めた。

もうこれは、どうしようもないだろう。

「美味しいか？」

「甘い物は苦手です」

歯に絹着せぬ物言いに、周りの男たちの放つ殺気のボルテージが一段階上がった。

甘い笑顔を滅多に見せぬ氷の美将にその笑顔をこれでもかというほどに向けられ、拳句の果てには手ずから食物を与えられながら礼すら言わずに不満を漏らす。最早彼らからすれば不敬罪で打ち首獄門晒し首であった。

「なら、何がいい？」

「……甘くない物を」

彼は、甘いものが苦手である。好き嫌いなく何でも食べる彼が唯一苦手とするのが、甘味であった。

人工的に作られた激烈なまでの甘味が、苦手なのである。

そして、甘くない物などはこの店にはなかった。

「エスデス。貴女の好みに付き合うのは、吝かではない。が、私にも苦手なものがある」

「……おいしいのにな」

少し寂しげに生クリームを塗装したスポンジケーキにフォークを突き立て、エスデスは残念そうに目を瞑りながらそれをパクつく。

その寂しげな表情に対して何の声もかけない彼に対し、周りの怒りのボルテージが一段階上がった。

「……食べないのか？」

「チエルシーならば食べるのでしようが……私には、どうも」

赤眼ではない方の眼の瞼を下にたわませ、如何にもそれとわかる困り顔で彼は遂に最後まで断り続ける。

そのブレの無さに怒りのボルテージは更が上がった。

「……それにしても、我が帝国は人材に乏しいな」

「大国の驕りでしょう。驕りは眼を曇らせ、目に見える物のみを恃むようになります。その驕りを持ち続けければ臣民一同になって心の眼が蒙くなるのですから、驕慢よりは卑屈の方がマシです」

ブドー。エスデス。オネスト。チョウリ。誰もが知る帝国の実力

者・切れ者はこの四人であり、革命軍にはナカキド・ヘミ・ナジエン
ダらが居る。

国民からすれば帝国の人材は未だ層が厚く、質が高いように見え
た。

「そもそも大將軍級が三人しか居ないというのが有り得ん」

「……ブドーの他は？」

「言うまでもないだろう。私とお前だ」

大將軍三枚看板と、内務の双璧。戦士として有能な者は帝具持ちに
まだ多く居り、将として有能なのはリヴァとノウケンであろうか。

始皇帝の頃は六人の大將軍と内務の四柱、戦士として有能な三十二
人に将として有能な十人。とにかく層が厚かったのである。

「……私は器ではないでしょう」

直前まで爆発して死ねばいいのにと思っていた相手の発言に対し、
周りの男たちは静かに反論した。

その器はあるだろう。と言うか我らがエスデス様に認められた男
がその程度なわけがないだろう、と。

「……ナイトレイド、革命軍、西部異民族、安寧道、東方の日和見共。
まだまだ敵は多いな」

「嬉しそうですね」

「嫁ぐ前の最後の狩りだ。楽しみにもなるさ」

狩りの相手は尽きない。死ぬとしても愛する男と共に死力を尽く
して戦い抜き、死ねる。

どちらに転ぼうが、彼女の望みは叶うのだ。

「結局は貴女の一人勝ちになりそうですね」

「そうだな……まあ、賊共は賊になった時点で私を負かすことはでき
んということだ」

生き延びようが、死のうが。彼女の勝ち揺らがない。どう転ぼう
が勝利と至福しかない。

「時間です」

「……ああ、名残惜しいがな」

服屋、武器屋、飯屋と来て、(こい)。

約五時間に渡る桃色空間は、その最後を無骨な鉄色に染めながらもその幕を閉じる。

エスデスはコウノウ郡ヘシラナミ山の盗賊を討伐しに行く旨が命ぜられていた。

ノウケンは北の異民族の残党狩りに、リヴァは西の異民族を抑えに行っている為、オネストの手駒は亜強の二駒だけなのである。

亜強の二駒の内、内政面でも使えるが為に汎用性に秀でるハクを帝都に残し、軍務一辺倒のエスデスを外征に使うというのがオネストの最上の采配であった。

「大臣、来たぞ」

「よく来てくれましたねえ、ハク將軍」

手にブラックコーヒー、相席に皇帝。天井裏には羅刹四鬼。

大臣前皇帝の死後に起こった後継者争いを戦争にまで発展させることなく、あくまでも政争の範疇に収める程の権謀術数に長ける。

外交に過欠を見せるものの、自分の勢力の拡大と手駒の整備には余念も油断もない、頑健そうな老年の男がそこには立っていた。

「変わったな」

「ええ、誰かさんの所為で」

福ぶく狸親父、或いは好々爺から如何にも悪そうな親爺のような外見に変わったオネストは、こめかみを抑えて歩み寄る。

「最近チョウリを中心にした一党が巻き返しに来ています。私は奴等を切り崩す為、少しばかり羽目を外そうと思うのですが……その間、陛下のお守りと私兵での警護・情報収集をお願いします」

「わかった」

すれ違いざまにさらりと言い残し、オネストはコボレ兄弟に脇を固めせ、天井裏の羅刹四鬼を引き連れてその場を去った。

警護・戦闘・指揮・情報収集・統括・内務を全てこなせるのがこの男、副将兼揚武將軍兼カンチュウ総督である。

後継者争いの時にも、彼は政争に全力を注ぐ為、他者に内務を一任していた。

(……やはり、カブンさんの戦死は痛かったですねえ)

彼女が生きていたならば、このような台頭は許さなかっただろう。それ程に優秀な補佐官だった。

セイリヨウ出身の割と正統派な政治家である彼女は、相当に切れる頭の持ち主であった。時世に聡く、気を見るに敏な軽快さと罨を見抜く重厚さを持ち合わせている頭は、まだ若年であった頃のオネストが権力を掴むまでもに役に立ち、その後の政争にも役に立ったのである。

オネストの挙措や命令をただ鵜呑みにするのではなく、意図を汲んで独自に実行することのできた彼女は、北の異民族との戦争で戦死した。軍務にも使える汎用さが裏目に出たわけである。

これ以後オネストが武に於いて最優秀とも言える手駒を手にするまでには、十五年の時を必要とした。

(不壞不拔の盾、ですか)

帝具を持つ前でも南部異民族との戦いで部下を庇って重傷を負うこと三度、その都度超人的な意志力と人間離れた勇気で先陣を切り続けたエスデスの副官を見て、オネストは少し危ぶむ。

エスデス及びエスデス軍の英雄的颯爽さは、その人間離れた勇気と意志力で私兵から半ば信仰的な信頼を勝ち得ているこの男の存在が大きい。

(死なれたら困るんですよねえ……ストッパーが燃料に早変わりするわけですし)

最大の強みが、最大の急所。

そんなことを思いつつ、オネストは頭を切り替えた。

皇帝を突く

「てーてーてーてーてー」

変なメロディを口ずさみながら、エスデスは求めていた物を届けてくれたマীগフアルコンを抱きしめ、離れた。

マীগフアルコン。二級危険種。マীগ高地という標高の極めて高い土地に生息する。

ここは人間も入りにくい土地であり、外から危険種も入り難い孤立地帯なので、独自の生態系が形成されていた。

何よりもマীগ高地はマীগ山という帝国で一番高い山の山頂が斬り落とされて出来た山であり、はじまり方からして異様である。

異様なはじまり方をすれば、その異様は色褪せることはあつても消えることなくその地に残る。

異様な発展を遂げた生物の中でもマীগフアルコンは非常に知能が高く、人に懐きやすいが為に調教され、飛行速度の速さも相まって伝令用に使われていた。

「やけにご機嫌ですね、エスデス將軍」

「ああ、まあな」

質の悪いストーリーカーの如く帝都にいる恋人に毎日のように手紙を送っていたエスデスは、一ヶ月ぶりに来た返事に心を踊らせる。

まず文に焚き籠められた香を嗅ぎ、表に書かれた『H a k』と裏に書かれた『E s d e a t h』の綴りを見て、彼女は一人で密かににやけた。

名前を見てすらにやけ、彼が自分の名前を書いてくれたことにすらにやけるあたり、相当に重い欠乏症である。

「ふふふ……」

彼女は一つ笑うと幕舎の寝台に軍服のままに身を投げ、背中から着地した。

花が咲くように可愛く笑い、恋する乙女の如き恥じらいを見せるこの女性が今までシラナミ山の山賊を殺し、焼き、凍らせていたとは誰も思いもしないであろう。

「……開けるか」

暫く布団に包まってもぞもぞと妄想に励んでいたエスデスは、白い長靴を脱いで露わになった長靴下で胡座を掻こうとして少し考えこんだ。

胡座は普通。何故なら咄嗟に反応できるから。

それが文字通りの戦闘脳だった彼女にとっての普通である。スカートが腿の付け根までしかないものであるが、それはわかることがなかった。

「……」

だが、基本的に彼女はハクの前では胡座は掻かない。またまた本能的な面での決断が八割五分を占めるが、彼女にも一応自分をもっと綺麗に見て欲しいとか、そういう欲望はある。残りの一割五分はそれだった。

では何故今は敢えて正座することにしたのか。それは本能でもわからなかったし、もっと別な——やっぱり彼の手紙に触れるときはこう在ったほうがいい、という判断によるものであろう。

「……ペライ」

自分が何枚も書いたのにたった二、三行で返される虚しさを味わいながら、彼女はその一枚を抜き取った後の便箋を覗いた。

当然の如く、何も無い。

『手紙書いている暇があったらさっさと片付けて帰ってきたらどうだ。帰還を櫛を砥いで待っている』

如何にも彼らしい端的さと世話焼き具合、そして『自分も会いたい』というような文面。

「……私も会いたいぞ、ハク」

膝まで長く、宝石の如く美しい蒼銀の髪を寝台に垂らしながら、エスデスは手紙を胸の内ポケットに入れる。

「……何だか軍服が窮屈な気がするな」

前までは掌で胸を潰しながらなら簡単に手首までをつっこめたのに、今は指までがせいぜい。

二年前に買った時はボタンがバツチリ閉まった。

何というか、最近全く下着も何も買っていないから測っていないからわからないが、肩も凝っているような気もする。

「……買うか」

キツイと動き難い。現に二年前も買う直前までは戦闘がやり難くもなっていた。

そもそもボタンを閉めるのが軍服の正しい着方である。正しい着方を無視するつもりもないし、順守する気もない彼女は、別に着方を無視するもなかった。

ただ単に閉まらないから三ヶ月に一個ペースでボタンを外していき、そのまま放置していただけである。

そのころのハクはと言えば、皇帝に政治のいろはを叩き込んだ。た。

幼帝。 齡十二の少年であり、名は公式には知らされていない。シン帝国千年の歴史の末に産まれた正統な後継者である。

「政治とは何をやるんだ？」

その結果が、この様だった。

大臣に全てを丸投げにしているが故に、この皇帝は政務のいろはを知らない。せの字すら知らないと言っていていいだろう。

シスイカンを境にして東に出たこともないし、地方の惨状も知らない。知っていてシスイカン以西の安定している都市くらいなものであった。

帝国全域から絞り取った税を私腹の肥やし及び西方の発展へと注ぎ、発展に乗じて西方の税を軽くする。

税を軽くしても搾取する元が殖えているわけだから、取る金額自体は変わらない。私腹に入る金も変わらない。

そして民政を担当しているのがエスデスの仮婿ことハクであった。

「思いやればいいのです」

「何をだ？」

「自分を思いやる、とは言いません。政治能力のなさとは思いやりのなさです」

ハクは、そうしてきていた。

彼の得意とする料理でたとえるならば、食材が人であるとするれば食材を合わせて作った料理が組織である。食材が苦く、或いは辛い物でも他の素材と合わせれば美味さを引き出すことが出来る。それが人事であった。

ならば、煮るとか蒸すとかが、政治なのであろう。

料理人は、自分の好みの味を主に押し付けない。逆らわぬと見せて徐々に自分の好みの味に引き込んで行く巧妙さというのがなければ、一流とは言えない。

彼が料理を学び始めた理由は政事を学びたいからではあるまいが、主にエスデスに対して使用されてきたらしくもない巧緻な術策は、そこを起因としてるのかもしれない。

「……思いやって、何をやるんだ？」

「何を何をと人に問う前に、自分で考えてからその是非を問われるがよろしいかと」

自主性に乏しいと言うか、自主性を発揮することを望まれていないと言うのか。このような型の主人を持たず、割と正統派暴君型の自主性と確立され過ぎた自己を持つ某ドSを補佐するには、その強烈な自己を湾曲させればよい。

が、この皇帝には自己が無い。人として自己がないということはいえぬから、希薄な質と知識の欠乏がそう思わせるのだろう。

「だが、余は自ら政務を執り仕切ったことがない。將軍は両カンチュウの総督でもあるのだから、そちら方面にも詳しいだろう」

両カンチュウとは、シスイカン以東の帝都を含むコウノウ郡らの総称『関中』とエスデスの封地であるシヨクの北方、外敵を防ぐの蓋のような役割を果たす『漢中』を更に纏めて呼ぶ時に使われる単語であった。

つまり、帝国のまともな経済・農業地域の関中・漢中・蜀・西涼・荊州の一部の内、十分の四がハクの管轄、十分の三がエスデスの管轄、残りが大臣の管轄なのである。皇帝領は無に等しい。

これを何とかしようとした結果が『ナイトレイド』に情報を流して総督であるハクを討たせ、両カンチュウを大臣一派の手から召し上げ

る』というものである。そうすればセイリヨウ―シヨク間の連絡も途絶え、反乱軍を鎮圧したあと迅速に大臣を討つことができるであろう。

まあ、エスデスのシヨクは険峻な山々を壁に、間道を氷で閉ざして門にすれば領地自体が無敵の要塞になるのであるが、所詮彼らは文官であつた。物流・連絡を絶つことではしか戦を見れないのであろう。

清流派であるチョウリらはシヨクは物流を絶てば干上がるだろうと思つていたので。

まあ、確かに干上がるだろう。五年連続旱魃とかになつたならばの話だが。

ハクは用心深い。そして自分の財は容赦なくばら撒くが国庫に關しては吝い。備蓄米は豊富にある。

引き籠もれば確実に勝てる程度の築城と連絡網の構築を配下にやらせていた。

「現実を知らぬままに提言された政策を言われるがままに施行する今の陛下の姿を見た先祖が恥じぬとあらば、私が執り仕切りましょう」これはつまり、傀儡相手に傀儡であるがままで恥ずかしくないのですか？と聞いているに等しい。

凄まじく苛烈な諫言であると言つていいだろう。

「余が現実を知らぬと申すのか？」

「宮殿から馬車に揺られ、窓も開けずに邑を廻つた程度で現実を知れるというのならば、知つていることになりましたが」

皮肉特有の毒がなく、ただ淡々と言つているだけであるが故に、皇帝は怒りを覚える前に興味の方が先に立つた。

オネスト大臣は、こう言う話を振らない。

ブドーは、諫言を呈さない。

チョウリは、大臣をどうかしようとするが皇帝をどうかしようとはしていない。

皇帝そのものを変えようとして近づいてきたのは、この男がはじめてなのである。

「ならば、街へ行こう。供をせよ」

「承りました」

皇帝も男であるし、人である。外への興味が無いといえれば嘘になるし、そもそも壁一枚隔てたところに未知があるとわかっているが、そこへの興味を持たずに生活することなどはできなかった。

皇帝はお忍びとは言え、自ら足ではじめて帝都に立ったのである。

「中々に活気があるではないか。大臣の言う通りだな」

「はい」

今歩いているのは、帝都のメインストリート。つまりは帝都で最も華やかなところ。

下町は活気ではこのメインストリート付近と互するが、発展具合では比べるまでもなかった。

「あれは何だ」

「義足屋です。靴も取り扱っていますが、精々が副菜のようなものでしょう」

義足とは何か。義足屋なのに何故靴もあるのか。靴も義足も同じではないのか。

ハクの皇帝の知識量を読み切った微妙且つ絶妙に興味を惹かれる説明に、皇帝はあっさり引つかかった。

「入ってみよう」

この決断とも言えない決断によって、彼はここで政治を学ぶことになる。

内務を突く

「いらっしやいませ、居飛車義足店へようこそ」

眼鏡、黒髪、均整の取れた筋肉質な身体。見るものが見れば一目でそれとわかるほどに見事な戦士の身体をしながら、義足屋。

もうその時点で色々おかしいのだが、皇帝からすれば他の義足屋を見たことがない故にこれこそが普遍的な意味での義足屋であり、戦士に対しての目利きなどは有りようもない。

こんな職業的な意味ではなく、物理的な意味で腕の立つ義足屋は帝国広しといえどもここしかないであろう。

「これは、將軍。ご無沙汰しております」

「いや、元気そうで何よりだ」

店主の名は、トビー。逮捕されて懲役三十年及び四十万銭の罰金を課せられたDr. スタイリツシユに人体改造と期限までの兵役を受けることで罪を軽減するという取引を違法に交わし、肘から手の指、腿の付け根から脚の指までを機械化していた。

その機械化が更に全身に及ぶ前にDr. スタイリツシユが逮捕された為、彼ら違法に取引を交わした罪人連中——チームスタイリツシユは、路頭に迷うことになったのである。

「これは、陛下」

「トビーとやら、余を知っておるのか？」

Dr. スタイリツシユは、将棋に凝っていた。故にチームスタイリツシユにもそれぞれの駒の役割を割り振っていたのである。

トビーは、飛車。カクサンは、角行。トローマは、桂馬。後は歩兵。金銀香車は欠員だった。

彼らは二年間の兵役の後に罪が軽減され、今は平の民に戻っている。

「はっ、嘗てカクサンと共に將軍の軍にいた際にお目にかかせていただきました」

「そうか」

トビーは腕だけは超一流だったDr. スタイリツシユの義足や義

手を自分で取り外して複製し、義足屋に。カクサンは何故か散髪屋に。トローマは探偵になっていた。

トローマの探偵は、わかる。彼は内部を強化改造させているが故に身が軽いし、気配を絶つのが巧い。

トビーも手先の精密動作性を数百倍にまで高めるD r. スタイリッシュの帝具『神ノ御手』パーフェクターと適合したが故に自分のような脚も腕も無き民の役に立てればということ。義足屋になったのもわかる。

唯一、何故カクサンが散髪屋なのか。それが皆目不明だった。

陛下。商品をご覧いただきたい」

「……靴が二千銭、長靴が五千銭、義足が五千銭、高級義足が一万銭。安いな」

二千銭は、健常な男性が二時間働けば買える程度の代金。まあ、質からすれば安いと言えるであろう。

「靴の原価と義足の原価は同じです。高級義足の原価は長靴の原価と同じです」

「げんか？」

「加工する前の値段です。素材の値段、ということですよ」

トビーの補足のともかく、やはり高級義足は手がかかるから流石に高い。義足も靴と同等の原価・加工にしては、高い。

「……むう」

「米は何故高くなるかご存知ですか？」

「……………必要とされているかららしいな。セイギがかなり前に言っていた」

だから?というような表情で問いを投げてきた傍らに佇む幽鬼のような白さを持つ男を見て、皇帝は自分の口を抑えた。

『何を何をと人に問う前に、自分で考えてからその是非を問われるがよろしいかと』と言われたことを思い出したのである。

「……………必要とされているから高くなる」

「は？」

「義足は必要とされているから、高い」

皇帝は、全く常識も何も知らなかった。逆に言えば、明度が極めて高いといえる。

「つまりは、刑法が重いのか」

無駄な知識や余分な汚れを知らないが故に、彼は細部から大要を、大要から細部を掴めた。

その真の理解を可能にするのは頭脳の中にある眼力であるが、その眼力を養うのは知識だけではない。知識は補助と言ってよく、知識に寄り掛かれればかえって囚われ、眼が曇る。眼が曇れば眼力が落ちのだ。

敢えて言うならば知識は、感性と悟性に積もってくる垢であろう。

「……軽くするように、計ってくれ」

「すぐさま取り掛かりましょう」

純な民を安寧に導きたいという心胆から発せられたこの一言が、彼の執った初めての親政であった。

刑法は皇帝の一言ですぐさま見直され、寛容な方面へ変法させるべく一月の間に二、三の案が出され、斬刑が三十二減り、五十三の懲役が罰金に、百七の罰金が嚴重注意へと変わる。

帝国はじまって以来、大臣が内密に内務を委任してからの半年間ほど、帝都の刑法が緩くなり汚職役人が追放されたことはなかった。

優秀な地方役人が——革命軍への内通の心配がない西部に限るが——中央に栄転し、汚吏を免職したり東方に飛ばしたりして組織自体を建制化し終えた彼らが辣腕を振るい、下級官僚の給料が値上げされる。

この値上げにより、賄賂の横行は一定の減少を見せた。そもそも生活が困難なほどに苦しいから賄賂をとらざるを得ず、その後も惰性で賄賂をとっていき、腐り切るといふことが多いのだ。

そして。

「ラン、スラムや戦災孤児を集めて国費で孤児院を作ったことは知っているな？」

「は？」

「お前の履歴書を見るに、教えるのが巧いと見た」

今も昔も水運と陸路両道の交通の要衝であり、帝国でも有数の豊かな都市・シヨウヨウで教師をやっていたのが一念発起して当時の太守に仕官し、スピード出世を果たした後に帝都へ異動。

帝都でもシヨウヨウで見せたほどの速さではないものの素早い出世を見せ、十二人しかいない内政官にまで登り詰めたのである。

因みに、現在のハクには三人の内政官が付いていた。

もっぱらシヨクに居るシヨウイ、両カンチュウをうろうろしているセイギが古株、あとの一人がこの新入りのランである。

「まあ、人並みにはできますが……」

「七日間ほど行つてこい。公務扱いだが、休暇のようなものだと思つてくれて構わん」

ランに回される仕事は兎に角多い。具体的に言うならばハクの次に多かつた。

ハクが政務を引き受けてからというものの、その改革に滞りが無い。帝国はひたすら、着実に前に進み続けている。

「将軍も休まれては如何ですか？」

「私が休んでしまえば、代役がない。改革がその分が止まるだろう。止まればその分民が苦しみに喘ぐ時間が長くなる。わかるな」

ハクが一時間休めば、決済は五時間遅れる。決済が五時間遅れば文面の修正と完成までは三日遅れ、完成が三日遅れば公布が一月遅れることは間違いない。

公布が一月遅れば、施行には三月、民の間でその改正が当たり前となるまでは半年かかる。

「休まないのはいつものことだ」

本当のことを言うなれば、休まないのではなく、休めないのだ。

だが、彼はあくまで自分で決めたというスタンスを崩さない。

何故休まないのか。それは恵まれている者は民の為に尽くし、生きた証を一つでも多く残さねばならないからだ、と彼は答えるだろう。

「孤児院の子らが待っているぞ」

「……では、くれぐれもお倒れなきように」

「倒れようとしないう限りは倒れることはない」

死のうと思わない限りは死なない、という例の根性論と同じく、彼は殆ど不眠不休での仕事が可能だった。

無論、肉体に備わる体力とは別な意志の力で、である。

「おーす。いつものことだけど、顔色悪いね」

「チエルシーか。何だ」

密偵には十分な精神の休息と快眠を。それが彼女のモットーであった。

だからヨガをして身体をほぐすし、紅茶を飲んで精神を休める。

彼女の外見と合わない趣味は、必要に応じて備わったものであると言ってよかった。

「これ、清流派の下級官僚の汚職名簿。清流つつても、あれだね。濁流派を潰す為なら手段を選ばないっばいから、掴むのは簡単だったよ」
「苦勞」

三十枚程のリストを一枚一枚確認し、法と照らし合わせて相応しい刑罰を決めて帝都警備隊を動かす。

このハクによる改革の裏で、セリユー・ユビキタスもまたその職務を全力でまっとうしていた。

「……で、どんくらい寝てないの?」

「十日だけだ。大したことはない」

十日。十日椅子に座りっぱなし、書類を書きっぱなし、政策の修正案を編みっぱなし。

槍も持っていないし、鎧もつけていない。弓も引いていないし、馬にも乗っていない。

帝国でも有数の武技を誇る槍兵は、完全にただの官吏となっていたのである。

「……死ぬんじゃないの?」

毎日快眠を貪っていたチエルシーは、軽く気が遠くなる感覚を覚えた。

寝て起きて変身して、情報集めて書類を書き、提出する。

そんな毎日を送っていた彼女からすれば、昼夜問わずに仕事をこなしているというのは想像すらつかなかった。

「死にはせん」

「寝たら？」

「……私が一時間休んだら、何だかんだで民が苦しみに喘ぐ時間が半年ほど増えるのでな」

ただでさえ不健康な幽鬼のような肌に峡谷の如き深い隈ができ、一層不健康な雰囲気醸し出している。

最早その姿は、幽鬼どころか亡者に近かった。

「……どうでもいいけどさ。かなりマシになったんだから、もういいじゃん」

「内政に終わりはない。戦争は見える敵を討てば終わりだが、内政に敵がない。敵がなければ勝ちようもなく、敵がいなくば終わるまい」

終わりのない内政は、エスデスの帰還まで続くことになる。

そしてこの手塩にかけて保っている治安がとある人物の帰還でぶっ壊されることを、この時は誰も知らない。

執念を突く

自分は幸せ者だと、思うのだ。

母の生命を喪つてしまったばかりに荒れた父親に戦闘の基礎を叩き込んでもらい、酒を呑みながら繰り返し繰り返し『お前はアルマスの娘を守るのだ』と言われて育ち、父を喪つてからはそのアルマスの夫である族長によつてのびのびと生きさせてもらったことによつて武技・精神面を高みに昇らせてもらった。

アルマスの娘が出て行き、青年期になつてからは払暁から日が沈みきるまで皆の為に働かせてもらい、日が沈みきつてからは政治や何やらを自得する為に勉強に励ませても、もらった。

副官たるに相応しい男になりたいと思つたのは、自分のエゴだ。それを叶えさせてもらった。アルマスの娘にも気に入られ、今の自分はここにある。

「エスデス」

「……ん？」

長い蒼髪、氷のような鋼鉄の剣と謳われたパルタス族一の戦士アルマスの娘。

その髪的美しさと煌めくような蒼眼はきつちり親から受け継がれており、その強さまでもがアルマス譲りの凄まじさだった。

一を聞いて十を知り、一を行い十を身につける。こういった人種を天才、というのだろう。

「……いつまでこうやっていけばいいのだ？」

「役得だと思えばいいだろう」

彼は今、彼女の後ろから豊かな胸を支えるようにその下に腕を廻しているながら更に、ほっそりとした華奢な腰にも手を廻している。

更には長い蒼銀の髪が彼の首を境に右、左に分かれて流れる川の如く垂れていた。

布一枚隔てた柔らかな尻に腿を敷かれながら、彼の意識はそこにはない。

「……なあ」

「はい」

頭一つ分低い背丈であるが故に、後頭部で背後の人間背もたれを叩けば自然と胸に当たる。

そして、柔らかな髪がふわりと首元をくすぐった。

「お前、女の髪が好きだろう」

「そうらしいな。どうも」

蒼銀の髪をやけに美しく保とうとするまでは、わかる。

しかし背もたれにされている時や対面で抱きしめ合っている時とかに廻した手を駆使して髪を優しく触りまくってしまつては、最早弁明はできなかつた。

「癖のない、長い髪がもつと好きだろう」

「ああ」

「お前の父もそうだった、らしい」

蒼銀の髪をゴツゴツとした、されど武張った雰囲気を感じさせない指で優しくほどき、梳く。

指に触れる柔らかな感覚と、きめ細やかな滑らかさがハクの好みに合っていた。

「父は貴女の母が好きだったようだ。何回かその容色や内面の素晴らしさについて聞かされたことがある」

「美人だったらしいな。私に似て」

確かに彼女の容色の美しさは隔絶としている。内面に残る稚気の残滓とは違い、その色は既に女盛りの味がある。

こんな時にも自己アピールを欠かさない彼女の内面に一種の微笑ましさを伺い見て、ハクは柔らかく相貌を崩した。

誇るに値する美しさを持たぬ者が自らの容色を誇れば、憐れさを孕んだ虚しさが出る。

誇るに値する美しさを持つ者が自らの容色を誇れば、即物的な浅ましきが出る。

だが、何というのか。彼女は自らの容色を別段誇りに思っていないくせに、自分の好きな男が他の女に目を向けた瞬間に誇り始めるのだ。

この焦りとも独占欲ともつかない可愛らしさの元は、稚気だと言つていいだろう。

「わ、笑うな。傷つく」

「いや、綺麗だぞ。貴女は」

「やめろ……」

外面の愛らしさならば、幼い頃の方が勝っていた。

外面の綺麗では、今が勝っているだろう。

可愛さならば、幼い頃。

内面的には変わっていないような気もするが、人格に円熟味が増えて棘と粗が丸まった。

「綺麗だと思うぞ。本当に」

「……やめろ」

ぽつり、と。

耳までを真っ赤にして、エスデスほ俯きがちにそう呟いた。

何というか、いつもいつも彼女は自爆でハクに追い詰められている。

「眼には海の如く深みを見せながら、いやらしい濃さを感じさせない蒼。髪は宝石もかくやと思う程のきらびやかな蒼銀。肢体も太みがなく、細い。柔らかくもあるしな」

「や、やめてくれ……」

「貴女は自らの容色を褒めた。だから私も褒めようとしているだけだ。やめる要因がどこにある？」

折れるほどに強く抱きしめたことのない腰部を、ハクは少し自分の方向に僅かに力を込めて引き寄せた。

やはり、細いというのが持ったり手を回したりして身に沁みた実感である。

「ハク……」

「はい」

「な、やめてくれ。私もお前の容姿に関しては何も言わないじゃないか」

ハクは、あまり褒められるような容姿をしていない。よくよく目を

凝らせば顔の作りはいいのだが、無表情からくる伶俐さと冷酷にもとられる齒に衣着せぬ言葉、そして何より幽鬼の如き蒼白の肌がそれを潰した。

しかも、細い。この戦乱の時代では筋肉達磨のような男の方が頼りになるというのに、あまり筋肉がつきやすい体質ではないのである。

寧ろ、目に見えるような形ではつきにくいとすら言える。

身体が細い。そして肉体と一体化している鎧を常に纏っているが為にそれを身体に沈ませている時は更に細くなり、肌色と相俟って病人にすら見えるのだ。

エスデスから見れば、このような欠陥は知らぬとばかりに良い所ばかりに目が向く要素でしかないのだが、傍から見れば正に美女と幽鬼であろう。

「……そういえば、陛下に武人に見えず、平凡にしか見えないと言われたのだが、どうだ」

「……不気味な平凡、だな。言うならば」

ハクを見れば、静の面に偏重し、磨かれた武における達人とはどのようなものかがわかると言って良い。

心身の力の偏りをけっして他人に悟らせない為にそうなるのだ。その平凡が非凡に変わったとき、相手は斃れているのである。

これを『不気味な平凡』と評し、内面を見据えたエスデスの心眼も確かなものだった。

ともあれハクの非凡さは誰にもわからないものであるに違いなく、人には隠顕があるのに彼には永遠に顕がない。

「隠のままに人の世を生きていくのが達人というものなのだろう。」

「……不気味な平凡、とは？」

「老練の鷹に爪が無いのを見たような感じだな。有り得なくはないし、寧ろ有り触れたことなのに、私はこう……怖さを感じる。無知のまま殺す気のお前と相対せば死にそうだなとも、思うな」

彼の武技は、一見するところ本来の物から一段や二段どころではなく何段も低く見えた。

強者というものが鞘をも斬り裂く鋭さを持つのに対し、彼はピタリと鞘に収まっているのだろう。

更には、その収めた鞘にはその錬鉄で鍛えられた剣を木剣に見せる術があるのだ。

だからこそ、彼は非常に圧しが弱い。初対面のチンピラにすら舐められ、力を量らねば生きて世を渡っていけないヤクザ者にすら格下に見られる。

殴りかかってきても茫洋としたままで避けようもしないから尚更『反射神経が鈍い奴』と侮られるのだ。

彼は『政の拙気が故に民から振るわれる力は肅々と受け止めるべき』という方針で避けないだけなのだが、そんなことはヤクザ者やチンピラの知ったことではない。第一、為政者という為政者すべてがそんな覚悟をしていたらこの国はここまで腐りはしなかつただろう。

まあ言うまでもないが、そのような輩にはエスデスの昇天道場が待っていた。因果応報である。

「……………話は変わるのですが」

「うん」

髪を緩慢に梳いたり撫でたりしていた手が止まり、綺麗なつむじを描く頭頂部に手が乗った。

「貴女は、蛇のような女だな。感嘆に値する。私にはとてもその執念深さは真似できん」

史書に記すならば確実に注釈を付けねばならないであろう。もう、こんな言い方しないから初対面のチンピラにブチ切られるのである。

「ああ……………うん。そうだな」

そして、髪の手で方によってほしいの話題の変遷がわかるあたり、彼女も流石であった。

一応これでも褒めているつもりなのである。

「私は喰らいついたら離さない女だからな。お前を一生逃さん」

「浮気、か。したらどうする?」

「相手を殺す。で、お前は監禁だな」

腕は抱きしめてもらおう為に斬らないし、脚はデートの為に斬らない。やって拘束かな、と。

エスデスは、零コンマ一秒の躊躇いもなく、彼の人権剥奪の決定を下した。

注釈を付けるが、彼女は正気であるし、本気でもある。つまり、嫉妬に狂っている訳でも冗談でもなかった。

「だろうな。だから蛇がお似合いだ」

女は——と言うか、エスデスは蛇である。

愛が深く、一途。つまるところは個人に対して執念深いし、略奪愛の心得もあると言える。

狡猾とは言い切れないが賢く、俊敏でなおかつ強い。狙いを定められたら運のツキだった。

「私が浮気したら？」

「それもありだ。咎めはせん」

訳すならば、私は貴女のような独占欲は持っていない。勝手にやればいいと思うだけだ、ということだろう。

天性我欲が薄いのだ。好きだし、愛してはいると思うが何よりも彼女の意志を優先し、尊重する。ある意味エスデスの強引さや執念深さとは対になっていた。

「……嫉妬は？」

「どうにも、人を恨む気にはなれんのだ」

そんな困ったような顔をしなくても、それは知っている。が、少しくらいはしてほしい。

例えば力づくで自分を奪ったり、とか。

彼らしからぬ荒々しい手つきにも、彼女は憧れを抱いていた。

「しかも、何だ。他人の女を奪う気にはなれん。奪われるのは構わんのだが——」

余計なことをペらペらまくし立てる口を無理矢理唇で塞ぎ、改めて背面から対面へと姿勢を移す。

「呪いの装備は外せない。我欲が薄いところがあるようだが、残念だったな。私は一生お前から離れないぞ」

「離れない装備には慣れていきます」
いつも通りの鉄面皮に、変化はない。
が、仄かに笑いが見えた、気がした。

予兆を突く

ハクの配下にチエルシーと言う女性がいる。

童顔メガネな彼女は、ハク直属の侍女長であった。

少なくとも、表向きは。

橙色の髪いつも舐めている飴が特徴的な彼女は実は化粧箱の帝具『変幻自在』ガイアファンデーシヨンの使い手であり、超一流の間諜である。

「買い物かあ……」

彼女の故郷での女官の制服に、首から掛けたホイッスル。適当に突っ込んだ化粧用具と奥の手用の手鏡が、彼女の専らの携帯物であった。

ホイッスルは、呼ばれて飛び出て正義執行な同僚を呼び出して盾にする為。

化粧用具は変装用で、手鏡は戦闘用と言った分類であろう。

「……まあ、仕事なんだけどねえ」

別に自分じゃなくても、例えばエアとかファルとかでも良いではないかというのが彼女の考えであった。そもそも彼女は基本的に潜入捜査が主な為、休みが殆ど無かったのである。

もつとも、最近一ヶ月間は完全に主が休眠態に入っていたからひたすらヨガをしたり紅茶を飲んでリラックスしたりの日だったのだから、別にブラックというわけではないが。

「あー……林檎林檎」

「んあ?」

黒髪オカツパ、腰にカトラス。

カトラスの柄に刻まれた印と文字、纏う雰囲気からして、それは明らかに帝具だった。

「よお」

「は———ったあ!?!」

挨拶がてらに刃をどうぞと言わんばかりに、カトラスが鞘走る。

辛くもヨガで鍛えられた柔軟さで鳩尾から上下両半身泣き別れ

コースを回避したものの、チエルシーは正にギリギリだった。

そもそも、何故こうなつたかがわからない。自分はただ、林檎を買いおうとしただけではないか。

「何、林檎!?!林檎が悪いの!?!」

「悪いのはお前の存在だ!」

取り敢えず顔面目掛けて投擲した林檎がカトラスで両断されたのを見て、チエルシーは懐から林檎一個分の代金を店主に向かって投げ、逃走する。

初対面のチンピラに人格どころか存在そのものを否定されるといふ中々に稀有な経験を体験したチエルシーの思考は、一つだった。

逃げる。それだけである。

「待て、眼からビーム女!」

「はあ?!眼からビームだすのはハクさんだけで充分だつて——」

迫る足音に立ち向かうように振り向き、チエルシーはかつ飛んできた真空の刃を屈んで避けた。

言葉を途中で切つてまでやる行動は、ただ一つ。

「——言つてんでしょ!」

足払いである。もとよりまともに勝負する気もなければまともな勝負になる実力もないのだ。

ならば、意表をつくにしても時間稼ぎが第一であろう。

「うおっ!?!」

「ださっ」

ぼろっ、と。思わず漏れたかのような一言に残心の状態で足を払われ、尻餅をついた男の頭の中の何かか切れた。

「……………殺す」

「やば、つい本音が……というか元から生かす気など微塵もない太刀捌きだったから今更感がすご——」

いんだけど。

おそらくはそう続くであろう言葉が真空の刃によって物理的に斬られる。

正にその言葉を切られた形のチエルシーはひらひらと落ち行く自

分のリボンを見て、思った。

死ぬかも、と。

「次は耳だ……」

「お断りします」

熊に相対した時の人間の如く、チエルシーは背中を見せずにジリジリとさがっていく。

真空の刃は、喰らえば即死。追いつかれたらもれなく即死。背中を見せたら避けることは困難だし、先ほどのように偶然という名を冠した女神が彼女に微笑んでくれるとは限らない。

ならば。

「……なんの真似だ」

「笛を吹く真似、かな」

天を切り裂くような笛の音が帝都を駆け、残響を残して消えた。

別に帝具でも何でもない、文字通りなんの変哲もない笛。貴重な一瞬を使ってまで唐突に鳴らしたそれは、黒髪オカツパ腰カトラスな不審者の僅かばかり残った警戒心に触れる。

見るからに戦闘力がない。鼠みたいに脚が速いだけだが、それも彼の友であるシユラには劣るだろう。

「なるほど、仲間でもいんのか」

「……逆に言うけどさ。この状況でその結論に行き着くまでに三分かかるってのは、どうなの？」

ほら、知的的に——」

真空の刃が、再びチエルシーの計算された挑発を切った。

彼女からすれば、いきなり斬りかかってきた黒髪オカツパ腰カトラスはただのキレやすい近頃の若者でしかない。つまり、先の無意識に出てしまった挑発で充分に警戒心を殺げていると思っていたのである。

だが、まだ考える頭脳があった。そもそも彼女からすれば黒髪オカツパ腰カトラスは初対面でしかないが、彼からすれば怨根渦巻く仇敵であり、先ほど出たシユラという男に着いて帝都に行く原因の一つでもある。

「テメエはシユラにプレゼントしてから、殺す」

「うわあ……本人の前でそれを言いますか……」

女として凌辱してから殺します、と明言した黒髪オカツパ腰カトラスに、チエルシーは少し頭を抱えた。

繰り返すが、彼女には何故林檎を買いに行くだけで不審者に襲われたかがわからない。そもそも遺恨の元がわからない。

「私、君に何かした？」

「西の海で光る舟に乗ってたのはお前だろうが！」

光る舟、西の海。

その二つのキーワードで探してみれば、チエルシーの頭の中には光るものがある。

「海賊かあ……」

チエルシー若かりし頃、彼女は休暇をとってはハクに舟を借りて空を翔け、海に浮かべて釣りを楽しんでた。ヨガ・紅茶に続いてまたしても年寄り臭い趣味だが、それはこの際どうでもいい。

問題は、その時に海賊に襲われている商船を見つけたことである。本質的に善人であり、怜悯になりきれない甘さを人格の内に含んでいる彼女は、容赦なく『護身用に』と言われて積まれていた45センチ主砲をぶっ放した。

砲弾ではなく光線の束を集束させて飛ばすそれは、見る者すべてが頷く正しきビームであつたらう。

「あの所為で部下は全滅、船は轟沈。海賊を廃業せざるを得なくなつた……この恨み、晴らさせてもらおう」

「……なんだ、逆恨みじゃん」

チエルシーは安堵した。海賊かあと言ってみたものの、あの時商船ごと消し去ってしまったている可能性も無きにしもあらずだったからである。

助けようとしての間違いだとは言っても、罪は償うべきだった。

もっとも、罪など犯していなかったのだが。

「問答無用、だ！」

「……あー、めんど」

頭を一、二度掻き、チエルシーは迫りくる斬撃をまたしても避けて、言った。

「ここならいつか……」

「何？」

場所は路地裏、人気もない。人目に関しては人一倍敏感な自分がそれを感じないのだから、それもない。

建物と建物の隙間。日は閉ざされ、暗い空間。

パチリ、と。風の吹きとおるしかない暗がりには、鳴らした指の音が鮮やかに響く。

「奥の手」

——変身。

手鏡から漏れた光がチエルシーの爪先から頭までを包み、隠す。

黒髪オカツパ腰カトラスことエンシンは、その強い光に思わず身構えた。

そして。

「……う？」

特に何も起こらない。起こった変化を強いて言うならばチエルシーの姿が消えているくらいであろう。

騙された、と気づいた時にはもう遅い。

「帝都警備隊長、セリユー・ユビキタスですー」

件の笛で呼び出された、執行者の姿がそこにはあった。

配属を突く

「不幸だなあ……」

不運と言う名の陰を背負い、チエルシーは林檎を片手に歩いていた。

奥の手と偽りながらも堂々と変身行程を一からスロー再生の如く遅らせてやることで、彼女は黒髪オカッパ腰カトラスことエンシンの追跡を逃れることに成功した。

恐らく黒髪オカッパ腰カトラス——本名はエンシン——は駆けつけてきた帝都警備隊長殿に捕縛され、連行されていることだろう。何せ、帝具の相性が極めて悪い。

片や、切断型に分類される殲滅力に欠ける帝具。

片や、生物型に分類される殲滅力がなければ突破困難な帝具。

真空の刃をいくら飛ばそうが、『再生・自己強化』に特化した帝都警備隊長セリユー・ユビキタスの帝具『魔獣変化』ヘカトンケイルは突破できない。

そこまで考えて、彼女は三種の笛からセリユー・ユビキタス呼び出し用の物を吹いたのである。

「む、チエルシー。無事だったか」

「……その言葉は素直に嬉しいんだけどさ。踵から出てる煙って、何？」

突然目の前に現れた鎧もしていないハクは息こそ切れていないものの、一目で全速力で走って来てくれたのだとわかる格好をしていた。

踵に於いては、特にそれが顕著であると言える。まあ、實際煙が出ているのは土踏まずから指にかけての平な部分なのだが。

「……ああ、これは全速力で走ってきたが故の弊害だな。許せ」

「ふーん………ま、許してあげる」

すまん、と謝る彼と少し開いてしまった距離を詰め、チエルシーは彼の右横に僅かに寄った。

悪い気はしない。悪い気はしないのだ。

「どうした」

いつもの間合いをとっていたはずが、あからさまにその間合いを詰められたことに対して訝しげな声を上げる。

鉄面皮に疑念を浮かべながらそんなことを言ったハクに、チエルシーは柄にもなく声を上ずらせながら弁明した。

「いや、ほら。襲われたから、ね?」

「らしくもないな。お前ならば敵を馬鹿にしつつ逃げてきそうなものだが……いや、まるつきり嘘でもなく、半分と言ったところか」

凶星を突かれ、ウツと詰まる。現に彼女は、ハクがふらりと現れるまでは普通に余裕だったのだ。

そもそも、黒髪オカツパ腰カトラスことエンシンゴときでは潜入捜査という一步間違えれば拷問死確定な仕事を好んでこなしている彼女の持つ中々の強心臓は破れないであろう。

「ほら、やっぱり直接的な戦闘になると怖さが増す、みたいなの?」

「……どうにも胡散くさいが、案ずるな。私は部下を見捨てはせん」

やはりそれほど恐怖を覚えていたなかつたことが見て取られたのか、ハクはどうにも解せぬというような顔をしながらもフォローに回った。

追求の手を緩めることを彼はエスデスに情け容赦ない追撃をし続けた末に、やっと学んだのである。

「つまり?」

「む?」

一言足りない、と。暗にそれを含ませたような問いを、チエルシーは投げた。

不幸の後にはそれ相応の褒賞があつて然るべきだというのが、彼女の持論である。

「……呼ばれば、助けよう。頼まれれば、叶えよう。呼ばれずとも、駆けつけよう」

「よろしく」

韻を踏むようにして言われた補足は、その彼女の持論を満たすに足りた。寧ろ、望んでいたもの以上であるとすら言える。

チエルシーは頬を赤く染めながらも、ひとまずご満悦だった。

一方、隣を歩いていった朴念仁は首を傾げた。今のやり取りに赤面すべき箇所も満悦すべき箇所も見当たらなかったのである。

一旦見つければ鋭いが、見つけていない状態では打刀にも劣る鈍さしかないのが彼の過欠であった。

「……そう言えば。朝から居なかつたみたいだけど、何してたの？」

前にも何回か触れてはいるが、彼女は侍女長である。副次的に家宰のような役割もこなしているのだから侍女長である、と言い切るのはいさか語弊があるかもしれないが、一応は侍女長ということになっている。

その彼女が、ハクの動向に着目しないわけがなかった。

「エスデスが西に行ったからな。私は彼女に貸した愛馬の代わりに徒歩で出向いて危険種を狩っていた」

「あー、可愛そうな鳥煙ね」

エスデスは、西に行っている。具体的に言えば西の国境を越えて攻め入ってきた異民族を踏み潰しにいつているのだ。

一応軍隊同士の戦いであるが故に、その帰還の目処は当分つかない。例の戦争狂の悪いくせも出ているらしいし、いくら攻めの戦では有能だと言っても時間稼ぎくらいにはなるだろう。

そしてエスデス・ハク両将の対抗馬であるブドーも地方軍の糾合に行っている。つまり、珍しくハクは帝都を開けていてもいいのだ。

因みに。エスデスに貸した鳥煙と言うのは彼が調教した馬型の超級危険種である。

その特徴はただ一つ、脚が速い。というか、速さとは突き詰めれば明確な脅威であるということを彼に学ばせた偉大な危険種であった。

「可愛そうな、と言うがな……」

「……実際そうでしょ。馬に乗ると速さが落ちる奴って、この世に早々いないと思うよ」

馬も代替わりし、帝国俊足ランキングの内一体が危険種になったりしたが、彼の一位は揺るがない。エスデスは鳥煙に大差で負けたが、彼女は腕力ではハクにも勝つ女であるから、対した弱点とも言えない

だろう。

第一、一位二位が文字通り人外なだけで彼女も十分に素早い。ただ、どうしても霞むだけである。

「……まあ、走り込みは大事だろう。が、私の真価は磨き抜いた馬術と弓術。槍術と走力は天然を多少磨いたものでしかない」
「あ、そ」

多少磨いたものでしかないと言っても、その多少は他人にとっては地獄の如きカルマであろうことが、彼女には容易に想像できた。

そして、またしてもふと疑問が湧いてきたのである。この二人の会話は、話題が定まらないことに定評があった。

「何で弓と馬なの？」

「パルタス族の男児が最初に習うのは皆、ダヌ……弓なのでな。年季の差だ。馬はまあ、パルタス族からすれば危険種からの逃走手段としての嗜みのようなものだ。自然と身につく」

パルタス族は、意外となの知れた戦闘民族である。

本来は狩猟民族だが、傭兵として雇っても非常に優れた資質を發揮したが故に対外的には『戦闘民族』の名で通っていた。

性質朴で武技に優れる——つまり、従順素直な強者が多いのである。例外的な存在であるドSもいるし、皆が皆こんな性格ではなかったが、だいたいこんな感じがパルタス族の典型的な性格であった。

まあ、辺境出身者の常として強欲ではあるが、そこは目を瞑っていれば傭兵としては最適な民族であろう。

すなわち、強欲・吝嗇でありながら質朴であり、なおかつ優れた武技を持つのがパルタス族だと言ってよかった。

「付かなかったらう？」

「死ぬだろうな」

そして彼らは、生死にシビアである。死ぬときは死ぬ、というのか。しぶとくはあるが生き汚くはない。寧ろ、死の直前に悟るような割り切りの良さがある。

強欲さがなければ飢えて死に、吝嗇さがなければ付け込まれ、田舎であるが故に質朴で、置かれた環境が劣悪であるが為に武技に優れる

のだ。都会にはない人格の典型というべき物が生まれてもなんらおかしくはないだろう。

「次に習うのは？」

「チエルヴァデイ、カタラム、ゲットウカリと続く」

「短棍、短剣、棍、ねえ……」

健気にもパルタス族独自というべき言語にまで学問の手を伸ばしていたチエルシーには、彼の非常にさらに混ざった異言語を解すことなどは容易だった。

なんだかんだで器用な女なのである。

「私は結局クンタムまでしかやらなかったが、長はトリシユールまでを修めていた」

「……なるほど」

クンタムは槍、トリシユールは三叉の矛というべき代物。つまり、クンタムまでが基礎講座とでも言うべきな代物で、トリシユールまでになると色物が増えてくるのだろう。

彼は飛ばしたが、槍を学ぶには曲棒・丸盾・長刀という工程を踏まねばならなかった。いずれも癖のない単純さを持つ武器である。

「でもさ、長は戦斧を使っただんじやなかったの？」

「トリシユールは三叉だから壊れやすくてな。その時運悪く破損していたんだ」

弓は遠くから敵を狙い撃ち、力なき子でも狩りの手助けをさせる為。

短棍は将来の主武器になるであろう長物を体に馴染ませる為、短剣は得物から素材を剥ぎ取る為、棍は短棍から更に身体に長物を馴染ませる為だった。

中々に考えられたカリキュラムなのである。

「エスデスは？」

「エスデスは型にはまらないからな。最初から長剣と短剣を振り回したりしていた」

二人揃って林檎をシャクシャクと齧りながら歩くこの二人は、幸運値が人それぞれに設定・その場の変動なしに固定されているならば間

違いなく下から探した方が速いであろうことは確かだった。

二人分を足してもエスデスどころかオネストにすら、いや、皇帝にすら届かないであろう。それほどに不幸な二人だった。

「……なんかさ、私達って不運だと思わない？」

「私は幸運な方だし、お前は決定的に間が悪いだけだろう」

不幸を不幸と思わないような男に話題を振ったのがチエルシーの失敗であろう。

何というか、彼は思考回路がズレていた。

「……いやまあ、そうかもしれないけどさあ」

「要は見方の違いだ、チエルシー。不幸だと思えば続ければ不幸しか舞い込んでこないが、幸運だと思えば変わる物もあるだろう」

なるほど、と頷けるところもある台詞である。

あるものをあるものとして受け入れ、嘆いていても何も変わらない。変わらない物を見方を変えることでその現実を変えようとする方が建設的であった。

「で、自分もそれをしてるの？」

「いや、私は幸運な方だから、要は助言のようなものだな。お前は不幸なんだろう？」

食べ終わった林檎の芯を灰に変え、ハクは纏おうとすれば重そうな鎧を纏ったままに首を傾げる。

見栄えからすれば、重そうには見えない。が、実際は極めて動作の枷となるような重量があるのだ。

胸にめり込んだ血の如き赤石と、光を織った鎧と紅光煌めく三枚の灼熱の翼。籠手と脚甲には銀と金の光彩を放つ光を編み込み、身体と一体化していることを示すように関節部分にも外甲がある。

「……重くないの？」

「体重の三倍だ。重くない訳がないだろう」

骨と皮だけみたいなの痩せっぷりとはいえ、一応彼も成人男性。筋肉も一応それなりにはついていていた。

そのの、三倍である。

「重いね」

「まあな」

それでも尚常人より速く、身体強化機能も何もついていないのだから、基礎のスペックも非常に秀でていることがわかった。チエルシーも、一応彼に変身したことがあるから、その重さもわかってる。

「……でき、超級危険種を狩った後に宮殿に行っただんでしょ？」

「辞令ならあった。キヨロク行きだ」

キヨロクといえば、リンシ・カントンと共に東方の大都市トライアングルを形成する宗教都市だった。西方にはキヨロク並みの経済的意義を持つ都市はゴロゴロあるが、東方では少ない。

何よりキヨロクには、とある宗教が根を這っていた。

「安寧道だ。あくまでも、援軍としてだがな」

「だろうね。新三獣士は？」

「帝都警備隊を動かすわけにはいかん。内政官を動かすわけにもいかん。お前だけだな」

犬担当、鳥担当は動けない。ネクロマンサーは自宅療養中。

残った最後の動員兵力は変色竜な彼女しかいない。

「慣れない任務だろうが、できないこともないんだらう？」

「バッチリバッチリ。くだらないところで奥の手使わなくてよかったよ」

修羅を突く

「アンタが親父からの援軍かあ?」

「そうだ。お前を護衛するようにとの願いを受け、キヨロクでの任務が終わるまで同伴する」

クリーム色の髪を逆立て、親と同じような黒い髪飾りを額の右脇左脇に付けた青年は、じつくりとその蒼白な肌が特徴的な槍兵を爪先から頭の先まで睨め回した。

弱い。それが彼の抱いた感想である。

彼が今まで見てきた強者という人種は、どうしてもそれらしき何か
が滲み出ていた。

例えばそれは彼の率いる秘密警察ワイルドハントの主要な戦闘員
であるエンシンであったり、イズウであったりする。

そして何より、エスデスがそうだった。

「最近の経歴を見るに、アンタは内政屋が帝具に選ばれたから出世し
た口だろうか?」

「まあ、合っている」

自分より背の低い彼を圧するが如く、シユラは傍らの机を叩いて立
ち上がる。

正直なところ、帝具に振り回されるだけの素人などは足手まといも
いいところだった。

「いいか、勝手に仕掛けて勝手に死ぬな。アンタに随分御執心な様子
の親父に何言われるかわかんねえからな」

「そう言われるならば、何があっても見ていよう。自衛はするが、邪魔
だてはせん」

頭の上がない父親の威を借りることなく従順な対応を見せた瘦
身矮躯の幽鬼の如き青年に気を良くし、シユラは一笑しながら椅子を
前に出した。

座れ、ということであろう。

「まあ、座れよ」

「ありがたく座らせてもらおう」

何の警戒もないように見える行動に、シユラは更に侮りを深めた。幼少から各地を廻って武を高めてきた彼からすれば、強者の匂いどころか、武の匂いがこれほど香ってこない男も珍しかったのである。「で、アンタの帝具は？」

「腕輪の帝具だ。今は鎧の形をとっているがな」

肉体と一体化していると言っているが、何より防御性能について何も触れていない。

これは別段、侮られた反感からくる不親切とかではなく、ただ単純に『あなたのことは息子に言い含めておきます』とオネストに言われていたからであった。

つまり、戦力として認識し、帝具の性能を認識しながらも更にもう一度念押しとばかりに確認をしてきた慎重さを彼がそれなりに評価した結果なのである。

「あー、だから自衛に関しては自信があんのか」
「ああ」

何せ、鎧がある内は無傷で通してきたのだ。無論それには本人の技量のほどもあるのが、鎧の堅牢さも加味せねばならない。

自衛に関しては一日の長があるというのが、彼の数少ない自信であろう。

「ふーん……で、何ができる」

「お前は書類仕事が苦手なのだろう。戦闘をこちらに回さないならば、せめて私が肩代わりしよう」

「内政屋だもんな」

明らかな嘲笑を浮かべながら、シユラは柄にもなく抱いてた嫉妬と緊張が消えていくのを感じた。

これは、別段注意を払うべき対象ではないだろう。

彼の心情はそんな感じであった。

「アンタは戦闘では何もすんな。適当なところにいたらアンタには指一本触れさせることなく、俺らがナイトレイドを潰してやるよ」

「期待しよう」

が、そんな甘い敵ではないぞ。

そんな一言を繋げようとして、ハクは取り敢えず黙った。

ここで言うべきかという判断を下すのに、少し考えなければならなかったのである。

「で、アンタは俺に言うことがあんのか？」

あるんだつたら聞いてやるよ」

「では、一つ。最近取り調べの際に『俺は大臣の息子だぞ』と言って威圧しているようだが、親の威を借りればお前は小物でしかない。やめた方がいいだろう」

シユラは、一瞬呆気にとられた。

今まで人形か何かかと思っていた男に、正に急所を抉られたのである。

エンシンの件とは違い、一瞬呆気にとられるのも無理はなかった。

そして、その思考の空白の後には煮え滾るような怒りが来る。

「それともそれを一々口に出さねばならないほど、お前は器量が狭いのか？」

そしてその怒りを見透かしたように、目の前の幽鬼が口を開いた。

一種の束縛のような正論が、煮え滾るような怒りの火種を消す。な

いしは、押し潰したともいってよいだろう。

「……んなわけねえだろ。俺はだいじ——じゃねえ、天下のシユラ様だぜ」

「それは何よりのことだ」

皮肉としかとれない一言に、シユラは遂に厭な物を覚えた。

何というか、彼の感じた感覚は底のない空井戸を覗き込んだそれに近いだろう。

興味を引かれるような、だが覗き込んだらどこまでも落ちていきそうなのな恐ろしさがあった。

「他にはあんのか？」

「見たところオネストを超えたいようだが、彼の名を使っている内は絶対に超えられん。お前は無意識にオネストを自分より格上だと認識していることになるのだから、尚更だ」

痛いところしか突かない直言っぷりに、シユラは流石にキレかけ

る。

真実は時として腹を立てさせる要因にしかならないこともあるということをハクは知っていた。が、一時の怒りを買うよりも忠告した方がよりその者の——つまりこの場合はシユラの為になると思っていたのである。

「……………家畜と味方残して撤退しただけのたいした戦績もない奴が偉そうな口をきくなあ、おい」

「調べていたか。まあ、合っているから否定はしない」

エスデスが帝都に上り、パルタス族の集落でまだハクが副官となるべく鍛練を積んでいた頃。パルタス族は北方異民族に攻められた。

その時に彼がとったのが家畜と味方を残してさっさと本軍を退かせるという戦術である。

無論、彼は帝国軍に責められた。最前線

「帝具も使わず十万人を討つたらしいが、こりやまた酷え嘘ついたもんだな」

「ああ、その報告には嘘があるようだな」

別段、その戦闘詳細は彼が報告したわけではない。故にその口調は、あくまでも他人事でしかなかった。

「……………出発は明日。出てけ」

「了解した」

馬鹿にしようが暖簾に腕押し糠に釘。反応のなさや表情の変わらなさに飽きを感じ、同時に見透かされるような薄気味悪さを感じたシユラは手をひらひらと振って退室を促す。

退室した彼を待っていたのは、マーズグパンサーの幼体。首にはわざと残したであろう、蝶型リボン。

「チエルシー、何をしている」

そう詰問の体を装いながら問うた瞬間、マーズグパンサーの幼体の全身が白煙に包まれた。

変身解除の印である。

「盗み聞き」

「誇らしげにいうことではないだろう」

痛快なものでも見たかのようにニヤニヤと笑いながら、チエルシーはいつもの如く左側についた。

エスデスが右、チエルシーが左。何だかんだ言いつつもそこそ彼女のことを認めているエスデスが許した最大の譲歩が、それである。

「で、どこが嘘なの？」

「殺したのは二十万五千七百八十三人だ。十万人ではない」

その報告には嘘があるようだな、と言っただけでどこが嘘かまでは言っていない。

彼女は、指摘されてもついつい一言足りなくなってしまう彼の欠陥をよく知っていた。

現に、シユラとの相互の認識には誤解があつたわけである。

「家畜と味方残して陣払いしたのは？」

「策だ。油断と追撃を誘い、覆滅させしめる為の、な。シユラはこのような姑息な手段を好まらんらしいが、無理からぬことだろう」

姑息な、というほどではない。少なくとも威を借るよりは姑息ではないだろう。

チエルシーは完全に誤解をしている彼の人の良さに苦笑いをしつつ、どうにも誤解もされやすい彼をジツと見据え、問うた。

「ナイトレイドは、どう動くと思っ？」

「動く。恐らくは適当な箇所でこちらの分岐を誘ってくるに違いない。そしてそれは、確実にフェイクだ。目的はこちらの戦力の漸滅だろうな」

「その後は？」

「こちらが護衛についたのならば地・空の両隊で攻めてくるだろう。地が陽動、凶面を見るに地中から中庭に来る。こちらが先に攻め込んだ地を潰そうとした間隙を突いて空からの奇襲部隊が護衛対象を討つ、と。ナジエンダならばそう来るのではないか」

これで詰みだと言わんばかりに渡された凶面の上を指で叩く。

未来予知というか何というか、守戦の名将であるだけにこれからの展望を見通せていた。

守戦に定評のあるエスデス軍の元副将兼参謀長は顎に手を当てて、少し捻る。

「まあ、戯言だ。お前が私から離れなければそれでいい」

「もう一声」

「ナイトレイドの指一本たりともその身に触れさせることなく守り切ってやろう」

黒髪オカツパ腰カトラスに切断されたりボンごとヘッドホンを新品へと替えたチエルシーは、戦闘民族の中でも白眉の戦闘能力を持つこの痩身矮躯の男を再び見た。

やはり、一見すればあの小物臭いシユラの方が強く見える。小物臭いのに強く見えるというのがおかしいと思われるかもしれないが、人格と強さは別物であった。

比例するところもあるのかもしれないが、現にシユラは強いだろう。あちらが適当な情報収集をしている間に、自分は黒髪オカツパ腰カトラスの情報と共に『シユラ』と言う彼の漏らしたリーダーらしき男を調べていたのだから、間違いはない。

(同じような言葉なのに桁が違うような安心感は……何だろうね)

子供が作った土山と霊峰・タイザンを比べているような感すらある。

身長的に僅かに勝るのはシユラだが、彼女から見れば土台が既に定まっていないような気すらしてきていた。

チエルシーは、弱い。それ故に人を見る目がある。本気で見ればハクの無意識的な実力詐欺を看破できる程度には見る目があったのである。

「チエルシー、これで満足か」

「うん、よろしい」

どちらが主か従かわからない会話は、まだ止まず。

ナイトレイドとの再びの戦いへ、時はその流れを止ませず流れていた。

策戦を突く

「……ホントに二手に分かれたね、このチーム」

「定石だ。仕方があるまい」

ロマリーの街での情報収集の結果、シユラ率いる秘密警察ワイルドハントはナイトレイド一行が二手にわかれたという情報を掴んでいた。

ナイトレイドのボス・ナジエンダ率いる一隊は南——即ち革命軍の本拠地へ。

ナイトレイド一のアサシン・アカメ率いる一隊は北——即ち安寧道が本拠を置くキヨロクへ。どちらに向かわれてもきな臭く、如何にも何かありそうな雰囲気である。

革命軍の本拠地へ向かわれたならば更なる増援とこれまでナイトレイドが経てきた戦闘で得た経験値すべてが革命軍の首脳にも共有されることになるし、安寧道の本拠地へ向かわれたならばこちらの護衛対象であるポリツクが危うい。

安寧道は、広く民衆に知られた新興宗教である。『現世で徳行を積めば死後に安寧がもたらされる』という——つまりは現世がろくでもなく、苦しいが為に来世や死後に願いをかけるといった思想が流行りやすい傾向にあるのだ。

これまでも多かれ少なかれこのような思想を持つ宗教はあったが、安寧道はその完成形であり、最大勢力であると言っただけだろうか。

「あの、さ。戦力は小分けにせず集中運用した方がいいって前に言っただけじゃなかった？」

「それも定石だ。どちらを取るかは指揮官の自由だが、私ならば戦力は小分けにせず使うとただけに過ぎん」

要は二兎を追うか一兎を確実に仕留めるかの差でしかない。前者は投機的な作戦であり、後者は堅実さを感じさせる作戦と言えた。

前者を採り、なおかつ分割した二隊が敵の撃滅に成功すれば敵の連絡線をも破壊することができる。後者を採れば連絡を許し、更には大勝を得られないものの確実に敵の分割した一隊を磨り潰すことができる。

きるのだ。

功を焦っているシユラや自分の腕に絶対の自信を置くエスデスならば前者を採る。

功績よりも敵戦力を漸減することを優先し、自分の腕にそこまでの信頼を置いていないハクやそもそも弱者なチエルシーからすれば、後者が魅力的に写る。それだけのことであった。

「チエルシーさんも分割させないかなー……」

「何故だ？」

「そりゃ、全員集めても100パー勝てる訳じゃないからだよ。200パー勝てるなら分割するけどさ」

石橋を叩いて渡る質なチエルシーからすれば、前述の通りにシユラの採った作戦は危うく見える。

そもそも敵を侮つてもろくなことはない。骨身に沁みさせるが如く恐れ、心胆の底から相手を怖がり、自分と相手との決定的戦力差に泣きながらも、どうにかして勝たねばと言つて脳髓を振り絞つて考えるのが彼女の戦いだった。

このような、不確定な侮りを基盤にした作戦には到底命を預けられない。

「勇気にもなるが蛮勇にもなる。それが若さというものだろう」

「ハクさんって、まだ23だよね？」

老将の如き呟きを漏らしたハクにすかさずツツコミを入れ、彼女は取り敢えずおし黙る。

詰まりは、次の彼の言葉を待つことにした。

「まあ、私は生まれた時から生命の危機に晒されてきたからな。死は僚友のようなものだ」

「というと？」

「未熟児だったからな、私は」

パルタス族は、戦闘民族である。産まれた時に戦闘に耐えられそうな身体を持つ赤子のみを育て、他は殺した。皆が命を張つて狩つてきた獲物を無償で食すには、将来齎されるリターンの大きさが必要不可欠だった。

女の未熟児はその『選別』の対象にならないが、男の未熟児は対象になる。

産まれた時、彼の意識すらないときに彼は初めて死に直面していた。

「じゃあ何で生きてるの？」

「父が槍の達人だった。もともと、父はこの槍が似合う巨躯の持ち主だった」

彼の台詞を補足をするならば、彼は父の『パルタス族随一の槍使い』という威光で生かされたのである。

某かの才能の欠片でも受け継いでいればと淡い期待もあったし、彼の父が自分で彼を食わしていけたことも彼が生かされた理由の一つだった。

「四歳から七歳になるまで死にかけていないことはなかったし、七歳からはパルタス流の戦闘訓練を受けていたから」

無論、この訓練についていけなかった子らは慈悲などかけられずに殺される。

死んだのは、弱いからだ。

それで全てが許されるところにパルタス族の凄まじさと環境の厳しさがあった。

「父から学んだことは、二つ。『死のうと思わねば死なない、斃れるのと死とは同義』ということだけだ」

因みにこの二条は彼の父のあまりのスパルタぶりを諫めに来たエスデスの父に彼の父が言い放った言葉である。

このやり取りがあった時、例によって例の如くハクは死にかけていた。

エスデスの父はこの時にエスデスを帯同させていたのだから、帝国最強を誇る二人の出会いを決してよいものではなかったろう。

「じゃあ、その親父は生きてんの？」

「いや、死んだ。超絶危険種に腹を食いちぎられて、な」

死のうと思わねば死なないと息子に教えておきながらそれはないんじゃないか、と。チエルシーは静かに突っ込んだ。

何というか、やけに達観した視点を持っていたり我欲が乏しいのは、あれだろう。

幼い頃に死域を何回か彷徨ったからではないのかとすら思えた。

「……変装しろ」

「あ、はいはい」

広範囲を見渡す超視力に何か引つかかったのか、ハクは馬の尻に乗っていたチエルシーに鋭い語調で変装を促す。

シユラが引き連れてきたのはイズウ・コスミナと、黒髪オカツパ腰カトラスことエンシンの三人。

買い出しに行く時の素顔のチエルシーから髪の色やら顔形やらを変装していたが為に特に何の諍いもなくここまでこれたが、はつきり言って彼女はワイルドハントにいい印象を抱いていない。

故に、シユラが未だ伏せられた敵に気づいていないことを、ハクに言って注意を促すように言わなかった。私情が多量に混じっているが、殺されそうになった挙句に誘拐・陵辱の最悪なコンボを食らいそうになった彼女からすれば、

『勝手に死ねばいい』

というのが正直なところであつたらう。

「シユラに注意を促そうと思うが、どうか」

「チエルシーさん知らなーい。というか、あんだけ大口叩いたんだから気づいてんじゃないの?」

いつものからかうような語調とは別な、悪意を毒棘に含ませたような割と辛辣な言い方をしたチエルシーに、ハクは僅かに眉をひそめた。

基本的にはシビアな現実主義者ながら、どこかに甘さと優しさがある彼女の冷めきったような態度を見るのは、これがはじめてだったのである。

「……いやに冷たいな。どうした」

「べつつにー?」

ハクは、彼女がエンシンに襲われたことを知らない。知っているのは『襲われ、笛を吹いた』という事実だけに過ぎない。

つまり、彼はチエルシーがここまでワイルドハントに対して伶俐さと毒棘を見せる理由を知り得なかった。

「……まあ、気づいているならばいいがな」

「そーだね。いいんじゃないの?」

死ねば。

彼の言葉足らずとは違う敢えての言葉足らずの辛辣さに、思わずチエルシー自身が辟易した。

他者に恨みを抱き、それを発散しないままに反芻するとそれは濃くなる。どうしようもないが故に、身体に溜まる毒が増すのだ。

「……………チエルシーさん、ちよつと黙るね」

「どうした。具合でも悪いのか」

「強いて言うなら……………気持ちの整理、かな。具合は悪くないから気にしないでいいよ」

いつもの如く鳥になり、ハクの肩に爪のついた脚を喰い込ませながらチエルシーはむつつりと黙りこくった。

彼女は黙ることで思考を一旦冷却させて、入れ替える。

喋っている内に恨みやなにやらが雪だるま式に肥えていく質であるが故に、本来は喋らないことよって思考に意識が偏重し、逆効果にしかならない『黙る』という行動も彼女にとっては有効だった。

「はい、完了」

「切り替えが速いな。流石だ」

「まね」

軽さを象徴するかのような略語で褒め言葉に対して『当然だ』と言わんばかりの発言を返し、彼女は辺りを見回す。

何か、進むに連れて嫌な予感がしてきていた。

「ハクさん、嫌な予感しない?」

「ああ」

ワイルドハントのメンバーは全帝具の中でも五本の指に入る性能を持つ帝具・『次元方陣』シャンバラを持つシユラ。

帝具を使わない侍・イゾウ。

超音波で敵を内部から破壊する『大地鳴動』ヘヴィプレッシャーの

使い手、コスミナ。

後は真空の刃を飛ばす『月光麗舞』シヤムシールの使い手の黒髪オカッパ腰カトラスである。

一方、ナイトレイドは鉄壁の防御力と身体強化、トリツキーな奥の手を併せ持つ説明不要の強者・ブラートの使う『悪鬼纏身』インクルシオ。

ナイトレイドの希望・アカメの使う一斬必殺の名に恥じぬ性能を持つ一撃必殺の帝具『一斬必殺』村雨。

ナジエンダからメインが継承したピンチになればなるほど火力が上がり、如何なる難局でも突破可能な『浪漫砲台』パンプキン。

パンプキンと入れ変わるようにナジエンダに適合した、未だ奥の手を使わずにいる火力不足なワイルドハントの天敵、生物型帝具の最高峰、『電光石火』スサノオ。

元ナジエンダ軍のラバックが使う応用力の高さが自慢な糸の帝具『千変万化』クローステール。

潜在能力は將軍級のタツミが使う、持ち主の潜在能力を引き出す仮面型の帝具『超力噴出』バルザック。

肉弾戦特化なレオーネが使う、高い治癒力と身体能力を使用者に与えるベルト型の帝具『百獣王化』ライオネル。

そして、シリアルキラー・シエーレの全ての物質を斬ることのできるシンプル且つ厄介な帝具である『万物両断』エクスタス。

ワイルドハントは、使い手の質でも量でも、帝具の質でも量でも負けていた。

「……………これ、どーすんの?」

「お前は私が命を懸けてでも守り抜く。心配はするな」

率直な言葉は屈折させようと努力している彼女の心を見事にぶち抜く。

チエルシーは、思わぬ不意討ちに倒れた。

「……………」

「どうした。まだ心配か」

チエルシーは鳥から前段階の人間変装態に戻ってしまう程度には

動揺している。というか、後一寸自制心が弱かったならば彼女は素顔に戻っていた。

割と殺人的な台詞を軽々と吐くのが、彼女の上司の難点である。

「……も、元々。元々心配はしてないから」

「そうか」

鋭さを増した鷹の目がある一点を捕らえ、離れる。

チエルシーは最早鳥になる気力もなく背中に力なく己の身体を凭れさせ、ただ馬の尻に乗る人と化していた。

「来るな」

「何が？」

目の前を通る、一筋の閃光。コスミナがこめかみを撃ち抜かれて倒れ、前方に八人の影が現れる。

槍。

刀。

棍。

手甲。

剣。

無手。

鍔。

それぞれ持つ得物は違うが、纏う殺気の質は同じだった。

「ナイトレイドだ」

不全を突く

「シユラ、どうする」

「ああ!？」

人数的には八対五。戦力的には八対三。割と動揺しながらも冷静に戦力差を掴んでいたシユラは、隣からかけられた声に対して苛立ち混じりの声を返す。

正直なところ、彼には全く余裕がなかった。流石の彼も八対三と言う凄まじい劣勢で慢心できるほど頑強な神経をしていなかったのである。

「援護をするか？」

いつも身に纏っている黄金の鎧を身体に沈め、両手でもって二丁のクロスボウの引き金に指をかけながらハクは問うた。

正規の弓ではないが、連射性ならば自動で次発装填が行われる機能のついたこちらが勝るだろう。

「……無いよりはマシだ」

「だろうな」

至極ごもつともなシユラの意見に頷きを返し、ハクは二挺のクロスボウを密集隊形をとるナイトレイドへと向けた。

ナイトレイドからすれば、防御に秀でた槍兵がいきなりガンマンスタイルに転職したということになる。

彼は先ず、少し驚いた。先の戦場たる竜船で槍兵としての優秀さを見を持って味わされていたからである。

まず、疑った。身体の調子が悪いのか、或いは何かの制約でもあるのか、ワイルドハントの手先となる事を良しとしていないのか、こちらを舐めているのか。

四つの内、まず四番目はありえない。他人を舐めてかかるような粗忽者であれば竜船でとつくに討たれていた。

そして、一番目もない。オネストの切り札の二枚の内一枚を、回復が不十分なままに送り出しはしないだろう。

そして、制約に関しては考えても仕方がない。誰に課せられたか、

或いはどのような意図で己に課したのか。それがわからない内に判断すれば死を招く。

あるならば二か三番目だが、仮定できるのは三番目だろう。今までの良識ある行動を見るに、いくら嫌疑のかけられた罪人候補といえども取り調べと称して虐殺するワイルドハントには必ずしも好印象を抱いていないのは殆ど確実と言ってよかった。

フブラート、レオーネ、タツミ、シエーレが抑えろ。スサノオはあの黒髪オカツパ腰カトラスを、アカメは侍を。大臣の息子はラバックが討て

了解、と。輪唱するかのようにそれぞれの声が鳴り、止む。

革命軍は黒髪オカツパ腰カトラスことエンシンがセリユー・ユビキタスに完封負けを喫したことを知っていた。

セリユー・ユビキタスの帝具は、ナジエンダの帝具である『電光石火』スサノオの下位互換と言える。

無論、内部エネルギーを使うことで使い手に優しい設計になっている『魔獣変化』ヘカトンケイルの方がコストパフォーマンスに於いては優秀ではあるから一概に全てにおいて下位互換とは言い切れないが、少なくとも戦闘技能に関してはそうであった。

が、侍ことイゾウと大臣の息子ことシユラに関しての情報は無い。イゾウは他国人だしシユラに至ってはどこにいたかすらわからない。しかし、この情報のない状況に於いても確実にわかることは、ただ一つ。

イゾウに、帝具はないということであった。

帝具には独特の妖気のようなものがある。何というか、見たらわかるのだ。

イゾウの剣には邪気はあるが妖気がない。つまるところは帝具ではない。

帝具というそれだけで勝負をひっくり返しかねない不確定な要素がなければ、勝てる。

アカメに互する剣の使い手など、帝国にはエスデスしかいなかった。

「――葬る」

「おお……江雪、今ナイトレイドの血を吸わせてやるからな」
帝国最高の暗殺者対、刀に魅入られた剣客。

「何だ、おっさんかよ……」

「髪が左右非対称だぞ、オカッパ」

元海賊対、生物帝具。

「チツ……面倒くせえな」

「なーんか因縁感じるねえ、あんたとは」

大臣の息子対、豪商の四男坊。

「何だ、スタイルチェンジか？」

「これが本職だ」

弓兵対、槍兵と獣人、大器と鎧に対するメタ帝具使い。

会話も対峙もそこそこに、一つを除いた全ての戦端がすぐさま切つて落とされる。

情報収集の入念さと、相性の研究からのメタ。

両・質ともに勝つていても対策を怠らなかつたナイトレイドのペー
スであった。

「ハク、久しぶりだな」

「ああ」

出会ったならばすぐさま殺し合いに発展する程の仲である二人の
会話とは思えないほどの朗らかな語気に、タツミは僅かに驚く。

まだまだ未熟な彼には未だわからないが、心身まで戦士となってい
る二人だからこそ、わかり合えるようなところがあった。

「どうだ、調子は」

「悪くはない。戦略で負けている以上、勝てはせんだろうがな」

これまたあつさりと負けを認めるハクに対し、糸の帝具の罨を避け
ながら彼なりに最上の注意を周囲に張っているシユラは意識を裂か
れた。

戦略的な敗北にあるのはわかるが、それを口に出すのと出さないの
では大きく違う。

その重みを与えるほどの重圧が、彼の言葉にあった。

「降るか？」

「有り得ん。戦略的には負けたが、一矢くらいは報いさせてもらわねばな」

両手に構えたクロスボウのトリガーに指を引っ掛けて一回廻し、ハクは緻密さと伶俐さを剥き出しにする。

お互い一歩動いたら、戦闘が始まるであろうことは明白だった。

本来ならば、ハクは動かずともよい。そもそもナイトレイド四人を釘付けにしている時点でその役割は存分に果たしていると言い切れる。

が、そうはいかないのがこの状況であることを、彼はまだ理解していなかった。

(やるか)

目の前にいる標敵四人は、このボウガンに備わった次発装填機能を知らない。

つまり、一発目を躲し、装填の時間を稼がせることなく一息に距離を詰め仕掛けてくるだろう。

敵は四人、クロスボウは二挺。誰を狙うかによってこれからの展望も変わり、誰を仕留めるかすらも変わってくることは間違いない。

誰を狙うか、誰を撃つか。或いはこのクロスボウ自体をフェイクにするか。

次発装填機能を早々見せてしまうのも手ではあるが、それは些か勿体ない。

「小手調べだ」

ハクは、決断した。

鎧が矢を弾くであろうブライトと、最高硬度の攻防一体の鋏型を持つシエーレを狙いから外す。

それは最安定の行動であり、ブライトならば読み切れる行動でもあった。

無論、そのことを彼と幾度となく槍を交えてきたハクはよく知っている。

「つぶねえー」

発射される前から走り出していたブラートが忽ちの内に矢を弾き、指で挟み込む。

クロスボウという形状でも、初速は弾丸並みかそれ以上。無敵の鎧の変形態の一つなだけあり、単純ながら強かった。

初速の速さと次発装填機能。光で編まれたクロスボウは、その『速さ』と『光は基本的にどこにでもある』という強みを受け継いでたのである。

「……ふむ」

やはり、ブラートの相手は弓ではキツイ。全体的な反応速度が増し、強靱な防御力を誇るインクルシオは点で突破することが難しかった。

初戦で使っていたならば違っただろうが、あれからブラートは技量が、インクルシオは装甲や機動性、腕力強化の幅が成長している。

「やはり、強敵だな」

「その言葉、そのまま返すぜ」

一切の肉体強化を施さず、強力な耐性を与えるのが腕輪の帝具・クンダラ。鎧と本体の成長にその身一つで圧倒しているハクが異常だった。

ブラートを倒せずとも、疲労を誘うことはできる。

そう判断したハクは一先ず長期戦に切り替えた。イゾウないしエンシン、或いはシユラが援護にできれば一人くらいは瞬時に屠れるようにお膳立てしておくのが、今の自分の任務だと思ったのである。

彼は、大口を叩かない。故に大口とか法螺とかがわからない。

そして、大口とか法螺は嘘ではない。周りからすれば『法螺吹きやがって』とか『大口叩きやがって』というように見えるだけでいう本人は嘘だと思っていない。

つまり、彼はワイルドハントを信用していた。少なくとも一対一に持ち込んでやれば自力で策を巡らせ、相性不利を打開するだけの能力があると思っていたのである。

後から見れば、彼は短期戦を採るべきだった。短期戦を採り、四対一を覆してワイルドハントのメンバーの援軍に向かうべきだったの

である。

「ハクさん、圧されてるよ」

「む?」

遠距離からの的確な射撃で消耗を最低限にして敵を抑えているつもりだったハクは、鎧を纏わぬ肩に止まった人語を解す鷹の言葉に驚き、窘めた。

「チエルシー、私は圧されてなどいない。敢えて硬直状態を作り、牽制に徹しているのだ」

「知ってる」

翼がはたりと右に向き、一つか二つの羽根が宙を舞う。

「葬る」

「……なるほど」

相対するイゾウを互いの刀が描く軌道の読み合いの末に討ち果たし、アカメが増えて五人になった。

即死刀をまともに喰らい、その身に呪毒を流し込まれればさしものハクとて無事では済まない。

左肩に止まっているチエルシーに負荷がなるべくかからないように頭を下げて避け、斬り掛かってきたアカメの腹に目掛けて矢を放った。

回避によって生じた隙を狙って攻めに転じたブラートの爪先にもう片手に持ったクロスボウで矢を突き立て、村雨によって防御されたであろう右のクロスボウの矢を自動装填機能を使用。再装填し直す。

奇襲を辛くも凌ぎ、アカメ・ブラート・シエーレによる果敢な攻めとレオーネ・タツミによる助攻を矢だけで十五分にわたって防ぎきり、彼は悟った。

「チエルシー、もしかするとの話だが」

「うん」

「……彼らは私よりも僅かに腕が劣るのか」

「そだね。比べんのも馬鹿らしいほどには劣るんじゃないかな」

クロスボウ二挺で何故前衛タイプ五人の波状攻撃を防げるのか。何故未だに無傷なのか。何故間合いに入らせたのがアカメの極限ま

で気配を殺した一撃だけなのか。

そんな気狂い地味な集中力とセンスが要求される戦闘を、ワイルドハントの諸君がこなせると思うのか。

チエルシーはそのところを聞いてみたかった。軽く二時間は問い詰めたかった。

が、ここはぐぐつとその問いを呑み込む。

今は突っ込むべき時ではないことくらい、戦闘センスが皆無な彼女にすらわかっていた。

「さつさと鎧を着てさ、逃げようよ」

「鎧は質に出した。手元にあるのは腕輪だけだ」

「質い？」

両手が塞がっているが故に、ハクは顎でシユラを指し示す。

つまり、くれてやったということであろう。

現に、シユラはラバックを圧倒し、且つ慢心していた。彼からすれば柵から牡丹餅式に究極の防具を手に入れたことになる。

「防御面が不安だから、と言つてな。頼まれたからくれてやった」

「所有者は、ハクさんのままだよね？」

「そうだな。彼は恩恵を得、私は負担を負っている」

現在の鎧は消費担当がシユラで、供給担当がハクであった。

こまめに攻撃を繰り返せ、且つ低燃費な形態であるクロスボウを選んだのにはそれ相応の理由があったのである。

「槍は？」

「一時的になら出せなくもないが、長時間となるとな」

お遊び鬨り殺しモードに移行したシユラに対して、この装備のあまりの貧困さ。

チエルシーは少し泣けてきていた。

「白兵戦に移行する。ボウガンも最早撃ち続けられん」

「鎧の維持コストって、全体の何割？」

「八割だ。非正規の使い手に遣ると消耗が激しい」

情けなさすぎる会話とは裏腹に、彼のとった行動は相変わらず強者の余裕めいた挑発の如きものであった。

——最後の連射で五人を射竦めて戦線を戻した末にトリガーに指を甘く掛け、無言のままに地面にクロスボウを落とす。

『来い。お前らの間合いでやってやる』

そう言わんばかり不敵な挑発に、ナイトレイドは戦慄した。

彼の内情など、彼女らが知るはずもない。単純に、大火力を残したセーブモードで圧倒されているとしか思っていなかったのである。

シユラの纏う黄金の鎧は、茫洋とした守護の塊。実体としては視界に極めて捉えにくい形だったことも、この勘違いには幸いした。

未だ警戒を緩めるところか強めたナイトレイドと、慢心気味なワイルドハント。

両者のぶつかりは、はじまった直後からその終わりが見えていた。

守勢を突く

『百獣王化』ライオネル。所有者を獣化させ、その身体能力・五感、果ては第六感までも強化させるベルトの帝具。

肉体強化がメインの帝具の中でも、この帝具は治癒力の付与という点で異質だった。

瀕死の重症を喰らおうが、即死しない限りは生き延びる。

そんな不死身の耐性を持ち主に与える帝具の癖に、非常に燃費が低いのだ。

似たような能力を持つ某鎧とは正反対である。

「シャアー！」

その獅子の如き獣の速度で、獣化した右腕が振るわれる。

喰らったならば人体に風穴を開けることも容易であろうその一撃を、ハクは冷徹に見極めた。

受けたならば、受けた箇所が不能になる。故に手で受けるのは得策とは言えず、避けることこそが最上。

帝具を取り込んで肉体そのものの耐久性が大幅に上がっているエスデスとは違い、彼には避けねばならない理由がある。

振るわれた獣の右腕。その破壊力が込められた最たる部位である掌と、爪。

その僅か前方である手首に一撃を加え、自分より遥かに勝る臂力を持つ敵の攻撃を防いだ。

「な!?!」

後は、流れるような自然さで右腕が前へ突き出され、顎を捉えた後に左へと振るわれる。

硬質な物同士がぶつかる鈍い音と、地面を滑る慌ただしい音。

一撃を完璧な形で喰らい、よろよろと拳に矯正された移動を行う獣人の姿と、開いた鋏の刃を前に突き出す女の姿があった。

左から右へ、右から左へ。

開閉音と共に、今まで胸板があつた辺りを通過していく鋏のギロチン。

喰らったならば、間違いなく即死だったろう。

が、その即死性を持つ大技も避けてしまえば隙でしか無い。

地に這うが如き屈んだ体勢から目の前の腹部に目掛け、筒から発射された砲弾の如き左拳がめり込んだ。

「——ぐう……!?!」

肋骨の何本かを確実に折ったであろう一撃を受け、使い手の挙動が明らかに鈍る。

文字通り一瞬掛かった力に押し折られたのだ。その痛みは一瞬で異物感として彼女を襲っただろう。

骨が折れても、すぐさま痛くなり始めるわけではない。時間をかけて脳が折れたという認識を定め、自覚しつつ痛みが増す。

「二、三、四……」

二で鋏の両刃を束ねる接合部を蹴り上げ、三で脂肪に勢いを減衰させられないであろう胸部の上方を、四で手の甲で以って顎を右に振り抜いて体勢を崩し、五で折れた下腹部を再び殴り抜こうとして、止まった。

無銘の剣に、白仮面。まだまだ隙の多い少年剣士が、怒りと共に刃を突き出してきたのである。

「が、まだまだ甘いな」

仮面に拳を叩きつけて弾き飛ばすことでシエーレへの更なる追撃とした彼の視界に、何かが過った。

槍。穂先の赤は、ノインテーターだろう。

穂先のすぐ手前の柄を手元に引き、白い鎧の布の部位である肩を掴んで共に倒れながら放り投げ、そのまま彼はバク転した。

気配は、倒れながら投げた時の足元。即ちバク転し、立ち上がった時には目の前。

僅かに狂った感覚を是正し、ハクは目の前に迫る即死刀を人差し指と親指の二本の素手で以って掴み取る。

僅かに、使い手であるアカメの身体が浮いた。

このまま放置すれば彼女の自重で即死刀の刃は自分に刺さることだろう。

咄嗟に親指と人差し指のロックが解除され、変わって背丈の割りに

は長い脚がアカメの腹部にめり込むがごとく突き刺さった。

即死刀は、その蹴りのベクトルに逆らえずに彼の手元からスライドする。

あと一秒の判断が遅れていたら死んでいるあたりに、この帝具『一斬必殺』村雨の恐ろしさがあつた。

「ッー」

槍を投げ、避けたところを跳びかかる。

シエーレに振るわれた追撃の四撃によるアカメへの追撃を防ぐためであろう為の行動の成功率は、彼が槍を持たないことに依存していた。

が、今の彼は槍を持たない。完全な無手だからこそ、間合いが短くなる。

間合いが短くなれば、ブラートの突進を早めに対処してすぐアカメを追撃、とはいかない。確実に喰らうカウンターの一撃をインクルシオで防ぎ、あわよくばカウンター・カウンターで以って一撃を加えてやるブラートの判断は正しかった。

そう。正しかった。

左手の人差し指と親指が円形に丸まり、他の指もそれに追従する。

その空洞は、いつもの彼の槍がすっぽり収まる程度の大きさだった。

「出せないとは一言も言っていないぞ、ブラート」

穂先は赤、柄は黒。いつもとは違う意匠の槍が、ブラートの伸ばした手がハクの肉体に触れるか触れないかという直前に出現し、鳩尾あたりの鎧に触れて火花を散らす。

堪らず下がったブラートに待っていたのは、怒涛の如き連撃であった。

右肩から左脇腹、左脇腹から右肩、胴を横に薙ぎ、胸部へ刺突。

肩に止まっていた鳥が動きの激しさを嫌ってか遂に飛び立ち、天へと舞った。

斬撃と炎熱に対する抵抗力が増していたことが幸いしたのか、インクルシオは火花を散らしながらも辛くも耐え切る。

が、内部に通った衝撃によるダメージだけは防ぎきれない。
ブライトは、一時の沈黙を余儀なくされた。

「……時間切れか」

突きの時点で限界を感じていたものの、手の内で灰と化していく大槍を眺め、ハクは今の武器出しカウンターがあと一度ほどしか行えないことを感覚的に悟った。

強力だが、槍を出さねばならないことが彼を縛っている。

無論、彼の腹算用などはナイトレイドの知ったことではない。心を読める帝具があれば別だろうが、それをなせる帝具はこの場になかった。

即ちナイトレイドからすれば、隙を見つけて仕掛けても決して傷を与えることができないであろう強力な技を刻みこまれたのである。

「どうした」

一寸前は自分を包んでいた剣撃による喧騒が止み、遠い喧騒と静寂のみが彼を包んでいた。

「もう来ないのか」

無手を帝具持ち五人で囲みながら、それで終わりなのか。

ハクには疑問のみがあったが、彼ら彼女らからすれば純然たる挑発でしかないであろう。

必死に身体を立たせる鋏使いと、重傷の仲間を慮りながらも怒りに思考を曇らせる少年剣士、隔絶した格闘センスに闘争心をかき立てられて凄絶な笑みを浮かべる獣人に、黒く濃密なオーラを漂わせる暗殺者。

背後には考えられうる限り最高の宿敵が居ることを考えれば、未だ有利はナイトレイドにあった。

「……皆さん、私が隙を作ります」

重傷の鋏使いが、身体を引き摺りながら名乗り出る。

彼女の奥の手は以前にも見た金属発光。喰らうにせよ防ぐにせよ、一瞬のみとは言っても確実に視界を潰すことができた。

「わかった」

「その間に、攻め込むってことか……上等！」

「ハア、はあ……無理は、すんなよ、シエーレ」

腹部への一撃を咄嗟の体勢変化で軽傷に済ませたアカメと、自動回復で脳震盪と打撃痕を治したレオーネ、仮面の内から血をこぼしているタツミが答える。

相変わらずの無傷が絶望感を漂わせるが、彼らの闘志はその絶望感にすら屈さず、収まらなかつた。

シエーレを後方に庇うような立ち位置にすべく、三人は一步一步を踏みしめて前に出る。

後方で放たれた、猛烈な光。

視界を白く塗り潰されたままに三人は標敵に向かって駆けた。

向きが違うが故に、モロに喰らうであろうハクとは僅かながら、反応差がでる。

そこをつくのが彼ら彼女の策だつた。
が。

「!?」

周囲を染める光が、僅かな残滓を残して消える。

ブライトを除く対ハク戦に動員されたナイトレイドに———多少の誤差があれども———驚愕とも不安ともつかない負の感情が宿り、脚が生み出す速度が僅かに鈍つた。

「私は、守っている間はその頭が回る方だな。いや、攻めるときはそうはいかないのだが」

その時。

今までほとんど無言だつたハクは、滔々と話しだす。

「何が言いたい……」

背後で何かが倒れる、音がした。

硬質な金属が地面を打つ、音がした。

光が止まったということはそのうことなのだ、ナイトレイドの面々は薄々ながら感じている。

その不安を、予想を。

裏切つて欲しかったそれらを、2つの音は裏切らなかつた。

「御苦労だつた、チエルシー。大事ないか」

「全然。次もいけるよ」

策を読まれば、兵が伏せられる。

無音の暗殺者が、天性の暗殺者を殺して立っていた。

反動を突く

「シエーレエエエー！」

一番最初に反応したのは、未だ未熟な少年剣士。アカメ・レオーネ・ブラートの三人に正面の強敵の相手を任せ、彼は半ば反射的に後方のサイレントキラーに飛び掛かる。

同時に崖の上から極太の光線がチエルシー目掛けて放たれた。

昂ぶった感情の分だけ強くなれる帝具・『浪漫砲台』パンプキンは使手の親友を殺された怒りで、凄まじい火力を吐き出していたのである。

大金星を挙げたあと特有の危機が不幸な彼女を襲っていたといえた。

普通ならば、彼女はここで死ぬだろう。

だが彼女は、正面から自分と比べるのも馬鹿らしいほどの剣士が突っ込んで来、頭上から彼女を十二度殺してもお釣りが来るような大火力が迫るといふ危機に対して震えながらも、笑った。

「キヤー、助けてハクサーン」

「わざとらしいな。が、真実味もある」

ナイトレイドの三人の網膜に写った肉体が霞む速さでアカメとレオーネの間を駆け抜け、勢いを殺してチエルシーの身に負担をかけないように速度を調節しながら腰を抱えて踵を返す。

チエルシー方面からたつた今通り過ぎていったアカメ・レオーネ・ブラート方面へ。

極太の光線が背後に突き刺さった瞬間、ハクは迫りくる仮面の少年剣士の仮面を勢いそのままに殴り抜いた。

パキリ、と。仮面の正中線に罅が入る。

「若いな、少年」

その一言で仮面が粉微塵に砕け散り、タツミの身体が後方へかつ飛ぶ。

二度、同じところを攻撃したのだ。確実に破壊することができる。わざわざ一度目の迎撃で殴り難い顔面を殴ったのは、この未熟さに

賭けたが為と言つてもよかつた。

レオーネが辛くも受け止めたからよいものの、そのままであつたら石壁にぶつかつて死んでいただろう。

それほどに、彼の移動速度とその速度を借りた一撃は凄まじい物があつた。

「概する気持ちはわかる。私とて同僚が二人ほど殺されているからな」

竜船で殉職した同僚二人の墓に三日に一度はチエルシーを帯同してに墓参りに行くだけあり、彼の仲間意識は外見よりも高い。

人並みに感情はあるし、仕方ないことだという諦めもある。

僅かな寂寥感を漂わせながらそうこぼし、ハクは崖の出っ張りに着地。両手でスカートを抑えているチエルシーを降ろした。

「はい」

「すまない」

最早演技でも何でもなくぐったりしているチエルシーは、いつもの小悪魔的な外見に合った調子すら取れず、適当な抑揚の元に忌憚なき感想を吐く。

「はい。速すぎる。烏煙よりずつとはやいとか何とか言っている場合ではなく彼女は抱えられた瞬間、本当に身体が腰から両断されると思つた。」

「内臓が、こう……ぐオツと来たんだけど」

「すまない」

手加減してよかつた。本気だつたらお前は死んでいただぞ。

心の中でそう呟き、ハクは『腰から輪切りの如く真つ二つに裂けるチエルシーの凶』を想像し、頷いた。

非常に有り得そうだから困る。

「……笑いごとじゃないし」

「笑つていたか。すまない」

「笑つてないけど、雰囲気さが……」

纏う雰囲気にか、出来の悪い弟子を見るような憐れみと慈しむような愛があつた。

恐らくチエルシーはその雰囲気を目敏く察知し、マイナスな気分にあることも手伝って負の方面に受け取ったのだろう。

普段ならば憐れみよりも出来の悪い弟子を見るような慈しむような愛の方に過剰反応しているはずであった。

「溶けたバターののようにスッパリと斬れそうだからな。お前の身体は」

「無駄な戦闘用の筋肉ついてないからね。後、骨も太くないし」

腰を抱えて突っ走った経験上、ハクはエスデスにはチエルシー独特の柔らかさのようなものに触れている。

普段ならばそんなこと言われたら確実に喰い付くであろうチエルシーが、ハクばりの事実報告のみで済ませたあたりにその憔悴ぶりがわかった。

「……切り替えー」

「そうだな。切り替えだ」

アカメとレオーネを迂回して躲し、追撃及び射線に捉えることがまず不可能な崖の出っ張りに立つ。

このことによってハクとチエルシーは体力の回復と策戦の再構築を計っていたのである。

チエルシーが自分の頬を二回叩くことで、策戦の再構築は為されようとしていた。

が、そうはうまくいかないのがこの世界である。

『現実はいつも理不尽なものであり、理想とはいつも美しいものである』とは、誰が言ったか。

兎に角、この二人は不運であった。

「天叢雲剣ツ!!」

崖に飛び乗れないなら、崖ごと斬ればいいじゃない。

几帳面なスサノオらしからぬ凄まじく大雑把な対応は、二人のこれから標敵・策戦の決定期間ごと足場を薙ぎ払う。

『禍魂顕現』。所有者の命を吸う代わりに絶大な力を得るといふ、諸刃の剣を具現化したかのような奥の手。

その奥の手によって絶大な力を手に入れている形態となったスサ

ノオは、遙か東方の島国に伝わる三種の神器を冠した武器、或いは力を操ることができた。

これは天叢雲劍。絶大な破壊力を持つ攻撃用の武器である。

「パワーが上がっているな」

「ヤバイんじゃないの、これ」

竜船でもこの武器は使用された。だがそれは、今は破壊されてしまった『超力噴出』バルザックによって無理矢理引き出した紛い物ではない。

それが、『スサノオの最大火力であろう天叢雲劍では崖を切断できない』というハクの判断の狂いを生み出している。

二人は破片と言いつけるのが難しい程の岩石の巨塊が宙を舞う中に浮遊——もとい、落下していた。

出して起点とすべき炎の翼は、出せない。彼には地を霞むような速さで移動できる機動性はあるが、今は地・海・空を制覇していたかつてのような万能さはないのである。

「八尺瓊勾玉ッ！」

その鋭く叫んだスサノオの筋肉質な巨軀に膨大としか言えない力が纏わりついた。

地面を砕きつつ跳躍したスサノオの身体は、いつもような簡素な容姿ではない。

背後に輪のような物を背負い、髪は白く、角は漆黑に。一目で強者とわかるような凄絶さを纏った姿で、彼は主の後悔とともにそこに居る。

「オオオオオ!!」

素早い跳躍と、大威力の拳。

強化された力を纏う強化された拳が、ハクを撃ち貫かんと繰り出された。

「チエルシー」

「わかってますよっと」

超級危険種、宵蝙蝠。二枚の翼と鷹のような脚を持つ、通称『空の烏煙』と呼ばれるそれにチエルシーはすぐさま変化する。

漆黒の翼の二つ名は伊達ではなく、その宵蝙蝠・チエルシー変身態の翼は濡れたように黒かった。

「合っ体！」

「と言っても、掴むだけだろうが」

頭から地面に垂直落下していた二人は、自称合体をした瞬間にすぐさま体勢を縦に百八十度回転させて立て直す。

迫りくるスサノオも、この自称合体は完全に予想外だった。

闇に溶け込む沈黙の色と、周囲を染める温かな黄金。奇しくも互いに合った色となった闇と光は、息の合った軌道でスサノオへと迫る。

スサノオの振るうは、拳。間合いで言うならば近であった。

近が迫りくるならば、やることは先程と変わらない。

「ホバリング」

「もうしてますよー」

見えない筒を掴むように指が動く。

かつてブライトが直進してくる勢いを利用して武器を出し、痛烈な一撃とそれに伴う連撃を喰らわせるための起点となった武器出しカウンスターが、スサノオにも炸裂した。

「チエルシー」

「はいよー」

手に持つは、炎熱の槍。武器出しカウンスターで突き刺さったスサノオの身体を一払いで空に浮かべ、無防備となった肉体を石壁の如き突きの雨と飛行による場所取りによって貫いていく。

そもそも、彼は肉体の基礎性能が高いのだ。帝具があるうがなからうが、彼の強さは変わらない。戦い方が変わるだけである。

「合わせろ」

「知ってますよっ、とー！」

空中で旋回し、槍をスサノオに突き出すような姿になったハクを身体を漆黒の翼が包みこむ。

穿孔の錘には、炎熱の槍。

推進力は、漆黒の翼。

「八咫之鏡——」

所謂合体技が、スサノオの腰部を防御の神器ごと消し飛ばした。下半身と上半身が泣き別れして落下していくスサノオと、圧搾するが如くきりもみ状に回転し、槍から地面に突き刺さる黒い物体。

この所謂合体技は、『大技の後には隙が出来る』の典型であろう。どんな壁だろうが圧搾・穿孔してぶち抜く代わりに、隙が極めてデカイ。

何というか、ピーキーな性能であるとしか言えないのだ。

「葬るー」

翼1，5メートル、胴体30センチ、翼1，5メートル。計3，3メートルにもなる長大な横幅を晒して地面にベツタリと倒れ伏す危険種を斬ることなど、アカメには俎の上の鯉を切るよりも容易い。

またも命に危機に晒されたチエルシーは、絶命的な息切れとともに、つぶやいた。

「チエルシーさんは、技の反動で、動けない……」

「体力もないのに反動技を使うからだ」

彼女の貧弱な体力も半分くらい減少しているであろう反動技を指示したのは、ハクではない。何故か彼と組むと無茶を重ねてはつちやける傾向にあるチエルシーである。

ため息を一つつき、ハクはアカメの前に立ち塞がった。

誓いを突く

「ハッー」

即死刀が描く横薙ぎの軌道を丹念に見切り、ハクは余裕を持って体を屈ませる。

185センチのブライトやその他男勢と膂力を競う上では不利な178センチの矮躯が、彼の持つ異常な視力と経験則による回避性能を更に底上げしていた。

「フウ——……」

横薙ぎの一斬を避けられ、反撃の拳を半身になって躲したアカメは深呼吸をし、頭の中身を切り替える。

一撃の重さ、正確さを重視するよりも手数の方で攻める方が、今の鎧なきハクには適しているとアカメは早々に判断したのだ。

「……手数で来るか」

一撃でも掠れば即死の呪毒が身体に回ってしまう常時一撃必殺である刀の連撃は、純然たる暴威を以って荒れ狂う。

避けられないことはないが、彼には時間をかけてはならない理由があった。

合体技でほとんどの体力を削りきったであろうスサノオの、再生の阻止である。

逃したら確実に厄介なことになるであろう生物型帝具が完全に回復しければ、残りの体力的に再び追い詰めるのは極めて難しいのだ。

「コードー」

避け、殴っては躲され、また斬りつけられては避け。千日手と化した戦局をなんとかかすべく、チエルシーは反動から立ち直った身体を宙に舞わせる。

背後で伝えられた符牒に何かを悟ったのか、ハクは即死刀相手にインファイトを挑むという無謀極まりない戦闘法を切り替えた。

後ろに跳び退き、片膝をつけて右脚に力を溜め始めたのである。

無論近距離からの戦闘から逃がすアカメではないし、力を溜める隙を与えるアカメでもない。

すぐさま開いた距離を詰めるべく、彼女は駆けた。
その時である。

「ッ！」

鼓膜を引き裂くような超音波が宙に舞う蝙蝠の口から漏れた。

彼女の変身した超級危険種は、声帯を超音波で敵を破壊する帝具『大地鳴動』へヴィプレツシャーに、翼の器官を『月光麗舞』シャムシールに使用されている。

つまりその姿に変身したチエルシーもまた、加工されていない物のそれに似た能力を使うことができた。

「ッ!」

超音波に対し、思わず塞いだ耳。

目の前で、陽炎の如く消えた敵。

その音と驚きとが、完全にハクの接近に対する警報を殺していたのである。

「後ろだと思ったな」

咄嗟に感じた気配に誘われるままにアカメは反転しながら即死刀を振った。

右に持った刀が半円型の弧を描き、空を切る。

超音波を振り切り、振り切った即死刀のすぐ横に、彼はいた。

（しまっ——）

ミスディレクションか。

そう気づいた時にはすでに遅い。

「先ずは二つ」

膝を大地に突きながら放たれた回し蹴りが音を超え、肋骨を二、三本押し折りながら突き刺さる。

彼の長靴はエスデスの長靴からヒールをなくした黒い男版である。

音を置き去りにする疾駆で摩擦しないようにとレアメタルで作られた靴底と踵は、一種の凶器であると言ってもよかった。

「二つ」

意識が飛びかけるほどの衝撃を腹部に受け、飛来しているところを追いつかれた末に更に一撃。

火花と煙を散らしながら速度を徐々に殺していき、ハクは追いついてからの横撃が成功したことを踵に残った感覚で悟る。

速さによる機動性を生かした高速戦闘は、鎧を纏っている時では見られないものであった。

「む」

チエルシーが負傷者を狩りに行ったことを目で見てとり、ハクは再び加速する。

タツミを殺すことはない。帝具を失ったのだから、その戦力は半減されたと言ってもよいのだから。

が、万一を考えて敵戦力を潰していくのがチエルシーのやり方であった。彼女からすれば今の戦力を潰していくハクのやり方はただの手温さに写るのだろう。

(が、それでお前が死んではどうしようもあるまい)

超音波で平衡感覚を失ったレオーネの片腕を翼の器官から放った真空の刃で切断し、地面に転がってタツミにとどめを刺そうと降下したところに復帰したブライトが槍を突き出した。

チエルシーの帝具、『変幻自在』ガイアファンデーションはある程度の制限はあれど様々な生物へ変化することができる。

まあ、アメーバのような生物には無理だが、人と対して変わらない身体構造——脳・心臓・肉・血——を持つならば、身体の構造をも変化させることができるのだ。

つまり、超級危険種だろうが何だろうが、見たことがあって解剖された内部を覚えていればその異能すらも再現できるのである。

が、耐久力は変わらない。

強固な外甲があるならばともかく、いくら巨大な体躯を持った生物に変化しようが、生身をブツリやられたら即死であった。

「やせん」

槍を掴んでブライトを引き寄せ、インクルシオの肩部装甲に舞うような踵落としを喰らわせる。

チエルシーの肩にあたる翼に手を掛け、ハクは相当な熱を持った脚を垂らした。

「光に変化しての瞬間移動とかが、奥の手なのか……?」

瓦礫の中から現れたブラートの身体には、未だインクルシオが装着されている。

前回の戦闘ならば、ここで解除されていた。

(確実に、進化しているのか)

飛翔の要である肩を抑えられているからか、いつになく不器用に羽ばたくチエルシーにぶら下がりながら、ハクは律儀に答えを返す。

「奥の手ではない。第一に、鎧は質に出している」

「じゃあ、別の帝具かなんかか?」

「素だ。元来脚の速い方だな。まあ、最早全力では戦えん」

彼の脚の速さは、偏に『間に合わねば助けられない』という執念と鍛練によるものであった。

故に全力で疾走して加速する分には問題ないが、蹴りや何やらを繰り出したり急に止まったり方向を変えると足が軋む。

走るだけでも攻撃になるから使えなくはないのだが、身体が急制動に耐えきれないのである。

「嘘言うなよ、圧倒してんじゃねえか」

「折れかけだ。蹴り技は強いが、負担が重い」

加速した勢いと運動力を叩きつけるから、威力は高い。

が、先の合体技と同じく反動もでかいのだ。

威力の高い技の宿痾というべきであろう。

「チエルシー、翔べ」

「持つ位置変えてよ……」

肩を持たれては、ほとほとスピードが出ない。無論、避けられる程度の速さは出るが、一撃離脱戦法を使う為のマージンがこの速度では取れない。

慎重派な癖に追撃好きなあたり、彼女も大概矛盾していた。

「追撃狂に最速での自由行動を許せば何をするかわからんな。赦せ」

「私に対する信頼は!?!」

「している。お前は必ず的に隙あらば追撃するという信頼は何がある

うが揺らがん」

時々降下して『月光麗舞』シヤムシールや『大地鳴動』ヘヴィプレツシヤーらノーマークだったワイルドハントの帝具を回収しながら、ハクはエクスタスの安置されている方角を見、溜息をつく。

スサノオが復活し、ガツチリとエクスタス及びレオーネ・タツミ・アカメ・ラバックら負傷者に対するガードを固めていた。

「シユラ、退くぞ」

「ああ!?これからだろうが!」

負傷しているとはいえ、奥の手発動中のスサノオとタイマンをはりながら未だ無傷なシユラは、繰り出された天叢雲剣を手首で弾く。

彼は、未だに無傷であった。帝具も使用を節約している為まだまだ使用することができるし、何よりもこの目の前の生物型を突破したら負傷者四人と四つの帝具を回収できる。

彼にとって、それは喉から手が出るほど欲しい大金星だった。

「その防御は、あと五分でなくなるぞ。防御なしにブライトとスサノオと戦えるならば止めはせんが」

絶対防御と言われたのは、この訳の分からない無敵状態のことである。シユラにも薄々わかっている。

が、目の前の大金星が魅力的過ぎた。

「シユラ、勝つ算段はあるのか」

「ッ——わーったよ!」

空間跳躍の帝具『次元方陣』シヤンバラを起動させ、シユラは一人ロマリートの街へと帰還する。

逃げ脚の速さならば、シユラがぶつちぎりで帝国一だった。二位はハクだが、その差は極めて大きい物がある。

「チエルシー、翔べ」

「……後一人いけたような気がするんだけど」

「チエルシー、翔べ」

急には助けに入れない程度には脚を消耗しているハクは、敢えて聞く耳を持たずに同じ言葉を繰り返した。

どこか手柄に急いているような部下を野放しにできるほど、彼は放

任主義に拘っていない。大事なのは命であり、そこは決して違えてはならない箇所であった。

「帰るぞ」

「へーい」

チエルシーの肩から手を離し、ハクは自分の両肩を掴ませる。

高速空戦形態——所謂合体状態に、二人は再びなっていた。

「ブラート」

「何だ」

空気を読んで未だホバリング状態にとどめてくれたチエルシーを他所に、ハクはインクルシオを解いた好敵手に向けて声を掛ける。

「私を討つのはお前の槍であり、お前を打ち倒すのは私の槍であってほしい物だ」

それは戦場で見せない彼のこだわりであり、あまりにも子供じみた願望であった。敵味方で仲間を殺し合いながらこのような友誼を結ぶなどはチエルシーには理解できないが、言われたブラートにも笑みがある。

全く理解できないが、その癖気味悪くはない。

そこには、一種の清々しさのようなものがあった。

「そうなるように、一層力つけてやるよ。覚悟しときな、色男」

櫛で髪を整え、ブラートは人差し指を生涯の好敵手に向ける。

越えるべき壁であり、宿敵である。互いに仲間を討った仇同士でもある。

が、平時に街であったならば酒でも酌み交わすのだろう。

「楽しみにしている」

決して触れることのない拳を突き合わせるように、お互い前に拳を突き出す。

本来ならば、共に戦えていたはずの二人だった。

ハクが帝都に来るのが僅かに早ければ、ブラートの決断が僅かに遅ければ。

(勿体無い)

チエルシーは、心胆からそうこぼした。

紫陽花を突く

キョロク。シスイカン以東の経済の中心地であり、安寧道の本拠である。

「ここは帝国領でありながら、民の心中に帝国はない。」

「納得いかないんだけどー」

「部下の手柄は上司の手柄だ。仕方あるまい」

部下がたてた功績は、それを指揮していた上司の手柄。これは古来からのルールであり、色々な揉め事の原因となってきた。

今回のロマリーの街付近における戦いにおいてもそのルールは適応されている。帝具使いこそ失ったものの帝具は失うことなく、同時に敵の数に限りのある帝具使いを葬り、別な帝具も破壊したのだから、それはシユラの功績と言えなくもなかった。

実際に倒したのはシユラではないが、指揮を執ったのはシユラである。

「あいつ何もしてないじゃん」

「そんなことはない。互角以上に渡り合っていただろう」

黄金の鎧はその身になく、帝具を使うためのエネルギーも然程には回復していない。

このように、ハクも前回の戦闘から回復仕切っていないのだ。

ナイトレイドも残存戦力の殆どが負傷している上に帝具使いと帝具を喪い、実質二人が戦闘不能。そうそう癒せる傷ではない。

「あれから半年くらいだけど、どう?」

「目方では、八割といったところか。鎧が戦闘状態に入れば槍を三回出せるか出せないかといったところだな」

回復しようがしまいが、不適合者に無理やりくっつけている形になっっている鎧の消費がデカイ。

そもそも件の腕輪の帝具クンダラーは、強力な性能と引き換えに強烈なデメリットを帯びるタイプの帝具である。それを不適合者が何のデメリットもなしに使うなど無理があった。

その無理は本来その無理を生じさせた使用者が負うことになるも

のだが、今回は勝手が違う。

使用者が非適合者に『貸している』だけであり、その負担は使用者にかかっていない。

すなわち、デメリットであるところの『一定期間使用した後、或いは鎧を解除した後の光による灰化』という項が適応されていなかった。

そのイレギュラーな出来事への対価として、膨大な消費が生まれているのである。

「……うーん」

「どうした」

何かを思案するように首を傾げるチエルシーを、回復に専念しているが故に瞑想中であつた眼が見た。

大抵このような考え込むような動作をしているとき、彼女がろくなくことを言い出さないということをはクはよくよくわかっている。

「ちよつと敵の様子を偵察しに行つてこよかなーつて。密偵がチヨロチヨロしてるし、密偵程度ならチエルシーさんでもよゆうで勝てるしさ」

「一任しよう」

「あら、止めないの？」

「止めても無駄だろう」

ここ二年にわたつて何回か許可を求められた単独行動への欲求を満たすには、一度やらせてみるしかなかった。

なんだかんだでしぶといし、この半年間の間瞑想で高めた集中力と思考を束ねるための空想力は、元々反則臭かつた彼女の奥の手をより上質な物へと高めている。

鎧のないハクがチエルシーを殺そうとすれば、奥の手を発動する前に殺すか殺し続けるしかない程度には、帝具使いとしての彼女は強くなっていた。

運動能力は変わっていないが、元々それは必要ないと言える。

「お、わかつてるじゃん」

「最初から奥の手を使うことを推奨する。私の案を採用した場合、持

続時間を忘れないようにしろ」

彼女の帝具は、持続時間というものが不確定であった。つまり、何をするか、何になるかで消費が変わる。

超級危険種になれば100減るとすれば、マージパンサーの仔の如き戦闘能力が皆無な生物ならば1で納まり、人ならば一律で5。帝具使いならば50とかが妥当だった。

無論、帝具使いを帝具ごとコピーした場合はその帝具を使う度に消費が生まれる。

つまり、器用で低燃費だが消費回数が多いのが弱点だと言えた。

「りょーかい」

背後でため息をつくハクを後目に、チエルシーは隠密の如く窓から――ではなく、階段を降りて水を飲み、ご飯と肉を丼に盛って平らげた後にこの安寧道の本拠を出る。

リラックスし、帝具と身体を動かすぶんのカロリーをとってから出るあたり、彼女の持つ誰にも該当しない個性があった。

「さて、お仕事開始といきますかね」

今は亡き黒髪オカツパ腰カトラスを完全に撒いた時と同じく手鏡を顔まで掲げ、右の親指と人差し指とで音を鳴らす。

自分を切り換え、奥の手をスムーズに発動させる為のキー動作。

技名を言った方が明確なイメージが付きやすく、発動ラグも微小なものになりやすい。要はそれと同じだった。

「変身」

身体が、切り換わる。

動作、道具、台詞。三段構えの切り換えが、今日もうまく作動した。鳥の翼をはためかせ、チエルシーは風に乗って獲物の元へと向かう。

行く先は、革命軍の密偵チームのアジト。まだまだ未熟に過ぎる者が多いが、数があるのが厄介だった。

(死んでる?)

鳥の羽毛がふわふわと、崩れた窓から舞い降りる。

降りるといよりは落ちると行ったほうが適切であろうその偵察

により、彼女は粗方の状況を早々に知ることができた。

(なるほど、羅刹四鬼が死んだ割にはキツチリと仕事してたわけね)

昨晚、ポリツクが無計画に攻撃に回してしまった大臣からの援軍である処刑人・羅刹四鬼は全滅した。

内訳を言うなれば四人中三人の死骸が見つかり、一人が行方不明になっていくといった方が正しいであろう。

が、絶人達の戦いにおける行方不明というのは限りなく死に近い。それこそチエルシーの主のような殺しても死なないような変態でない限りは、死で確定だった。

おとなしく帰るのもなんだかなー、と。

鳥から人になったチエルシーがそう頭を掻いていると、視界の端に何か映る。

(ん?)

密偵だ。

その道に於いては槍に於けるハク、剣に於ける某ドS並に優れた素質と練磨された才覚を持つ彼女は、一目でその隠行を見破った。

そばかすが特徴的な彼女は、相手が悪いとしか言いようがない。端的に言うなれば格が違う。

(首を動かしてる……ふーん、待ち人来たらずってやつかな?)

鳥から人に、人から鳥に。

上空を旋回し、彼女に向けて走る人影を軒並み観測。密偵臭い人間を見つけた後に更に観測し、彼女は確証を得た。

驚くべき汎用性で標敵の近く向かって飛び、程よい場所で降りてそばかすの彼女の待ち人であろう巨漢に変身し、近づく。

「あ、トリネ君ー」

トリネと言う、名前らしい。

それがわかればもう問題はなかった。

口調がわからない為に迂闊に口は開けないが、適当に相槌を打ちながらしばし一緒に歩き、目の前を行く少女の延髄に針を刺す。

何の抵抗もない、久々に味わう命を奪う感触。

技量の劣化が心配だったが、未だ何十人もの人を殺してきた手腕は

色褪せてはいなかった。

「二人」

何で、と。

裏切られた痛みを喘ぎながら命を散らした少女に化け、何の油断もなしにチエルシーは今は亡き少女が待っていた木の下に戻る。

「トリネ君！」

呼び方から声色まで何もかも変わらぬ恋人の様子に安堵したのか、トリネと呼ばれた大柄の男性はそばかすの少女の名を呼んだ。

「心配していたぞ、パイス」

「ごめんね、遅れちゃって。でも——」

甘えるように大柄な男の胸に飛び込むように身体を素早く動かし、首にさらりと手を回す。

キスの前行動のような、自然な動作だった。

「——遅れたのはあなたなんだよ、トリネ君」

回された腕の袖に忍ばせていた針を中指と人差し指で取り出し、なんの躊躇いもなく頸部に突き刺す。

固まったトリネから無情ともとれる速さで針を抜き取り、チエルシーはさらりと距離を取った。

「二人」

普段の元気で快活な彼女とは打って変わり、冷淡且つ無情な暗殺者の姿が、そこにはある。

暗殺者の手には、針に替わってとある羊皮紙が握り締められていた。

「……ここがナイトレイドの臨時のアジトかあ」

持ち前の頭脳で一見して暗記し、死骸に戻して鳥に化ける。

密偵も始末した。地囃も奪った。

このまま帰っても、十分な収穫が手元にある。

（この程度じゃ、褒めては貰えないんだらうなあ……）

しかも、この手柄はシユラとかいう陵辱野郎のものになるだろう。

それは、彼女としては嫌だった。

「さーて、大仕事二発目……張り切っていつてみましょうか！」

二輪を突く

『はい、こちらハイドレンジア社機巧部』

鳥から黒服を着た壮年の男に変身したチエルシーは、ナイトレイドのアジトを崖下に見下ろしながら連絡用の機器であるヘッドホンからマイクを伸ばしてその聞き覚えのある声に答える。

「私だ」

バリトンより僅かに高い美声が、変身したチエルシーの口から漏れた。

彼女の背後には、仮にも一国の宰相の如き権力を持つハクとそのハクの後ろ盾を務めるオネスト大臣の強力なバックアップがある。

情報を統括・収集する為の大企業を維持するだけの絶大な権力と抜け目のない性格、割となんでも出来る能力の優秀さがあいまって、彼女には帝国で一二を争う大企業の社長という裏の顔があった。

無論、素顔は晒さない。未だに男社会な帝国に於いて、なめられやすい女の顔ではいつクーデターを起こされるかわからないからである。

起業してから情報を集めるのではなく、情報を集める為に起業するという逆転の発想と天然の経綸の才が、帝国の秘密警察が持つ情報網をかくるく凌駕する綿密且つ巧緻な情報の網を編み、維持することを成功させていた。

「そう、完成した一台を回してくれ。場所はキヨロクだ。そこまで飛ばしてくれたら後の誘導はこちらでする」

無策で突っ込むような馬鹿はしない。散々迂闊迂闊と嗜められてきたのだから、完璧な体勢で攻勢をかけて鼻をあかしてやり、思う存分褒めてもらおう。

三ヶ月かそこいらの差で某槍兵より一年年下なことを全く感じさせない稚気を漂わせ、チエルシーは胡座をかいて瞑目した。

瞑想で集中力を高め、戦闘になった時に出るであろうポ力を少なくしなければならぬ。

彼にヨガを推奨されてから、何度となく繰り返してきた作業であ

る。流石に瞑想で意識を内に沈めるまでは速く、且つ深かった。

これからの戦闘で起こりうることで、敵の戦力データはもう頭にある。

ブラートとスサノオという特級の危険も、データを加味した事前の計算によつて無効にできる、ハズだった。

「来たか」

相変わらずのハクめいた口調と、黒服。美男子に分類されるであろう威厳のある相貌が、近場に降り立った大型二輪に向けられる。

内部にまで完璧に秘匿していた彼女の愛車は、その銀色の巨体を草原に悠々と鎮座させていた。

「さて、行きますか」

アジト周囲には、糸の結界。空にも微量ながら糸の警戒網が存在しており、侵入者への警戒の色が極めて強いことを、鳥となった彼女は早々に察知している。

もつとも自分が侵入するだけならば結界などあつてなきようなものだが、それでは退路を確保することができない。逃げるときは逃げることに集中しなければ、後ろからバツサリとかブツスリとか、回り込まれてザクツとやられかねなかった。

やはり功績をパツパとあげたいならば結界をすり抜けてメンバーの一人に化けて殺すのが一番だが、バレた時の死亡率が実に九割を越す。

ならば、どうするか。

「ふーふーん」

ご機嫌そうに二つの円形のハンドルの中央を割るようにして通された取手を片手ずつで握り、推力・浮力を調節しつつ機体を空へと駆けさせた。

水・陸・空。三界制覇のこの二輪の火力スペックを紹介しておく、先ず鋭角になっている先端部分に十六機搭載のミサイルが左右に一つつづつ、車体の先端部分からドアまでの区画に20センチの連装砲をこれまた左右一門ずつ、後部座席には収納式の機銃が三門付いている。

速さにおいては音速に迫るといふハイスペックは、無論現代の技術ではない。ハクの帝具の一形態である馬車から技術を盗み続け、馬の代わりに光で動くエンジンを搭載した代物であった。

砲やミサイルなどは舟から技術を盗み、これまた大幅な火力アップを果たしている。

言うなれば、擬似帝具であり擬似臣具であると言えた。

「こんな簡単なものが何故操縦できないのやら……」

両手に持った操縦桿を小刻みに動かしつつ、チエルシーは右操縦桿と左操縦桿の間にあるガラスに左操縦桿から離れた指を触れさせ、タツプする。

十字のスコープのような形に組み立てられた照準光がガラスの中をプログラム通りに動き回り、タツプしたナイトレイドのアジトに照準が向いた。

「爆破あー！」

先端部分が左右に大きく開き、ギツシリ詰まった十六機、左右合わせて三十二機が並行に飛び、飛び終わって先端部分が閉まった瞬間に二門の砲から光が迸る。

計三十四発の超火力が次々とアジトに着弾し、ナイトレイドは一網打尽、爆発四散すると思われた。現にこれをすべて叩き込まれては、幾ら百戦錬磨のナイトレイドいえども肉片が残ればいい方だっただろう。

が、ナイトレイドには奴がいた。

「って、鏡!？」

ミサイルの半分と二門による砲撃がそっくり跳ね返された光景を見て、彼女は思わず狼狽する。

帝具スサノオの奥の手である『禍魂顕現』によって使えるようになるのは三つ。

ロマリーの街付近における戦闘に於いて使われた盾の鏡。

これも同じくロマリーの街付近における戦闘に於いて使われた八尺瓊勾玉。

船場の死闘及びロマリーの街付近における戦闘で使われた天叢雲

劍。

合体技時に使われたことは、わかっていた。が、難なくぶち抜けた為に彼女は『なんてことはない、超火力でいけば勝てるただの盾』だと誤解していたのである。

その実、鏡が持つ真の能力は『飛び道具の完全反射』。苦し紛れに物理攻撃に使ってもある程度の効果は得られるが、それはあくまでおまけに過ぎない。

そのおまけに過ぎない性能だけで立てたチエルシーの計算が、今完璧に覆された。

「……まあ、二手目と行きますかね」

消耗を防ぐ為に普段の自分に戻り、機体のエネルギーを三割使う。エネルギーはすなわち、件の鎧を編んでいた光そのもの。如何様にも姿は変えられる。

ただし、編んでも定着させることができないがためにやはり本家の無敵っぷりは再現できなかったが、それでもこの技は彼女の誤算を埋めるには十分な性能を持っていた。

編んだ光は一時的に機体を円錐形に覆い、穿孔するかの如く直進する。

空気を切るような排気音と車輪の駆動音が一時的に活発化し、突撃への僅かなラグが生じた。

「とっ、げきつと……」

推力に極振りし、浮力は維持できる程度にまで抑え、斜線を描くようにして突き進む。

流星の如く黄金の尾を曳きながら、二輪は瓦礫の塊と成り果てたナイトレイドのアジトへとひたに進んだ。

音の壁を突き破り、鏡の盾すらぶち破る。

遂には盾の持ち主であったスサノオをもぶち破り、脇に避けたナイトレイドのメンバーを風圧で弾き飛ばし、チエルシーはそこで急制動をかけた。

勢いを極力殺さぬようにUターンし、彼女は八咫之鏡とスサノオを穿った後に突撃前の如く再度ナイトレイドと対面に向かい合う。

「久しぶり」

「シェーレを殺した——」

再度左手を離し、ガラスの画面に表示されたコンソールを操作。敵の前口上など更々聞く気になれないチエルシーは、ミサイルを再装填して照準を合わせた。

「で、いつてらっしやい」

怒りを見せた者から負けを見る。そのことを、彼女はハクを通してよく知っている。

彼と戦う者は、大抵怒りに燃えていた。仲間を殺されたり、挑発めいた言動を喰らわされたりとその要因は様々だが、怒った者は悉く太陽に灼かれて灰と化している。

その点では。

「頭に血が上らせたら負けだぜ、タツミ」

爆炎ともうもうとした煙の中で、仲間を庇ってなお無傷の白い鎧がそこにはあった。

「男は燃える心でクールに戦え。心は燃やすが、頭は冷やせ」

仲間を殺されてなお激情を秘めているこの男の方が、怖い。

チエルシーは鋭敏な危機管理を完璧に行ってきた自分の脳がそう言ったのを、確かに感じた。

彼女の『怖い』は、大体当たる。

何せ、太守のお付をしていた時に近寄ってきた実力の片鱗を見せる前のハクにすら、彼女の『怖い』は反応した。

あれは敵にするには恐ろしすぎる、と。彼の天然の実力隠蔽を、彼女の危機管理力は看破したのである。

（怖さは初対面時のハクさん以下ではあるけど、それってなんの安心材料にもならないんだよね……）

暫し思考を巡らせ、チエルシーは一先ず後ろに下がった。

二輪ではありえない変態機動にさしものブライトすらもド肝をぬかれたのか、非常にスムーズに距離が開く。

だが、この程度であのブライトの裏をかけるはずがない。

その答えは、頭上から来た。

「仇、取らせてもらおうよ!」

スサノオに救われてから咄嗟に動き、高台に陣取ったピンクの少女。

手に持つ帝具は『浪漫砲台』パンプキン。精神力を弾丸として打ち出すという異色の帝具が、割りと壊れやすい機体を壊すべく放たれていた。

「おー、怖いことだねえ」

ポツリと本音とも挑発ともつかぬ一言を漏らし、チエルシーは操縦桿を握り締める。

ハクの戦車の御者として鍛えられてきた操縦技術を駆使しなければ、この連続射撃は防ぎきれない。

前輪を狙った一弾目を後方に更に下がることによって避け、それを予期していたか如く放たれた後輪への一弾を機体を浮かせ、左に四十五度操縦桿を切って逃れる。

この二秒ほどの攻防で、狙撃手であるマインはこの二輪の機動性が尋常ではないことを早々と悟った。

ホバー移動と高速旋回。突撃時の音速の突撃に、収納式の大火力。帝具であるとは考えられない性能だった。

左に回転した瞬間を狙い、操縦席にいるチエルシー目掛けて弾を放つ。

旋回中に旋回の軸となっている操縦席を無理に動かすことは、どんな曲芸師でも実行は不可能。

駄目押しに後輪目掛けて射撃を行い、マインは鷹の目を鋭く睜けた。

どうやって避けるか、或いは仲間がどのように援護するか。

巨体であるが故に小回りが利かないであろう機体にここまでする必要はないように見えるが、相手は訳の分からない帝具を使う。

初めて見た時にシエーレを殺害した透明化らしきもの、二輪の戦車にしての変態機動。

もう、油断はできないというのが正直な共通意識だった。

「はあ?」

旋回中の前輪を無理矢理急制動で軸として固定し、そこから半回転して操縦席に迫っていたレオーネを後輪で横撃して撥ね飛ばす。

更に後輪に迫ってきたブライトを後方にある機銃で迎撃し、側面の砲を地面に向けて発射。無理矢理浮力を得てナイトレイドの包囲陣から逃れた。

「おー、やるね」

チエルシーは褒めるような口調に皮肉を三割混ぜたような声色で迎撃した二人に向けて二輪の正面を向け、再装填されたミサイルを三度解き放つ。

残りエネルギーが減少していく中、如何に敵を削るか。

それがチエルシーの思考だった。

罨を突く

鉄の階段を駆け下る時の如く連続した硬質な音が三十二回ほど連続して響き、前方に蟠った煙を二門の主砲が無理矢理飛ばした。

全門斉射で消費するエネルギーは恐らく一割。確か全門斉射は三回目だから、突撃と合わせてこれで六割のエネルギーが失われたことになる。

確保された視界に、ナイトレイドのメンバーは居ない。

彼等彼女等は夜の闇に隠れて、得意の夜襲の機を伺っていた。

(無駄なんだよねえ……)

確かに、夜襲は脅威だろう。綿密な連携と必殺の帝具を組み合わせるの波状攻撃。これは怖いとしか言いようがない。

が、何が怖いのかと言えば『不意を突かれるのが怖い』だけだった。偽物である彼女の二輪では本家であるハクの戦車には、火力・装甲・機動力で負ける。

これはどうせ劣化コピーなのだから仕方がなかった。が、勝っている点がひとつだけある。

「どこから来るのかなあ……」

中々の演技派である彼女らしく、チエルシーは怯えているように周囲を見回し、闇を恐れるように怯んだ。

手は、照準器代わりのタッチパネルにある。

コンソールを操作し、三キロレーダーを作動。自身を中心に電波が円形に飛び、いとも容易く標敵を掴んだ。

「っと」

レーダーの情報を照準器に読み込ませ、標敵を指定。十字型のレティクルが真逆にいたマイン以外のナイトレイドを捉え、用心深く位置を変えながらこちらを射撃してきているらしいマインの放った光弾を避けつつ機体を右に切って旋回する。

四回目の一斉射撃。いきなり位置を掴まれたことに驚いたのか、敵の動きは鈍い。

しかも意地の悪い面制圧型の『バラ撒く』射撃であるが故に、ナイ

トレイドの面々は致命傷こそ避けられても無傷とはいかなかった。流石にブライトはミサイルこそ槍で弾いたものの爆風と弾き用のない光の束で装甲を削られる。

ミサイルを二発避け、一発を斬り落としたアカメはこれまた斬り落とした瞬間に大爆発するように仕組まれたミサイルの破片と爆風によって左腕を負傷した。

ナジエンダを庇ったスサノオも二発弾いて二発を喰らい、修復中の身体の内面でソルメタルと呼ばれる新金属の塊であるミサイルが爆散、更なる修復を余儀なくされる。

レオーネは追尾誘導弾に左右から挟まれて爆発に巻き込まれる形で瀕死の重症を負い、タツミは新たに得た帝具で刻み、或いは防ぐことによって重症こそ回避したが右腿に鉄片が突き刺さった。

ラバックは抜け目なく糸の結界で防ぎ切り、身に受けたのは爆風のみ。

レーダーをチラ見しつつ、暗視スコープ付きの双眼鏡で確認できるナイトレイドの被害を分析したチエルシーは、ミサイルと立てた音と風向きから大体の被害を予想する。

実際はレオーネは一発を殴って逸し、逆から来た一発に激突させた時の爆風を食らっただけではあるが、この観測ミスには理由があった。

操縦・観測・索敵を一人でこなさねばならない忙しさが災いし、彼女もそう長く一人に構ってはいられなかったのである。

更に観測対象がレオーネだったこともあり、彼女の危機意識はあまり高くはなかった。

これがハクと互する實力を持つブライトであったりスサノオであったり、或いは即死刀を持つアカメであったならば時間を裂いたであろう。

が、レオーネの帝具はハクの下位互換であることと奥の手が自動回復能力の増幅であることもあり、チエルシーは正直、舐めきっていた。

「うーん……」

重症を負ったレオーネを仕留めに行くか、アカメやブライトを削り

に行くか。

一見すると行動における三択だが、実質はこれからの行動指針を決める為の二択である。

一人を確実に潰していくか、何人が纏めて仕留める為の布石として、この二輪の超火力を使うか。

つまるところは一兎を追うか二兎を追うかの選択肢であり、ここで二兎を追うことを決めれば後に一兎のみを追う方針に変えることは困難だった。

中途半端は身を滅ぼすと、彼女はよくよく知っていたからである。

「……きりめた」

彼女が瀕死であろうと判断したレオーネから標敵を外し、次なる標敵をアカメに定めた。

アカメの即死刀は脅威だが、肉弾戦をしない限りはただの刀。

何よりも、あの刀はハクを殺し得る可能性を濃厚に持つ。

排除した方がいいというのが彼女の私情混じりの判断だった。

「——やっぱこれ、ちょっと改良が必要かな」

レーダーで敵影を捉え、暗視スコップで敵を視認し、照準器で照準し、操縦して一射逃走という組み合わせを一気にこなせないのは、レーダーだけでは『どこにいるか』しかわからず、『誰なのか』がわからないことを踏まえると少しきつい。

だからこそその暗視スコップであるわけだが、暗視スコップを使えば片手が塞がる。更には照準するとき片手を使うから、その間は操縦桿から手が離れる。

つまり、本気を出せば音速を超える速さの機体を手放しで運転することになってしまうことになるのだ。

自転車の手放し運転とは訳が違うのである。やればもれなくお陀仏だった。

彼女は、目があまり良くない。もっともそれはハクの『10キロ先の針まで見える』とかエステスの『5キロまで視野』とかいう気違いじみたものでないだけであり、日常生活に支障はないレベルである。

ただ、平均よりも少し低い。

その為、彼女は夜目が利かなかつた。『星の光があるなら昼の如く見える』、『獲物は視覚と嗅覚と感覚で狩る』と言う連中とは違い、暗闇だと全く見えない。

その夜目の利かなさを揶揄する意味もこめて鳥女と言われているわけだが、そこはあまり関係がなかつた。

「……見えない」

真昼に宮殿の屋根に転がって天体観測できる奴等とは人種が違うのである。

文字通り北の異民族と、西の異民族との混血的な意味で。

赤色系の髪は西の異民族という噂に違わず、彼女は母が西の異民族出身だつた。

西の異民族は、騎兵と変な肉体改造術を作り出す技術力の高さが著名であろう。

彼女は、その西の異民族の典型だつた。

乗り物の操縦が巧みで変態技術を駆使することができるし、西の異民族から盗んできた秘術とやらにも適性がある。

目が悪いのと近接戦闘能力が皆無なのを除けば西の異民族が理想とする騎兵であつた。

「ツダア！」

直進してくる二輪へ、大型の鋏を持ったタツミがコクピット付近目掛けてそれを突き出し、それと同時に刃を開く。

丁度決まれば斬首コースだつた一撃に、チエルシーは非常に伶俐に対応した。

彼女は予想外の出来事には障子紙の如く弱いが、想定内の出来事には滅法強い。早々にリーダーを駆使して位置を掴んでいた彼女の脳内には迎撃の方法が浮かんでいる。

操縦桿を握る手に力を込め、推力を弱めるに比例させるように浮力を増加させ、突っ込んできたタツミにエンジンの排気口を向けたのだ。

三つの排気口を列ねてタイヤの両脇に付けた大型二輪の排気口から漏れる空気の圧は、凄まじいの一言に尽きる。

突っ込んだ来た勢いを相殺され、思わず顔に腕をやって空気から目を守ろうとした瞬間、地面を走る為に縦に備え付けられていた後輪が横に半回転し、あたかも丸鋸の如き勢いを帯びた。

丸鋸と化した後輪が横の旋回速度とこれまで出していた推力をも束ね、タツミの腹に突き刺さる。

(……って、手応え変だね。防がれたのかな?)

後輪が僅かにへしやげたような気もするから、タツミが手に持つている何かは鋏型の帝具『万物両断』エクスタスに違いない。

彼女は、極めて適当な感じにそう判断した。

使い手の実戦経験が足りないから、帝具はともかく脅威にはならないと判断したのである。

それよりも目下の問題はひしやげた後輪であった。

ひしやげた後輪では運転こそできるが急制動の末に変態機動をするといういつもの回避行動をすることができない。

それは夜目の利くナイトレイドも勘づいている。

すぐさまブライトとレオーネとアカメが旋回したまま横腹を見せ続けている二輪へと駆けた。

こちらにミサイルを収納している先頭部分を向けるべく旋回した瞬間、ブライトを側面のミサイル収納庫を開かせぬように両手で挟み込むように封殺。その隙にレオーネを左廻り、アカメ右廻りから急襲させてコクピットから叩き落とす。

それがこの肉弾戦特化の三人の策であった。

が、チエルシーは端から旋回など考えてはいない。何せエネルギーが足りないし、ミサイルを打つにもエネルギーの内の一割が消える。チエルシーは、機体の横腹を晒しながらそのまま壁が迫るが如く三人に向けて推進した。

この三人はエネルギーのことを全く知らない。故にこの反応は全く予期できなかった。

それに、平然と横進できるような二輪を三人は知りもしなかった。というよりはこのようにメカニカルな機体を相手にしたことがない為、いくら噴進によるホバー移動が可能だとすぐ前に認識したとはい

え、それがどんな行動を意味するかがわからない。

更によえばホバー移動がどのようなものであり、どのような行動が可能とすることができているのがまだはつきりとわかっていない。

人は認識外の物を見た時にその類似品に当て嵌めようとする。

その所為もあり、ナイトレイドの三人は馬車か何かの類似品だと思っていた。すなわち、変態二輪の変態機動を推測するにあたってのまともな材料が得られなかったのである。

「ッお!?!」

いくらインクルシオと言えども1500キロ近い巨重の二輪のしかかられ、轢き潰されては無事ではすまない。

三人は目配せするでもなくわざとその横撃の勢いを利用して後ろに飛び、衝撃を逃した。

そのことも、チエルシーの想定内である。

「ほい、発射」

チエルシーは機体を素早く旋回させた。

左の操縦桿となっている推進用ステアリングから手を離し、宙に舞った三人をタッチパネルでロックオン。逃走用エネルギーの都合も考えるともう何回もできないであろう一斉射撃を行い、さっさと機体を宙に上げようとした、瞬間。

「……………ん?」

機体の側面に、火花が散った。

凄まじい火花と音、滑るような金属音と圧搾音と共に機体が無理矢理に止まり、いきなり速度を殺された反動でチエルシーの身体が宙を舞う。

(糸かあ……………)

ふっ飛んでいるチエルシーがわかったのは、それくらいだった。

絶望を突く

チエルシーは、宙へ舞った。

人は、原則的には空中で身動きを取ることができない。これはごく単純な理由である『人に翼はない』というものに起因する。

エスデスは適当な箇所を凍らせて空中を歩けるが、あくまで歩いて
いるだけ。

ハクは背中から焰の翼を生やして飛んでいるだけ。人の身のまま
で飛翔しているわけではない。

現在のところ、何の道具も使わずに空で自由に行動した人間はいな
かった。

現在の状況に、話を戻す。

チエルシーは、優位に立っていた。だがそれは薄氷の上を疾走して
いるようなものであり、走れば走るほどに踏んだ氷は崩れていく。

彼女はうまいこと走っていた。が、転んだ。結果として、彼女が二
十分ほどの戦闘時間と二年間ほどかかった技術を駆使して得た優位
は三秒ほどでひっくり返されたのである。

彼女は、弱い。兎に劣る攻撃力と障子紙とどっこいどっこの防衛
力しかない。これがまだ基礎能力に秀でていればこうも簡単に状況
をひっくり返されることもなかっただろうが、彼女は単体ではそこら
の兵卒に劣る実力しか持っていなかった。

結果、自身に向けられて放たれた狙撃弾を避ける術を現在の彼女は
喪失している。

というよりも、ここまで立ち回れたのは二輪の力が大きい。あの二
輪に積まれている兵器の悉くが未知のものであり、全く以って似通っ
たものの存在しなかった。

要は、不意を突いて勝つていただけであろう。

だが、前にハクが彼女に対して行った助言が生きた。

『お前は不意を突くが、不意を突かれることに極端に弱い。それは何
とかすべきだろう』

「変身」

バサリ、と。屋根に積もった雪が崩れ落ちるような音が鳴り、鳥となったチエルシーの身体が別の意味で宙に舞う。

一瞬で鳥へと変わり、稲妻の如く上昇したチエルシーは素早くマインの視界から消えた。

「はあ!」

それに対してマインは、驚愕に顔を染める。

確実に仕留められるような射撃をヒトの生物学上有り得ないような避け方で躲されたのだから仕方ないが、それはあまりにもデカイ隙だった。

「さよならー」

マインの背後に突然現れた彼女は、珍しく助言を聞き入っていたのである。

奥の手を使っているときの副次的な効果として、彼女は帝具を手にとって発動させなくとも変身することができるのだ。

無論、どこかに帝具の一部を身につけていなければならぬが、それでも遥かに変身までのタイムラグがなくなる。

チエルシー最大の弱点である見破る系統の能力や不意を突かれる能力に弱いということは全く解決されていないが、こういった一秒を争う状況に於いては非常に役に立つ効果であった。

「舐め——るな!」

軽い気持ちで前屈姿勢をとっていたマインを蹴り落としたチエルシーの足場に、パンプキンから放たれた弾が直撃する。

変身できなきやただの女であるチエルシーには当然ながら白兵戦における適性はない。

西の異民族の秘術で自身の肉体を動植物に変えることができるものの、嘗てその秘術を使って帝国の精鋭中の精鋭である暗殺部隊と戦った帝国北西に位置する渓谷地帯・プ

トラに存在する王家の遺跡を守護する墓守たちと違い、彼女の適合したのは危険種でも動物でもなく植物であった。

身体能力も上がらないし、耐久力も上がらない。強化幅のヒエラルキーで言えば危険種、動物、植物の順であろうことは確定だった。

チエルシーはほとんど白兵戦に弱い。だが、近づいて仕留めるのが彼女の戦闘法であり、帝具を最も効率よく活かせる手段なのである。もう彼女にとって、この攻撃したら反撃を喰らうというパターンは宿痾だった。

「また落ちるのかあ……」

そこらへんの突起物や障害物に蔓引つ掛けて逃げることも考えたが、自分がやった二輪による火力集中のお陰でそんなものはない。

仕方ないから撤退するかと決断し、鳥へと変わったその時。

「フッフッフ……やつと、安定させられたッ！」

ラバック操る二輪が、縦横にガタガタ揺れながら恐ろしくスロリーにチエルシーの眼前に浮上する。

操縦者は、ラバック。彼は割となんでもできる要領のいい男だった。

チエルシーほどの変態機動は描けないし、スピードも出せない。が、操作性に難ありというレベルではないこの二輪をあつさりと動かせるあたりに、ラバックの凄みがある。

「……やっぱ」

開くミサイルポッドの中に装填されたのは、僅か半数。エネルギー不足であるが故に、圧倒的な広範囲殲滅能力を持つはずの変態二輪はその殲滅能力を文字通り半減させていた。

と言っても、半減されようがなんだろうが、変身できなきやただの女であるチエルシーを殺すには充分過ぎる。

無慈悲な十六発が、ロックオンされた標敵に向けて放たれた。

耳を劈く爆音と白い光が視界のすべてを覆い尽くし、軽々平衡感覚を失った鳥を吹き飛ばす。

「ったあ……」

身体の並行が取れなくなった瞬間、咄嗟に硬い外皮を持つ危険種に変わったものの、衝撃までは防げない。

チエルシーは叩きつけられるような鈍い痛みを腰に感じ、痛み思わず寝返りを打つ。

その瞬間、嘗て頭のあったところにザクリと刺さる大型銃。

一流の暗殺者の目になったタツミの姿が、そこにはあった。
「つぶなあっ！」

追撃の一突きを辛くも躲し、チエルシーは必死の思いで立ち上がる。

背後からの射撃を執念で避けたその先には、アカメ。正にナイトレイドが誇る必殺の布陣であった。

「葬る」

軽口も叩く間もなく、変身する為の動作すら取れず。

完全に処理限界を超えたチエルシーの脳が所謂走馬燈というものすら許されずにその機能を停止させようとした、その刹那。

「ツッ……」

アカメが跳び退き、ラバック操る変態二輪が後退。マインも軽射撃用のアタッチメントから長距離砲火用のアタッチメントへと銃身を換装し、アカメで隠されて見えなかったタツミが僅かに撥ね飛ばされ、大地に転がる。

黄金色の見事な彫刻と意匠が施された、黒塗りの二輪と四輪。

所謂サイドカー付きの二輪に乗り、救いの主は現れた。

「ハクさん……」

死すれすれの境界にいたからか、チエルシーの反応は鈍い。

呆けたようにそう言えただけ、彼女は彼が来てくれたというだけで脳に余裕が出来てきたのだろう。

相変わらずの不健康な肌に、闇に溶け込むような黒い革鎧。

太陽のような金色の彫刻が入っているのは、鎧があつた名残らしかった。

スタツ、と。二輪の方から降りたハクの手が、彼女を後ろに庇うように前に出てきた去り際にさり気ない仕草で置かれる。

ただ、男性にしては小柄な。

だが、何よりも安心できるような大きな背中が目の前にあつた。

任せろ、とも。よくやった、とも。言わんこつちやないとすら、言わない。ただ、ひたすらに行動で示す。

こんな急場だというのに——否、このような急場だからだろう

か。

安心しろ、と言わんばかりにすれ違いざまに向けられた温かみのあ
る笑みに、トクリと胸が高鳴った。

「……ハク」

「如何にも」

撥ね飛ばされながらも中々のタフさを以って立ち上がったタツミ
がその名を畏れとも憧れともつかない正負相混じった声色で呼び、彼
はただ淡々とそれに応える。

手には何の武器もない。というよりも、武器を出すような余裕がな
い。

無手でも尚、白黒の武者は強者の風格を漂わせながらそこにあつ
た。

「タツミ、一人で突っ込むなよ」

「わかってる、アカメ」

俺も流石に、そんな命知らずなこととはできない。

言外にそう臭わせ、タツミは静かに死者から継承した帝具を構え
る。

万物両断エクスタス。全てを切り裂く両刃の鋏。剣としても槍と
しても使いにくいそれを、彼は既に全所有者並に使いこなしていた。

「俺達が抑える。決定打はねえが、早々押し負ける気もないからな」

「お前たちは隙を見計らって奴を討て」

ナイトレイドの最高戦力である二人が無手無装備の一人に向けて
警戒を濃厚にして歩き出すというその光景は、彼ら二人の実力を知つ
ている者からすれば驚愕するであろう。

繰り返すことになるが、ナイトレイドという革命軍の切り札の中
でも白眉の戦闘力を持つ彼ら二人が、本気も本気で無手無装備の相手を
『抑える』としかいわないのだから。

殺せるとは微塵も思わせないところに、敵する無手の槍兵の凄味が
あった。

「セアツ！」

ブライトは自身の愛槍であるノインテーターを使わない。

もし奪われたりしたら、本当に手がつけられない。故に彼は、無手こそが本気の証である。

無言でその正拳突きを首を傾げて躲し、最小の動作でカウンターを敵の顎めがけて叩き込んだハクに向けて、スサノオの全力が向かった。

「八尺瓊勾玉ッ……！」

身体能力の大幅強化から繰り出される、連続の蹴りと打撃の雨霰を軽々躲し、ハクはまるで軽業師のような動作で回し蹴りを放つ。

一回目を避けられ、二度目を避けられ、放てば放つほど脚の入れ替えと体裁きの回転運動によって速度を増していく蹴りがスサノオの首を捉え、地面に沈めた。

「葬る」

「ハアアア！」

片手で村雨を、もう片手でエクスタスを。

計四本の指で完全に無効化し、ハクはアカメの腹を蹴り飛ばすことよって距離を強制的に取らせ、タツミの足元を払ってエクスタスを蹴り弾く。

「……ヤツバいな、ほんと」

チエルシーの一言が、この状況の全てを代弁していた。

逆手を突く

(さて、どうしたものか)

ハクは、落としどころを悩んでいた。

チエルシーを助けに来たはいいが、このままでは勝てないことくらい彼には容易く予想できたのである。

もとよりチエルシーを助けることが目的だが、ただ助けただけでさよならというわけにもいかない。

逃げてでも追われ、その拳句にボリック暗殺まで漕ぎ着けられる可能性があった。

軽度の損害を与えて、怯んだ隙にさらりと退くのがベスト、といったところだろう。

しかしながら、それは極めて難しい。自らも鍛えていたから未だ差は縮まったと明言できるほどではないが、倍率は大きく縮まっていた。

今は素手で何とかやり合えている。が、その後どうなるかはわからない。

「ツターー」

ハクは防御一辺倒の守勢を自ら崩し、突き出された獣の拳を迎え撃つように上半身を傾けた。

彼の闘法は大振りの攻撃を引き出し、小技とカウンターで息もつかせず敵に反撃の隙を与えることなく圧すことである。

この場合は首を捻って避け、カウンターを振じ込むと言うのが彼の導き出した最適解だった。

「フツ……」

少し息を吐き、ハクは体勢をすぐさま直す。

意識の半分を後方に、後の半分を右から左へ万遍なく分散させた彼には敵の大体の位置が掴めていた。

ブライトもスサノオもアカメも、あと十秒なくば連撃を止めには入れない位置にいる。エクスタスも蹴り飛ばしたから今現在は脅威ではなく、ナジエンダの噴進機能付き義手が描く射線とマインのパンプ

キンの射線上には今相對しているレオーネを誘導することによって対処。

守勢一辺倒と見せかけて敵を釣り、孤立したところを徹底的に叩く。

彼の用兵にも現れている『多対一に慣れきっているからこそその智慧』がよく現れていた。

大振りの攻撃にカウンターを返されれば、もとより男にしては小柄なハクが身を屈め、間合いを詰めるようにして殴ってきた場合に対処する術がない。

「——ギッ!？」

レオーネは自分が向かっていく速度とハクの拳打に乗せていた速度を足した勢いを持つ拳で顎を振り抜かれ、脳を揺らされている。

反応すらおぼつかず、彼女は腹部に骨を砕く程の一撃が入ったことのみを認識した。

肋骨を砕かれた痛みと、脳を揺らされたことによる酩酊。それが、更なる隙を産む。

腿に向けてローキックと、肩に向けての拳打。もはや俊敏な動きなど取れなくなった彼女が一步身を退こうとした瞬間、腹を抜くような前蹴りが彼女の身体を宙に舞わせた。

舞った身体を地に叩きつけるように、光を織って生成した金色の刀身を持つ鏢無しの細剣が右肩から左脇へとぬける。

持ち方は、逆手。癖者の持ち方であった。

レオーネも、剣使いとは戦ったことがある。しかしそれらは全て『正当』な剣術を学んだ順手持ちの達人たちのみだった。

逆手など次にどう斬ってくるかすらわからないという迷いが、脳の振動による酩酊から覚めた彼女の構えを鈍らせる。

「シッ……」

食い縛った歯から息が漏れるような音と共に、右肩から左脇へとぬけた斬撃によって身体のベクトルが地へと向いた身体が再び宙へと変更させられた。

右脇から、左肩。確実に攻撃手段をこそぎ落としていくような二撃

目がレオーネの戦闘能力を完全に奪い、戦闘能力を失った身体が地に沈む。

「終わりだ」

戦闘の高揚など微塵も感じさせない逆手に持った棒の如き細剣を首元に突きつけ、空いた手で柄を押し込むようにして首を斬ろうとしたその際に、ハクの危機管理センサーに何かが掛かった。

「姐さんの危機とあっちゃ、やるしかないでしょ！」

件の二輪。すっかり火力をなくしたはずの巨体が、自分めがけて突進してきている。

だが、ハクは異常なまでに冷めていた。

このままではレオーネをも轢き潰す。おかしい、と。

慌てずにはいられない、或いは目の前の威圧感ある巨体の対処を優先せずにはいられないであろうこの状況において、ハクが取った行動は極めて異質であろう。

「お前は嘘を付いている」

彼は一人、足元に転がるレオーネの始末すらつけずに考え始めたのだ。

その嘘の糾弾ともとれそうな台詞に似つかわしくない穏やかな語気を聴き取ったのは、意識が朦朧としたレオーネだけであつたらう。

まだ、見落としがある。彼にはそれがわかつていた。

その見落としては、恐らくこのラバックによる二輪の突進及びレオーネの始末にかまけていたら、或いは致命傷になり得るもの。

「アカメか」

極限まで気配を殺し、飛翔する蚊すら捉える危機管理センサーの網を潜り抜けた暗殺者は、戦いにおける禁じ手である長考によって捉えられた。

来るなら背後。

「否、右か」

逆手に持った剣を盾とし、最後まで掴めなかつた暗殺者の必殺の一撃を止める。

その不可能とすら言える卓犖とした思考を瞬時に導き出す洞察力

の凄まじさと有り得なさは、常に感情を表に出さないアカメの見開かれた眼によつて表されていた。

「何故わかった」

「私は非凡ではない。故に、頭を使わねば勝てない」

逆手に持った剣を一振りしてアカメの軽い身体を弾き飛ばし、ハクは次いでその爪にラバック操る二輪を串刺しにした己の二輪と四輪の計六輪の変わり果てた姿を見て、溜息をつく。

「だから誰よりも考えるんでしょ、ハクさん」

「チエルシー。私の考えを当てたのはいいが、私のアシユヴァに何をした」

「やだなー。合体と変形、その改良だよ。火力は上がってるから気にしなさんな」

二輪の後輪にある排気口を光子力ミサイルの発射口に、前輪にある突撃用の収納式鋭角を四つにバラしてクレーンのような豪腕に。

四輪を真つ二つに縦に割って脚にし、突っ込んできた彼女の愛機すら凌駕するその巨体は佇んでいた。

「私の馬——アシユヴァだぞ、チエルシー。馬は変形する必要はない」

「馬ならほら、烏煙が居るでしょ。それより至高の帝具とガチの殴り合いアンド火力戦をできるようにチューンしたチエルシーさんの手腕に何か一言」

「素晴らしい技術力だ。使いどころを間違えなければの話だが、な」

凄まじいドヤ顔と、物理的な上から目線。四本の爪に押し込まれるようにして圧搾された二輪から脱出したラバックすら気にも止めない慢心っぷりは、もはやどうしようもないと言える。

「後ろから出るなよ」

「援護に徹しますからご心配なく」

コクピットのハンドルに組んだ腕を寄せ、そこに更に顎を乗せてだらりと姿勢を崩しながら、チエルシーは巨人の如き機巧馬車の上で傍観を始めた。

正直なところ彼女は、嘗ての愛機のような両手で操縦するステアリ

ングのようなものでなければ、片手で運転できる。

暗視ゴーグルを片手に、もう片手を硬いコクピットの上に乗せ、彼女は戦闘中の動作の傍観にかかった。

勿論、これにはちゃんと戦闘経験を視覚で積むという意味がある。

ハクの戦闘を見ることによつて、彼に変身した際に彼の身体のスベックに合わせた動きができるように、彼女は観察を欠かしていなかった。

ハクが一番輝いているであろうシーンを見たいが為では、断じてない。私心はなかった。

端から見れば無いとは確実に言い切れなく、だいたい八割が『好きな人のかっこいい所を見たい』という乙女心だが、一割五分は本気であり、無論乙女心にかける情熱も本気である。

傍観は寧ろ望むところであつた。

「モテるな、色男」

「仲間を助けに来たか、ブラート」

無繆の刺突を逆手の剣で受け流し、ハクは宿敵の到来を自らも気づかぬうちに喜悅する。

ブラートの最近の成長は目覚ましい。上からのつもりはないが、彼はそれが嬉しかった。

共に研ぎ澄まされていき、いずれはどちらかが折れるまで火花を散らす。

本来ならばエスデスがそうなたであろう実力の持ち主であつたが、あいにく彼女はハクの妻だつた。

命のやり取りまではできないし、やるつもりもない。

代わりなどという、ものではない。同じ槍使いとして、エスデスと戦うにはまた違った雅味がある。

彼はブラートとの戦いの間に僅かな高揚と楽しみを得ていることは確かだから、これを強者の驕りというならばそうだ。

しかし、彼は油断はしない。慢心もしない。驕っているつもりも毛頭ない。一つ踏み外せば崩れる差の上で、そんな思いは抱けない。

驕りと誇りは、紙一重である。強者特有の誇りは、すなわち周りか

らすれば驕りに取られかねない。

これを驕りに取られないのが、人品骨柄というものだった。

ハクとブラートの人品骨柄を見た上で、『驕り』と取るか『誇り』と取るか、それは見た者次第だろう。

だが、態々味方を押し留めてまで白兵戦で技量を競い合う二人の技に、曇りはなかった。

「仲間だからって助けに来たのはお前も同じだろ？」

「違う」

刃と刃が交わり、火花が散る。

黄金と赤。どちらも、火を思わせるの色だった。

「私はチエルシーに守ってくれと頼まれた。故に仲間でなくなろうが、私は生命ある限り、彼女を庇護し続ける」

逆手に持った剣が一閃し、槍を弾いて距離を離す。

「……天然か？」

「何がだ」

後ろで憧れるような眼でハクを見ていたチエルシーが真っ赤に染まり、完全にフリーズしたのを視認したブラートはそう問い、やれやれとばかり溜息をついた。

「難儀なもんだな、色男。槍から剣に趣向を変えても相変わらずの天然か」

「変えたわけではない。燃費の問題だ」

この会話の合間に酌み交わすべき杯を、この二人は刃を以って代用する。

宿敵としか言い表せず、宿敵とは言い切れないような変な繋がりが、そこにはあった。

姉妹を突く

「ふふん、ふふーふふふー、ふふふ……」

黒髪黒目黒制服という如何にも黒な少女が乗るのは、二輪。

彼女は盗んだ二輪を己の死体人形に操縦させながら、後部座席でカレーパンを食べていた。

隣には彼女の操る死体人形の中でも白眉の実力であるナタラ。前方の操縦席には常に両手に持っている二丁拳銃を腰のバックルに挿してステアリングを握っているドーヤ。

ハクがチエルシーと共にコウノウに墜落した時に使っていたメンバーそのままである。

彼女の帝具は、『死者行軍』八房。この武器を使って自らの手で討つた生物を八体まで死体人形にして操ることができるという強力無比な帝具だった。

もつとも、それは例に違わずノーリスクではない。使っている間は使っている死体人形の数に応じて術者の力が落ちる。

だが、それを加味しても相当に使える帝具であることは間違いがなかった。

使用者となる条件も『不適合者が付けると一回戦った後に自動的に解除されて灰になる。一応適合しても使い過ぎると灰化が進む』とか『飲んだら気が狂う。適合しても狂うことがある』とか『装着したら体力を絞り取られて死ぬ。無理に使うと一体化、ないし吸収される』とか『不適合だと喰われ、死ぬ』とかではない。単純に切れ味のいい刀としか機能しないだけで済む。

因みに今紹介されたデメリットを貸された帝具たちは一番目から『玄天霊衣』クンダーラ、『魔神顕現』デモンズエキス、『悪鬼纏身』インクルシオ、『魔獣変化』ヘカトンケイルである。

アカメの『一斬必殺』村雨、レオーネの『百獣王化』ライオネル、ラバックの『千変万化』クローステール、チエルシーの『変身自在』ガイアファンデーション、ブドー大將軍の『雷神憤怒』アドラメレク並に良心的な帝具であった。

黒い鞘が前方からの光に照らされ、妖しく光る。

発展している街特有の不夜とも言える光は、キヨロクの繁栄を如実に示していた。

「さーて、今度こそ会えるかなあ……」

武装車は遠くからでも見える程に巨大な二脚二腕の機動兵器目指して走行し続けている。

今回の任務は撤退の掩護であって戦いではないが、一目合わすことくらいはできなくもないと、彼女は冷徹に考えていた。

薬を服用してきた時の彼女が持っていた人外めいた耐久力・直感は無いが、その分思考能力と持久力が上がっている。

幾分か理性的かつ健常になっているとはいえ、自分の身体は未だ長期の剣戟に耐えうるものではないことくらい、自身のことだけに彼女にもわかっていた。

後、半年。長くて一年。その時間が経てば嘗ての力を取り戻し、姉を己の死体人形にすることができる。

今回は偵察であり、死体人形を何体か使用して撤退を掩護すること。

クロメは、何回目かになる自戒を為した。

その頃、彼女が駆けつけんとするかの地。つまり元ナイトレイドアジトでは、一進一退の攻防が行われている。

逆手持ち——凄まじく変則的な軌道を描き、順手と似通った点を探すことが馬鹿らしくなるほどの異質な剣術に、ブラートは防戦を強いられていた。

順手ならば、彼にも最初の動作の予兆を見れば次の動作を予測することができる。

そもそも彼の帝具である『悪鬼纏身』インクルシオは一般的には知られていないが、待機状態は剣なのだ。

インクルシオを解除されたらその武装のみで戦わねばならないブラートが、鍛練を怠るはずがない。

だが、その剣をとつても達人であるという腕前が現在の彼の苦戦の元となっている。順手と重ねるようにだぶっている構えから全く違

う斬撃が飛んでくるのだから堪らない。

身に染み込んだ順手持ちの剣士との戦闘経験が身体を咄嗟に動かし、彼は斬撃を目の端で視認してからの修正を強いられていたのだ。

「動きが鈍っているぞ、ブラート」

任せろと言わんばかりの親指を胸に当てるような構えから曲げた肘を伸ばすようにして突きが放たれ、インクルシオの胸部装甲を貫かんと火花を散らす。

何回か斬られても装甲を貫き切れていないのは燃費を重視するあまり光の持つ攻撃力を抑えている所為だろう、と。

ブラートは刃が踊っているような剣戟の後にいつでも退いて防げる構えをしながら何回か喰らうことによって実証された事実を、非常に慎重に現状として捉えた。

普段と立場が逆転していると言ったら、わかりやすいだろう。

現在のところはブラートのインクルシオがハクの鎧型クンダーラであり、ハクの槍型クンダーラがノインテーターであった。

つまるところ、常に決定打に困らなかったハクには決定打がなく、常に決定打に困っていたブラートには一撃一撃が決定打になり得る。

ハクが死ぬかどうかは別として、腕やら何やらの機能を停止させることもまた、できた。

動かなくなるかは別として。

「フツ」

ストーンと空気を吐き、インクルシオと距離を取ったハクは刺突と装甲の力比べのような身体の捌きから小技で圧していく構えへと身体を変える。

息を吐き、無駄な力を抜いた今の彼の眼は、装甲の薄いところを狙い撃つかのような鷹の眼であった。

「ツッ」

鎧の縁に刃が触れ、掠めるような音が鳴る。

鎧の防御力を少しずつ削いでいくと言っても、相手がそれを許すとは限らない。ブラートにも彼の狙いは見えていた。

クンダーラは物理的に削れないが、インクルシオはできなくもな

い。刃の重みで触れるだけで豆腐のように斬ることのできる程度の腕と、機を見極める眼。それと名刀名剣と呼ばれるものレベルの切れ味があればできなくもないのである。

ハクの技量は我流ながら槍と見劣りしないような腕前に見えだし、燃費を重視しているとはいえ剣もそれなりの鋭さがあった。

弱体化に次ぐ弱体化を強いても尚、一瞬足りとも油断できない。そんな風格とそれに相応しい実力を、彼は兼ね備えている。

実力を知らないままに一見すると貧乏学生か不景気に悩むサラリーマンでしかないが、彼は実際強かった。

「む」

何かを感じたのか、或いは何かのフェイクなのか。ハクは右眼の黒目をちらりと西方へとやり、唐突に弱所破壊を止める。

次なる狙いは、頸部。そう察知したブライトは一つ思索し、思考した。

装甲の力を信じてカウンターを行うか、避けて一動作遅らせた上でカウンターを行うのか。

何か隠していた場合、前者を採れば下手すれば死ぬ。後者を採ればカウンターにカウンターをぶつ込まれる可能性が五割を超え、どちらも採択せねば迷いにより一動作遅れた上で、後者で喰らうカウンター以上の一撃を喰らうかも知れなかった。

もはや正規の剣術とは言えない我流の逆手の『次』が読めなかったブライトは、決断する。

彼は、装甲の力を信じた。

「オオ!!」

迫る刃を無視して気迫と共に渾身のカウンターがハクに向かって繰り出されるといふこの一幕には、前回の攻防に於けるブライトの得た情報がある。

——ハクの剣は、頸部装甲に次いで硬い胸部装甲を貫けていない。そして、確実に致命傷を与えられたであろうあの状況で貫こうとしない理由がない。

即ち剣の切れ味を増させる力は彼には無いと、ブライトは判断して

いたのだ。

「良くないな」

身体の黒鎧に施された太陽を思わせる装飾に光が通り、鎧に黄金の光が指す。

ブラートがそれに気づいた瞬間には、その光は右手の甲から指の甲を伝い、鈍い金色の刀身が描く弧を霞んで見せながら頸部に迫る刃にまでわたっていた。

鋸で以って金属を切っていくような灼くような、叫ぶような音がインクルシオの頸部装甲から鳴る。

確実に、溶かすようにして迫りくる黄金の刃は数秒の後にブラートの頸動脈を束にして灼き斬る、はずだった。

「やらせねえー！」

首を挟み斬るように開き、突き出されたのは大型の鋏。一瞬で展開した黄金の鎧すら穿ち斬るであろう切れ味を持つソレは、確かにハクの動きを止める脅威となり得る。

ブラートがハクの描く致死の軌道から逃げるように同方向に回避行動をとったこともあり、ハクはさらりと切り替えた。

死ぬなど言われている。この命は有意義に散らせるには惜しくはないがそう言われたら死ぬわけにもいかないし、首を叩き斬られれば流石に死ぬ。

前蹴りでブラートを後方に蹴り飛ばし、空いた鏢無しの剣刃をエクスタスにぶつけた。

灼き斬る刃と、挟み斬る刃。切れ味では挟み斬る方に軍配が上がるが、強度と技量では灼き斬る方に軍配が上がる。

ハクはもはや気違いじみた冷静さと沈着さで、エクスタスの弱点を刹那の内に見抜いた。

鋏の、中央部。留金の部分に刃がない。しかもそこを突破すれば首が挟み切られることはなくなり、鋏として動かしていたが故に二刀となったエクスタスは殺傷力を失うだろう。

二刀は二刀として、鋏は鋏として使わなければ人を殺すことはできない。

横から突き出された留金を刃と刃の間を斬るようにして、分断。運動能力を伝えていた機構である留金を斬られて運動能力を失ったエクスタスを持った使い手の首に目掛け、ブライトに対して描いた軌道を焼き増ししたような斬撃がタツミの首から下と上を両断せんと薙ぎ払われた。

が、ナイトレイドにはブライト並の使い手がもう一人いる。

「ハアアアアア！」

天叢雲剣。ハクを腰斬せんと長大な剣を振るっているスサノオの一撃をもろに喰らい、ハクはタツミの頸部に触れるか触れないかというところで、逆ベクトルに吹き飛ばされた。

「……一寸、足りんか」

不完全に、しかも一時的に纏った鎧が完全にその斬撃による外傷を阻む。

使い手吹き飛ばされて仰向けになって寝転ばされても、やはり彼の鎧は頑強であった。

そして何より夜の闇の中に在っては、まるで誘導するかのよう光っている。

仰向けに倒れ込んだハクにトドメを刺さんと駆けるアカメとラバックの足元に、鉛製の銃弾が突き刺さった。

放たれた先に目を向ければ、そこには無音で近づいてきた武装車。その武装車の上には、ガンマンハットを冠った金髪の女性が立っている。

運転をクロメに変わった武装車は、そこで反転。いよいよ近づいてきた二メートル半はあるであろう機体の右脇に武装車を止め、《Hydrangea Motors》とデカデカと印された扉を横付けにして停めた。

「ラバック、私の後ろに！」

反転する際にスタリと降り立った西部劇風の茶色の革製の服を着、お洒落なブーツを履いた金髪の女性の手にあるそれぞれ二丁拳銃を見て、アカメは鋭く警告する。

ラバックの帝具は銃弾に対して相性が悪く、彼自身の身体能力も弾

丸を見極められるほどではない。

ここは、銃弾に対して回避という手段を取れるほどの敏捷性を持つアカメが適任だった。

「頼んだ、アカメちゃん！」

軽い破裂音と共に発砲された二発の弾丸を切り落とし、アカメは村雨を構えて目の前の銃士の隙を伺う。

彼女は明らかな遠距離型の戦士でありこちらの間合いに入れれば鎧袖一触にケリがつくように思えた。

しかし間合いに入らせないような鬼気からは、近接戦もできるような強かさが伺える。

暫しの沈黙と、停滞。互いに武器を構えて硬直状態にありながら隙を伺う静かな戦いを破るように、砂を踏み締めて歩くような音がやけに響いた。

「久しぶり、お姉ちゃん」

「クロメ——」

僅かな、動揺。

生き割れ、自分が置き去りにした形になってしまった最愛の妹との再会があることは、アカメは流石に予期している。

だが、まさかここで相見えることになるとは、彼女は予期していなかった。

「アカメちゃん！」

一瞬戦闘から離れかけたアカメの意識を、後方のラバックの声と前方からの破裂音が引き戻す。

空気を讀まないドーヤの、隙を見つけての射撃だった。

「早かったな」

顔見せだけでよいと判断したのか、或いはまだ自分では姉に太刀打ちできないと直感したのか。

姉を見つめる姿勢から後方へと身を翻したクロメに、ハクは静かに感想を述べる。

「誘導してくれたから、ね」

近寄ってからは巨大な機体ではなく、闇の中に浮くように光る剣と

鎧に這う装飾を目印に来た為、視認と追突を恐れずに近づくことが出来た。

「じゃあね、おねーちゃん。もう少しで、私の物にしてあげるから——」

ドーヤに後方を任せながらナタラがステアリングを握る武装車へと戻り、ハクが己の馬の左脚の脇に退いた瞬間、チェルシー操るハクの馬の左腕に相当する六連装ミサイル砲から六本のミサイルが発射され、六本が六本とも空中で更に細かい弾子となってナイトレイドに迫りくる。

スサノオが八尺瓊勾玉で迎撃し、爆炎と煙が晴れた時には、彼等は既にいなかった。

影を突く

寒風吹き荒ぶ冬の空の下、歩道橋の上。明らかに不景気な顔と、病的な肌色。更には影を背負っているような貧相な身体付きが、彼がこの就職氷河期の犠牲者であることを如実に示していた。

無言で眼下の年末の活気に溢れた光景を見下ろす彼を、通行人は一種不気味な物でも見るような視線をやって通り過ぎる。

去り際に他人をちらりと振り返らせるオーラを、この男は背負っていた。

パツと見、顔立ちに優れているというわけでもない。そもそも顔立ちに優れているか否かという判断は初めて見た時にそう思うか——
—即ち第一印象で決まる。

彼が与える第一印象とは、『思いつ切り殴ったら折れそう』とか『肌色が悪い』とか『目つきがヤバイ』とかであり、大抵の人間はその顔立ちにまで目が行かなかつた。

一度見て、固定されたチエックポイントは肌色と貧相さと、目つきの悪さ。二度目見ても『相変わらずだな』と思うだけであり、よっぼど凝視しない限りは彼の他の点には気を配らないであろう。

「……チエルシー、何だ」

後ろから忍び寄ってきていたチエルシーを、ハクは視線をやるまでもなくいち早くそれを感じした。

感知型ではないが、慣れ親しんだ気配くらいならば読み取れる。

特にそれが、いち早く見つけねばならないものならば。

「何でわかんの？」

無論、変装はしていた。足音も脚の運び方も、呼吸のリズムに至るまでの全てを他人のものへと為し、身振り手振りから口調といった最低限の物までキチンと網羅している。

だが何故か、この男だけは騙せなかった。

「護るべき存在すら見極めずして、宮仕えの何ができる」

周りの視線がなくなつたあたりで接触してくるあたり、やはり非常に用心深い。

彼女のその用心深さと慎重さは先の襲撃の失敗を経て大きく上昇し、成長した点であるといえるだろう。

「……あ、そ」

ハクより僅かに低い、エスデスほどには背丈のある如何にも大人な女性が煙に包まれ、150センチ後半である本来のチエルシーの姿に戻った。

本来の二十代女性としてあるべき色気溢れる変装から、実年齢には到底見えない童顔になったあたり、彼女の中には大人の女性に対する憧れのようなものがあるのかもしれない。というより、彼女が専ら化ける際は専ら大人の女性である。

これは彼女自身が稚さを残し過ぎているから対比の関係でそう受け取られるのかもしれないが、よくよく見るとそうではなかったりしていた。

無論、合理的な……本来の姿とのギャップを誘う狙いもあるのかも知れないが、つまるところ彼女は美しい女性に憧れている。

その理由は恐らく自身が美人、と言うよりは可愛いタイプだからであらう。

他にも理由があるのかもしれないが、少なくとも彼はそう薄々と思っていた。

「ふむ」

「な、何?」

赤面した顔を隠す為にそっぽを向きながら、チエルシーは歩道橋下の光景から移された視線をその赤らめた顔で受け止める。

別に何かを期待しているわけでもないが、ふとした一言での動揺状態にある彼女にとっては好んでいる男の視線を受け止めるだけでも恥ずかしかった。

「いや、まだ言うべきことでもあるまい」

「何ソレ」

勿体ぶった発言に興味を抱いたのが、六割。少し浮かれたような気持ちになったのが、四割。

この好奇心の塩梅に、彼女の個性が良く出ている。

好奇心、猫を殺す。隠密にあるまじき好奇心の旺盛さと闊達さが、彼女から暗殺者特有の陰鬱と陰を照らしていた。

「……というか、これ」

チエルシーが突き出したのは、白い紙袋。雪が降っても大丈夫なように袋に包まれているあたりに、彼女の女性らしい気遣いが伺える。

「何故私に渡す？」

遺失物を届けに来たとても思ったのか、ハクはチエルシーが近寄って差し出してきた紙袋の前に掌を突き出した。

この拒絶に、一世一代未満修羅場以上の気力で贈り物を突き出したチエルシーは、本気で心が折れかける。

——そんなの、お前が好きだからに決まっているだろう。

某ドSの將軍ならば、堂々と言つてのけるだろう。何せ女は度胸を地で行く、所謂『引っ張っていく』タイプなのだから。

しかし、彼女は『引っ張られていく』タイプであった。この半年と少しの猶予期間中に何の進展も挙げられていないあたりに、彼女の攻めの拙さが見て取れた。

が、そんな彼女の迷いや何やは、次なる一言にぶっ壊される。

「クリスマス・イブは、親しい女性に男性が装飾品やら何やらを贈る行事。つまり、逆だろう」

「違います」

一音一音に間を開け、はつきりと区切るようにして彼女は突っ込んだ。

時として彼女の心理的余裕を無情にも奪い去る天然さがプラスに働き、これまでの緊張やら何やらがこれで完膚無きまでに壊されたのである。

これが計算ずくめだったならば大したものだが、あいにくただの天然であった。

そもそも彼の天然めいた言動が計算ずくめであったならば、演技の達人であるところのチエルシーには予備動作や語気からそれとなく察せたであろう。

「そう……だったのか」

珍しく愕然とした様子のハクを見て、チエルシーは堪らず嘖き出した。

ハクに割りと冷たい目で見られ、目に涙を浮かべるまで一通り笑い転げてから、チエルシーはすっかりほぐれた緊張感に別れを告げながら再び手に持った袋を前方に突き出す。

「はい、チエルシーサンタからのプレゼント」

いつもながら、緊張と硬さを無くしたチエルシーが軽く笑えば、花火のような快活さが剥き出しになった。

正直、彼女もわざと計算ずくで動くよりも本能的・反射的に動いた方が可愛げのある女性である。

或いはそれは普段が計算ずくだからこそ、なのかもしれないが。

「有り難く受け取ろう」

ちよつと拝むようにして、チエルシーの包みはハクの手へと渡った。

白い包みに、黒い梱包。中に入っていたのは、しっとりとした光沢のある黒コート。

コートと言うには大きくなり、タキシードと呼ぶには稼働性に溢れている。

強いて近いものを挙げるなればエスデス軍三獣士の制服があるが、やはり似て非なるものであった。

「良い物だな、これは」

着ることすらなく、ただの一目でわかるほどの着心地の良さと、防御力。

肝心なときに鎧が無い彼にとって、基本的な防具となるのは防御力が紙と言つていい黒い革鎧である。

エスデスもチエルシーも防御力よりも機動性を尊重する彼の思考は一定の理解を示しているものの、どうにもこうにも不安であった。

チエルシーが元々進めていた帝具もどきの基礎素材に仕上げとして秘密裏にシユラからパチった鎧の一部を解析。

まさしく莫大な金と高価な素材を加工した逸品であり、二輪やらに使われている金属の強度を布素材に置き換えて再構成という偶然と

オカルトによって生まれた謎繊維に、三重のコーティングをすることによってそこそこの帝具並みの防御力を実現している。

慢心すれば貫通するが、慢心しない限り少なくとも常より切り傷を抑えられることだけは確かだった。

「ま、ね。そこらの銃弾とか剣とかを通さないくらいの強度はあるし、脚にかかる衝撃を逃がせるよ。勿論、無制限ってわけじゃないけどね」

「素晴らしい物だ、これは」

これまた珍しく手放しに絶賛したハクの言葉から逃げるように、チエルシーは手を前に出して慌ただしく振りながら弁明する。

これはそれほどものじゃない、防御と言ってもデザインと帝具とのシナジーを優先したから防御力はそこまで高くはない、と。

つまり彼女は、褒めて欲しくてたまらないくせにいざ褒められると恥ずかしくなって逃げてしまうような型をしていた。

何とも損な性格をしているし、何をしてやったらいいかわからなくなるような質ではあるが、それがまた彼女の複雑さからくる可愛さを助長している。

そんな剥き出しな可愛さを知る聡さを、彼は多分に持っていた。

「チエルシー」

「な、何かな？」

完全に腰が引け、甲羅に首を引っ込ませた亀の如き精神状態のチエルシーの甲羅をいとも容易く破碎するように、ハクは言葉の槍を突き立てる。

「感謝する。これその物も嬉しいが、その気遣いが嬉しいぞ」

チエルシーは、常日頃から『褒めてくれ』と言っていた。ハクはそれを憶えているから、確かな功績をたてた時にはすぐさま褒めるようにしている。

しかし、彼女の主な仕事や功績はといえば裏方で色々やることであり、表に出て敵を殺すことではなかった。経済制裁とか、産業支配とか、清流派の動向の調査とか、私兵に強力な武装を配布した後にスパイ狩りを行わせたりとか、敵の眼と鼻と耳をいくつものパネルに細分

化し、それを丹念に血で塗り潰していくような作業が彼女の天職なのだ。

そしてそれは、ハクには伝えていない。彼には似合わないからである。

ガタガタの帝国で一際輝く英雄には暗さは要らないし、影などはあつてはならない。影があるならば自分が為り、それが民に見えた時には切り離されねばならなかった。

いつでも自分で自分をハクから切り離せるように、彼女は常に証拠を摘発できるようにしてある。

詩的な言い方をするなれば、革命軍という内から湧き出てくる敵に対抗するにはチエルシーのような存在が必要だった。だが、それはチエルシーであつてはならなかったのである。

「チエルシー」

いつになく赤面し、しどろもどろな言葉すら吐けないチエルシーの手首を優しくつかみ、ハクは少し屈んで目線を合わせた。

「これは、私からだ」

ふわり、と。

夏服であるミニスカートと白長袖の黒服という制服めいた恰好から、冬らしい暖かそうな生地で織られたコートを着、膝下までの靴下から腿までを覆うニーソックスへ履き替えた季節感を知る彼女の首元に、白い雪のようなマフラーが掛けられる。

「確か、お前は白が好きだろう」

「うん、大好き」

良く似合う格好に満足したのか、或いは少しも直す必要のない完璧な着方に感服したのか、それともただそうしたかっただけか。

この極寒だと言うのに暖かな掌が頭に一度触れ、二度触れた。

「……ありがと」

「ああ」

丁度よいタイミングで橋の根元に来た二輪にハクが乗り、サイドカーにチエルシーが荷物を置く。

隣はエスデスの固定席であり、流石にチエルシーもそこを侵す気は

なかった。彼女の二輪も、呼べば来る。

「チエルシー、疲れていないならば私の後ろに乗るといい」

「……………ごめん。もっかい」

「後ろに乗るといい。腕が疲れていなければ、だが」

やけに優しい、と言うか甘い。

というよりは、暗黙の了解を破ってまで、言いたいことがあるらしかった。

「じゃ、そうさせて」

細い割にはガツチリとした横腹に手を廻し、チエルシーは凭れるように背中に頬をピタリと付ける。

穿いても止めることのできなかった鼓動が、血を身体中に巡らせていた。

「抽象的な頼み方になるだろうが、私の頼みを聴いてくれるか」

頬から伝わる振動にまずびっくりし、『頼み』と言う言葉に二度驚く。

彼は常に頼みを聞く側であり、頼む側ではなかった。

明らかに普段と違う様子が、彼女には簡単に見て取れる。

「い、うん」

普段ならば、何かしらの余分な装飾の一言が後に続いた。

直に体温を感じて、緊張している。

自分のことを他人事のように分析した後、チエルシーはゆっくり目を瞑った。

外気の寒さと、少し冷えた自分の体温。ひだまりのように暖かな彼の体温のみが今の彼女の世界の全てである。

余計なものを遮断し、内容も聞かずに了承したことを心中で笑う。

どうにも、彼も自分もいつもと違っていた。

「お前は私との関係を光と影だと言うが、今後が変わらずそう在りたい」

「……………うん」

もうこれ以上の関わりはないという、明確な線引き。

いつかこうなるとは、常々わかつている。片思いでもいいと思っ

いたが、拒絶はやはり痛かった。

涙がぼろりと溢れ、自分が作った外套を濡らす。

暗殺者らしからぬ、感情のままの発露だった。

「何故、泣く」

「……哀しいから」

何故哀しいのかがわからないが、彼はチエルシーの泣いた姿を見たことがない。

つまり、今までとは違った事象に聞こえるように自分が何かしらしてかしたのだろう。

自分の言葉を反芻し、彼は勘違いされていることを早々と悟った。

「光と影は分かってぬ物だ。お前が居るからこそ、私はここにこうしていられるわけだ。故に私はお前が自分を切り離せるようにしているのが気に入らない。つまり、変わらないで在りたいとは、停滞ではない」

死ぬほど不器用な弁明の如き解説がチエルシーの耳朵を打ち、ハクの脳裏を過ぎ去る。

彼は今、嘗て無いほどに動揺していた。

「謀らずとも停滞しているのが、今だ。私はお前との関係を停滞させたくはないし、発展させていきたいのだ。無論、それが嫌ならば職を辞してもらっても構わない。私が勘違いされていると思ったことが正しく伝わっていたならば、それは自意識過剰ということになるが」
「言えば言うほどややこしくなる状況を、ハクは更に引つ掻き回している。それを本人は気づいていないし、今まで言われたこと全てを憶えて何回も読み直すような記憶力を備えていなければ、彼の解説はただの言い訳や変節でしかなかった。」

だが彼は今、その記憶力を備えている相手に向かって話している。そしてハクはもう既に語彙が尽き、ほとんど困り果てていた。

「……つまり」

「ああ」

「切り離せるようにするんじゃない、本物の光と影みたいに一緒に居ましよう、ってこと?」

「お前は既に切り離せるような軽い存在ではなくなっているということだ」

出された助け舟を僅かに改造し、ハクは安寧道本拠の前で機体を止める。

「自己犠牲もいいが、残念ながら私は最早それを許さないということだ」

「……………それさ。すつつごいブーメランだつてこと気づいてる？」

「む？」

気づいていない様子のハクの額にデコピンをかまし、チエルシーはまだ僅かに赤い目を優しげに笑わせた。

「私にそれを言うなら、ハクもね」

「当たり前だ。私も命は大切だぞ」

三番目くらいに。

呼び捨てにされたことに気づきもせず、ハクは返事を聴いて笑って安寧道本拠の自室へと帰っていたチエルシーを追いかけてようとして、止まる。

「……………何故哀しかったのだ？」

傍から見れば誰もがそれとわかる問いは、寒風に紛れ消えていった。

詭弁を突く

「チエルシー、お前は猫だな」

「……はい？」

珍しいことに、ハクは中編小説を読んでいた。

何故中編小説を読んでいるということがわかったのか、と言われれば『何読んでんの？』という質問に『中編小説だ』と返されたからであるが、別に彼女が後ろから覗き込もうとしたり屈んで表紙を見ようとしたりしていないとは言っていない。

つまりこの発言は、チエルシーの忙しい行動に対して呈されたものだと推測できる。

「猫、かな？」

「こちらが近づくと逃げる癖に、普段は隙あらば近寄ってくる。お前は間違いなく、猫だ」

勝手気ままで悪戯好きだが、憎めないヤツだということだ。

ハクが言いたいことはこうであったし、それはチエルシーもわかっている。しかし、彼女にはこう聴こえた。

要約すれば、『肝心なところでへタレだな』と。

正直、彼女にも自覚はある。前も今も、チエルシーは自分からフラフラ寄っていくくせに、こちらに向かって手を伸ばされると凄まじいビビリになっていた。

ハクのような非常に明快到に、それこそナタで二つに割ったような単純化した思考回路を持つ者からすれば、チエルシーの行動は正しく意味不明であろう。何せ近寄ってくるくせにこちらが近づこうとすれば逃げ去るのだから。

「……かもねー」

「かもではない」

いつになく自信に満ち溢れた語気で言い切られ、チエルシーはさっそくビビリ始めた。

近づかれるのが苦手というより、強く迫られるのが苦手なのだろう。

これが悪感情を抱いている者相手ならばともかく、好意を抱いているものに対しては、特に。

「そんなことより！」

「そんなことより？」

「そんなことより」

それほどしつこい性格ではないことが幸いしたのか、ハクは一回で追求の手を早々に引つ込めた。

律儀にも手に持っていた小説に葉を挟んでパタリと閉じ、傍らの机に置く。

題名は、Die Verwandlung。帝国語に意識するならば、風流と雅味を加えて『変身』、と言ったところだった。

「シユラ。何か焦ってるみたいだけど、どうしたの？」

「珍しいな。お前は興味を抱かない対象に対してはひたすらに無関心を貫く性格だと思っていたが」

端的な感想とどこか意外そうな視線を受け止め、チエルシーは少し肩をすくめる。

ハクの言っていることは合っていた。彼女はどうでもいい存在に對しては心底冷淡であるし、ファーストコンタクトの悪さもあって嫌悪すら抱いている。

彼女がシユラを心配するというか、シユラの事情を聞こうとするなどは殆ど有り得ないことだった。

「どうでもいいよ。でも、弱みは知っておきたいっていう感じかな」

「……まあ、言うなどは言われていない。教えよう」

ハクに嘘をついても無駄でしかないということを、チエルシー程よく知っている者もない。

何せ、ここぞ動いていた時に嘘をつき続けていたら、仕舞には『お前には嘘が多すぎる』と言われ、マス目を埋めていくような精緻さで一々嘘を暴かれた経験が痛烈に残っている。

こういう時はバツサリ言ってしまった方が良い。目的の一つをバツサリ言い、何かしらの腹案を隠しておけば真実までは見抜かれな
い。

腹案や、代案。或いは他の目標があることは勘付かれるが、その腹案まで詳しく聞かれるわけではなかった。

つまり、九割真実、一割虚飾。裏の十割を腹案にすれば、この難攻不落の人間嘘発見器の突破をすることが可能だと言える。

「オネストから警告が来た、らしい。私には慰安品と直筆の詫び状が来ただけだからわからんが、どうにもオネストからすれば彼は不甲斐なく見えるらしいな」

「へえ」

何でもないような反応を返し、そこらにある本を一冊とり、チエルシーは読書を開始した。

その心中は陰謀というか、策謀というか、彼女の得意とするところをどう活かすかとか、コネと伝手を活かしてどうするかを考えていたのだが、彼女の表面は平静である。

（オネストが使ってるのはエステスとハクのツートップ。世界屈指の反則どもを両翼にして自分の権力を輔弼させてることを考えれば、そんな気持ちを抱くことは容易に想像できた。だからいつ来るかと思ってたけど、思ったより遅い。オネストも人の親だね。シユラの切り捨てが三月遅い）

さりとんでもソツなくこなせる頭で毒を吐きながらも、チエルシーは数分で読み終えた本を。パタンと閉じた。

オネストは有能な策謀家だが、やはり遠隔からの指揮では粗が出る。

恐らく目となり耳となる羅刹四鬼がやられたことを併せて考えれば、まだ革命軍側の策謀に気づいていない可能性すらあった。

だが、それはチエルシー自身にも言えることだろう。

彼女がキヨロクに釘付けになってしまったばかりに、帝都にいた頃には殆ど完璧に知覚していた清流派の策謀を掴む為の神経が完全に麻痺したことを感じていた。

「ハクさん、動ける？」

「随伴はできませんが、助けには行こう」

「じゃあ、クロメは？」

「クロメは警護の任についている。一番負担が少ないのでな」

対革命裏部隊であった羅刹四鬼の壊滅により、護衛対象であるボリックに常に一人付けなければならなくなっている。

ボリック側が手薄になった戦力を更に割かねばならない一方で教主側には革命軍の手の者と思しき屈強な護衛が犇めき、本来のプランである『圧倒的なカリスマを誇る教主を暗殺、ボリックが跡を嗣ぐこと』によって教団を掌握。いずれ革命軍に合流するであろう戦力を確保する』ということができなくなった。

つまり、東方というアウエーな環境において『無限に湧いてくる内通者を利用して戦力を分断する』という至極当然且つ有効な戦術をとられているのである。

「じゃあ、今日。ナイトレイドを引き込みましょうか」

「勝つのは、困難だろう」

嘗てのハクの思考回路は、『ボリックを守らねばならない』という点に固定されていた。現在とは違い、いくら帝具なしでもこの時点ではまだ勝ち筋はあったのである。

だが、ボリックからこのようなお達しが出たことが、ハクに実質『勝ち筋がない』と言わせる要因となった。

『私の屋敷に居る愛人・財産に危害を加えられてはたまりません。屋敷の外周にある貴方達の屋敷をラインにし、防ぎきつてくれることを望みます』

断言しよう。無理である。

詰んでいる要素を一つ一つ紐解いていくが、まずナイトレイドが二手に分かれた時点で詰む。

そして、一人でも突破されてはならない為こちらからは動けない。つまり、ハクの間合いに入らない程度に距離を取り、何人かが立っているだけで彼は完全に機能停止に陥るのだ。

立っているナイトレイドの分遣隊——仮にAとする——に打ち掛かれれば、二手に分かれたナイトレイドの別な分遣隊Bが真逆から

来る。

分遣隊Bに打ち掛ければ、分遣隊Aがそのまま進むことでポリツクの屋敷内に通すことになってしまう。

羅刹四鬼に代わる護衛であるクロメにしても、死体人形の一人であり名うてのガードマンであったウォールを屋根裏に突っ込んでいただけであり、彼女自身は外周に居た。

ハクが北、クロメが南にいても、東を守るのは戦力にならないシユラたちであり、西はチエルシーだけ。チエルシーは乗り物があれば何とかなるが、東がザルである。

理由を長々と述べたが、つまるところ勝利条件はナイトレイドを一点に集めること、これが無理ならば東西南北に分散させないこと、これが無理ならば五分ほどでブライトとスサノオを突破し、掩護に向かうことがハクには求められていた。

「諦めはせんが、今はナジエンダにやられていることも事実だ。奥の手の使用も考えねばならない」

僅かに疲れたような声がハクから漏れているあたり、彼も相当悩んでいる。

あくまでも、勝つ為に。

この絶望しかない状況で諦めない姿勢には好感が持てるが、チエルシーとしてはハクに奥の手を使わせるわけにはいかなかった。

自分の実力で勝てないのならばもともとかく、無能な味方を庇う為に浪費するなど馬鹿らしいにも程がある。

「ハクさん。でもそれ、命令違反だよ」

「……何？」

「だってハクさん、『自衛しかしちやダメ』なんだからさ」

詭弁かもしれないが、これしかない。というか、最初の頃に彼女が変身した諜報員がもしもの時のために彼の経歴を偽造してシユラに渡したことが、ここになって作用した。

「護衛は、シユラの役目。ハクさんは自分の命最優先。シユラに言われたでしょ？」

「それはそうだ。が、援護は『無いよりはマシ』だと言われた。せねば

ならん」

「だから、次に勝つ為に動こうよ。シユラが求めているのは、ボリックの命じゃなくて、功績。ハクさんがやるべきことはシユラが次の機会に功績を挙げることができるようになること、なんじゃない？」

ハクは、一転して沈黙する。

それは何よりも雄弁に、チエルシーの詭弁に一定の正当性があることを物語っていた。

シユラが求めているのは、功績。功績によって、父に認められることに他ならない。

即ち、詰んでいる盤面に直面しているシユラにすべきことは、別な功による失態の挽回だろう。

シユラは己に課せられた任務を失敗に終わらせることになるが、次の戦いで勝てば挽回できることを知ればそういうように命令を下すであろうことは、明白だった。

「シユラが領けば、そうしよう」

「うん。そう言ってるよ」

周到極まりない用意を整え、正式な署名と印が押された命令書をハクに差し出したチエルシーに隙はない。

ここに来てナイトレイドが仕掛けた完璧に近い封殺が無効化されようとしていることに気づいたものは、チエルシーだけだった。